THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十月號

第三十五年第十一號 第三百八十八號

島田清次郎氏著

大望

羽二重表紙特製
定價金貳圓參拾錢
―郵送料貳拾錢―

社會救濟の大望の下に火鞭の如き大筆を揮へる特異なる作品の集也

『地上』出で丶島田清次郎氏の名天下を風靡す。『大望』は、『地上』の作者が其戯曲と小説と、自ら選して會心の作となす所のものを收めたる集にして、何れも偉大なる使命を自覺せる年少氣鋭の一天才が、社會救濟の大望のものに、火鞭の如き筆を揮へるもの。若き新しき時代が、腐れ爛れたる古き時代に向つて加へたる最も痛烈にして深刻なる批評の聲、非難の叫び也。單なる小説にあらず、謂ゆる藝術家の藝術とは自ら撰を異にするところに、本書が獨り文學の士のみによりて壟斷せらる可からざる理由を存す。敢へて一般讀書階級に此の書を薦む。

島田清次郎氏著

地上

■第一部 地に潜むもの（價壹圓參拾錢）
■第二部 地に叛くもの（價壹圓六拾錢）
■第三部 靜かなる暴風 ―近刊―

東京市込矢來町三番地
振替（東京）一七四二番
新潮社
電話番町｛局八〇九番 八九九番｝

■現下世界の文壇に於ける最大雄篇の新譯成る■

ロマン・ロオラン著　豊島與志雄氏譯　■第一巻　新刊出來■

ジャン・クリストフ

全四冊。總紙數約四千頁。總洋布最上製。定價一冊貳圓五拾錢。郵送料拾貳錢

□□□□□

十巻、四千頁、現下世界の文壇に於ける最大雄篇として知らるゝは、ロマン・ロオランが「ジャン・クリストフ」也。樂聖ベエトオフエンが俤を寫したりと云はるゝジャン・クリストフなる一英雄兒を主人公として、その多難なる戰ひの生涯、數奇なる惱みの生涯の裡に、作者が懷抱するところの眞勇主義の主張を寓す。これ實に、二十世紀の初頭、人間精神の荒頽その極に達せむとする時に方り、世界救濟の爲めに叫ばれたる一大豫言にして、之を新らしき福音書と云ふも決して溢美に非ず。剛正なる眞理慾と、神のために戰ふ努力主義と、この一大理想を具現せるジャン・クリストフの生活を描ける高華にして雄渾なる作者の筆は、まことに世界文壇の一大偉觀にして、曾てこれをトルストイに見、ユーゴーに見たる大天才の大氣魄は、こゝに、より近代的なる思想と表現との中に活く。豊島氏は曩に『レ・ミゼラブル』を譯了して、その精嚴暢麗の譯筆、現下の我が文壇に倫を絶すと稱せられたる人。昨秋より渾身の精力を傾けて、這の書の譯に從ひ、拮据十閲月、業漸くその半ばに達せるを以て、先づ玆に第一巻を公にするに至れり。切に大方の一讀を待つ。

レ・ミゼラブル

全四冊

ユーゴー著　豊嶋與志雄氏譯

▼中版總洋布製
▼定價一冊貳圓
▼郵送料拾貳錢

東京牛込矢來三番地
振替東京一七四二番

新潮社

電話番町 八〇九番 八九九番


スワン石鹸
▼秋風颯々▲
不景氣風何かあらん
我にスワン石鹸のあるあり。
一浴爽然
皮膚をスワン化せん哉。
SWAN
WHITE FLOATING
SOAP
LEVER BROTHERS (JAPAN) LIMITED
製造元
日本リーバーブラザース株式會社
神戸


J.B.S.C°

秋！

オノトの能率を全的に發揮する事が出來る一年中の最も爽快なる時！

オノト萬年筆　無飾八圓　飾付九圓以上

アルビオン萬年筆　飾付五圓以上

オリオン萬年筆　無飾貳圓八拾錢

萬年筆用アテナインキ　四拾五錢

送料各拾八錢



東京日本橋通

丸善株式會社

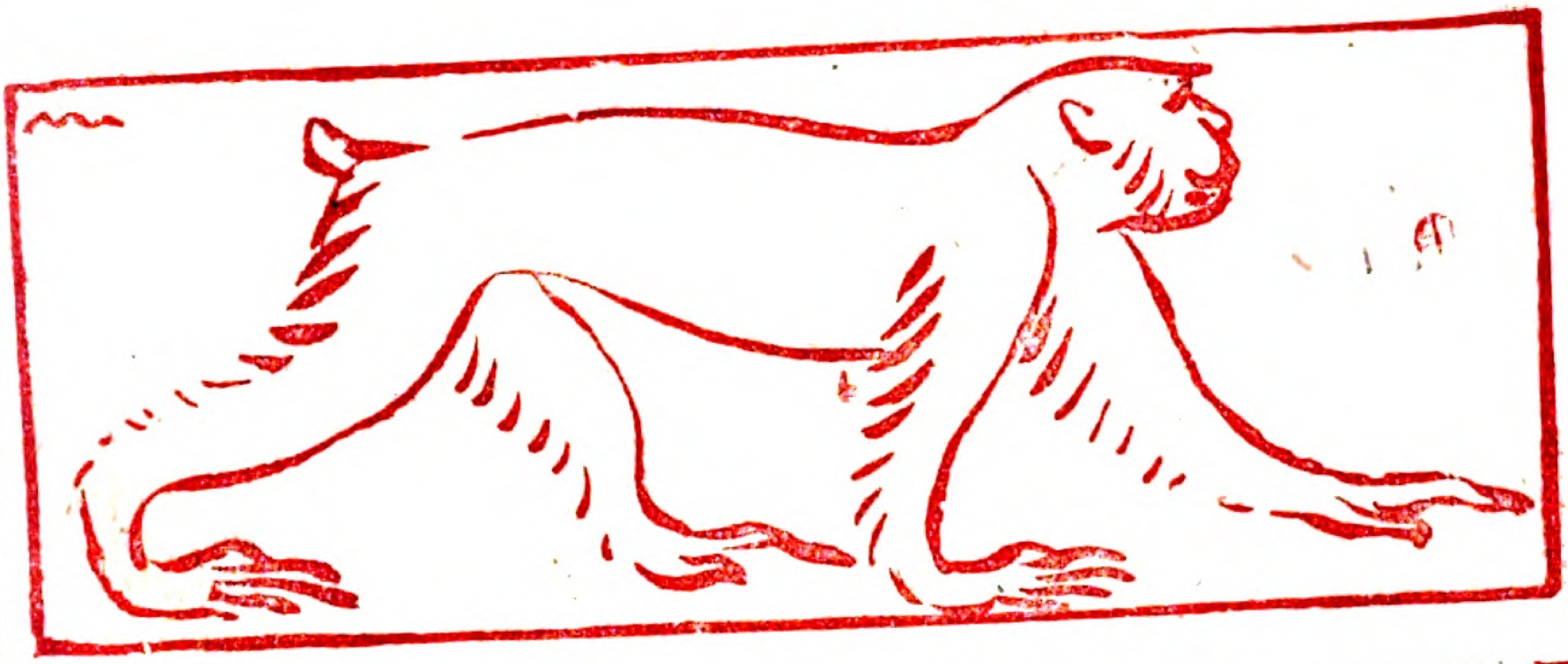
大阪心齋橋筋　京都三條通

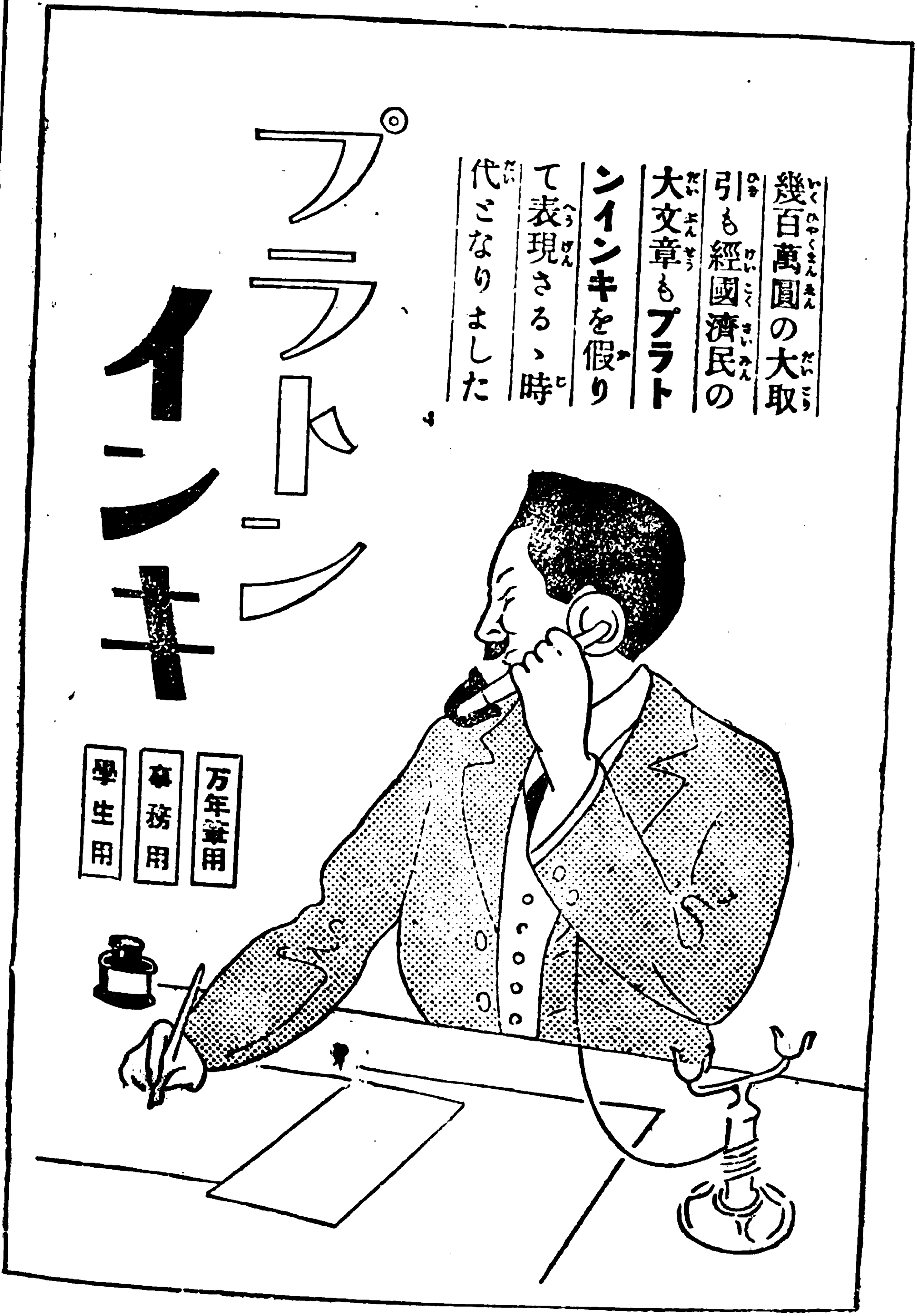
福岡上西町　仙臺國分町


リファインドライフ
文化生活にふさはしい
鷹印帽子
純品質主義
大阪
株式會社
高橋製帽所



中央公論第卅五年十月號目次




プラトンインキ
幾百萬圓の大取引も經國濟民の大文章もプラトンインキを假りて表現さるゝ時代となりました
万年筆用
事務用
學生用



"MATERNITÉ." MARY CASSATT.

■東京帝國大學文學部助教授　植松安氏著

上下　完成

註釋　假名の日本書紀

■四六判最上裝美本全二册箱入　上卷下卷を通じて千二百餘頁

上卷　參圓五拾錢
下卷　參圓八拾錢
送料各十八錢

大好評を博す

■日本書紀の一體に假名日本書紀のあることは從來一部の學者に知られて居たが■未だ普く其存在を知る人が尠い。本書は著者が出來る丈手を盡して調べ得た廿餘部の異本を參照して編述したものである。内容は本文を漢字交りに書き下し漢字に振假名を附し假名に漢字を當て一段毎に簡明なる註解を加へ索引として辨ずべき詳細なる目錄を添ふ正確なる國史を最も平易に讀み得る書なり■■

全一册で　金七圓參拾錢　送料金參拾錢

■鈴木善太郎氏著■

（著者自信ある著作）

新刊發賣

創作集　暗示

四六判上裝　約六百頁

金貳圓五拾錢　送料金十二錢

（變體心理小説）本書は著者が誇大妄想狂・ヒステリー・癲癇・病的虚言者・悖徳狂・早發性痴呆その他の異常人格者を自由に巧妙に取扱つた面白き作品十八篇を集む。

《内容目次》

暗示
鰤中毒の發見者
僞と一兵卒
祭日の出來事
婦人傍聽席
切支丹
ヒステリーの話
支那皿の怪
ある掏摸の手紙
金時計と銀時計
川の祈り
人生の扉をあけて

▼▼▼▼▼▼

文學士　高森良人氏著

鮮支那旅行の印象

菊判半截本全壹册　紙數三百餘頁箱入

金壹圓五拾錢　送料金拾貳錢

貧弱なる才能（財嚢）の所有者の旅行はその所得も亦從つて貧弱たらざるを得ない。單身飄然として東都の下宿を去つた私に孤影悄然として故山の土を踏んだ去年その間行程將に七千哩自然は秋から冬へ移つて行つた。若い知識探求者第一の印象は少なくとも同書同趣味の士の知想に添ふ所なければならぬ。

東京市神田區表神保町七番地　◻　大同館發行　◻　振替貯金口座東京八七二番

見よ！我が學園に異彩を放てる最新最良の五大講義録

早稲田大學講義錄

大隈侯爵指導――經營三十有餘年

個人改造を措いて世界改造を語る勿れ

政治經濟科
十八ヶ月修了
第一號
十月六日發行

法律科
十八ヶ月修了
第一號
十月七日發行

文學科
十八ヶ月修了
第一號
十月八日發行

中學科
二箇年修了
第一號
十一月一日發行

商業科
十八ヶ月修了
第一號
十月十日發行

葉書にて申込次第各科見本附規則書直ちに送呈す

東京牛込早稲田

早稲田大學出版部

電話三四五
三七四
番町二四二二

登録商標

事務ノ澁滯ヲ來サヾル筆而モ縦横酷使ニ耐ユ

□極品八斗才　壹本　廿五錢　□貳號自在　壹本　七錢

氣持ノ善キ光ト漆黑ノ墨而モ芬芳ノ香氣アリ

□櫻印紅花墨　一丁半形　壹圓　□わら茶　一丁半形　貳拾錢

鮮カニ氣持良クのびる繪具而モ美的色彩アリ

□十二色　絞出し　壹圓参拾錢　□三號　六色　廿五錢

事務ノ進捗ハ一炷ノ薰香而モ盡日執務ニ倦ズ

□極ら香　壹入　四拾五錢　□あかつき　一把　参拾錢

熊谷鳩居堂

京都寺町　振替＝大阪六三八

東京銀座　振替＝東京二〇七〇

・目錄御報次第進呈。

大谷光瑞師序　廣瀬了乘著

日印會話捷徑

印度と我國との過去の文明の交渉を思ひ、又將來に於ける政治的並に經濟的關係を考ふる時は、印度語を習得するの必要は敢て多言を須ゐるの要なし。本書の著者は多年彼地にあつて佛典を研究するの傍、我國一般人士の爲めに此簡潔にして要を得たる印度語學習の好指針を與へたり。苟も印度に志あるの士、速かに一本を購うて其雄志の實行を急げ！

定價金五拾錢　郵税四錢

東京神田　(振替東京二七〇)　東京堂發賣

毒●毒●毒●毒●毒●毒

禁煙風味液　解毒風味液

○一日で煙草がきらひになる

禁煙パイプ

○禮状數千嘖々如下

解毒パイプ

○卷刻に併用でき煙毒を消す

■平民病院發行平民醫學評　記者も之に依つて禁煙を斷行したる一人なり物はためし一度買つて記者の言の妄ならざるを知り給へ……

■日本評論評　一貫社の禁煙パイプは禁煙斷行最有效にして……

■東京評論　評風味液の效能顯著なる例は多々あり現に砲兵工廠に於て……

■日支貿易綜攬評　一飲該液、即見實驗

■實業界評　記者も實驗中だが、確に煙草がのみたくないし、又のんでも煙草の味がない、誠に國家の爲に結構な發明である……

■朝鮮時論評　禁煙斷行に最效あり……

風味液　小罎 五拾錢　德用罎 九十錢

パイプ　水牛上製 四十五錢　同 特製 八十錢　象牙製 壹圓貳拾錢

サック 參拾五錢

送料 拾貳錢　海外四拾錢

ニセあり、ダマサレ賜ふな見本進呈郵二錢

募賣店月百圓以上の利を見てゐる人多し

東京市神田區猿樂町二ノ四い號　發賣元　一貫社　振替口座東京一壹壹貳七番

東京新橋
資生堂化粧品部
支店 大阪市東區南久寶寺町四丁目

東西名流婦人考案手提嚢
支那風紋様スカーフ手提嚢
新様式鏡臺と小道具
更紗加工片側帯と嚢物
東髪用鼈甲櫛簪

不景氣のために今年は流行品が出来ないといふことであります、流行といふものを廢れるといふことにのみ關聯させて考へると或はさうなるかも知れません、而し私達は今景氣不景氣を考へるより、流行を考へねばならぬ立場にあります、そうしてどうかして何か新しいものを生み出して流行界に多少の貢献をしたいと思つて居ります、茲に發表致しますのは其一端であります時期は更めて新聞でお知らせ申上げます

權利の主張と實行の責任

東京帝大山川總長病の故を以て辭され、去月下旬內規による後任總長の公選は行はれた。法律上の制度ではないが、從來の天降り任命を斥け兎も角も教授間の公選に依るといふ內規を決めるに到るまでには、幾多の紛糾曲折のあつた事と察せらるゝ。然るに愈、此內規を實行する段になると、教授間の打合をするでなし、大學の內外に於ける輿論を喚起し且つ之を參照するといふでなし、例により秘密の裡に突嗟の決定を見んとする官僚的慣行を踏襲するに過ぎざるは、我々の甚だ意外とする所である。由來權利を主張するに勇にして共責任を充實するに怯なるは、近代日本人の常とは云ひ乍ら、最高學府の教授諸君までが這の輕薄なる風潮を脫し得ずとは、鈍感なる我々ですら一寸呆れて物が言へない。

取る丈けは取つて置け、之を如何處分するかは後の問題だ、といふ流儀は朝野の到る處に見ゆる。共弊は過分不當の主張と云ふ事にもなるが、假令正當なる主張でも、之を適當に處置するの準備と覺悟とを具へずしては、少くとも未だ主張するの時機に達しないと謂はれても仕方がない。這の準備と覺悟となくして餘りに早く主張の滿足を得た者は、試驗の樂になつた學生が惰ける樣に、賃銀の上つた勞働者が缺勤勝になる樣に、自己の道德的責任を怠るの傾を呈する。近頃西洋の勞働運動は頻りに產業管理といふことを主張するが、日本の勞働者などに果して自ら產業を管理するの能力があるだらうか。

要求は正しいかも知れぬ、只之を求め得て後十分に共責任を完うし得るか。責任を完うし得る程度の發達を遂げた者が要求の聲を放つのならいゝ。隣りが要求するから己も要求して置かうと云ふのでは、安心が出來ない。我國のやうな後進國の勞働運動などには多少斯の不安が伴はないだらうか。

さうすると反動論者は得たり賢しと附け込んで曰ふ。さればこそ勞働者の要求は輕々しく聽くべきでないと。併し之は飛んでもない間違だ。やつても如何始末するか分らないことは明だが、やるべきものをやらずに置くは到底不正たるを免れない。我々は思ひ切つてやつて仕舞つて、さて夫れから徐ろに間違の起らぬ樣自ら警め又互に導き合ふべきである。

十分なる訓練を缺く勞働者の現狀に鑑み、右の如き反動說の起るは怪むに足らないが、そが往々資本家階級の利己的主張の道具に利用さるゝ事實に對しては、亦大に警戒するの必要がある。けれどもまた警戒の餘り、此種の論は悉く資本階級の利已的言說だときめて仕舞ふのも正しくない。

尤も世間には制度さへ變れば能事了ると觀る人もある。制度の變更だけで駄目な事は、帝大總長公選の結果に付ても明ではないか。產業管理權を取つた斗りでは駄目だ、取つた權利を如何運用するかの訓練と教養とを勞働者に與ふる事が最先の急務である。今までは此種の議論は勞働階級の主張に對抗する目的を以て資本階級から頻りに說かれたので、勞働階級はとかく之に與り聽くを厭ふの態度があつた樣だけれども、之を說くの動機は孰れに在れ、言ふ事共自身の眞理たることに疑はない。

吾人は勞働者の權利を主張する人の口より、最も痛切なる勞働者訓育の必要の絕叫を聞きたい。資本家階級の逆襲武具としてのみ此種の事が說かるゝ間は、社會改造も勞働運動もまだ本物ではない。

中央公論



第卅五年第十一號
十月號
第三百八拾八號

☆☆闘爭本能と國家の進化

長谷川如是閑

一『人間』と『國民』との背馳。二 國定國家哲學の建設。三 國定國家哲學の破壞。四 國家の機能と社會本能。五『互助』と『闘爭』。六 闘爭本能の現はれとしての國家。七 武力國家の發生。八 社會系統と國家系統。九 現實國家の社會化。十 新ユトウピアの特徴。結論。

一 『人間』と『國民』との背馳

人間同士の間では、人間以外の他の動物を、その動物本來の名で通しながら、人間を、人間といふ本來の名だけで通さないのは何ういふ譯であるか。他の動物は、人間に向つて『私は犬です』又は『私は猿です』と名乘りを揚げることを

許されてゐるが、人間が自分を『私は人間です』と名乘れば、相手を驚かすか怒らすかしなければ已まない。『お前は何だ』と問ふ人に對し、『私は人間です』と答へたならば、彼れは私を白痴か然らざれば謀叛人と思ふであらう。今日の人類の生活では、人間であることは、往々にして謀叛人であることになるのである。

今の世界では、人間は悉く何れかの國家に屬してゐる。此の國家は、所屬の人民に對して、人間であることよりも、國民であることを要求してゐる。少くとも、國民でなくして、人間であることは絕對に禁止してゐる。『國民でない人間』卽ち『人間である人間』たらんとする人間は、往々にして此の禁止を破らなければならない。それをした時には、彼れは國家の賊であると宣告される。人間であることが、謀叛人であることになるのは、國家生活と人間の生活との間に喰ひ違ひのあることの證據であるが、何人も、何れかの國家に屬せざるを得ない今日の場合では、人間たることを、何ほどかの程度で斷念して、謀叛人たることから脫れるの外はないのである。

國家が、『國民でない人間』卽ち『人間である人間』を敵としなければならないといふのは、訝しな話ではあるが、實際今日の國家は、悉くさういふ立場にあるのである。それらの國家は、人民に對して國民たることを要求してゐるが、人間たることは要求してゐない。國民の道德は持つてゐるが、人間の道德は持つてゐない。さういふ立場から、國家はその人民を、人間たらしめずに國民たらしむべく、各方面に於て努力してゐる。敎育を國家の手で行はなければならないといつてゐるのも、國家思想の涵養といふ名目で、國民的謬見（プレヂュディス）の上に、自國の國家的精神を建設せしめなければならないと考へてゐるのも、その爲めである。それはその筈で、『國民でない人間』卽ち『人間である人間』は、人間的立場から、國家の生活を批判し得る地位に在る。國家を批判することは、國家を盲信することよりも、人間として忠實なのであつて、人間として忠實なことは、國民としても忠義なことであるに違ひないのだが、さういふ意味に於けるローヤル

テイーを承認するほどの自由國家は稀有なので、大抵の國家は、『人間でない國民』を自分に一番忠義なものと心得てゐる。これは實際の苦がい經驗が國家に教へたことで、科學や哲學の所產ではないのであるが、然し國家は、往々にして、『人間である人間』を否定する科學や哲學を案出せしめて、國家に對し批判的の態度を取るよりも盲信的の態度を取る方が合理的であるといふ理屈を作り上げる策を講ずる。『必要』は『最高』であるといふ道理はこゝにも働いて、國家は、自己に必要なものに、客觀的の價値を與へやうとする。それは、或る時期に於て、國家は自己の生存上その人民に、人間たることを犧牲としても國民たることを保持せしめなければならない事情に迫られるからである。

二、國定國家哲學の建設

人間たる事を、何ほどかの程度で犧牲にしなければ國民であり得ないといふ目下の狀態――それは多少良心のある國家の代表者が、切に遺憾とする旨を述べてゐる狀態なのである――から考へて、國家を本質的に人間的生活の自然の狀態――道德的意義に於ける――と相反するものと解する見地を生ずる。それには、人間性（ヒューマンネチュアー）を極めて眞純なものと見て、國家は、その眞純な人間性の自然の發達から脫線したものであつて、その發生及過程は、道德的であるよりも不道德的であると考へるものと、人間性なる絕對に眞實の或るものを想定すると否とに拘らず、國家は强者と弱者との階級的の存在であるが故に、强者卽ち治者の階級は、勢ひ自己の意識した目的に適合すべく、弱者卽ち被治者の階級にある人間を作り上げやうとするのであると考へるものとある。所謂人道主義的の見地にある人々の多くは前者に屬し、後者は、所謂人道主義に寧ろ反感を持つところの無政府主義的、乃至社會主義的傾向の人々が、これに屬する。何れも『人間を『國民』に改造することの否定である。

これに對して、一般に、國家を人間生活の至高の存在とする見地の行はれてゐることはいふまでもない。此の見地はヘーゲルによつて頂點に達し、その餘勢を以て、國家、及法律に關する今日の哲學は、所謂新ヘーゲル派なる人々の獨壇場になつてゐるかの如き趣がある。すべての國家は、右の立場を、國定國家學、國定法理學として採用し、それを國民に服用せしめてゐる。――それは『服膺』といふよりも、『服用』と稱するを適當とする方法で呑み込ませてゐるのである。

この見地によると、國家といふものは、個人のそれを超越した客觀的の意志である。それは個人の意志のやうに有限なものではなく、不純なものではなく、不合理なものではなく、相對的なものではなく、全く無限にして眞、合理的にして絶對の存在である。かるが故にそれは『自由』である。國家の法律は、この『自由』の發現に外ならない。故に個人は國家に絶對服從することによつて、客觀的、無限的、合理的、絶對的眞意志に合致する。即ち彼れはそこに眞正の自由を發見し獲得する。――それは、何のことはない、奴隷であることは『自由』であることであるといふ論理上の一大發見である――國家にとつて此の位便利な哲學が又とあらうか。日本政府が憲法といふ法律を作らうとした時、右の哲學を學ぶべく學者を獨逸に派遣したのは、當然の處置であつたのである。

此の見地が、今日の獨逸――尤も大戰後の獨逸ではなく、その前の――の所謂『文化國家』の觀念にまで發達したのであるが、それは特に、その當時の普魯西といふ獨逸の一國の國情がさうさせたものであるといふことは、世間一般の認めてゐることなのである。普魯西が獨逸に統一し、次いで世界の統一を夢むるに至つたのは、國家を以て最高道徳の表現であるとし、その使命は、人間の生活に、その最高の價値――彼等が『文化（クルツル）』と稱する――を持ち來すことであるといふ見地に基いたものなることは、彼等の戰爭中公言して憚らないことであつた。ヘーゲル式國家學が、普魯西國家

をかくの如きドンキホーテ的運命に導くべきものであることは、早くから獨逸人の學者中にさへ認められてゐたことであつた。或る獨逸の法學者も云つてゐた『ヘーゲルの哲學に批難を加へるものは、彼れの法律及政府の哲學は、當時の普魯亞國家を理論的に肯定する爲めに向けられたものであるといふが、實際、多少その意味はあるのである。ルソーが彼れの「人類間に於ける不平等の起原」に於て佛蘭西革命の哲學基礎を提供したやうに、ウオルフが絶對主權説の理論の代表者となつたやうに、カントが法的制度としての國家の辯明者となつたやうな、政治家としてのフィヒテやロマンチストとしてのシエリングが獨逸の國民的精神を喚起せしめたやうに、ヘーゲルの法理哲學は、國家を道德力の最高代表者と認めることによつて、普魯亞國家の發生及完成の爲めの敎養であつたのである。……要するにヘーゲルは國家を文化の擔任者たらしめ、依つて、新らたに覺醒した普魯亞國家が理想として採用した『文化國家（クルツルスタート）』に、その理論的基礎を提供したのである』（ベロルツアイマー）。

かういふ使命を持つた獨逸國家の眼からは、彼れの文化事業を妨げる聯合各國は、文化の敵即ち野蠻民族であると考へられたのである。彼等とても、事實上英佛米伊等の各國民を、野蠻人と考ふることは困難なのであるが、それは觀念化、哲學化を商賣とする獨逸人のことであるから、國家を神樣に作り上げた哲學を逆用して、自分と同列の文明人を野蠻人に作りかへる哲學を案出したのである。それはウィンデルバンドがヴイコーの歷史回歸説——歷史は原始的狀態から始まつて又原始的狀態に復歸するといふ説——によつて『民族が蠻野から開化に昇つた後、先きのよりも更らに惡しき新たなる蠻野に逆戻りするとの觀察（ヴイコーの）は精細且つ適切である。吾々は今日、我獨逸の敵を一方には蠻野の第一種のものに、他方にはその第二種のものに比較せねばならぬ……』（哲學雜誌四〇三號四宮學士抄譯による）と云つてゐるのでもわかる。

この獨逸の高慢な文化國家の哲學は、事實がこれを破壞したので、その故郷に於て、今後どんな風に虐待されるか想像に餘りあるのであるが、然し今までの國家は、一つとして主我的自己肯定の必要を持つてゐないものは無いのであるから、その國家的立場に於て、多少のヘーゲル式傾向を帶びてゐないものはない。英國のやうに、理論的には何うしてもそれを受け入れない國家でも、實踐的には何等かの程度でそれを實行してゐたのである。何しろ、道德力の最高表現であり、文化實現の唯一の使徒である國家が、他國の領土を掠奪したり、他國の政治、經濟を攪亂したり、詐欺をし合つたり戰爭をし合つたりしてゐるといふのは、餘りにその師父ヘーゲルを馬鹿にした話であるが、然しそれは師父ヘーゲルが、その掠奪なり、詐欺なり、戰爭なりを、最高意志の發現即絕對唯一の道德と解し得ることを敎へたからである。それは丁度『國王は惡事を爲し得ず』といふ法的擬制によつて、王樣が姙婦の腹を割くのまで、神聖の行動と見做すに至つたやうなものである。それは法則を間違へたのかも知れないが、十分間違はれる處のある法則なのである。

三　國定國家哲學の破壞

この國家の哲學を事實が破壞したのは、國家の現實が、國家の哲學的性質と沒交涉に進んで行つたからである。卽ち國家の現實性がその非現實の被包物を刎ね除けて、所謂現實暴露となつたからである。さうしてこの現實暴露は、二樣にその現實性を露出せしめてゐる。第一は、國家が、その道德的存在を裏切つて、寧ろ國家以外のいろ／＼の集團と同じく、利己的乃至階級的存在であることを暴露せしめたことで、第二は、その國家によつて制約されてゐる人類は、國家によつて、人類自身の道德的完成が企圖されないで、寧ろ國家によつてそれが妨げられてゐることとの發見なのである。

この二樣の發見は、何がそれを誘發せしめたかといへば、即ち經濟的狀態の進化に外ならないのである。現代の經濟事情は、一方では、國民の現實の生活を脅かしてゐると共に、他方では、さういふ事情を通して國家の存在をも脅してゐるのである。資本家と勞働者との二大階級に分裂してしまつた社會は、――勿論それは科學的社會主義が、科學の單純化によつて抽象したやうに、截然と分かれた譯でなく、寧ろラッセルなどの考へてゐるやうに、頗る復雜な關係に於て分立してゐると見るが妥當であらうが――國家を、この二つの階級の何れかに屬せしめるより外なき事情に立ち到らしめたのである。云ひ換れば、力のあるところに權力の生ずる、普通の理法に從つて、國家は、權力者の掌裡に歸するといふ歷史を、こゝでも繰返して、資本階級の手に國家が占められる外に、行き途のない事になつたのである。で國家自身は、資本主義的發展の爲めに、領土の擴大を要求し、經濟的活動の範圍の擴張を企圖し、他の國家に對してその目的で立ち向ふのであるが、他の國家も、全く同じ立場にあるので、そこで二物が同一空間を塡充する能はざる物理の方則に從つて、戰爭によつて、强い方が、その空間を塡充するといふ結果になるのである。現にさうなりつゝあるのである。同時に國內に於ける人民の生活も、資本主義的組織の下に、次第に機械化し、手段化し、多數の人間は道具である外に、たいした發展も完成も不可能であるといふ事情を生じたが、機械化の物理的力は、更らに逆に、少數者の人間的力に向つて逆襲を試みるに至り、『人間的』(?)の獨占者は、機械的なる『非人間的』(?)多數者の壓迫を感じつゝあるのである。此の國際的と國內的との兩面からの不安は、國家の道德的、絕對的、合理的、文化的價値を、一種の價値顚動によつて、無(インフィニット)根から零(ゼロ)に還元せしめやうとしてゐるのである。而かもその價値顚動は、非現實的生活から現實的生活への移動によつて生じたものに外ならない。更らに云へば、觀念的生活における價値を、現實の生活の權衡で量つたのであつた。

觀念的の生活を、非現實的生活といふのは、正確な言ひ方ではないかも知れないが、私は極めて素朴的の言ひ方に從つて、さういふことを許して貰ふならば、今日の國家は、その所謂國家的生活を觀念的のそれから引離さなければならないといふことを、各人の生活事實によつて促されてゐるのである。それは即ち非現實的國家生活から、もつと現實的の國家生活に返らなければならないことなのである。超國家の建設も、元より、人間の生活の或る方面の要求には違ひないが、それが現實を、或る目的――然かも少數人の意識した目的――に從つて瞞着し、糊塗することであるならば、その超國家は、現實性への少しばかりの移動によつて、直ちに破壞さるべきものなのである。さういふ理想國は現實の國家を許さない範圍内に於てのみ觀念的にも成り立ち得るのである。誰れやらが、ヘーゲルの國家思想は、希臘の都市國家に於ては、多少受け入れらるべき性質を持つてゐるといつたが、それは、希臘市民に意識された希臘國家の現實は所謂文化的意義に於て、多少今の『文化國家』の觀念に觸れたものがあつたといふ意味で、間違つてゐないことである。

これに反して、現在の國家は、如何に市民的の國家であつても――或はそれが市民的であるだけ――資本國家であり軍國國家であつて、決して道德國家ではないのである。かゝる現實を目前に示されて、尚ほそれと懸け離れた觀念國家の信仰を持てといふのは、此上もない無理な話である。それを一方からは、人間が現實的に墮落したといふ風にいつてゐるものもあるが、高尚(?)な觀念生活に悠々と自適することの出來ないやうな境遇に、多數人を陷れたのは寧ろ現在の國家生活そのものなのである。多數の人民は、『觀念』を樂しむには、餘りに苦しい『現實』に縛られてゐるのである。私達一般の生活に於ては、此の現實の改善が何よりの急務と考へられてゐるのである。在來の國家哲學の破滅は國家の現實を、有りのまゝに見なければならないといふ要求によつて持ち來されたのである。國家の現實の改善は、先づ現實をありのまゝに見ることを先決問題とする。觀念的な乃至浪曼的な冥想や想像によつて、國家の現實は作り直さ

れるものではない。

この事實は、始めに云つた、國家に忠實な人間即ち忠義な國民は、往々人間たることを失はなければならないといふ事情だけでも十分察知されるのである。國家が、合理的、道徳的、絶對的存在であるならば、國家の人民と人間とが衝突するといふやうな事情の發生する譯がない。私がこれから簡單に觀察して見やうと思ふのは、國家の性質及び職能についてのほんの一面的の觀察であるが、それによつて、私は、今日の國家の合理性と不合理性とが、對照をなして觀取されやしまいかと思ふのである。

四　國家の機能と社會的本能

獨逸流の哲學的國家觀では、社會と國家とを混同して、國家の生活は、社會の生活の最も發達した或は最も完成した樣式であるといふ風に觀るのである。これに反し英國などの實驗的國家觀によれば、國家は社會に發生したいろ／＼の制度の一つであつて、その價値は、一般の制度と同樣に、その社會的價値に依據してゐるのである。私が要求してゐるところの、國家を現實に見るといふ觀方は、いふまでもなく、後者の見方をいふのである。前者即ち國家は社會の最完全な現はれであるといふ見方の事實に合してゐないとは、現に世界的の要求になつてゐるところの、國家をもつと社會化しなければいけないといふ切迫した事情の發生によつても明瞭である。實際、國家の生活が、社會の生活に適應すべく進轉して行くことによつて、國家の肯定が成り立つのである。社會が國家といふ完全體に進んでゐるのではなく、國家が社會といふ生活體の手段として存在してゐるのである。で國家は、人類の社會機能の一形式であつて、無論全般的のものではなく、他のいろ／＼の制度と同じく一部的のものである。即ち大學が、學問の爲めの制度であるといふ如

く、國家も生活の目的の限られた範圍を擔任してゐる機關なのである。たゞ國家の目的は、大學などよりも廣汎で且つ復雜である爲めに、その範圍について常に說が分かれてゐるといふだけのことである。『文化』とかいふ總汎的の、全生活的の職能を、國家が持つてゐないといふことは、大學制度又は、交通制度の如きは、國家の制約を離れるほど、理想的であると考へられてゐることによつても明らかである。日本のやうに『國家思想の涵養』を目的とすると、學問に國家が制限を加へてゐる大學の如きは、昔法王の制限を受けた時代のそれで、大學中の最も退步的のものと認められてゐるのである。國家の職能が、總汎的でないことは、この一事でも解かる。目下の狀態に立脚していへば、眞個の文化を持ち來すには、國家を離れた方が好いかも知れない。これは文化國家の觀念とは、正反對の事實ではないか。このことは少しく國家を發生學的に觀察すると明瞭に理解される。

國家の發生を說明する爲めに、私は、社會生活をその原始的狀態に於て考へて見たい。

生物が集團の生活をする時には、孤獨の生活の困難なものほど、その個體の數が多く、その數によつて自然の壓迫の爲めの滅亡に抵抗しやうとする。蟻と猿とを比べると、その集團を組織する個體の數に於ては、比べものにならぬほど蟻の方が多い。それだけ、蟻は猿よりも弱小なのである。然かも場合によつては、此の弱小な蟻の群は、猿の群を襲擊して全滅せしめることがある。その場合に、一匹の猿は、無數の蟻を潰し殺すに違ひない。これに反して一匹の蟻は、一匹の猿の子をも殺すことは出來ない。それにも拘らず、蟻の群は遂に猿の群を全滅せしめるとすれば、それは全く數の力に依るのである。而かも此の數の力は、一個〱の別々の力に於ては效果がなく、全く無數の力の共働に於てのみ發揮し得る力なのである。即ち彼等の一個〱の力は物理的の力であり、此の共働のそれは社會的の力である。蟻の

集團に於けるその力は、所謂組織された力（オーガナイストフォース）の最も簡單な現はれであることいふまでもない。

人間も亦アグム、イヴの傳說とは正反對に、蟻や猿と同じく、集團として發生したものに相違ないのであるが、哺乳動物のうちでは、人間は生理的、肉體的の組織に於て强い方とは云はれない。最も肉も皮膚も概して他の動物のそれよりは弱い。原人に於ても、それは確かにゴリラよりは弱かつたらうと想はれる。さういふ弱い種の生存は、いふまでもなく、組織された力（オーガナイストフォース）によるのである。人間がゴリラに立ち向ふ時、一人と一匹とで人間が勝ち得るやうになつたのは、より高等な發達によつて、道具といふ一種の自己伸長が完成された後のことであつて、始めは、人間もゴリラの武器と大差ない武器で立ち向つたに違ひないから、勢ひ組織された力による外はない。このゴリラに勝ち得た『共働（コオペレエシヨン）』――自然に勝ち得る『共働』――が人間の社會的生存の原始的の狀態であつたのである。

然し種は全部共働（コオペレート）するものではない。同じ種に屬する集團と集團とは、いろ／＼の事情の下で生存の爭を起すのである。人類に於ては、一つの氏族（クラン）が幾つかの氏族に分れる。それは、食物獲得の關係、生活の本據の關係等から、繁殖の必要上分裂する譯であるが、さうなると、氏族と氏族と間に或る場合に生活の競爭が起ることは必然である。生物の移動は生存手段の最も抵抗の少い方面に動くのであるが、自然の供給が不十分になつた時に、その附近に於て、最も形勢の良い自然は、往々他の民族によつて占められてゐることを發見するのである。この場合に、移動者は退いて自己の收獲の增加を智的方法で計畫するか（それは今の平和國家がやつてゐることである）又は他方面に移動の方針を變へるか（それも今の移民奬勵國家のやつてゐることである）又は、先住者に對して襲撃を加へるか（それも今の侵略國家のやつてゐることである）の三つの方法によるのである。此の三つの方法の何れかに於て成功したものが生存の適者として發達して行くのである。

この三つの方法の第一と第二とは、自己發展的であつて排他的ではないが、第三のものは自己發展よりは、排他を主としてゐる。第一の、退いて自己の收穫法を改善して增收を計るといふことは勿論、第二の更らに他の方面に移動するといふ場合にも、それが排他的でない時は、それは氏族の『共働』によつて完成さるべきものなのである。これに反して、第三の襲撃は、同じ『共働』であつても、それは鬭爭である。卽ち、同じ組織された力でも、第一第二は平和的であり、第三は鬭爭的である。

生物學者は、この第一第二の平和的共働を互助（ミユーチユアル・エード）と稱し、第三の戰爭現象を生存競爭又は力の鬭爭（ミユーチユアル・ストラツグル）と稱してゐる。生物の進化には、この互助と鬭爭とが並んで働いてゐるので、動物の本性は爭ふことにあるのか、助け合ふことにあるかといふ議論が起るのであるが、動物が本質的に、憎み合ふものか愛し合ふものかといふやうなことが決せられる筈のものではない。愛するとか憎むとかいふことは――形而上學的の議論は別として――環境に從ふ心理狀態なのであるから、食物でも足らなくなれば、愛し合つてゐたものが憎み合ふことになり、危害が襲來すれば、憎み合つてゐたものが助け合ふことになる。『貧すれば鈍する』とか『兄弟墻に鬩ぐも外その侮を禦ぐ』とかいふ諺は、それぞれ右の兩方の場合をいつてゐるものである。

五　「互助」と「鬭爭」

卽ち生物は、環境がこれを必要とするに從つて、或は爭ひ或は助け合ふものと見るべきであるが、然し、若し强いて本質的といふものを求めるならば、あらゆる事物の常態は、平和と自由とであるといふ常識的の見地に從つて、平和的互助が生物の生活の本質的狀態であるといふ方が妥當であらう。例へば、前の第一第二の例でも、戰爭を必要とする際

害が發生しなければ、平和な互助によつて發展して行くのであるが、或る事件によつて、この平和な互助だけでは生存が六かしくなると、爭鬪を必要とする場合が生ずるのである。がその爭ひに於て、各の氏族が共働する精神は、即ち平時に於ける互助の精神に外ならないのである。即ち戰爭に於ける互助は、平時に於ける互助の延長であるとも云ひ得る。

一つの集團に、平時に於ける互助的生活が十分に成立してゐない時に、ある必要が彼等の中に起ると、そこに互の爭が生じ、集團の破滅を惹起することは、犬の食事に於て、その教訓を見ることが出來る。多數の犬を飼養する所では、犬は皆一つの食器から共同の食を取つて、少しも爭ふことをしない。かういふ集團に於ては食物の缺乏が起つた時に、一つの香餌を獲たにしても、それは共同の食物をして、何等爭の基にはならないが、普通の無教養の犬の場合には、多くの犬に同一食器で食事を與れば、犬同士猛烈な爭を起して、食物はそつちのけにして、死物狂ひの戰爭が起る。これは互助の本能が働かないで爭鬪の本能のみが働くのである。それはその集團の間に、平時に於ける互助の働きが十分に涵養されてゐない爲めである。

平時に於ける互助の働きの十分成り立つてゐない時には、爭鬪に於てもその集團は共働に於て缺くる所があり、從つて劣敗者となるのである。即ち爭鬪に於て共働的に勇敢なるものは、平時に於て、より互助的なのである。此の點から觀察すると、互助が、動物の社會的生活に於ける本質的の働きである。

この互助の衝動は、全く集團の生活の本能であつて、純個人的生活に於ては發生すべき筈のものではない。それは個人を何等からの意味で犧牲にして全體の生活を保全することなのであるから、個人にとつては犧牲である。蟻が大集團で他の大きい動物を襲ふ時の互助に於て、無數の個體は、その大い動物の爲めに粉碎されるのである。個體が此の運命を承認することは、『共働』を可能ならしめる根本條件であるが、此の承認は、畢竟互助の衝動に外ならないのである。

ダーウヰンは『一團を爲して生活する動物は、防禦攻擊に際して、互に信實である事、指導者に從順である事を必要とするが、この必要は個人的の必要を以てしては說明することの出來ないものである』と云つてゐる。それは個體が爭鬪の犧牲となることではあるが、それは個體の犧牲によつて種の生存を可能ならしめるといふ自然の法則に從つたものなのである。

全體が個體の犧牲によつて生存を保全するといふ場合は、互助が極端に働いた場合であるが、これは集團の生活の常態でないことはいふ迄もない。何となれば集團を爲して生活するのは、畢竟個體の孤立の生存が、種を保存せしめることが出來ないからであるが、種の保存が出來ないといふのは、矢張り個體の生存が出來ないといふ事なのである。集團はこれを要するに個體の爲めの組織に外ならないのである。個體を措いて、別に集團といふ存在があり、それを保存せしめるために個體が犧牲となるのではないのである。

これを約言するならば、生物の社會的本能である『互助』は、個體の生存の爲めの『共働』であつて、それが集團の保全の爲めの爭鬪に於て犧牲的行動となつて現はれる。而してそれは、その生物の個體の保存が、集團の保全によつてのみ可能である性質から派生した働きなのである。

右の敍述に於て既に豫想し得られる所であるが、この『互助』の働きについて人類學者等が人間の社會について觀察したところによると、それは生物學者が動物の社會に於て觀察したところと大體に於て一致してゐるのである。即ちそれは極めて自主的に、何等の强制なしに、殆んど個體の本能として（義務としてでもなく、屈服としてゞもなく）すら〳〵と行はれてゐるのである。こゝに於て、クロポトキンのやうに、人類の社會的生活を全くこの互助の本能に求めて、社會及一切の强制を排除することによつて此の互助の自然に歸すべきものであることを主張するものもあるのであ

る。此の見地の當否は別として、社會的生活の自然が、ホッブス等の考へたやうに、自滅的に亂脈のものであるといふ想定は、當を得たものでないことは疑ひない。それは狼の群でさへも、互の喰ひ合ひによつて自滅しないで、(食糧さへ乏しくなければ)繁殖しつゝ行くことによつても察しられるのである。自然が人類の發生しない前にも着々として生物無生物を繁殖せしめてゐたことを考へると、人類の意識的社會生活のみが、秩序と法則の下に於ける唯一の生活であると考へることは、餘りに高慢な考へ方である。互助は、生物の社會的生活の自然である。此の自然が、何等かの事情によつて撞着を來した時に、そこに爭鬪が起るのである。

此の爭鬪に於て、勇敢、信實、從順等が集團の優勝を持ち來すとすれば、(それは皆生物の社會本能の現れである)この本能を十分に發揮したものは、社會に於ける優勝者の地位を占めるのである。勇敢と忠實と順從とは、場合の相違によつて、現はれ方を異にした同一本能なのである。ダーウヰンの擧げた例の中に、激流の中の岩の上に取殘された猿を救助した猿のことがあるが、此の猿の行爲は勇敢であつて、然かも集團の指導者の意志に忠實であり、一般の精神に從順であることに外ならないのである。戰鬪に於て勇敢であることも畢竟、集團に於ける互助の本能の非常の現はれに外ならないのである。而して此の現はれるから國家といふ制度が發生するのである。

六　鬪爭本能の現はれとしての國家

國家は掠奪の團體であるとか、國家は階級的鬪爭の抑壓機關であるとかいふ見地は、生物學的にいへば、人類の社會本能の鬪爭的の現はれが國家といふ制度に發達したといふ見地を一致してゐると見ることが出來る。然しながら、本質的にいへば、國家は、掠奪とか階級鬪爭とかいふ社會的本能の非常(アブノーマル)の一定の現はれに於て成立するものでなく、鬪爭に

於て必要とする本能の保存と發達との爲めに發生したものと見るべきであらう。

人類生活の互助に於てでなく、互の闘爭(ミューチュアルストラッグル)に於ては、個人の蠻力、更らに進んで、集團的の武力が優勝の必須條件を爲す。この集團的の武力は、勇敢、忠實、從順等の條件によつて發揮される。人類の社會的本能が、これらの諸條件となつて現はれるには、たゞ各自の蠻力による又は强者の蠻力による强制のみに依賴することは出來ない。そこには矢張り組織された力による本能の誘發又は强制を要するのである。歷史上の國家は、何れも少數蠻力家の若しくは――更らに進んだ社會に於ては――智的優越と、それらの力との結合による指導者の强制的の組織の上に成立してゐるのである。それはその强制的の組織によつて、始めて闘爭の本能は十分に發揮し得らるゝからである。その場合に指導者たる優越者は、社會生存の爲めのエジエントとしてよりも、自我的優越者として働く場合を生ずるので、國家は、社會的產物であるよりも、英雄的產物であるかの外觀を呈する場合が多いのであるが、英雄の自我は、集團の社會的本能に全く相反する場合に於ては決して完成されるものではなく、寧ろ、それと一致した場合に成立し得るものであるから、その意味に於て、個人的であるより以上に、社會的である場合が多いのである。

然しこれだけの事實によつても、歷史的の實際の國家は、人類の社會的性質の全般を包括する制度でないことは、殆んど明瞭である。それは社會的本能のアブノーマルの一面なる闘爭の本能に立脚する制度である。社會的性質――假りにその意味に社會性といふ言葉を使用するならば――卽ち社會性は、國家制度とは全く沒交涉に作用し、發展し、完成せしめられて行くべき性質のものである。何となれば、それは、國家といふ制度が强制する力以外の組織(オーガナイストフォース)された力の發展だからである。

この事は、今日の國家の働きを觀察すれば直ちに諒解される。今日人民が米を作り、詩を作り、發明を爲し、飲み、

食ひ、唱ふ等の日常生活の平和の展開に於ては、所謂帝力何んぞ我にあらんやで、國家の强制に待つことは少しもないのである。たゞ、かくの如き正常の生活を妨げる侵略者が發生した時に、國家の力が感じられ、國家の干渉が要求されるのである。即ち非常(アブノーマル)の事が出來した時に、國家が出しやばらなければならない。或は、それは所謂警察國家時代の國家思想であつて、今日の國家理想に於ては、所謂文化國家の理想の示す通り、國家は啻に非常の發生した時に發動するのみでなく、正常の生活に於ける指導者としての存在なのである。即ち社會本能の平和的互助の現はれに於て國家が働いてゐるのであるといふものもあるかも知れない。然しそれは、敢て今日の所謂文化國家には限らない、豐太閤やフレデリック大帝やピートル大帝時代の英雄國家に於ても、やつて居たことなのである。然しながら、如何に國家がその正常の生活に出しやばつて來ても、その力の加はる所は、一定の限界を持つてゐるのである。例へば、國家が大學を設けるといへば、如何にも國家の力が、正常の生活に積極的に加はつてゐるやうであるが、さう見るのは表面の觀察である。なる程大學は、國家の力で出來たのであらうが、そこに學問する人々の智識慾の發動は、人々の社會的本能の自然の現はれであつて、百姓が米を作り、詩人が詩を作るのと同じく、國家の力もこれを如何ともすべからざるものなのである。ラチームが發見され、進化論が完成されるについて、國家の力は精々、たゞ、これらの本能の發動が、障害を受けた時に、その障害を除去する働きに止まるのである。(實際はそのあべこべで、國家は、さういふ新思想の發見を妨げるのが常であるが)これを水道に譬へるならば、國家は水管を作り又はこれを塞ぐ障界を除去する機關であつて、流出する水そのものを製造する働は持つてゐない。水は國家の力を待たない山奥から湧出したものなのである。國家は如何に踏張つても、水を作る化學的力であり得ないと同じく、人類の社會的本能の自然の發露は、本質的には國家の發動とは沒交渉のものなのである。國家が人類の文化の總般的の本體でないことは、大學を作ることは出來ても、自分から學說を

作つたり、元素を發見したりすることの出來ないのによつても明かである。

要するに、國家生活は、決して社會生活の全般を含んでゐるものでもなければ、その最も肝要な部分を包含し盡してゐるものでもない。國家の社會生活に於ける關係は、丁度往來と交通巡査との關係である。各人が往來を歩くには、何等交通巡査と交渉はない。各人の意志に從つて、各人の足で歩いてゐるのであるが、一旦そこに、何等かの障害が起ると忽ち交通巡査との交渉が生ずる。各人をして往來を歩かしめてゐるものは、各人の歩行本能（假りにそんなものがあるとして）であつて、交通巡査ではない。人類をして社會的發展を遂げしめてゐるものは、各人のいろ／＼の社會的本能であつて國家ではないのである。で假りに前者を社會性と稱し後者を國家性と呼び、前者を正常（ノーマル）にして道德的なるもの、一後者を非常（アブノーマル）にして不道德的なるものとさへ認めるものがあるに至つたのである。然かも前にもいつた如く、國家性は矢張り社會的本能の一面の現はれであるから、本質的には不道德なものといふことは出來ないのである。然しそれが不道德性を帶びるに至つたことは事實なのであつて、それが爲めに、冒頭にいつた如く、人間と國民との間の相違をさへ產み出すに至つたのである。

七　武力國家の發生

國家が不道德性を帶びるに至ることは、それが鬪爭本能の組織化であることを想へば、敢て不思議はないのである。人類の道德が、平和的互助に於て破られることは殆んど考へ得られないが、鬪爭的本能の現れに於ては、當然破られ勝ちの筈である。殊に社會的鬪爭本能が、如何にして國家といふ制度にまで組織化されたかを觀察すれば、それは愈々有り得べきことであるのを發見するであらう。

普通、國家の觀念に適合する國家の中には、古代希臘の夫れの如き、又古代羅馬のそれのやうな種族國家を含んでゐないのである、これらの國家は、今日の言葉で國家と呼んではゐるが、その性質は全く別のもので、種族的單位の下に(例へその種族は嚴格な意味の肉親關係ではなかつたにしろ、同一種族といふ意識の下に結合したものであつた)權力關係以外の社會的結合として存在したのである。それが次第に國家的性質を帶びるに至るには、全く征服關係による權力と服從との支配が發生してからのことである。即ち結合の楔子が、種族的統一より武力的統一に變ずることを要するのである。

此の征服的統一に於ては、當然武人の支配が、互助の生活に代るのである。この武人の支配が、國家の特徴なる『鬪爭本能と平和本能との分業』を國家の內部に發生せしめる。此の分業は、社會生活の保安上發生した筈のものであるけれども、一方に於ては、此の武人の示した力の發露が、一般人民の本能的忠實と服從を馴致すると同時に、他方に於て、武人自體の鬪爭本能の非常(アブノーマル)の昂進を惹起し、武力は社會的必要の本位から、武力それ自からの本位に轉換するのである。この轉換から、鬪爭本能の不道德性が發端するのである。故にその武力國家の延長である今日の國家に、同樣の不道德性が伴ふのは敢て怪しむに足りない。

元來國家的武力の起原は、種族國家が外部よりの敵に對する防禦として發生したものなのである。その武力が、國家の內部に對して働くことになつたのは、國家が、親族關係から征服關係に移つた爲め、國家內部に於て、常に國家に對する反抗が起り得るからである。一旦征服國家の成立した以上は、此の反抗は、國家的不安であると同時に、社會的不安であるから、それを平和に維持することは、たゞに國家的必要(支配者の必要)であるのみならず社會的必要(被支配者の必要)でもある。こゝに於て、權力服從による國家關係が成立し得るのである。此の武力的權力關係は、封建國家

に於て最もその特徴を發揮してゐるのであるが、此の封建的の服從關係は、個人的忠義と、契約的關係とから成り立つてゐるものと西洋學者の云つてゐるのは（オックフォードのカーライル教授）日本の封建時代のそれにもよく適合してゐる。我が封建諸侯の勢力は、大體に於て野武士豪族等の歸順によつたのであるが、それには、歸順者との間に報償的の契約が、暗默にか明確にか成り立つてゐたのである。このことは、武力階級は、社會的保安の爲めに、一般平和的人民の委托によつて存在し得たといふ觀察に一致してゐる。從つて、此の委托による武力を濫用して、武人が一般の社會的生活を脅やかすに至つたのが、國家制度成立の具體的の要件であるといふ一派の見解に多少の根據を與へてゐるのである。而して封建諸侯が、野武士や豪族を統一して、自己の小國家を完成せしめたやうに、その後の民族國家（それは名ばかりで、別段民族に立脚してゐる譯ではないが、封建國家を統一する口實が民族的といふ名目であつたし、又比較的民族で區劃されてもゐるので民族國家の名が生じたのである）は、その封建小國家を統一して一國家を完成せしめたのであるから、それは依然として同樣の武力的性質を具備したものに外ならないのである。即ち武力がその國家の中心勢力を爲し、それに對する絶對服從が要求されてゐる。かくして、國家は、一方に於て社會生活の安全保障者でありながら、他方に於ては社會性の壓迫者として進化し來つたのである。

かくの如き國家に對する盲從的服從が、社會生活の停滯と不安とを惹き起すに及んで、度々國家に對する革命が勃發し、何度か國家の改造は要求され、觀念的にも國家思想の變革を來したのであるが、人類の社會的發展と國家的發展とは依然として、決して相會しない並行線の如くに進んで行きつゝあるのである。而して此の並行的進行を何うかして同一軌道の下に持ち來さうとする企が、即ち國家觀念の哲學化なのである。

八　社會系統と國家系統

國家の哲學化に於て、要求されてゐることは、現實の生活に於て、無暗と撞撃(フリクション)を生ずるこの國家生活に、何とかして觀念的の妥當性を與へんとすることなのである。それは人生の不合理的現實に妥當性を與へん爲めに、それを論理的に合理化しやうと苦心する一般の傾向が、國家といふ制度に對しても行はれてゐる譯なのである。

然しながら、論理的の妥當は、必ずしも實踐的の妥當を持ち來さない。從つて、現實の國家生活は、常に、その理論的構成を破壞して進んだり退いたりしてゐる。この破壞から脫れる爲めに、國家の形而上學が發生し、經濟其他の社會的事相によつて左右されない、絕對的存在としての國家の想定したのである。がそれは鼬こつこで、結局現實で破られる論理的妥當性に過ぎない。始に述べた通り、ヘーゲルのそれに於て頂點に達し、今日もなほ一部の新ヘーゲル派によつて保持され、多くの國家によつて公認され、すべての國家主義者によつて信奉されてゐる思想は、卽ちそれである。

この思想にもさま〴〵の系統はあるが、そのすべてを通じて似寄つてゐる點は、社會性のアブノーマルの性質から發生して國家を、ノーマルの社會性そのものに結合せしめてゐることである。事實の上で、全く不可能であるこの結合を可能ならしめるには、國家を、觀念的、絕對的、無碍無障的實在として形而上學的に認識する外はないのであるから、この企ては當然でも必然でもあるだらうが、然し、我々が目下の國家生活に於て痛切に感じ出した撞着は、その論理的破滅ではなくして、現實の破滅なのである。譬へていふならば、2+2=4といふ論理が崩れた譯ではなく、二といふ數によつて表はさるべき二圓なり二千圓なり二萬圓なりの金を持たない爲め、二と二とを加へて四圓なり四千圓なり四萬圓なりの金を現實に握ることの出來ない悲哀を感じてゐるのである。2+2=4といふ公式があつても、それを實際

の生活の上に現實化する實物のない爲めに、そんな公式が我々の爲めに何の役にも立たないことになつたのである。國家の形而上學も、それ自體の論理的妥當性が何うであらうが、現實の國家は、明かにそんなものではないので、形而上學的國家を現實化する何物も實在してゐないといふことになつたのである。『勘定合つて錢足らず』といふ諺が一番之れに適當してゐるのである。正何位勳何等何爵何の某といふ名前があつて、その人間が人殺しをしてゐるといふ實際に觸つた事件は、丁度今の形而上學的國家と實際の國家との關係を象徵してゐるのである。

何といつても實際の國家は、その發達の歷史を追ふてゐる限り、社會性の本來の發達に一致し得ないのは、左の圖式を見てもわかる。

社會——民族——種族——共產村落——ギルド——都市——コンモンウエルス。

國家——家族——武力國家——封建國家——民族國家——聯邦國家——帝國——世界聯盟。

これは、歷史的發達の順序をいつたものではなく、——大體その順序によつてゐるが、それは必要なことではない——社會性及國家性は、その發達に於てそれ〴〵別々に右樣の形を採り、到底合致する時のないことを示したものである。論理が、この二つを結びつけて見たところが、事實がから分れてゐることを如何ともする事は出來ない。

右のうちで、都市やコンモンウエルスは、それ〴〵殆んど國家的生活に近いたこともある。——都市は中世のそれに於て、殆んど封建國家の一國的であつたが、その性質に於て、全く混同されない。コンモンウエルスは、今の濠太利のそれの如きは、英國の一部であり、又それ自身全く嚴然たる一國家であるが、然し英國を離れて考察する時、及びその成立の動機に於て鬪爭本能の發動よりも社會性のそれに依據したものである。それが今日の如く國家的であるのは、全く一般國家的生活の一員として、生存競爭を試みる必要に迫られてゐるからである。

兎に角右の二つの系統は、多少接觸はすることはあつても、本質的に合一はしないのである。

九　現實國家の社會化

然るに、形而上學的の社會及び國家の合一が現實の爲めに破られてゐるに拘らず、それと逆に、現實の國家生活が、社會的傾向に帶びるに至つたといふ事實——少くとも、その方への運動が起りつゝある形勢——を生ずるに至つたのは甚だ皮肉な事である。

それは互の鬪爭（ミューチュアルストラッグル）に立脚してゐる國家を、互助（ミューチュアルエード）に立脚する國家に改造しやうとする運動である。それが全然成功したのは露國のみに止まつてゐるが、——露國の過激派の革命の成功は、果して一般に考へられてゐる互助の原則の上に立つたそれであるや否や、私は今斷言するに足る材料を持たない。多くの文書は過激派の理想を語つてゐるもので、その實際に至つては、文獻の殖へれば殖へるほど、混沌たる疑惑の裡に我々を投ずるばかりである——何れの國家も、今日までの鬪爭的性質を保持しつゝ存立を續けて行くといふことは、絶對に六かしい形勢に陷つてゐるのである。

一旦革命を經た獨逸は、この意味で先達の反革命的再革命ではない、二次的革命の危險に瀕してゐるし、伊太利は、巨大の陸軍を擁しながら、非常なる社會的混亂に陷り、もしそれに向つてその軍隊を使用すれば、忽ち全體的崩壞に陷らんとする危機に瀕してゐる。英國も、國內の階級的分裂に加ふるに民族的分裂を以てし、僅かに英國人の民族的鈍重によつて安康を得てゐるといふ狀態である。佛國は一大軍國的勝利の餘勢を以て、盛に國內の社會化運動を壓迫してゐるが、それが小成功を齎らしてゐるやうに見ゆる現時の形勢は、決して恒久的のものであるとは思はれない。米國は、資本主義的大規模の政治によつて、戰後も戰時に劣らない强烈の壓迫を社會運動に加へてゐるが、それが爲めに、運動は全

く過激化して、舊式無政府主義者の恐怖主義を實行せしめる傾向を馴致し、昨年の大爆發計畫に續いて、今またウォールストリートに對する爆彈による示威運動を勃發せしめるなど、單純な壓迫によつて到底安泰を得られさうな形勢ではない。

此等の形勢の眞正の性質について、今こゝに詳しく說く譯には行かないが、要するに、それは、前揭の社會及國家の二つの系統の何れが、今後の人類を支配すべきかについての爭ひであると云ひ得る。さう見た時には、國家が、しやにむにその成立の歷史的精神を固執して、その系統の純粹を維持しやうとするのは、一般の不安を愈々甚しからしめるものと見なければならない。さうして結極それは、國家自體の進化の法則とも合致しないことかも知れない。

産業革命によつて、歐洲殊に英國に於て、社會的大變革を生じた時に、多くのユトウピア社會が、哲人や、詩人や、學者や、實際家の間に案出されて、これに向つて突進せんとする運動が猛烈であつたが、これは誠に單純な國家否定で、言はゞその昔ピューリタン敎徒が英國政府の强壓を脫れて、米大陸に自由國を建設したといふ政治的運動を、經濟的に實現しやうとしたやうな傾向のものであつた。然るに、その後所謂科學的社會主義が起り、階級意識に基く國際的資本階級と、國際的無産階級との鬪爭が生ずるに至り、國家は、これに對抗すべく、相競ふて階級抑壓の手段を講ずることになつた。これが爲めに、前代の國家無視的傾向は、急轉して國家の積極的發動に變じ、無干涉主義國家は、その正反對の干涉主義國家と産れ變つた。この國家的隆興の災であつたことは、世界の大戰によつて痛切に人類に敎えられたので、戰後の國家は、互の自制によつて、その鬪爭本能に制約を加ふるべく世界的聯盟を企てたが、それは大部分空望に歸した。その筈である。國家は、前揭の系統に從つて、何時までも、その鬪爭本能に基く本來の性質を失ふことを嫌つてゐるからである。

十　新ユトウピアの特徴

こゝに於て、事情は逆轉して、前世紀のユトウピア的思想が復活することになつた。それは既成國家の否定であると同時に、新國家の建設なのである。前世紀來の學問の非常な進歩の爲めに、今日のユトウピアは昔日のユトウピアと同じくはないが、それはより多く科學的性質を帶びた點に於て異なるのみで、ユトウピア的であることに違ひない。

ユトウピアの特色は、それが有機的な進化を賴らないで、人類の意識した目的によつて、社會組織を甲の狀態から乙の狀態に作り直さうとする點にある。有機的進化に於ては、右の甲と乙との間に物理的、化學的、その他の聯絡があるのであるが、ユトウピアはその間に何の聯絡もなく、人間の腕が、甲を無くして乙を持ち來さうといふのである。今日の社會思想の多くは、有機的進化若くは所謂觀念的進化等の科學的若くは論理的聯絡を必要としないで、然る冥想的の飛躍によらうとしてゐるのである。それは何れも頗る構成的（コンストラクチィーブ）ではあるが、その構造を持ち來す作用については、全く主觀的進行に依賴して、客觀的根據に乏しいこと甚しい。それはマルクス等の科學的社會主義に動機して起つた運動でありながら、その構成的作用についてのみそれに賴り、その進化的作用に於て、科學的社會主義から遠く離れてしまつたのである。露國革命を完成せしめたレニンの說によると、それはマルクスの科學的理性とマルクスの實踐理性とを忠實に實現したに過ぎないといつてゐるが、或はさうかも知れない。マルクスに於て、その純理性と實踐理性との間に何等かのギヤツプのあつたことは、人間が科學の化物でない限り當然のことなのである。今日の社會思想は、多くは皆科學的構成を持ちながら、その發生に於てユトウピア的である點で、何れもそこに人間的特徴を示してゐる。それだけ實行の可能性があり、從つて國家にとつては、これを科學視してのみゐることは出來ない譯である。レーニンの獨裁政

治や、伊太利勞働者の工場占領の如きは、このユトウピア的進行に於て始めて可能なことなのである。英國に於て、さういふ進行の起らないのは、英人が實際生活に於てユトウピア的であるよりも實際的であるが爲めであらう。然しその代りに英人は、ユトウピアの構成的方面に於ては、その本家だけに中々發達してゐる。オレーヂやコールやホブソンやのギルドソシアリズムの如きラッセル等のアナーキズムの如き、そのユトウピアの最も立派なものである。レーニンのそれから見ると遙か人道的、紳士的で頗る文明的のものである。たゞ大陸人は、それを持ち來す作用に於てユトウピア的であるが、英國人はその實現に於てユトウピア的ではないので、彼等の頭腦のうちに作り上げた好い物が何時到來するか、甚だ迂遠の感がある。

結論

歐米の國家は、今や社會的審判廷に立たされてゐる。或る者は既に刑の執行を受けてゐる。國家は外部からの强力によつて前掲の闘式の國家系統からお隣りの社會系統に投げ込まれるか、又は、有機的發達によつて、次第に同様の道を採るか又は採らないか、それは解らない。が外部からの强力に待つならば、國家は殆んど何等の自己努力を必要とせず益舊態を遵守すれば好いのであるが、國家自體の有機的進化によつて、社會化する傾向を採る場合には、それは國家系統に屬する進行の本質的特性から離れることによつてのみ可能なのである。それは即ち闘爭本能に立脚することから互助本能に立脚すべく進むのである。

現在の國家は、國内的には、出來るだけ、さういふ進行を採らうとしてゐるのであるが、國外的には依然として闘爭本能の集團として存立せんとしてゐる。元來種の闘爭は外部に對するそれであつたことは、既に云つた通りであつて、

此の國外的鬪爭本能の國內的に變態したのが、武力國家の發生なのであるから、國家が國外的鬪爭を已めない以上は、到底その鬪爭的機能本位を、互助的機能本位に改めることは出來ない。目下の處各國は、一種の被害妄想によつて臥床にある時でも常に甲冑を着してゐる始末である。米國は、日本人が太西洋岸を武力的又は經濟的に侵畧すると思惟して排日を絶叫し、日本人は、米人が東洋に於ける日本の勢力を壓迫せんとすると思惟し、居合腰で立ち向つてゐる。支那と日本もその通りで、歐大陸の武力的對抗は、全世界に波及して、一旦治まつた所謂世界戰爭の空氣は、次ぎにはもつと廣い空間的の擴がりを以て彌蔓しやうとしてゐる。これは國家にとつて何事を說明してゐるのであらうか。人間的社會と國家的社會との沒交涉『人間』と『國民』との沒交涉、生活と國事との沒交涉、これを要するに、國家と人間との沒交涉は、人間にも不幸であるが、より以上に國家の不幸に相違ない。鬪爭本能に發端した國家は鬪爭本能により苦しめられる。劍によつて起つたものは劍によつて滅ぶ。國家の機能を鬪爭本能のそれから互助本能のそれに移すことは、人間の生活の爲めにも、國家の存在の爲めにも望しいことである。

「G. D. H. Cole」氏の社會學說の根本思想

田邊忠男

（一）

人間の本性は一般的問題としては、飽くまで形而上の問題であつて、實證的科學の研究對象となり得ない。人間の形而下の存在は或は物理學化學生理學等の目的となつて、實證的方法により或斷案に達し得る。又甲なる男、乙なる女に就いては、其意思の發表である行爲の方面から觀察して、一定の時に於ける並に一定の條件の下に於ける善性惡性を知るは餘り至難では無い。併し人間全體の善性惡性に就いて、人間は果して如何なる本性を有するかを科學的に實證することは全く不能である。否如斯き一般的斷定が實證上の不能事なるのみならず、歷史上未だ存在せざりし社會制度の下に、未だ存在せざりし動機を與へられたる一般の人間が如何なる行爲をなすか、卽ち其場合人間全體が善人となつて現はれるか又は惡人となつて現はれるか、は實證し得られざることである。

故に社會の構成に關する研究が單に現在及び過去の社會の構成の解剖と比較とに止らず、一定の理想を心に抱いて是等を批評し、若しくは進んで創建せんと欲する未來の社會の構成を論ずるに當つては、必ず人間に就いての、實證科學の範圍外に出た一定の信仰を基礎とせねばならぬ。卽ち自己の構想する一定の社會制度の下に、一定の動機を與へられた人間の活動に就いて一定の想像を畫き、之を信じて居なければならない。

扨て現在行はるゝ、又は過去に行はれたる社會制度の下に於ける人間の本性の發表に不滿足であつて、未だ行はれざる社會制度の下に於ける其等の發表が自己の理想に合するを說く者は、而して其社會制度の根本原則が『個人の個性の發表』のため完全なる自由を實現するものであるならば、深く人間の本來の善性を信仰して居なければならぬ。

一度人間の本來の善性を信仰するなれば、社會制度の問題は如何にして個人の人格の發表のため自由を獲得するかと云ふ問

題となるのである。

「コール」は人間の個人生活及び社會生活の最高の方式は『人格の發表のための自由』であると云つた。人性に就いて彼が人間の善性を深く信仰することの當然の結果である。人間の個性は善性である。之が彼の深い根本的信仰であつて、一切の彼の社會學說は之を第一の基礎として築き上げられたものである。

而も此個性は如何なる嫌惡す可き社會的狀態の下に於ても決して消滅することは無い。本來の個性卽ち人間の善性は永久的不滅の存在である。

『余は人間が旣に恐怖に依つて働かざるに至りたれど、理想のためには喜んで働くを信じる。而して若し余の此信念にして誤れりとすれば、何人の意見が正しきか。又社會のための希望は何れに求む可きか。何となれば、若し人は强制せられて働かず、又理想のためにも働かずとすれば、彼等が全然働かざるは明である。若し然らば寧ろ一時も早く惑星が地球に衝突する方、反つて人類の幸福である。』「工業に於ける混沌と秩序二二五頁、」

『人に自由を與へよ。然らば余は彼等が本能に依り、善き仕事を善く爲す可きを信ずる。』『社會に於ける勞働者」二二一頁、

『然らば何に希望を繼く可きか。男女の人間性にのみ、他に何者も無し。…………何となれば男女の中に在る精神は、一時其正常の發達をなすを挫き又は歪め得可しと雖も、決して滅し得無い。』「社會に於ける勞働者三五頁、」

誠に人間の個性の發表の自由は「ウイリアム、モリス」に於ける如く、又凡ての民主々義の主張者の如く、「コール」の理想であつた。併し之が理想として價値あるものであるためには、人間本來の性の善美なるを信じねばならぬ。人間本來の性が惡であるとしたならば、其自由の發表は理想とするだけの價値がない。個性の發表の自由其者は實質的內容無き一の方式に止まつて、獨自に吾等を首肯せしめる倫理的價値を有するもので無く、其倫理的價値は要するに此方式の內容として發表せられたる個性其者の倫理的價値に外ならないのである。

(二)

「コール」に取つては個人が一切の希望である。凡て社會又は如何なる種類の團結にもあれ、社會及び團結は個性を完全に發表するための手段であつて、夫れ自身目的ではない。個人の存在は社會及團結の存在に包含せられて消滅し終ること無く、社會及び團結は個性の發表のためにのみ存在する。個人のみ萬全

(Universe)である。團結は、假令國家と雖も、個人の特定の目的のためにする個人の『個性の團結的發表』に過ぎない。(Communal self-expression)「社會に於ける勞働者四二頁」、

『社會を目して或種の偉大なる、且つ凡てを包含する人格となし、一切の他の人格者は其中に包含せられて獨立の存在を失ひ、社會に比べて個人は無なりと云つて居る。哲理上個人としての人間は局限せられたる且つ獨立なる存在をなさざる者なりと說く。之に對し社會の絕對なる且つ獨立なる實在を貫映し、我等自身の存在を忘るゝに至る。是は全然誤つた思想である。個人としての人間の精神の本質は飽くまでも個人であつて、他の何者の中にも包含せられて其れ自身の存在を失はざる點に在る。』「社會に於ける勞働者二七頁」

『併し此社會其者に就いて毫も神聖なるものなし。謂んや社會が夫を通じて自己の發表をなす社會の機關をや。社會も、其機關も個人たる男女が良き生活をなすための手段である。其等の價値は唯其等が個人の幸福及び安寧に寄與するの結果を齎すか否やに依り判斷す可きである。』「同五七頁」

――玆に社會と云ふは Commonwealth =Society であつて、個人の團體的生活の全體である。通俗に了解し易からしめるため、可成の不正確を忍べば、國家市町村より傭主組合、勞働組合、「クリケット」倶樂部に至る種々の團結(Associations)及び制度の全體であると思へば善い。

『凡ての個人は其性質上萬全(Universe)である。……團結は、如何なる意味に於ても眞の意味に於て「人格」となり得ない。何となれば特定的なる、一定の職分に就てのみ存在をなし、而して萬全となり得ぬからである。』「社會理論四九、五〇頁」

獨り個人は社會及び各種の團結の中に於て其存在を失はざるのみでない。社會とは個人の『個性の團結的發表』の總面であつて、團結とは其個々のものであるが、個人の『個性の發表』は強ち『團結的』で無く、此外に『個人的』發表の領域が存在し、且つ此後者の領域に於て反つて『個性の發表』の華美な方面が見得られる。

『各種の組織の合成體である社會とは共同生活(Community)の內部に於ける人間の凡ての生活、又は何れの個人の全般の生活、又は其發表に等しきものでは無い。實際、恐らくは男及び女の生活の中で、其最善なるもの及び人間性あるものは殆んど悉く社會と云ふ網から洩れると見るが眞實であらう。何となれば如斯きものは組織し得ないからである。』「社會理

論三二一頁」

個人の生活は社會又は國家と名くる完全なる人格——此種の論者は社會又は國家と共れ以外の團體的存在をなすものとの間に本質的の相違を主張する。社會又は國家は完全なる人格ありと云ふも、勞働組合又はクリケット倶樂部が社會又は國家と同意味に於て完全なる人格である事を主張する者は無い。——の分子としての生活であると見て、個人自身の人格が社會又は國家の人格と同意味に於て獨立せる存在を有するを認めざる論者と、個人にのみ人格の獨立の存在を認め、社會及び國家を以て個人の人格の發表のための一手段に過ぎずと觀念する者との何れが正しきかを判斷するは、畢竟各自の信念の差であると自分は信じる。何人も、社會又は國家と個人との以上の如き關係を論じる時には、兩者の關係は有機體と共分子との關係に全く同一であると論じるのではない。社會又は國家が人格であることを主張する者は、實證以外の方法に依つて、謂はば「形而上の直感」の作用によつて共存在を主張する者であると信じる。神の存在を認めしめると同種なる精神作用の結果である。斯如き「形而上の直感」を有せざる者は、「コール」と共に個人を以て唯一の實在として出發せねばならぬ。

（三）

人生の一切の活動は個人の生活であり、個人の性は善であるとしても、尙個人が理性の支配を受けず、又自己を治める能力を缺きたりとすれば、個人に『個性の發表の自由』を與へる價値幾干なるか。性質の善は、善を知るの能力と伴つて始めて『善なる個性の發表』となるのである。個人は自己を治むる能力があつて始めて『自由』を個性の完全なる發表に役立て得るのである。

『勿論人間は唯鞭たれざれば何事をもなさず、驅使せられざれば動かずと信ずる者は、余の旨に依りて勞働運動と同盟すること無からん。併し人の眞の指揮者が共地位を保持するは、力又は優越せる經濟力又は高き社會的身分に依るに非ずして、品性の力及び人格に依ることを信じる者は如斯き同盟を結ぶを恐るゝなからん。』「社會に於ける勞働者九〇頁」とは人間の辨別の能力を信じたものでは無いか。又曰く『民主主義は全然人性に對する信用を基礎とする。民主主義は何を措いても各人が自己を治むるため適當なるを前提とする。』「產業自治二三〇頁」

(四)

以上が「コール」の基礎的信仰である。是等の信仰と共に「コール」の社會學說及び經濟學說は相關的存在をなし、是等の信仰にして崩潰すれば、彼の說の中少くとも理想に關するものは傷かざるを得無いのである。併し同時に之等の信仰は理想家が悉く持つべき信仰では無いか。又現在の如き悲慘と混沌との世界に於て、多少とも現世に希望を懸ける者が悉く保持す可き信仰では無いか。罪の現世に背いて神の御許に逃るゝ者は知らず、

「緑なる快き英國の地に
「ジエルザレム」を建てる迄

其努力を止めない」「勞働の世界將來」者に共通する[illegible]である信仰では無いか。

併し「コール」の思想の精髓は社會學說特に勞働組合運動の觀念仕方にあるのであつて、宗教でも哲學でも無い。故に自分も彼の理想的社會の提案の前提となる可き思想を一瞥したる後、少くとも彼の理想境たる社會の構造の根本原則に觸れざるを得ないのである。

唯只々も忘却してならないのは前記の信仰を前提として彼の社會學說が作られて居ることである。我國に於て、通常彼の思想を取扱ふ時は、其結論とも云ふ可き社會の構造上の原則をのみ論じ、甚しきは文字通りの「バランス、オブ、パワー」の提案として「ギルド」と國家の對立する彼の理想的社會を觀念して居る。「コール」の社會は盲目なる利己の衝動に驅られたる諸種の利己團體が相爭鬪する間に出現した、勢力上の妥協としての社會では無い。倫理的衝動によつて動かされる個人が理性の支配の下に構想し創建したる社會である。此意味に於て彼の社會學說は全體として、且つ本質的に考へれば「プラトー」の「リパブリック」と同樣な長所と弱點とを具へるものである。

(五)

「個性の發表の自由」が「コール」の理想的社會の方式となる可きものである。之のみが最高の方式であつて、人が團結を結び又は制度を設くる如きは、社會に於て此方式を完全に實現する為めの手段に過ぎない。社會其者も、國家も、勞働組合も、野球團も、要するに個人が完全に個性を發表するための自由を得るための手段に過ぎないのである。個性の發表が人生の目的である。自由が其方式である。

共同生活の中なる個人の生活は個人的方面のみならず、又同時に團結的方面がある。併し團結的生活は個性の、より完全な

る發表をなすといふ目的を追ふに過ぎず、團結其者は飽くまで此目的のための手段である。

如何なる方面に於て、個人の團結的生活を認め、如何なる方面に於て其個人的生活を認むるかは、如何にせば個人は個性の發表のため最大なる『自由』を得るかと云ふ問題である。而して自由とは全然此意味に於てのみ、即ち『個人の個性の發表の自由』と云ふ意味にのみ解して始めて眞である。『何となれば結局「自由」と云ふ語は個人に關してのみ意味がある語である。』「社會理論一八二頁」

而して畢竟團結とは、其國家たると「クリケット」倶樂部たるとを問はず、特定の目的に就いて個性の發表をより自由ならしむるための個人の『組織せられたる生活』に過ぎない。

「コール」は『個性の完全なる發表』のため『自由』を主張するが、『自由』とは前記により明なる如く無拘束では無い。又或一部の學者が主張する如く自由の內容は拘束では無い。無政府と無制の下には供に個人の個性發表の自由は失はれる。彼は人性及び人の精神的能力に就いて、無政府主義者と同樣な信仰に立つ。而も此點に至つて彼の思想は民主主義の極致として、斷然前者と異つた途を步むのである。

「眞の意味の自由とは、就中個人たる男及び女の自由である。此自由が完全に實現せられるためには組織を必要とすると云ふ。個人たる男女を他の男女より孤立せる者として取扱ふは各人より、其最も重要なるものの大部分を切り離すこととなる。一方に於て人は單に社會的生物なりとし、又は單に彼等が所屬する種々の制度國家等を通じてのみ自己を發表するものと思ひ、彼等の個性を無視するは空論に過ぎない。彼等は如斯き制度の中に於ける存在を有すると共に、又之等を離れたる存在を有するものである。他方に於て彼等の個性は之等の制度を離れたるものとのみ思惟して之等の制度の內に於て、又之等の制度を通じて發表せらるるを無視するは同じく空論である。』「社會に於ける勞働者一九六頁」

個人の共同生活の內部に於ける個性の發表の或部分、及び團結の內部に於て、又は團結を通じてなす發表には常に多少の拘束がある。而も此の拘束は完全なる個性の發表に達するため、自由を獲得する爲の積極的意味ある手段として考ふ可きである。『法則を通じて、吾等は法則無き域に達しる。自己拘束を通じて、一層完全なる個性の發表のための自由に達す。』「社會に於ける勞働者一九八頁」

而して共同生活內部に於ける各個人の個性發表の生活の中、其如何なる部分を、拘束す可き生活となすか、又其如何なる部分

を團結的生活となすか、又團結的生活は特定の目的のためにする個人の『組織的生活』なりとして、各種の團結の中如何なる目的の團結を尊重するかは、結局個人の價値判斷に求む可きものである。個人は個性發表に就いて完全なる最後の判定の能力を有す。

（六）

「コール」の意見によれば、團結とは特定の目的に就いて一層完全なる個性の發表をなさんがための『組織せられたる個人の生活』に過ぎない。基礎的目的は常に個性の發表のため一層完全なる自由を獲得するにある。然らば其基礎的目的に最も適合する『社會的團結の原則』は如何。換言すれば如何にすれば最も徹底的なる自由の社會を得可きか。

前記の如く個人の個性發表の自由とは『個人の自由』であり、個人は個性を自由に發表する能力ありとすれば何を措いても、他人に個人の意思を蹂躙せしめることを許してはならない。換言すれば團結は徹底的な民主的團結であることを必要とする。然るに多少とも複雜なる團結的生活に於て、團結生活は常に代表制度を必要とする。單純なる小團結に於ける場合と、簡單にして且つ重大な問題を決定する場合の外、「レフレンダム」は實行不能である。

代表制度と團結生活が大體に於て近世にありて離す可からざるものならば、而して代表制度とは一の個人が他の個人に代る制度であつて、何うしても代表者が被代表者の意思を蹂躙する傾向があるとしたならば、十分此制度を斟酌したる完全なる團結の原則を求めねばならぬ。而して如斯き團結の原則は『職分の分科の原則』に求む可きである。

「コール」の意見によれば團結は常に一定の目的のために存在する。一定の職分を有す可きである。此目的及び職分は特定なれば特定なる程、團結の基礎的目的即ち個性の完全なる發表と並存する。即ち自由が保持されるのである。何故なれば個人の個性の團結的發表は代表制度を通じて發表されるのであるが事實上の關係を見れば、個人は他の個人の全體を代表し得るもので無く、只特定の目的に就いて他の個人を代表し得るのみである、隨つて目的の範圍の廣汎な團結は、代表者の個性の團結的發表を實現するとするも、被代表者の個性の發表を實現せず、從つて團結の基礎的目的と一致しない。加之廣汎の目的に就いて個性の發表に適當なる能力ある人間は求められ無い。人の能力は常に特色があつて、政治家にも向き又工業者にも向くと云ふ者は少ない。されば職分の分科せさる團結は『虚僞の代表』

と『無能力の代表者を作る傾向がある。前者と後者と共に『完全なる個性の發表』と兩立しない。

『自我としての、又意識の中心としての人間を代表するは不可能である。代表に當りて被代表者の意思は常に幾分正確に現れ出でざるは避け難きも、他人をば、特定の目的のため團結的努力をなす限りに於て、代表することは極めて可能である。』「社會理論一〇六頁」

『代表者選出の目的が不明瞭並に不確定となるに從つて代表は虚僞の代表となり而して團結より生ずる行爲は代表性を失ふ。』「社會理論一〇七頁」

『若し社會の長となる可き者が適材たるを望むならば、彼等を選ぶに當り、特定の能力のために、特定の職分のために、又之等の特定の職分を代表する團結を通じて選ぶ可きである。』「社會に於ける勞働者一八九頁」

故に個性の發表のためには、一個の團結であつては其目的を達し得ない。例へば國家と云ふ一個の團結に依つて凡ゆる個性の方面を發表せんとすれば、虚僞の發表と無能なる發表を齎し得るのみである。政治方面の個性の發表のためには國家が必要である。産業方面の個性の發表には「全國的ギルド」が必要である。將た又遊技の方面の個性の發表には「クリケット」俱樂部も野球團も必要である。團結の間に職分の分科が精密に行はれゝば行はれる程、個性の發表は眞實となり且つ完全となる。乃ち個人の個性の發表の自由が實現されるのである。加之團結の職分が分科すればする程、各の團結は、益々個人の個性發表の生活の全般に亘らざるのみならず、——個性の個人的發表の生活が此外に存在することは前に言つた。——個人の團結生活に就いてすら、其一小部分に亘るに止るが故に、特定の團結が個人に對して優越を主張し得ざるに至り、個人の自由は此點からも保たれる。

『尚數の上に於ける安全が在る。余が記述した如き計劃によれば、個人に種々の仲間から成る異りたる多數の團結に加入し部分的に代表される。彼は其等の何れによりても全部代表されることも無く、又其等の團結の全部によりてすらも個人の全部は代表される者では無い。何となれば彼の生活の大部分は團結を通じて代表されるもので無く、反つて直接に彼の個人的なる、非團結的なる行爲の中に發表される。從つて彼は埋沒することとなし。否寧ろ彼は必然且つ明白に樞軸であつて彼を中心として團結の全組織が回轉する。何となれば彼のみが彼の一身の中に種々の團結の種々の目的を悉く藏して居る。』「職分の分科を有する」民主制度により、主權の分割制

度により、並に之に依る部分的なりと雖も而も眞實なる代表制度に依り、始めて個人の自由を實現する望が在る。』「社會に於ける勞働者一九一頁」

前記によつて明なる如く「コール」の理想的社會の構造は何れの單一なる團結にも、完全な主權を持たさない。完全なる主權者は只「萬全」である個人のみ。團結は個人の生活の一小部分である。而して個人の團結生活の方面にのみ及ぶ主權と雖も尙且つ何れの特定なる單一の團結に所屬せず、團結相互の間に『職分による分權』が行はれて居る。

『分權に關する舊說は段階による分權である。立法の段階は行政の段階から分離せしめた。新說は職分による分權でなければならぬ。』「產業自治九七頁」

立法行政司法は連續せる一行爲の三の段階である。

特定の目的に依り分れたる種々の團結は其特定の目的の範圍に於て部分的に個人を代表するに過ぎない。從つて個人は其目的に就いて一々代表せられて始めて團結的生活の全部に亘つて代表される。故に實行上の標語として、

『各人一票の主張をなす代りに、「各人は其利益の數だけの票數但し一個の利益に就いて一票」と云ふ主張をなさねばならぬ。』「社會理論一一五頁」

（七）

以上に依つて「コール」の理想的社會に於ける一般の原則をや抽象的に說き終つたと思料するから、之からは稍具體的な其應用とも云ふ可き方面を紹介しようと考へる。特に國家に對する態度を明白にすると、團體全體に就いて今迄說き來つた根本原則が最も判然するに至ると思はれる。

理想的社會に於て國家が有する職分無し、從つて國家と云ふ團結の存在の理由なしとは「サンディカリスト」の主張である。國家は只社會の階級的構造に隨伴して生じ來つた「ブルヂョア」階級の壓制の道具であるとのみ觀察する。社會の階級的構造が消滅すれば、階級的壓制の道具も亦存在の理由を失ふと主張するのである。

實際機械工業の成立以來、社會の階級的構造が顯著となるに從ひ、『政治は經濟勢力の反映となつた』のは確かである。

併し如斯く「經濟的勢力の反映」となつて、最も廣汎なる方面に於て壓制をなすのが國家の本來の目的であるか。又國家は如斯き廣汎なる方面に於て種々雜多な職分を荷ふの最適當であらうか。

「コール」に取つては個人のみが「萬全」であり、一切の團結

此個人の個性の完全なる發表のための一層大なる自由なる手段に過ぎない。國家も亦之等の團結の一である。然らば特定の目的のために存在す可く、其職分は同じく限定せらる可き性質のものである。

理想的社會に於ける國家とは如何なる職分を有する團結なるかを決定するものは、要するに國家は個人の團結的生活として如何なる方面に於て個性の團結的發表のため最も適當なるかの問題である。前述せる如く「コール」の社會學說は理性の支配の下に在る善なる人間が構想し創建する社會であることは此場合に最も明瞭に現れて居る。

「コール」は之を國家の所屬員の構造より發見せんとした。即ち如何なる個人の團結的生活なるかを研究して、國家の適當なる職分を見出さんと力めた。

國家は地域的區劃に基き、凡ての個人を包括して居る。然らば若し國家が所屬員たる各個人の個性の發表のため最も適當なるものとすれば

『國家が爲す可き事は、凡ての種類の人々、凡ての狀境の下に在る人々に關係する事項でなければならぬ。且つ大體上同じ樣に、即ち彼等の同一なる點に關係ある事であつて、異れる點に關係せざる事項でなければならぬ。』「社會理論九六頁」

以上述べた國家の一般的職分を決する見地となる可きものである。而して「コール」は國家が最近益干涉し來れる經濟的活動に就いては

『經濟活動は大部分、國家の種々の所屬員に對し異りたる程度且つ異りたる狀態の影響を與へる。』「社會理論九七頁」

と云ひて國家の本來の職分に屬す可からざるものとなし、只消費に就いては

『經濟界に於て凡ての人に同樣且つ同程度の影響を與へる唯一の事項は所得の問題である。所得とは消費額の名儀上の多寡を表すものである。之と密接の關係ある問題は價格の問題である。價格は所得と關連して、實際の消費額を決定する。然らば所得及び物價は明白に國家の活動の領域である。而して是等の決定は國家の職分の重要なる部分を占める。』「社會理論九九頁」

と云つて居る。

併し現今の國家活動の主たる部分は政治的職分即ち共同生活を營む人と人との非經濟的關係に對する社會的規律（例へば教育保健）と、按排的職分（Function of coordination 譯語は不穩當なれど主として權限を按排すると云ふ意味に依つて假りに譯す）即ち團結と團結との調和である。

『國家の政治的活動に關しては非經濟的活動に於ける如き複雜なる問題を生じない。此場合に生じる唯一の問題は、多くの場合、人と人との關係中或特定の領域のものが規律せらる可きものか、若しくは規律せらる可からざるものかの問題である。若し規律せらる可しとすれば、既述の原則に依り明白に國家活動の本來の領域內に來る』「社會理論一〇〇頁」

『國家に按排的職分を委かすれば、多くの場合に於て自己と他の職分を有する團結例へば寺院勞働組合との關係を裁決することとなる。併し恰も何人も自己の行爲に就いて自ら裁判者とたり得ざる如く、何れの團結も亦然り。故に按排的職分は國家の職分に非ず。併し同時に特定の職分を有する何れの團結の職分でも無い。

吾等は、國家は自己の事件を裁決するを得ずとの議論を度外視して、單に按排的活動の性質より論じても同一の結論に達しねばならぬ。何となれば按排的活動の結果、各人に對し同程度且つ同樣なる影響を與へずして、反つて種々の團體に對し全く異りたる風の影響を與へる多くの問題が現れ來る。故に、今一度、吾等は按排的職分は國家に屬せずとの結論に達しる。』「社會理論一〇一頁」

國家に對する「コール」の態度は一般の問題に對する態度の應用に過ぎない。國家も亦特定の目的のために存在する、個人の個性の團結的發表に過ぎない。之と他の團結との間には本質的の差異がなく、唯目的が重要なる價値あるや否やによる、程度上の差異あるに過ぎない。『完全なる主權』は常に『萬全』なる個人にのみ存す。團結生活のみに關係する主權は團結が分有する。

（八）

按排的職分と云ふは、團結と團結との間の調和である。卽ち各團結の職分の範圍の規律である。故に此職分は規律せられざる個人の生活卽ち個性の個人的發表の領域には關係しない。

理想的社會が全體として、個人の個性の發表のため最大なる自由を許容するためには、各團結間の調和が最も完全に行はれて居らねばならない。卽ち各團結が自己に最も適當とする職分のみを行ひ、自己に適當せざる職分卽ち當然他の團結の職分を侵さざるを必要とする。而して如何なる範圍が如何なる團結の職分なるかを裁決する權利は特定の職分を有する何れの團結にも專屬することはない。何れか一の團結が此權利を專行すれば、必ず職分の侵犯が行はれ、獨り按排的職分其自身の性質から云つても、之を行ふを適當とせざる團結によりて此職分は

はるゝのみならず、尙其結果此裁決の權利を專行する團結は他の團結に屬する職分をも自ら行ふに至る。如斯く職分の分科の原則が破らるれば、前記の如く、『虛僞の代表』と『無能の代表』が實現せられ、被代表者たる多くの個人の個性發表の自由は代表者たる少數の個人の個性發表の專恣のために蹂躙せられ團結は基礎的目的と撞着するに至る。現在の國家は其好例である。國家の如き只特殊の職分をのみ有するに適當する團結が按排的職分を專行すれば民主主義は『虛僞』となり『無能』となる。

併し同時に此職分は、團結の重要なると否とを論ぜず、――團結が重要なるためには、團結の目的が個性發表の重要なる方面に關係して居ねばならぬ――凡ての團結に悉く同程度に分屬することとすれば、之も亦適當でない。何となれば如斯き場合は重要ならざる目的を有する團結が重要なる目的を有する團結の職分を制限する結果となる。

されぱと云つて個人が直接に行ふ事も、適當でない。前記の如く「レフレンダム」が個人の意思を蹂躙せず且つ實行可能なる場合は共同生活が單純且つ小規模であるか、又は問題が簡單又は大問題でなければならない。

「コール」は、上記に依つて察知し得るが如く、按排的職分は社會に於て最も重要な團體の聯合委員會が有す可きものとして居る。而して如斯き團結としては、政治的職分を有する團結、生產分配、並に交換的職分を有する團結、消費並に使用に關する職分を有する團結を舉げ、其等の聯合委員會に按排的職分を與へて居る。即ち主權的職分的團結は存在せずして主權的聯合委員會が存在する。

生產分配並に交換に關する職分を有する團結とは、正しく凡ての獨立の生產者の民主的團結である全國的「ギルド」である。政治的職分を有する團結は國家である。消費並に使用に關する職分を有する團結は國家であるか否かは、大體此職分は國家と同樣なる所屬員の構成を有する團結に適當するは前記の如くであるが、經濟的職分を行ふための代表者と消費及び使用に關する職分を行ふための代表者と同一人である場合に、兩者の職分を最も適當に、被代表者の個性を蹂躙せずして、行ひ得られるか否かの問題である。

「是等の職分（消費に關する職分）を行ふに適當する者は國家であるか、若しくは同樣の構造を有する他の一個又は數個の團體であるかの問題は、同一の被選舉者の團體が政治的職分及び之等の專門的なる經濟的職分の兩者を併せ行ふて、何の程度迄滿足なる結果を舉げ得らるるか、若しくは同一な選舉

人の團體は、性質上根本的差異ある、從つて全く異れる能力及び技能を要求する、之等の職分遂行のため、異れる代表者又は代表團體を必要とするかを考へて決す可き問題である。（「社會理論一〇〇頁」）

之に依つて見ると、「コール」の理想的社會の根本的の構成は從來「ギルド」社會主義者が提唱せるものと――「コール」自身も「ギルド」社會主義者ではあるが――相違し得る如く見える。勿論此相違は應用の方面であつて、唯個人の個性の發表を一層自由ならしめる方法論に關するものである。

「ギルド」社會主義者は社會に於ける根本的なる團結の職分として以上の三種――宗教の問題は我國民に關係少きが故に暫く度外視するとして、――を認めるに於ては、大體一致して居る、只之等の職分を行ふ團結として、多くの者は全國的「ギルド」と國家を認め、後者は政治經濟の兩者の職分を併せ有して居る。産業的領域に於て産業の管理權を論じるに當つて、消費者の團結として國家を認め、工業は全國的「ギルド」と名くる生産者の團結と國家との共同管理をなす可きものとして論じて居る。――如何なる種類の管理權が生産者の團結たる全國的「ギルド」に屬し、如何なる種類のものが國家に屬するかは茲に詳說しないが。

「コール」自身も「社會理論」より以前に執筆したる著書に於ては同樣であつた。而して「社會理論」中の前出の文言に就いて見るも、從來の國家の外に、之と同樣なる構成を有する、卽ち地域内に於ける凡ての人を含める、團結を認め、前者を、[illegible]り生産分配交換に關する職分から許りでなく、消費及び[illegible]に關する職分からも解放するため決定的の意見を抱かないらしい。併し自分の考へでは、「コール」の提唱する前記の如き、職分による分科の原則に基き、將來彼の理想社會に關する說は、前記の最も重要なる三職分を最も重要なる三團結によりて別々に行ふ主張となるであらうと信じる。結局國家は經濟的職分の全部を他の團結に委し、一層人性の高尙なる方面に於て個性の完全なる發表を實現することとならう。從つて「勞働の世界」に於て彼が消費組合運動を頗る輕視した點はやがて改めらる可き運命に在ると信じる。併し此點に就いては他の場合に論じ[illegible]

古き社會學說の分權制度が主權は立法司法行政となりて、同一の團結に於ける三個の機關に分屬せるに對して、新しき社會學說の分權制度は、主權が職分により分れたる三個の團結に分屬することになつた。古き社會學說の段階による分權制度は多くの場合分權共者が性質上不可能なるのみならず、之が大體に於て行はれたる例へば北米合衆國に於てすら、單に個人の個性

發表の名目上の自由を與へるに過ぎなかつた。之に反して部分は社會に階級的構造が存在して、一般の者は其がため各の個性を發表せんと欲するも、其自由を有せざりし事實上の理由によるのであらうが、理論としてのみ見ても、一個人が他の個人の人格の全部、又は少くとも其大部分を代表し得ると云ふ謬見に基くためである。新しき學說は、一個人は他の個人を狹き目的に就いてのみ代表し得ると云ふ眞實の上に基礎を置き、職分の分科のを團結の原則として居る。

云ふ迄もない事であるが、新學說に於て主權とは單に殺排的職分を行ふ權利である。即ち各團結の職分の限界を劃定する權利である。團結は特定の目的に關し存在し、一定の職分を有する以上、『即ち職分の分科の原則』が行はれる以上、一の團結が他の團結の職分を行ふことは許されないのが當然である。即ち各團結に其職分の範圍内に於ては自治である。各團結の自治が失はるれば、職分の分科の原則は行はれざることとなるからである。

又團結が主權を有すとは常に二次的の意味である。一次的に云へば個人のみ主權者である。團結が有する個人に對する凡ゆる强制權は同じく第一次の意味に於ては個人の自制と云ふ內容を有つて居る。

(九)

「コール」の理想的社會の構成は前記の如しとして、現在の社會が其理想を具ふる遠きことは明である。然らば現在の社會、現在の團結が理想の社會に趣くの條件及び態樣如何。即ち社會進化の條件及び態樣如何。

「コール」の信仰によれば、一切の社會に關する價値判斷の源泉は個人であり、個人は自己を治むる能力があり、並に社會の現象は悉く個人の生活の一方面に過ぎずと云ふのである。然らば社會の構成も亦結局は個人の欲する儘の態樣を取るは明かである。

故に社會の進化の源泉に結局する所個人の意思であり、其條件は個人の決意に求めねばならぬ。如何に全體の個人に取つて悲慘殘酷なる社會の構成が存在するとも、其裏には必ず如斯き構成を欲しる個人の意思がある。若しくは或場合に於ては如斯き構成を欲する少數の個人の意思の傍らに、如斯き構成に無關心なる若しくは無關心とならしめられたる多數の個人の意思が在るは明である。個人の決意以外の條件を否定することはない。併し社會進化の條件として個人の決意は常に一次的のものであり、他の物的條件は之に比ぶれば二次的のものである。此見方

に於て「コール」の社會進化の說は「サンディカリスト」と同樣であると云へやう。

『現制度の持續は決意の問題である。否寧ろ其缺けたるが故である。營利の負擔より免れんと欲すれば、先づ昏睡より醒め、明晳なる頭腦を以て一層良き制度と代らしめる決意をなさねばならぬ。國家は（今日の職分と分科の行はれざる國家を云ふ）其國民以上に進步し得無い。前者の總意思は國民の意思の反映に過ぎない。』「勞働の世界四一二頁」

『世界を一變する革命は自由を欲する意思より生ず。仁慈の如きは改革を産むに過ぎない。』「産業的自由の意義四頁」

此點に關して最も注意する必要あるは、「マルクス」の社會進化（寧ろ遷移）の說である。「マルクス」は生産關係が凡ての社會の構成を定めると云ふ說である。「マルクス」に取つては、社會の遷移の源泉は意思以外なる物質的關係であり、其遷移の條件は物質的關係の變化である。一見「コール」の說と「マルクス」の說は東西の兩極端に立ち氷炭相容れざる如きも、前者の說は後者の說の補正又は新解釋に過ぎまい。即ち「コール」と雖も、物質的關係が少くとも現在及び過去に於て、全く社會の構成に無關係であるとは考へない。否反對に其關係を認めて居る。其說は物質的關係は「一定の狀態の下に、一定の程度まで、個人の意思を通じて」社會の構成に影響すると考へる。即ち例へば機械的生産大規模生産の結果は社會の多數の者の意思を昏睡せしめ、少數の者の意思の儘なる社會の構成を出現せしめた。併し此場合と雖も強ち物質的關係が意思に影響する程度は絕對的ではない。例へば非經濟的團結の行動に影響するが、其形態には影響しない。又非經濟的團結の行動の全部が經濟的目的を逐ふに至る事は無い。例せば國家の如き、其働きは著しく資本主義の目的を逐ふが、其團結の形態は經濟的條件によつて決定されない。且つ其行ふ職分の中には例へば非經濟的職分がある。又個人の意思は永久に物質的關係によつて決定されるものでない。例へば現在に於て社會の階級的構造を消滅せしめる決意をなし、――此決意は主として教育の力による覺醒の齎し來る所である――之を消滅し終れば、個人の意思は積極的に主張せられ、而も經濟以外の、一層高尚なる方面に於て個性の發表を目的とし、從つて「コール」の理想的社會の構成も實現せらる。

「コール」が「マルクス」說の價値を認めたるは、大規模生産機械生産、營利の生産が社會を相對する階級に分れしめ、下の階級の個性は歪められ、意思の能働的主張をなし得ざる者と化した點である。

即ち經濟的關係は多數者をして自己の意思を主張し得ざる者

たらしめ、從つて之等多數者の意思は社會其のの原動力と成るを得ざる如くしたと云ふ消極的意味に於て、過去及び現在の社會の構成と生産關係との因果關係を認めた者である。

『吾等は物質的條件が社會的變化の原因として、及び社會的發達の行路を決定するものとして大影響を與へる事を否定する必要も亦輕視する必要も無い。併し吾等は、古き社會的形式の代りに新なるものが造られるため又一層多く、物質的條件の變化に起因する新なる社會的形式を利用し且つ之を支配するため、人間の意思が影響し得、且つ是等の事の行はれると否とに全然人間が之等の機會を利用する能働的意思あるや否やに懸つて居ること」を信じる』「社會理論二〇〇頁」

併し前記の如き革命の意思は個人的意思であつてはならない。團結的意思の發表でなければ適當しない。『「スマイルス」氏の提唱せる個人的自助の說の代りに、團結的自助の說を主張せねばならぬ。』

理想的社會に到達する條件は決意である。而も團結的決意であるとしたならば、社會理想家の眼は常に新しき團結の將來に向つて注がれる必要がある。而も此新しき團結と云ふも、如斯き社會革命の職分を有して突如として現出するものでなく、舊來の團結が漸次其職分の內容を變じて新なる職分に發展するを常とする。即ち社會制度の創造者は個人の團結的意思であ る。共同生活の構成は連續的な發展である。

「大なる社會的變化を齎し又は少くとも維持するためには、多くの場合、變化を齎したる原動力の背後に組織せられたる大而も重大なる共同的必要の基礎の上に立つ一團の人々の團結が控へて居なければならぬ。』「社會理論二〇六頁」

「常に新しき運動及び團結を注視し且つ之等の者をば、現在の狀態よりは、將來の能力に從つて評價せよ」とは社會的叡智の第一の格言である。』「社會理論二〇六頁」

「共同生活に取りて最も重大なる價値あることは、常に新なる種類の團結を創建する必要無き事である。否古き團結より、異れる形式を發達せしめ、依つて以て新なる職分を遂行するに適當ならしめ得る事で在る。此事は常に記憶して居なければならぬ。」「社會理論五六頁」

而して「コール」は理想の社會を實現する使命を有する團結として、勞働者の團結特に勞働組合運動を發見した。

茲では「コール」の社會學說の根本思想を說くのであるから勞働組合運動に對する彼の學說は恐らく彼の全部の學說中の最も精彩ある部分なりと思惟する十分な理由があるが、之は他日の機會に讓り、具體的には殆んど觸れない事とする。只筆を擱

く前に、産業、主として工業の現状に關する彼の社會學説の應用の極めて根本的な方面だけを述べよう。

(十)

現在の産業界の現象は一層正しく云へば資本主義的社會の事實の觀察方法に就いて、「コール」の説は只一點を除いて、他の社會學者經濟學者と特別異つた所も無い。社會の階級的構造、資本家階級と勞働者階級の對立及び爭鬪、貧窮と窮乏の側らに奢侈と逸樂の並び行はるゝ事、營利のための大規模なる機械的生産、社會に階級的構造の存在する間、常に政治は經濟の反映に過ぎず、資本家の經濟的利益が政治の指導となること、國家は階級的構造の用具に用ひられ、本來の政治的及び消費に關する職分は閑却せられ居ること。其他、等の點に就いて數へ立てれば限りは無いが、「コール」は之等に關して凡て事實を事實として眺め、正統派なる御用經濟學者の如く、曲解をしないだけである。

「只一點を除いて」と條件を付けたのは、彼が工業の全問題を精神的倫理的に觀念して居る點である。而して之は彼の社會學説の根本思想とよく照應して居る。卽ち工業に於ても亦、其目的は凡ゆる社會生活の場合と同じく、個人の個性の自由なる發表』を目的とす可しと云ふ主張に現れ、又資本主義的工業の結果の最も惡しき方面は、貧窮窮乏等の物質的害惡に非ず、反つて勞働者をして『機械の輪齒』たらしめ、勞働者の意思の能動的發現を不能ならしめる點に在ると云ふ意見となつて居る

「コール」は「モリス」及び「ラスキン」の理想に共鳴して、『資本主義的生産並に産業革命が起つて以來、仕事上の悅樂趣味若しくは自己の快樂を仕事の上に表現する等のことは凡て失はれた。「ラスキン」及び「モリス」は共に痛く此現象を悲み、其回復を希望した。俗人の理想たる高き賃銀と彼等の理想たる、勞働者をして日常の仕事の上に、微妙にして變化の極り無き各人の個性を發現せしめんとする要求との間には雲泥の相違がある。各人の個性は生來具備する所である。資本主義のため各人の生活及び仕事が全然劣惡なものとなされた後に於ても、其個性のみは消滅せず、啓發するに從つて隨時發現し來る。』「勞働の世界九頁」と云つて居る。

而して現在の勞働組合運動が賃銀の問題を離れ益々工業の管理權を要求するは、要するに個性の發表のため自由を獲得するに至る道程であると見て居る。

殊に資本主義制度の下に於ける勞働者は商品と同樣の取扱ひ

を受けて居る。勞働者には經濟上に於ても、製作上に於ても何等の發意をなすを許されず、從つて彼の社會生活の大部分である、生産者としての生活に於て、個性を發表し得る機會は與へられない。而も結果は尚之に止らない。彼の精神及び身體は機械の間に於ける全然受働的なる生活をなす間に、悉くの精力を奪はれ、工場以外に於ても能働的な個性の發表をなし得ざるに至る。之が資本主義制度の惡の結果である。物質的窮乏の如きは之に比ぶれば云ふ可くも無い。何となれば個性の發表を不能とするは人間としての存在の目的を蹂躙するものである故である。

併し之等の點を細說して勞働組合運動が何故に「コール」の希望なるかに及ぶは恐らくは本論文の目的以外に出て居るであらう。

（十二）

「コール」の社會學說の根本思想が正しきか否か、其唱ふるが如き理想社會が希望す可きものなるか否か、又實現可能なるか否かは大部分信仰の問題であると思ふ。之が贊成者も、又反對者も共に實證的な方法を以て、正否を爭ひ得ないと思ふ。兎に角「コール」の信仰及び其信仰に基く社會理論は民主主義者の懷抱す可き思想の極致であるだけは事實である。民主主義と云ふものが單に多數者の自我の主張と云ふ機械的意味に止ると思惟する場合は別であるが、民主主義の中に人生の希望を發見し倫理的意味に於ける社會の進化を認めるものは、先づ個人にのみ完全なる獨立の人格を認め、人間の善性と理性の支配とを認め、自治の能力あるを信じる必要がある。斯くして始めて、自治的の、且つ『職分による分科』の原則を團結の原則とし、以て個人の個性の發表を自由にした結果として、出現し來る社會が倫理上希望す可きものとして、吾等が其實現に努力す可き社會となり得る。例へば前に現れ出た「コール」の何れの信仰を除くも、民主主義の主張をなし得ざるを見よ。人が惡性なれば、個性の發表のために自由を獲得することは結局希望す可き倫理的價値無きものに過ぎない。假令各人の合理的利己主義のため秩序は保たれ、個性の發表は自由であつても、要するに制度上のみの民主主義が行はれ居る强盜團の如く、倫理上一顧の價値無きものに墮落する。又假令人は善性なりとするも、其行爲をば理性が支配せず、各人に自治の能力無ければ、個性の發表のための自由は混沌の世界を實現するに過ぎない。又個人は完全なる獨立の存在を有する者で無く、國家其他の分子としての存在のみであるならば、其個性の發表を目的とするは、少くとも一次

的價値のみより外無き議論である。併し民主主義は之を最高の價値あるものとして說く主張である。個人の意思の上に、多少とも個人の意思を超越した國家又は社會の意思があるとしたならば、結局は個人の意思の數に關係する思潮たる民主主義は許容し得可き思想であるか否か頗る疑問であると云はねばならぬ。民主主義は從來の如く「一人一票」と云ふ標語に現れる時でも、將た「コール」の如く「一の利益に就いて一票」と云ふ標語に現れる時でも、個人の意思の數に關聯して居る。結局は一定の領域に於て多數の意思の優越を說く主張である。個人をのみ完全なる存在をなすものと觀念してこそ、其多數の意思を尊重する理由がある。此外に、多少とも個人の意思を超越した國家又は社會の意思を認めることと、多數の個人の意思の總和に過ぎざるものを尊重する思想と並存し得るものであらうか疑問と云はねばならぬ。

既に個人のみの完全の存在と、理性の支配、自治の能力、人間の善性を信じれば、個性の發表のための自由の實現は吾人の目的となり、團結の原則を職分の分科に求める議論も自然と生じ來るは前說の如くであらう。

要するに「コール」の說は「コール」の信仰の當然の結果であらう。之が正否を論じるためには信仰の問題に就いて先づ異論を立てるを必要とする。——勿論細目の點に就ては同一の信仰を抱いて異說を立て得るが、之は最も根本的な思想のみに就いて云つたのである。

而して資本主義的制度が保たれる結果、人間は個性發表の自由を得られず、從つて人間本來の善性及び能力は發揮されずに居ると信じる者は——而して此說が結局信仰に過ぎないことは個々の場合は別として、人間全體として個性の發表のため完全な自由を得た經驗が無いからである。Potentiality の狀態にある人間の本性及び能力を一定の條件の下に行爲となさしめて、始めて吾等が知り得る現實となる。——「コール」の如き理想社會の建設を希望し、其實現のため努力するを惜まない。反之して如斯き信仰無く、例へば人間を絕へず活動せしめる動機は、單に物質的慾望の滿足であると信じる者、人間は喰へなくならねば働かぬ者、鞭たれざれば何事をも爲さずと考へる者は彼の理想社會の說に一顧をも與へまい。

「コール」の理想的社會に就いて其經濟的方面を論じるに當つて、彼の提案によれば資本家が勞働者並に一般消費者を劫掠する現在の社會の代りに、生產者が一般消費者を劫掠する社會を實現するに止ると云ふ說をなす者がある。即ち彼の理想的社會の理想は問題を解決するもので無く、單に問題を一步先へ推し

進めたに過ぎないと云ふのである。人間の本性及び能力に就いて「コール」の如き前提を承認しなければ畢竟永劫に亘つて、社會學説の方面から最後の解決に到達し得ざるものである。故に如斯き非難的批評は獨り「コール」の社會學説に對して當て嵌まるのみならず、苟も社會學説の性質を有する凡ての理論に對して爲し得るのである。此種の論者は結局人生に就ての希望を斷念するか、又は宗教家又は教育家となる外無い。

「コール」の社會學説の根本思想と云ふ意味は「コール」の獨特の思想と云ふ意味では無い。又「コール」の思想の系圖は全然度外視した。又「コール」の思想の精彩ある部分は理想的社會に關する學説にあると云ふよりは寧ろ理想的社會の創建者として勞働組合運動を觀念して居る方面であるが、之は他日に讓る事とした。玆で取扱つたのは「コール」の學説の總論とも云ふ可き部分のみであることをお斷りして置く。

貨幣價値の大低落と通貨整理問題

法學博士 堀江歸一

戰時財政の餘殃

歐洲戰爭は交戰諸國の民衆に解決に至難なる多くの問題を與へて終熄し、今や諸國は智能の限りを盡して、當面の問題の目鼻だけでも付けることに、焦慮しつゝあるやに見受けられる。

私は是等諸問題の内で、特に通貨整理に關する問題に就て論述し、併せて今日此問題に關聯して、貨幣に對する根本觀念に動搖を來して居ることの一端を説明したいと考へる。

歐洲諸國が今度の戰爭で、軍事費の財源を主として租稅に求めたならば、戰後の今日に起る經濟財政の問題も餘程趣の違つ

たものと爲つたことであつたらうが、諸國は何れも軍事費の財源を多く公債に求めて、租税に依賴する所を少なくした。現に交戰諸國の内に於て、比較的租税を戰時の財源として、依賴することの多かつたと稱せらるゝ英國ですら、最近の統計に據ると、軍事費總額百十四億七千九百二十一萬八千磅の内、租税收入に依つたものが四十三億三千二百七十六萬六千磅であるに對して、公債に依つたものが七十一億四千六百四十五萬一千磅であつて、軍事費總額を假に十一とすれば、公債七、租税四の割合に爲つて居る。是れが隨分無理であると非難される程度に於て、重税を徵收した國の狀態であるとしたならば、政治上の關係を恐れたり、又事實國民に納税力の乏しい結果から、増税に躊躇せざるを得なかつた國に於て、公債に依賴することの如何に大なるものであつたかを想像し得るのである。現に歐洲開戰當初と本年一月とを比較して、佛蘭西の公債總額が三百四十一億八千八百萬法から、三千三百八十四億七千四百萬法に増加して居るとか、獨逸の軍事公債が千五百七十七億馬克の多きに上つたとか云ふが如きは、何れも上記の事實を語るものである。

英佛獨の三國は歐洲に於て、假令ひ程度に多少の相違はあるとしても、經濟上の強國であり、國内に幾多の資源が存し、國民の財力亦豐富である點に於て、他の群小諸國の追隨を許さなかつたのは、明白の事實であつた。若しも上記の公債が是等の諸國に於て、悉く國民の貯蓄金に依つて應募され、而して其貯蓄金は戰時に國民に收められた増加所得で出來たものであると云ふやうな關係が成り立つて居つたならば、公債は右の如くに増加したとした所で、尙ほ戰後に於ける公債の處理は今日の如くに困難を覺へなかつた道理である。然し如何に經濟上の强國であつても、數年の短日月間に、殊に戰時經濟社會の困難しつゝある際に、上記の如き額巨の公債を國民の貯蓄金ばかりで、募集することは、殆ど不可能の事であつた。斯くて諸國が募債を容易ならしめる爲めに、施した政策は期せずして通貨の膨脹を促すことゝ爲つたのである。第一中央銀行をして兌換停止を斷行させ、斯くて不換紙幣の増發に依り、中央銀行自身に公債を引受けさせたり、増發された不換紙幣が市中に行き渡つて、自然公債の應募を容易ならしめたことの如き、第二政府自身又は政府管轄の下に在る機關が特殊の紙幣を發行して、之を以て公債應募の財源に充てたり、又時に市中諸銀行の支拂準備金を此紙幣で豐富にさせて、公債應募の財源を涵養したことの如き第三政府が直接に中央銀行に就て、借入金を爲し、中央銀行は不換紙幣の發行で、之に應じたことの如き、何れの交戰國に於ても、廣く行はれた所であつて、諸國の公債政策は通貨政策に

支持されて、實行されることゝ爲つたのであり、而して共通貨政策と稱するものは、實に兌換制度の停止や、政府紙幣の發行で、多年整理し來つた通貨制度を破壞し去るものに外ならなかつたのである。

兌換制度の即時停止

歐洲諸國は從來不換紙幣に就て、最も苦き經驗を重ねて居るのであつて、如何なる犧牲を拂ひ、又如何なる苦痛を忍んでも兌換制度を維持して行かう、不換紙幣制度の昔に復歸しまいと云ふことは、諸國の財政家の平生固く決心して居つた所のやうに見受けられた。其決心の現はれたのは、即ち戰前諸國の中央銀行に於ける正貨準備の極めて堅固なることであつた。經濟一方の見地から考へれば中央銀行は如何に兌換制度を擁護し、又之を鞏固にする責任があるとは云ひながら、其の持つ可き正貨準備には自ら限度がある譯であつて、紙幣發行高に對して六七割の正貨準備を持つとか、又時に紙幣發行高に超過する正貨準備を持つとか云ふやうなことは、法外の沙汰であつて、過ぎたるは猶ほ及ばざるの類であることを免かれなかつた。此位に諸國の中央銀行が正貨準備を増殖し、兌換制度の擁護に勉めた以上は、例へば恐慌に襲はれたとか、戰爭が起つたとか云ふ從來常に兌換制度を壓迫した事變に臨んでも、相當に之に堪へることが出來るであらう、兌換制度停止、不換紙幣發行と云ふやうな事は容易に起り得べきものでないと、一般に想像されたのである。然るに歐洲戰爭勃發の際には、如何であつたらうか。英吉利以外の交戰諸國は戰爭の始まると殆ど同時に、又或る國は宣戰の布告される前から、中央銀行の兌換制度を停止したのである。彼等が平生から正貨準備を蓄積したのは、兌換制度を鞏固にする爲めであつた、而して豫想の如くに、此希望は實現されたのである。然るに戰爭が始まつて、愈々平生鍛錬された强味を發揮す可き時に爲ると、遽に兌換停止と云ふ特殊の保護の下に、立つことゝ爲つた。以前は如何な國にしても、兌換制度を續け得られるだけ續けて行き、正貨の取付甚だ急であつて、如何としても之に堪へ切れない時に至つて、不承々々兌換を停止したのであつて、恰も矢盡き刀折れて、討死にしたと同樣であるのに、今度歐洲戰爭に於て、諸國の行つた兌換停止は未だ敵と一戰をも交へずして、早くも降服したものと異なる所を見ない。

是れは表面から考へると、甚だ矛盾したことである。殊に諸國が從來兌換制度を尊重し、又之を擁護する爲めに、正貨を蓄積するに、力を惜まなかつた事實に對照すれば、尚ほ更ら大な

る矛盾を認めるのであるが、諸國財政當局者の心事を付度すると彼等の胸中には、斯う云ふ考があつたらうと想像される。

第一、今度の戰爭は意外に長引く、又財政當局者としては、長引くものと見込んで計畫を立てるのが安全である、其長い間、兌換制度に對して、財政の壓迫が加はつたならば、如何なる國の中央銀行と雖も、兌換を停止せざるを得ざる境遇と爲るであらう。どうせ停止しなければならぬものならば、何時停止しても一向差支ない、寧ろ兌換制度の維持に顧慮して財政に對する援助の自由を掣肘されないのが宜しい。

第二、斯の如く早く兌換制度を停止すれば、未だ正貨の取付けが始まらず、多年蓄積した正貨の大部分が中央銀行に殘つて居り、將來も取付けを受けなければ、中央銀行は今後兌換制度を復興するのに、容易であつて、從來のやうな困難を感じないで、濟まされるであらう。

第三、兌換制度の停止即ち不換紙幣の發行と共に、免かれ難き事は、紙幣流通價値に於ける低落であつて、此低落の爲めに、經濟社會を困憊させることの大なるは、既往の實驗の示す所であるが、今中央銀行が相當の正貨準備を擁して居り、且を將來に兌換を復興するを得る[illegible]方に備へたならば、此事に調せられて、紙幣の價値を維持し、兌紙の間に生ぜんとする價値の開きを制限し得るであらう。

兌換停止の影響

諸國の財政當局者が斯う云ふ筋道で、兌換停止を開戰當時に即行したものであるとすれば、此處迄には確に一ツの根據があつたと云ふことを認めなければならぬ。然し今日に爲つて見れば、始め彼等の深謀遠慮のある所と考へられて居つた事柄に、幾何の價値を與へることが出來るであらうか。成る程諸國の中央銀行は早く兌換を停止したればこそ、今日尚ほ巨額の正貨準備を擁して居る。其れなら斯く準備を擁して居る爲めに、諸國中央銀行の不換紙幣は其流通價値を額面なり、又は額面に近くに維持することが出來たであらうか、將た又諸國は澤山の正貨準備を持つて居るので、戰時數年間こそ兌換停止の已むを得ざる狀態にこそ居れ、近き將來に於て、兌換制度を復興する望があるであらうか、兌換制度の即時停止論の論據にして、正し[illegible]ものである以上は、是等の問題に對して、肯定的答辯を與へなければならぬ譯であるのに、實際は却て想像の反對で、諸國に於ける不換紙幣の價値は隨分低落して居るし、又兌換制度の復興も容易に行はれさうに見へない。是れは何の爲めに然るやと云へば、中央銀行に於ける正貨準備の在高の如何に拘はらず、

之に幾倍する程度に於て、紙幣の增發された結果に歸せなければならぬ。佛蘭西銀行に就て云へば、紙幣發行高と正貨準備との關係は左の如くである。（單位一千法）

	紙幣發行高	正貨準備
一九一三年　平均	五、六六五、三四六	三、九七二、一〇〇
一九一四年七月三十日	六、六八三、一八四	四、七六六、六七四
一九一五年七月二十九日	一二、五九二、五二九	四、四九七、三六二
一九一六年七月二十七日	一六、〇九〇、八九三	五、一二六、〇五九
一九一七年七月二十六日	二〇、二〇一、七四二	五、五六〇、八五七
一九一八年七月二十五日	二九、一四八、〇六七	五、七〇八、七〇九

獨逸の狀態は如何と云ふに、左の如くである。（單位一千馬克）

	紙幣發行高	正貨準備
一九一三年　平均	一、九五八、一七〇	一、三〇八、三八四
一九一四年七月三十一日	二、九〇九、四二二	一、五二八、〇二六
一九一五年七月三十一日	五、五三八、一六〇	二、四四五、二二〇
一九一六年七月三十一日	七、〇二四、三八〇	二、四九六、七〇〇
一九一七年七月三十一日	八、八五三、〇〇〇	二、四七八、〇〇〇
一九一八年七月三十一日	一二、七〇五、〇〇〇	二、四六七、〇〇〇

此外に獨逸では政府の特設した貸付金庫なるものゝ發行した貸付金庫證券も段々增加して、千九百十八年七月頃には七十八億五千六百萬馬克に上つて居つたのである。

英國が通貨の狀態に於て、他の諸國と著しく違つて居る點は今日に至るまで兌換制度を停止して居らないことゝ、英蘭銀行の增發した紙幣が正貨の基礎に於て、行はれたこの二ツである。然し是等二ツの特色が戰後に於ける通貨の整理と云ふ方面から考へて、果して幾何の効果があるであらうか。成る程英蘭銀行の兌換制度は表面上停止されて居らないであらう。然しながら兌換制度の特色としては、半面に於て金貨輸出入の自由と云ふことが伴はなければならぬ。英國が多年世界金融の中心點として、世界に覇を稱し來つた一原因は倫敦が金の自由市場であり、金の輸出に對して、何等人爲的檢束の加へられなかつたことに基くのである。然るに開戰後は如何であつたか。英蘭銀行は兌換を停止じなかつたが、政府は金貨の輸出禁止を勵行した。金貨の輸出が政府の手で、制限されるに至つたならば、通貨の伸縮は其自由である可き作用を失うのであつて、英蘭銀行が戰局の進むに随つて、段々レコードを破るやうな巨額の金貨を英蘭銀行の正貨準備に吸收するを得たのは、一に此不自然なる政策の結果であると共に、同時に通貨に著しき膨脹を齎すことと爲り、爲替相場が幾ら逆に爲つても內國から正貨を外國に現送して、之を調節することが出來ず、合衆國に巨額の外債を募集して、爲替調節の目的を達しやうとし、結局今日の如く英國をして國際金融上、合衆國に依賴する所多きに至らしめた次第であ

る。英蘭銀行の保證準備發行高は今日に於ても、依然千八百四十五萬磅であるのに、正貨準備は何時の間にか、七千萬磅から八千萬磅に、八千萬磅から九千萬磅にと云ふ工合に、段々増加して、最近には一億一千萬磅臺に上つたと云ふが如き、驚く可き事實であつて、此事だけでも如何に不自然に通貨の膨脹しつゝあるかの事實を知るに難くないのである。而して此外に英國に於て通貨膨脹の勢を助けつゝあるものは、實に政府紙幣の發行である。此紙幣の發行された當初に於ては、市中諸銀行貯蓄銀行等に貸付けて支拂準備金の不足を補つて、遣らうとか、流通に便利な少額面紙幣を發行して、市場に流通して居る金貨を回收する用を致させやうとか云ふやうな特殊の目的もあつたらうが、兎に角今日に至るまで一向回收されず、三億數千萬磅の發行高と爲つて居るのである。隨つて開戰前と今日とに於ける英國通貨の狀態を比較すると其間に左の如き變動を見る。

開戰前（一九一四年七月中旬）

紙幣發行高	三六、九〇八、二七五磅
正貨準備	二八、四六八、二三五
準備比率	六割七分

最近（一九二〇年七月上旬）・

紙幣發行高	一六七、九五五、四七五磅
政府紙幣發行高	三三〇、一三三、〇〇〇
計	四九八、〇八八、四七五
英蘭銀行所有正貨準備	一一九、四五五、四七五
政府紙幣勘定正貨準備	二八、五〇〇、〇〇〇
計	一四七、九五五、四七五
準備比率	二割九分七厘一

諸國中央銀行の正貨準備が戰時に爲つて、増加したのは、要するに從來國内に流通し、又は隱匿されて居つた金貨を吸收したり、戰時産出された金を蓄積したりした結果であるが、正貨準備の増加するよりも遙に強ひ割合で、紙幣發行高が増加し、而して兌換停止なり、金の輸出禁止なりで、斯く増發された紙幣が正貨を海外に驅逐して、通貨全體の調節を保つ所の作用を中絶させてしまつた以上は、内國に於て通貨が膨脹し、過剩と爲り、其價値に低落を來すことは、已むを得ないのである。通貨の價値の低落したことは、何で之を側るかと云へば、第一は内國の物價を標準とするのである。第二は外國爲替相場を標準とするのである。即ち一國物價の指數が或る時期と他の時期とを比較して、上進して居れば、其上進しただけ、通貨の價値の低落したものとするのは、一ツの見方であり、又一國と他の國との爲替相場を比較し、平價に對して、前者に不利と爲つて居れば、其不利と爲つただけ、通貨の價値の低落したものとするのは、他の見方である。今、倫敦エコノミストの物價指數に據ると、千九百十四年七月一日の指數百十五・九に對して、千九百二十年六月末の指數三百五十六・七である、故に第一の見方を

應用すれば、英國通貨の價値は開戰當初と今日とを比較して、三分の一に低落したと云ふことに爲る。又爲替相場を標準として、諸國に於ける通貨の價値の高下を知る爲めに、左に紐育市の相場表を揭げる。

	平準相場	一九二〇年七月八日
倫敦宛	一磅に付き四弗八六六六	三弗九五五
巴里宛	一弗に付き五法一八二五	一一法九七
伯林宛	一馬克に付き二三仙八三	二仙六六

即ち右の爲替相場を標準に取れば、米貨に對して、英佛獨三國の貨幣價値は夫れ〴〵低落して居るのであつて、其内で獨貨低落の程度の如きは最も甚だしいのである。

然しながら開戰以來今日に至るまで、交戰諸國は勿論中立諸國の諸物價は戰爭と云ふ特殊の事情に依て、異常の變動を生じたのであるから、物價の指數に於ける變動を以て、直に貨幣價値の變動を正確に示したものと考へられない。爲替相場も亦同樣で、戰爭の終熄し、講和の成立した今日に於ても、國際間に於ける金貨の輸出入は未だ戰前の自由な狀態に復歸して居らない。之が以前の、狀態に復歸する一方に、國際間に於ける物資の移動も亦自由と爲り、獨逸から他の諸國に向つて、物資の輸出が始まつたならば、爲替相場も多少或る程度まで、平準相場の方に向つて、動くものと考へられるのである。

通貨整理法の正則と變則

斯の如く通貨の價値低落を正確に測る尺度には缺けて居るが、價値其もの丶、低落したことは爭ふ可からざる事實であつて、現に英國の如き金地金一オンスに對し、七十七志十片半の割合で造幣上の公價を與へて居るのであるに、最近市場の賣買價格が百四志内外に上つて、容易に下らないと云ふが如き、所謂金紙の差の大なることを示すのである。斯くて通貨整理の問題が起らざるを得ない。何分今度の戰爭は其範圍の廣く、規模の大きかつただけ、影響も著しく、之に對抗するには尋常一樣の政策では、到底處理し難いと云ふ所から、一場の危道を以て、之に臨まうとする說を生じるのは、敢て怪むに足らない。軍事公債を整理するのに、從來慣用された手段で、國庫に財源を作り出して、公債を償還して居つたのでは、何年苛重の租稅で、國民を苦しめたとした所で、容易に其目的を達し得られない。斯くす一時英國には資本徵課金(キャピタル、レヴィー)制度なるものが主張された。即ち全國の資產家に就て、其所有する資本額を調査し、之に對する何割と云ふ割合で、徵課金を割當て、此徵課金は各自の所有する公債又は新に買入れる公債で、納付して宜しいと云ふことにする

國家は忽にして公債の或る高を銷却し盡すと云ふ說であつて、一時英國などでも議會の問題にまで上つたのであるが、遂に實現されずして、消滅したやうである、公債問題に就て、斯る說のあるが如く、通貨整理問題に關する說に就ても亦同樣の趣がある。

國家が何處までも正則の手段を取つて、今日のやうに混亂した通貨制度を整理しようとするならば、第一國家は財政上に餘裕を作つて、戰時中央銀行から借入れた資金を返濟すること、第二以上の目的を達するには、增稅、經費節約等の財政的手段に已むを得ざる所であること、第三政府紙幣を回收銷却するには、公債を發行しなければならぬことと、第四中央銀行も政府と方針を一にし、常に信用を收縮して、通貨を回收する點に心掛け可きこと、第五國家は一方に金貨輸出禁止の制を解き、所謂金をユベレートすると共に輸出を奬勵するなり、對外取引を盛にするなりして、自國に有利なる國際貸借の狀況を作ることの諸點を必要とする。是れが從來不換紙幣を整理する場合に行はれた正則の方法であつて、現に我國の如き明治十九年兌換制度を開始するに至る數年間、此方針で國民に不景氣の影響を蒙らせることを忍びつゝ、不換紙幣を整理したのである。是れは通貨價値に處する正則の方法として、大に稱揚す可きものである

が、之を實行するには、政府にも國民にも大なる決心と堅忍[illegible]悟とがなければならぬ。第一財政に於て餘裕を作るには、租稅を增徴するか、經費を節約するか、二途の一に依るの外は存[illegible]のであるが、今日の歐洲諸國に取つては、二策共に其實行困[illegible]於て、容易なるを得ない、租稅は戰爭の際、あらん限り徴收せれ、獨逸のやうな戰時に租稅增徴に手加減の施された國であつたが、革命後に爲つて、盛に徴收された。英國民の如きは、今や尙重なる所得稅の一日も早く輕減されることを祈つて居るのであつて、此以上の增稅は事實不可能と見なければならぬ。さうすれば政府が財政上に餘裕を得て、中央銀行に對する借入金を返濟し、斯くて通貨回收の手段を求めようとするが如きは、一片架空の望である。國家が新に公債を發行して、民間市場に過剩と爲つて居る、紙幣を回收することは、通貨整理の一手段であるが、諸國は戰爭の結果、公債の過剩に苦んで居る。此上に高い利廻りで公債を發行することは、假令ひ直接に民間の資本市場に壓迫を加へないとしても、高い金利其ものて、金融に或る打擊を及ぼす以上は、諸國の勉めて回避せんとする所であるに相違ない。

殊に諸國の考へる所は戰後に於ける經濟社會の形勢如何の問題である。戰時數年間諸國が通貨を膨脹させたのは、戰時の財

政を處理する上に於て已むを得ない所であつたらう。而して此間通貨膨脹の結果として、物價が騰貴し、一方に政府が價格の如何に拘はらず、殆ど無限に物資勤務を需要した爲めに、商工業は豫想外の繁昌を極めたのである。此繁昌たる、決して眞實の基礎の上に築かれたものではない。戰爭と云ふ大なる富の破壞を行ひながら、尙ほ商工業に繁昌を保せると云ふ奇怪な現象を生じたのは、要するに諸國が不換紙幣の形で、通貨を膨脹させ相次いで通貨の價値を低落せしめたからであつて、戰後の今日に於ては、結局此總勘定をしなければならぬ。何が總勘定の道であるかと云へば、戰時に膨脹しただけの通貨を戰後に於て、回收するのであつて、是れが一國の通貨制度を健全なる狀態に赴かせ、普通の軌道を歩ませる所以であるが、之をするには何人も通貨の回收される道程に於て、物價の下落し、不景氣の襲來すると云ふ影響の生ずるとに三思せざるを得ない。流石に今日の歐洲諸國には現時日本の一部に於て唱へられるやうな非通貨收縮論者又は通貨膨脹萬能論者や、五六十年前合衆國に居つたやうな通貨膨脹論者は全く見出さないとしても、何分戰後人心の安定を要する時であり、又左なきだに戰時に人爲的に維持された好景氣が地を拂つて、反動に襲はれやうとする時であるから、正則の兌換制度復興策に躊躇するのは已むを得ない所である。

變則法の第一

然らば兌換制度を復興するに就いて、正則の方法を避けて、如何なる邊に變則の方法を求めるであらうか。變則の方法の第一は往年英國に行はれた政策であつて、是れは一氣に紙幣の價値を引上げ、金紙の價値の一致した所で、直ぐ兌換を始めると云ふのでなく、今少し迂回的の方法を取るのである。固より中央銀行は國家と相協して、紙幣を回收するに相違ないが、回收する道程に於て、紙幣の價値が高くなれば、高くなつただけの地金價値を公定して、此割合で金紙の交換を行ふ、即ち何年何月には斯くの割合で、兌換を行ふことを豫定し、此豫定通りに紙幣の價値を高くするに足りるだけの回收を行つて行くのである。即ち千八百十九年の法律を以て、兌換停止は千八百二十年二月一日まで繼續されるが、同日から十月一日まで英蘭銀行は一オンスに付き四磅一志の割合で、金地金を以て、紙幣を兌換すること、十月一日から千八百二十一年五月一日まで、兌換の率を三磅十九志六片に改め、更に千八百二十一年五月一日以後一オンスに付き三磅十七志十片半と云ふ造幣公價で、紙幣を地金に引換へ、千八百二十三年五月一日を以て、王國の金貨で紙幣を支拂ひ、兌換制度の再開を成就することとしたのである。

即ち以上の方法は數年を費して、徐々紙幣の金貨價値を高くして行く。然も之を高くするに就ては、紙幣の回收される程度に任せて、置くのでなく、豫め高くなる時を定めるのであつて斯くしたならば通貨の流通價値は騰貴するにしても、急激の騰貴は避けられるであらうし、騰貴する時が定まつて居るから、契約其他長期限に亙る取引をする人々は之に處するの道を得るのであつて、普通の方法に比較すれば、經濟社會に及ぼす影響を緩和するものと認められる。

變則法の第二

次に變則の兌換制度復興法は金貨に與へられて居る法律上の價格を改定するのである。是れは先年露國でウキツテが兌換制度を復興する時に採用した方法であつて、當時或る程度まで紙幣を回收して、其價値の上進を企てたが、金紙の價値の同一と爲る時を待たず、千八百九十四年政府は金貨一に對して、紙幣一、半の割合で、各種の取引に紙幣を用ひさせることにしたが、更に千八百九十七年貨幣法を改正し、在來の十ルーブル金貨の價格を十五ルーブルに引上げ、金貨一に對し、紙幣一の割合で兌換を始めることゝしたのである。是れは法律で從來低落して居つた貨幣價値を公認し、此低落した價値を將來の標準に充てさせる譯である。若し國民の間に、將來正則の兌換制度復興法が行はれるであらう、而して其下に於て紙幣の價値は金貨と同等の程度までに引上げられるであらうと想像して居つた人があつたとすれば、其人々は失望するであらうし、又右の想像を基礎として、紙幣の買占めを行つた人などに爲ると、在來の金貨で兌換が行はれない爲めに、豫定の利益を收められないことゝ爲るであらう。然し斯る個人的利害關係は姑く問題外に措き、此變則の兌換制度復興法に就て考へるに、根據は確にある。假に紙幣が永い間低落した價値で、萬般の取引を律して居つたとする、債權者も債務者も其紙幣を基礎として、取引を結んで居る以上は、價値の如何は彼等に取つて、何等利害の關係を持たない事である。然るに今急激に正貨の基礎に移さうとしたならば、紙幣增發の時代に、債權者に損失を加へた如く、債務者の利益を傷けざるを得ない。其處で紙幣の價値が正貨に對して三分の一だけ低落したならば、最も公平なる兌換復興の方法は金貨の表面價値の三分の二を以て、兌換することに在る。即ち在來の金貨の重量三分の二に相當する量目で、鑄造された新金貨で、兌換を開始すれば、最も簡單に目的を達し得る譯であつて、斯うすれば當時行はれて居る紙幣本位制度も、價格や、所得に關する現在の標準點も亦認められて、確實な正貨の基礎の

上に置かれるのである。今度のやうに、歐洲諸國が大なる規模で、不換紙幣を發行し、然も其流通が永い期間に亙つて、今や諸國の物價も、國民各自の所得も盡く此低落した紙幣價値で律せられて居る場合には、兌換制度を簡便に、又社會を騷がさずして、實行しやうとするには、此變則法を採用する理由が生じやしまいかと考へるのである。

變則法の第三—金核心本位制

以上の變則法に比較して、更に變則の甚だしきものが獨逸一部の學者に依て唱へられて居る。是れは紙幣本位制度と云ふのが適切であるか、或は金核心本位制（Goldkernwährung）と呼ぶのが正當であるか、文字の詮議は兎に角とし、其要點は對外取引の必要に應ずる目的の下に、金貨準備を有する紙幣本位制であつて、國內に於ては專ら不換紙幣を流通させ、金貨は準備として、中央銀行に所藏させ、專ら外國爲替相場調節の目的に供しやうと云ふのである。此本位制に關する主張は必ずしも歐洲戰爭に依て惹起されたものとは云へない。開戰の前年ヨハン、プレンゲ（ミンスター大學教授）なる人の著はした「割引政策と金融市場の統制」と題する書物に於ても、金核心本位制と金流通本位制とを比較した一節があり、更に遠く遡れば、クナップの貨幣國定說にも淵源を發して居るが、最近兩三年に至つて、ハイン、ベンデヰクセン其他の人々に依つて、再び盛に唱道されるやうに爲つたのは、要するに戰爭の爲めに、獨逸の通貨制度が殆ど地に委するまでに、攪亂され、蹂躪され、今や正則に以前の狀態に復歸しやうとしても、殆ど手を着けることが出來ない、左ればと云つて今日の儘に推移することも、國際經濟に於ける獨逸の地位を復興する上に於て、事情の許さない所であるので、從來主張された金核心本位制を現狀に適用しやうとする試みが行はれるに至つたものと考へられるのである。

金核心本位論者が此本位制を主張するに就て、論據とする所は多岐多樣である。或は中央銀行の金貨準備を比較的多く爲替の調節に用ひ得るとか、或は金貨が一個所に集中して居るので財政に對する外國の信用が高いとか、或は金貨に對する取付けがないから、金貨の流出を防止する爲めに、金利を引上げる必要に接しないとか、或は金貨本位制を復興するよりも、金核心本位制に依つた方が金貨を節約し得るとか、種々の理由が陳述されるやうであるが、私は容易に是等を是認するを得ない。我々が本位制度を決定する場合に、第一に眼目とす可き所は如何にしたならば、貨幣をして完全に其職能を盡さしめ得るかと云ふ點である。此點から云へば、貨幣が實體價値を有すること

國内に於て自由鑄造を認められて居ること、國際間に於て出入の自由なることの諸條件を備へなければならぬ。而して此正貨を代表し、正貨と自由に兌換される紙幣であつて、始めて貨幣の代用物と爲り得るのであるが、此場合に於ても、紙幣の伸縮をして或る規律の下に、正貨の增減に伴はしめることを要するのであつて、是れが今日銀行紙幣の發行法を律する根本觀念となつて居ることを爭へない。一部の論者は紙幣が正貨と同一の價値を有したならば、何處までも貨幣の用を爲すものと考へるやうであるが、紙幣が貨幣と同一價値を持つのは、單に信用上の事實であつて、然も此信用も即時兌換條件の兌換制度の運用で支持されるのである。論者は紙幣本位制と云ふが、其紙幣は何を根據として、其價値を維持し、斯くて諸般貨物の價格を律するかと云へば、政府なり、中央銀行當局者なりの專斷的意思以外に、殆ど何の據る可き所あるを知らない。外國爲替相場の高低を標準として、不換紙幣を伸縮した所で、內國に行はれる取引に對して、堅實なる支拂用具を供へたものとは認められない。

國家と貨幣との關係如何に就ては、一部論者の間に誤解の存することを免かれない。私の考へる所を以てすれば、國家が貨幣の價値決定若しくは其流通に對して、爲し得る所は、所謂宣言的方面のみであつて、價値的部面に及ぶを得ない。國家は紙幣を流通させる場合に、此一枚の紙片は若干の名義的價値を有するものであることを宣言するであらう。然し此紙幣と財貨との間に、如何なる割合で交換が行はれるであらうか、是れは取引をする當事者の意思に依つて、定まることであつて、國家の權力を以つてするも、之を如何ともするを得ない。

辯護論に對する批判

或は斯う云ふ說もある、紙幣に對して、之を兌換する準備として、正貨を置かなければならぬかどうかは、純然たる便宜上の問題たるに過ぎない、國家が放縱なる紙幣の發行を愼しむか、又中央銀行をして之を愼ましめるならば、必ずしも常に正貨準備を必要としないと。然し今日の社會に於て、誰れが、又何人が國家又は中央銀行の紙幣發行を愼ましめるであらうか。之を愼ませるものは兌換制度の制限であり、金紙同價流通の維持に外ならない。オーヴアーストーン卿は英國が千八百四十四年のピール條例で、英蘭銀行の兌換制度を確保したことを擧げ、次いで曰く「銀行紙幣の正貨兌換こそ有效に保護せらる可きものであると云ふことが此條例の基礎であつて、此目的を達するのが實に該例制定の眼目であつた。余は他の事柄が總て兌換保證の爲めに、犧牲に供せられ可きものとは考へない、寧ろ此目的を成就することは、一層大なる患害から、國民を保護する所以であることを信ずる」と言つたが、私は此說に双手を擧げて、贊成するに躊躇しないのである。金核心本位制の主張者は斯う云ふ、金貨本位制の下で、貨幣の供給を增さうとするには、新に金を買入れなければならぬ。然し金の蓄積高の多寡で、此買入は時に困難を感ずるであらう。其困難な時には、銀行の信用狀

拘束され、日歩合を勝手にすることを許されないが、斯る拘束を受けない貨幣制度即ち金核心本位制の如きものであつたならば、國民經濟上の需要に應じて、貨幣なり、信用なりは、自然に増加される利益があると。然し是れが果して此本位制度の長所であると云はれやうか。論者の舉げたやうに、金核心本位制の下で、貨幣竝に信用の膨脹が自由であるとしても、此膨脹は現貨の基礎を缺いて居るではないか。兌換制度が誠意を以て、運用されるならば、信用の膨脹をして必ず正貨の實在に伴はしめなければならぬ。此保障があつて、始めて信用の授與が適當に制限され、通貨の過剰も防止されるのである。戰時の獨逸に於て、早くも金核心本位制の主張に接するに至つたのは、戰時數年間獨逸の不換紙幣が世人の豫想しつゝあつたよりも、完全に流通し、貨幣としての職能を盡した實證の齎した結果であると云ふ說もあり、戰時に於てすら彼の狀態で流通したのであるから、戰後の平和時代には、更に流通上良好の結果を奏するであらうと云ふ。然し冷靜に考へて、我々は戰時數年間獨逸國民が不換紙幣の過剰若しくは其流通價値の低落に惱まされたことの大なるを知るが、其良好な狀態で流通し得た跡を認めない、又戰時に於て色々の無理が行はれ、又外國との取引の絕無であつたことが餘程不換紙幣の流通に資したことであらう。是等特殊の理由を以て、金核心本位制を主張する理由に充てるのは、我々の首肯し能はざる所である。

如何にも諸國が歐洲戰爭前に行はれて居つたと同一の原則で兌換制度を恢復し、通貨制度を再建することゝ爲つたならば、英國が最も好都合の地位に立つであらう。即ち紙幣に對して比較的多くの金貨を持つて居るのは同國である。今後の貿易、海運、海外企業の働きで、國際貸借の上に戰時に蒙つた打撃が恢復されるとしたならば、英吉利こそ一番早く戰前と異ならざる狀態の貨幣市場と爲り、金の出入を自由にして、國際金融の中心點たる地位を固守するに至るものと想像される。獨逸の金核心本位制を主張する論者の内には、此勢に對抗し、モット簡單に、又モット經濟的に一國に貨幣市場を作つて、英吉利と覇を爭うとする地位に自國を進めると云ふ考はないであらうか。假令ひ此考はないとしても、金核心本位制の裏面には、正常の手段、普通の原則で、兌換制度の昔に歸らうとしても、百方計盡き、力盡きて、其道がないので、兌換制度に代る窮餘の策を茲に求めた趣のあることを免かれない。政治と經濟とは常に相提携するものである。否經濟の多くの部分が實に政治其ものであるから、經濟上の原則が政治上の關係で、左右されるのは、誠に已むを得ない所である。唯世間に學者と云ふものあつて、斯う云ふ場合に、殊更に牽强附會の辯を弄し、道理を枉げた所に、何か別の道理でもあるやうなことを言ひ立てゝ、世人を迷はさうとする趣のあるのは、吾人の大に不快とする所である。

不景氣の國民生活及國民思想に及ぼす影響と敎訓

新經濟人のスケッチ

(國際眼と自治心)

杉森孝次郎

今から四分の三世紀前に、エマーサンが著はした『英國民氣質』は、敎訓の多い作だ。不景氣を未發に防ぎ、已發に堅耐克治する力に於て、當時の英國民は、實に超人的國民であつたのだ。現在の英國民といへども、他國民に比べては、矢張りその資格があらう。

しかしその事は後廻はしにして、最近の不景氣を觀望して、先づ感ずる一事は、吾人は經濟的にも國際眼を開かねばいけないといふ事だ。經濟的單位としての社會は、國內的社會では昨今すでにない。それは國際的社會と成りかはつてをる。國際的經濟社會が、唯一の眞の經濟的社會と現實に成つてをる。歐洲が開戰して、それが原因でわが經濟界の溫度計が上昇したのであつた。物も船も始ど無計算的に要求されたのであつた。一夜地

底に大鯨隊が地震かなにかのためにあいて、地上の水溜まりが吸ひほされたやうな勢ひであつた。戰爭がやんで、各國が再び生產力を發揮するやうになり、且つ財政整理の必要上、成るべく輸出を增して輸入を減らす方針を立てるやうになつた。その結果としてわが經濟界が不景氣に逆戻りする。これは國際的經濟界の潮汐の干滿に乘じて、わが經濟界の舟が昂低するといふ單純なる現象だ。

以上だけでは自然法の叙述だ。人間の誇りは、自然法を人爲法の支配下に齎らすにある。開戰に始まつた景氣は、終戰と共に終はるといふ道理を、冷かに考慮し得なかつた事は、吾人の不明不德であつたのだ。遙かに汐がさして來たといふので、有頂天になり、株の、豪者のと騷いで、城門を高うして、歌舞宴樂してをる間に、汐はいつしかひいて、游げなくなつた大小魚の觀が、最近のわが國民にはあるでないか。

國際的經濟界を經濟的社會の單位として直視し得なかつた事は、吾人の不明に歸すべき過失であつた。しかしながら、いはゆる成り金氣分と恐慌的態度とには不德がある。經濟はまじめ

[illegible]ないからだ。學者も、教育者も、政治家も、經濟的救濟を乞ひ、援助を仰ぎ求めた人に對しては、いかに頭が上がらぬかを見ても、經濟生活の權威はわかる。私は最近、象山が、藩の某富豪には常に金の世話になつた。それでわれの書翰等の遺品も多く其の手にある。といふ噂話を耳にして、志士も、憂國者も、正義人道の殉難者も、經濟生活に於て不獨立である時には、弱い者だといふ古今東西の鐵則を憶うた。福澤諭吉の偉大は、實に彼れが道德的獨立自尊の一大條件として、經濟的獨立を實践高唱したところにある。釋迦も、耶蘇も、マホメットも、今日では[illegible]に依頼するやうでは成功したい。時代が進んだのだ。

ギルド社會主義のエス・ジー・ホブスン氏その他が、經濟は政治の主人だ。政治は經濟の隷僕だと激語してをるのに、意外に强い眞理がある。生産の實權、隨つて富を握らずに、勞働議員を選出し、普選を實行し、勞働黨を育て上げても、勞働者の位置は實質上些も向上しなかつたと言つて、無産政治、無資産有政權のシャボン玉よりも儚ない事を痛嘆するに注意すべき要素がある。婦人解放運動にしても根底は同じだ。經濟上の權能が夫に集中してをる限り、妻は救はれない。腕力が物を言ふ時勢は去りつゝあるが、經濟が物を言ふ時勢は進みつゝある。實[illegible]は[illegible]を下げ[illegible]かと反問するなか[illegible]は儲けさせて貰ふ底意があればこそでないか。

經濟生活に於て自治なくては、人は道德的に自尊する事は出來ないのだ。經濟と道德との關係は、こゝにその一要點がある。この生活の根原則に開眼すれば、經濟的生活に於ける成り金的膨脹と、恐慌的萎縮とは、吾人はつとめてこれを避けなくてはいけないことになる。吾人は經濟生活に於て機會主義者であつてはいけないのだ。形勢次第で限りもなく付け上がり、また縮み込む事は、無品性者のする事である如く、經濟生活に對する根本的態度が出來てゐない證據だ。わが國の實業家は、戰前に於ても、一夕の集宴に數千乃至數萬金を、それも極めて低級趣味の瑣末事に擲つ事に誇りの競爭を示したといふ。恥づべき小志といはねばならん。經濟は健康の如く、信義の如し。內側から操守する原則がなくてはいけない。個性の中心を距る遠き問題をば、吾人は比較的に機會主義に委して差支へない。散步の如く、遊獵の如し。個性の中心に近き問題をば、機會によつてよりも主義によつて決定しなくてはいけない。經濟生活は、個人に取つて、隨つて國民に取つても、現代に於てはすでに道德的生活の犀壁とも稱すべき重要位置に達してをるのだ。吾人はこの事理を明觀して、個性の自治及び成長の最必要の一件に

對する徹底的態度を、經濟生活に對して執らねばいけないのだ。當今の實業家は粗末な品性の所有者たる場合が多からう。それでも當今の實業家は當今の學者や文人や政治家や僧侶よりは見上げた品性の所有者たる場合が意外に多からうと想像する。純化された產業主義は、祿を食まぬ武士だらう。王候にかゝへられない傭將だらう。見識が一段と高いのだ。吾人は經濟生活の底から今はただチョロ／＼と湧き出づる超利害的個性神の活路を瓦劈して、經濟生活に、眞善美の內容を詰め込まねばならん。經濟生活を、景氣不景氣といふが如き外的勢力の翻弄にまかせる事は、人間の大なる屈辱だ。個性と人格を外的勢力の翻弄にまかせる事をかなりの程度に於て意味するからだ。吾人の經濟生活は、風浪の故に行止する帆船であつてはならん。二十世紀の經濟生活は、風浪の艱險を物ともせずに、行かんと欲するところに行き、止まらんと欲するところに止まる巨艦でなくてはならんのだ。經濟は自然力でなく、威力でなくてはいけないのだ。景氣と不景氣とは自然力でないか。

私經濟より始めて公經濟に及び、その原則を國際的に發見せよ。そしてその動機を個性の保護以外にも、以下にも持つてはならん。吾人は經濟生活に於ても、弱者と見れば土足にもかけ、強者と見れば靴の埃をも拂ふやうでありたくない。經濟生活の學と術にかけては、英國民の過去は有資格者であつた。景氣と不景氣に亢奮しまた恐慌する國民は、夭折する。個人としては、ナポレオン程度、カイゼル程度までは、天才だにあらば行けよう。國民として大きく長生するには、恆心がなくてはいけない。恆心を以て恆產を治めなくてはいけない。しかも、ナポレオンは、治產力に於て遙かに古今の英雄を拔いてをつたではないか。榮華と觀えた大帝國を半生の間に築き上げて、身後に一錢の負債をも殘さなかつた彼れは、近代の徵候を帶んでゐたのだ。世はデモクラシイの阪をのぼりつゝある。產業自治は、公私經濟を、景氣不景氣に支配されないやうに立て直ほすといふ意味に於ても叫ばれなくてはいけない。

新經濟人の眼は國際眼だ。彼れの心は自治心だ。

不景氣から起つた悲喜劇

文學博士　三宅雪嶺

不景氣はいろ／＼であつて、部分的なのがあり、全體的なのがあり、強烈なのがあり、微弱なのがあり、期によつて影響を

異にする。低い程度の景氣不景氣は、絶えず繰返され、別段の事なくして進んで行く。轉んで膝を擦剝いたとか、少し許り風邪を惹いたとか云ふのは、ひとりでに癒る。不景氣も非常な天災によるのは容易に恢復せず、洪水とか饑饉とかで、何とも仕方なくなる事がある。さうでなく、好景氣に對する不景氣は波の上下するが如く、順序の然らしむる所であり、其の間に人心が動搖するに止まり、進むべきに進んで行く。

世界戰役に伴ふ好景氣及び不景氣は、原因が頗る明白、結果も察するに難くない。世界戰役の初めて起つた時、關係國が餘りに多く、如何になるか見當が着かず、一大不景氣に襲はれると考へ、何でも用心せねばならぬとて手控へするに傾いた。所が實際は不景氣風が一般に吹き渡るのでなく、吹く所があり、吹かぬ所があり、吹かぬ所は前よりも景氣好く、或は何處まで景氣好くなるか分らぬ。必死に戰つて居る國々でさへ、悲慘の狀態を見るの傍、大儲けして居るのがあり、嚴重に戰時利得稅を取立つるに到つた。

戰地より最も遠い日本では、僅か許り戰禍を蒙つた者を除き、不景氣風よりも好景氣風に出逢ひ、豫想外に金廻りが好くなつて居る。考へて見れば不思議も何もなく、戰地に必需品を輸送するが爲め船舶が必要であり、戰地に平時の業務を廢する者多く、必需品の缺乏を生ずる丈、何處からか之を補はねばならぬ。一千數百萬人が歐洲で動員し、米國でも多くの兵を募らんとしては、何處からでも出來るだけの供給をせねばならぬ。日本で造船製鐵を初め、假に事業の發達するのは定り切つて居る、船といふ船は何でも價が幾倍に騰り、造船場が注文に應じ切れぬ。直接又は間接に必需品の性質を帶ぶるものは、悉く翼を生やして飛んで行く。別段懸け値をするとなしに値が騰り、幾十億の金が入込んだ勘定になる。貨幣が入込んだのでなくても、財界が入込んだと同樣に扱ふ。中央銀行を初め、是處で警戒し、通貨膨脹を制したならば何うかとの說あるが、思はぬ好景氣續きで、迚も控目にする氣にならず、茲で出來る丈け事業を起すのは國力を發展する所以と考へ、若し警戒して差控へたならば、折角の機會を逸するものである、無能であるとの譏りを免かれぬ。何時までも好景氣が續かぬと思ひつゝ、何時好景氣が去るかを斷定する事が出來ず、相應に永續きしさうにも考へる。双方互角の勢で戰つて居り、双方力竭きるまで年數が掛りさうに見える。景氣は益々好く、出超に次ぐに出超を以てし、此機會を外づしてならぬと慮かるに傾く。英國銀行に預けてある金が必ず取れるか、不換紙幣の質を備へて居るでないかとの疑あるが、何分にも此機會を外づしてならぬとの考へが先にな

る。見すく儲けが見えて居り、儲かりさへせば政黨員にも割前が來る。衆議院に自働車が集まり、貴族院よりも景氣が好いのは其一端を示す。貧乏代議士が權利株でニコ〱して居る。權利株が議員連中に廻るのは、一般に新規企業の盛んなるが爲めであつて、觸込み通りに事業が成立たぬならば、儲かつた金のみで引き足らず、不成立に終るべきものの少からぬ事は定り切つて居る。

然し何れが不成立になるか分らず、濡手に粟のやうな儲出して、株を募らうと競つた、眞面目に將來を考へる者も、明白に之を云ふ事が出來ず、云ふたとて人の承知する程證明する事が出來ず、眞面目でなく、自分も儲けようとして居つては、多少將來に疑あつても、まだ〱景氣が續きさうに云ひ、殊更ら之を煽り立てる。さうして既に儲けたもの、即ち成金と成つた者は、嘗て考へた事ない程の金高になり、夢に夢見るやうで有頂天になつて居る。十萬二十萬と羨んだものが、百萬所でなく千萬長者となつて、我身で我身が分らぬ。其儘で續けば幾千萬にも膨りさうである。成金根性を發揮するとして笑はれるが、斯く突拍子も無く身の廻りが變つては、調子の取れぬ所あるのも尤もである。そこで生きた鯛を膳に付けるとか、虎の肉を料理して出すとか、種々の事がある。造船、製鐵以下戰時關係の事業は悉く發展し、資本家が豫想外に儲かるは勿論、勞働者も亦豫想外に儲かる。金額に於て比べものにならぬにしても、日に一圓を俸とした者が五六圓を取り、或は十圓以上に騰つては、之れ亦有頂天となるを免かれぬ。生きた鯛を膳に付ける程でなくても、それ相應の事をする。比目魚の刺身は食へるものかと、丸で食はうとせぬ。間借りなんかして居れぬとて、一軒構へようとし、裏家に住まつて居れぬとて一軒建ちへ移らうとする。勞働者の需要あるに賴み、村落より都會へ出て、繁昌な都會程住宅の缺乏を告げる。住まうとして家が無く、俄かに住宅問題が起つた。

所で斯く景氣が好いと共に物價騰貴し、戰前の三四倍五六倍に騰り、物によつてそれ以上に騰る。戰時必需品の關係者は、資本家となく勞働者となく、前に幾倍するの收入を得、物價騰貴を意に介せず、却つて興味を以て之を見、高い物を買ふのを誇る程なるが、所謂俸給生活者流はさう行かず、比較的體面を重んずる官吏や教員や、物價騰貴に困しみ、特別手當で辛うじて息を吐く有樣である。五十圓以内では如何に切り詰めても、家を支へる事が出來ぬといふ事になつた。前に學校教員を旦那と呼んだ勞働者が、月給を聞いて憫な者とし、自ら小學教員の二倍三倍を得るは造作も無い。教員巡査等で職工に移つたのが

可也りにある。船腹拂底、運賃暴騰といふ事になつた。一方で成金連が奢侈を競ひ、骨董品の中で最も高價なるものを買はうとし、勞働者も頻りに衣服を吟味するやうになり、他の一方で官吏教員等が小さくなり、或は生活難を嘆ずる。何時でも好景氣の場合幾何か此傾向あるが、世界戰役に伴ふ好景氣には、其最も著るしきを見える。之れ程山と谷との違ひになるのは珍らしい。

景氣の好いのを喜ぶべきか呪ふべきか、人によつて違ふ。何處まで運ぶか、此の先如何に成らうかと云ふ所で、常に攻勢を取り、今一息で戰勝を得さうに見えた獨逸が、俄かに屈服するの餘儀なきに至り、之と共にはるばる日本から必需品を供給するの必要が無くなり、造船の注文が無く、製鐵の注文が無く、戰時關係の資本家の儲けが頓に減じ、勞働者の解雇せられる者が至る所にある。前に醉拂つて居つても、頼んで連れて行つたのが、今は此方から頼んで行つて、向ふで撥ね付ける。成金が倒れたのは數へ切れず、勞働者の失業問題が起つて來た。物價は下がる譯であつて著るしく下らぬが、次第に下向きになつて來る。そこで好景氣の時に最も失意であつた官吏教員等が俸給が増加し、物價が下向きと云ふので、聊か得意の狀態になり來つた。中學教員で會社に入り、現在で職工になつたのは、再び元へ還らうとする。還へらうとして還へらぬ狀態に立つて居る。

不景氣は暴風の如くパニツクを起さぬやうでも、壓迫は日に日に甚だしく、儲に儲けたもの程苦痛を感じ、或は絶體絶命に陷つて居る。好景氣の時、最も景氣付いたのは大阪、不景氣に轉じ最も景氣の惡いのも大阪である。東京に不景氣風が吹いても、官吏が多く、割合に景氣好ささうな顔をして居り、不景氣らしく見えぬ。然し何と云ふても、嚮に未曾有の好景氣を呈し、それが行き止まつたので、困らずに居れぬ。今後如何にすれば可いか、判斷し兼ねる。靜かに考へれば何程の事でも無いのに、先きに儲かつて逆せ上つた如く、今度は氣落ちして手が着かなくなる。鐵は米國に供給を仰いで居つたのに、今日米よりも價が廉いといふ奇異な狀態となる。米國の相場より廉いので輸出したならば儲かりさうである。若し米の東部へ輸送し得ば、確かに儲かるであらうけれど、はるばる東部まで廻つては、船賃が高くなる。西部で需要があれば可いが、それがあるか何うか。併し今の所、其邊の所をも考へるゆとりが無く、只あゝでもない、かうでもないで、屈托に日を送るらしい。一切の事さうなつて居る。生憎何處にも排日熱が昂まり、持出しても思ふ様に行きさうもなく、行くか行かぬかよりも、敢てするの

意氣込みを缺いて居る。若干大頭株で輸出の計畫に從事して居るが、それが甘く中たれば新に道が開かれよう。好景氣に連れて設備を大にし、不景氣になつて之を維持し難く、今の儘では幾何縮少してもやり切れず、思ひ切つて海外に發展するか、全く事業を廢するか、何れかと云ふのがある。今冬より明春に掛けて成敗の如何を卜する事が出來る。然し如何にしても前の好景氣を恢復する事が出來ず、何處まで不景氣になるか、成るべく悲慘な狀態より免かれたいと云ふ所である。今よりも更に不景氣になるべきを覺悟せねばならぬ。事に依つて悲慘な狀態に陷らぬと限らぬ。

然し今回の不景氣は世界戰役に伴ふ好景氣の反動であつて、差引して埋合せが着く筈である。儲かつて大いに飲み、宿醉して寢て居る位の事であつて、眞の病氣と名付くべきものでない。飲み過ぎねばさう云ふ事に成らぬと云ふに過ぎぬ。何故に飲み過ぎたか。飲み始めては兎角過ぎる傾がある。夢見る事も無い程の大儲けしては、恐慌の來るのは避くべからざる勢であつて、今は頭を抱へて惱んで居る。幾年かを過ぐれば自づと平癒する。個々人々について見ればさま〴〵の事があらう。成金になつて出入の者に殿樣と稱ばせ、零落して行方を晦らませたのがあり、或は自殺したのがあり、大小の成金が多い丈け、さま〴〵の事がある。然し、元と戰爭で荒らされたのでなく、饑饉で荒らされたのでなく、前に儲かつた程儲からぬといふのである。日本が戰時に儲けたといふ事が反感を買ひ、尙ほ其他の事情で戰役以前より惡くなるにしても、堪へて居りさへすれば濟む事が多い。好景氣の時の如く泡沫護が儲からず、それ丈け人の顏が浮かぬにしても、前よりも損して居る事が少い。信實の三十六歌仙を買ひ、又之を賣るのは、其當人が激變を感じても、三十六歌仙は、依然存在して居り、唯だ三十六人に頒かたれたに止まる。不景氣を極めたとて、元の杢阿彌になつて止む。所謂俸給生活者連は景氣が好くても惡くても何程も感ぜず、今のやうでは不景氣の方が可さそうになつて居る。幾許か俸給が上り、物價が下つた丈け安心して居る。前に俸給生活者が谷底に落ちたよりも、資本家及び勞働者が共に登り過ぎ、近來漸く適當な所まで落ち來つた形である。一時の現象で、幾年をも平均して見れば何程の事も無い。

然しそれにしても資本と勞力との問題が盛んになり、從來と同じく之を解決しさうになつて一頓挫したのは物淋しい。資本家が大分受身になつて居つたのに、よう〳〵氣強くなり、それ丈け勞働者の意氣が昇らぬ。もと勞働者の練習を缺き、商人多いに任かせて浮き立ち、其の減ずると共に沈むのであつて、何

ともすれば[illegible]好い[illegible]し、一旦一月休業して差支へない程になつて居れば、徐ろに手強いのであるが、さういふ準備なく、景氣不景氣に支配せられるの已むを得ぬ状態になつて居る。勞働者の爲めに悲觀するものは此點に考へるを要する。

大體上、景氣不景氣は一種の動搖であり、程經て動搖が收まり、跡形が無くなる。幾度もかゝる事を經驗する程個人として、國民として、性格を鍛へる。何處でも人に多少の浮沈があり、景氣不景氣はこれを一般的にする。無事平穩に生活するのは幸福のやうであつて、競爭場裡に立つに痛み、なかなか不幸である。國民として世界に立つには、幾多の浮沈を經驗するに如くはない。歐米は東洋よりも此類の經驗が多く、それで今は優勢を制して居る。東洋の比較的泰平を續けたのは、今日歐米に壓迫せられるを免れぬ所以である。景氣不景氣を幾回も經驗して居れば、好景氣で無暗に逆せ上らず、不景氣で失望したり落膽したりせぬ。珍らしい好景氣で特別の經驗を得たと同じく、氣味の惡い不景氣で特殊の經驗を得る事になる。今幾年間か不景氣な類をせねばなるまいが、よつて得た苦がい經驗は更に將來に發展すべき原因となる。

不景氣の國民生活及び國民思想に對する影響と教訓

法學博士　堀江歸一

俸給衣食者の打擊

不景氣の國民生活に對し、又國民思想に對する影響は如何なる形で、現はれるであらうか。之を一言にして云へば、國民生活を壓迫し、國民思想を惡化するに至るのである。

既往數年間の好景氣時代に於て、我國の産業は非常に活躍し、其結果到る所に富の増殖したことは、著しいものであつたが、其富は決して公正に社會に分配されず、一部の少數者が多額の富を獲取したので、少部分の分配にしか與るを得なかつたとか、又は全然分配に與るを得なかつたとか云ふやうな階級があり、而かも此階級に屬する人が多數であることは、爭ふ可からざる事實である。俸給衣食者の如き、即ち此後者に屬する階級であつて、最近數年間彼等が社會生活上に、虐げられたことに對しては、何人も同情を惜まなかつたのである。然らば今日のやうな不景氣に爲つた場合には、好景氣時代に生活難に苦んだ人々

は少しは安樂な位地に就くことが出來るかと云へば、必ずしもさうでなく、物價は生活費の節約を許すまでに低落しない一方に、俸給衣食者の職を奉ずる會社や商會は早くも不景氣風に襲はれて、之に對抗する爲めに、一部の使用人を解雇して居るのである。彼等は戰時好景氣の際に、少しは手當なり、賞與金なりを支給されたかも知れないが、其れは資本家の占め得た利益に比較すれば、九牛の一毛にも過ぎない。而して好景氣時代には仕事の繁忙であるに隨ひ、事務員階級の者は早出晩退で、長時間を通じて、休息する間も、酷使されたのであつて、事業の繁昌に對しては、彼等の勤勞に負ふ可きもの少なしとしない。然るに不景氣が來れば、直に其地位の安全を脅かされると云ふのは、何たる不幸の事であらうか。一旦解雇され、免職されたならば、俸給衣食者は木から落ちた猿、水を離れた魚と同樣、生活上如何ともすることが出來ず、物價が假に不景氣の濃厚を加へると共に、下落したとした所で、物價を購ふ可き所得其ものを失つたならば、物價下落の如きは、彼等に取つて、何等の意味を爲さないことゝ爲るのである。

俸給衣食者の生活問題

今度就職を拒絶した會社の内には、社員に對して今後一年間位は右の當[illegible]の[illegible]て、其[illegible]るまで [illegible]

あるが、斯う云ふことをするのは、大會社だけで、好景氣時代の利益が殘つて居る場合に限られるのであつて、決して一般に之を望むことは出來ないのみならず、斯る待遇は會社の好意上、社員の爲めにすることであつて、社員自身から請求し得る權利とは認められて居らない。好景氣の時代に、彼等が事業主から賞與金を貰うとしても、此賞與金は自分達が斯る勤勞をして、利益金を生み出したから、勤勞に對する幾割と云ふ正確な步合を立てゝ、貰ふのではなく、殆ど事業主の獨斷的決裁の下に分配されるのであつて、詰り其好意に依るのである。さうすると俸給衣食者の大部分を占める銀行員とか、會社員と云ふやうな者は好いに付け、惡いに付け、多くの程度に於て、事業主に依賴して居るのであつて、生殺與奪の權を彼に握られて居ると云つても、差支ないであらう。其證據は今度の不景氣來と共に、彼等が何時解雇問題に上らせられるかも知れないと云ふ危險に瀕したことを以て、之を知るを得るのである。

其處で私は俸給衣食者に向つて、組合を作ることを勸めたい。其組合は無論協に作る可きであるが、姑く縱の組合でも我慢するとしよう。而して此組合で利益分配を決定する場合に、之に參加することも必要であり、又組合の勢力で、事業主と被傭者[illegible]に、[illegible]し、其[illegible]として、[illegible]に

罹つた場合の保護、解傭される場合の豫告期間、解傭の際併に解傭後に於ける保護等に就て、嚴重な規定を設け、傭主一個の意志で、被傭者一身の運命を如何樣にもすると云ふやうな弊害なからしめることが必要であつて、此點を閑却して居つたならば、俸給生活者の生活は浮萍と少しも異なる所はないのである。

政治と國民生活

政治と國民生活とが如何に密接の關係を持つて居るかと云ふことも、今度の不景氣に依て、充分に觀察されるのである。今度の不景氣は餘程劇しい影響を社會の各方面に及ぼして居る。昨日まで全盛を誇つて、傍若無人の振舞に出た者が今日は他人の憐みを乞はなければならぬと云ふ轉變も生じたらうし、好景氣時代に苦しんだ者が不景氣時代に、更に其苦しみを重ねると云ふやうな悲慘事の起るのは、不景氣時代に免かれ難い現象であるが、其れが今度のやうに著しく起つたのは、要するに原内閣が極端に好景氣を煽揚した其反動として、恐慌を誘致した結果であつて、國民がモット政治的に目覺めて、原内閣のやうな間違ひだらけの經濟政策を施す内閣を倒して仕舞ふか、又は輿論の力で、内閣をして秕政を施す餘地なからしめたならば、經濟社會も今度のやうな慘憺たる影響を蒙らなかつたらうと思はれる。

恐慌は資本制度の産物であるから、恐慌の慘害を回避するには、資本制度に代つて、他の經濟制度を立てなければならぬと云ふ說は近頃日本でチラホラ耳にする說のやうであるが、私は當面の問題としては政治の仕組みを改良する、從來よりも、民衆的政治としたならば、餘程多くの程度まで民衆の利益を政治上に發揮することが出來るであらうと考へる。

不景氣と商業組織

昨今卸賣の取引や、定期取引で、相當の處まで、物價が低落し、是等の方面で既に不景氣風が吹き荒んで居りながら、小賣市場では價格が好景氣時代と異ならない程に騰貴して居るのは畢竟我國商業組織の宜しきを得ない結果でもあらうが、同時に私は其原因を我國に完全な、又有力な消費組合の存在しないことに歸したいと思ふ。若し消費組合があつて、自ら物資を生産製造し、今日のやうな場合に、代價引下げの先驅を爲したならば、一般小賣價格を支配するに至るのは勿論であるが、我國現在の消費組合に果して斯う云ふ働きを望み得るであらうか。私は世人が今度の事實を教訓として、從來の配給的消費組合に滿足せず、生産的消費組合の方に向つて、歩を進めることを肝要と考へるのである。

國民思想と不景氣

不景氣は國民思想に如何なる影響を與へたであらうか。近頃

我國民思想は動揺して居ると云ふやうな觀察を下して、頻に憂慮する者もあるが、私は必ずしもさうは考へない。唯國民思想を堅實にし、健全にするには、有形無形の兩方面から、之に培はなければならないのに、近頃の經濟的變動殊に、原内閣に依つて、人爲的に醸成された經濟的變動の爲めに、有形的方面から國民思想を健全にすることが出來ないやうな狀態であつた。一方に成金階級があり、他方に之を虐げられる階級があつたならば、何としても國民間の團結が鞏固であるを得やうか。窮して亂すると云ふのは、如何なる場合にも適用され可き言葉である。原内閣自ら國民に階級的差別を置き、普通選擧は階級的差別を撤廢する怪しからぬものであると云ふ考で、何時までも國民の一部を政治的無能力者として置くと云ふことは、國民思想を惡化する道ではあるまいか、抑も亦原内閣の經濟政策が徹頭徹尾金權者階級を利するものであつて、金權を有せざる者や、之に近づけない者を苦しめる政治であるとしたならば、國民は特殊の階級に對して、不穩の考を持つやうに爲るのが自然の成行ではあるまいか。國民思想に惡い分子、不穩な徵候があるとすれば、其れは總く原内閣の醸成したものであり、今度の不景氣で、更に生活に窮する者の思想に一層の變化を來すとすれば、其れも亦不景氣の惡弊を人爲的に甚だしからしめた原内閣の責任である。金權萬能の弊害は餘程強く、又多くの場合に現はれ來つた。而して金權者階級に列するものは、少數の人に限られ、其れも眞面目に勤勞に勤しんだのでは、仲々此階級に這入れず、寧ろ政權と結託するとか、投機に從うとか云うやうなことが、其近道であり、現に斯る奇道を踏んだ者が金權者階級として、天下を横行する、金權以上に尊重す可きものも、尊重され可きものも、共に社會に存在しないと云ふ狀態であつて、何として國民思想の健全が期せられるであらうか。而して當今の政治家は自分の責任は棚に上げて、國民思想の混亂するのは、指導者宜しきを得ない爲めだとか、外來思想の影響だとか、途方もない所に原因を求めやうとする、誠に片腹痛き所業である。

今後不景氣が段々濃厚と爲り、其影響が酷烈と爲つた場合に、社會生活に於て、眞に苦しんで居る者に向つて、救濟を施さないで、唯團體を組んで政府に運動して來た者などばかりを保護して居つたならば、不景氣の爲めに、國民思想は益々惡化することを免かれないであらう。

不景氣時代に處する用意

不景氣時代に處する用意としては、國家經濟と云はず、國民經濟と云はず、私人經濟と云はず、總ての經濟に於て、整理緊縮を行ひ、冗費を節して、資力を養ひ以て他日の活躍に資する

ことが肝要である。政府が明年度の豫算編成に窮して居ると云ふことであるが、是れは窮するのが、當り前であつて、大に節約を行つて、當面の急に處す可きであり、私人の經濟に於ても、成金時代の氣分は之を排除して、質素の風を養はなければならぬ。原内閣が積極政策を唱へた手前今更ら消極政策を行へない行き懸りであると云ふならば、原内閣自身が處決して、然る可きであると考へられる。歐洲諸國でも今や政治家は戰時に紊れた國民の風俗殊に男女間の關係を如何に剛健のものにするかと云ふことに就て、苦心して居るやうである。而して倹素の風は一旦戰時に養はれて、中に永く續いて居るやに聞く。日本が何時までも半醉半醒の狀態に居つたならば、國際競爭場裡の落伍者たることは必然の勢であつて、私の最も恐れる所である。

不景氣來の責任と不合理なる社會組織

早大教授　安部磯雄

經濟學の立場から云へば、今日の不景氣と云ふ事實は或意味に於て不可抗力とも考へられる。乍然今日のやうな烈しい不景氣を來した事は、勿論人力を以てそれの來る事を豫防するのが全然不可能ではないのであるから、私は此度の不景氣の責任を日本の局に當る今日の政治家に歸さなければならぬと思ふ。

經濟的に考へるならば、物價は少しづゝ漸を追ふて騰貴する場合には、社會全體のためから云つて好い事であると思ふ。之は勿論比較的の言葉であつて、若し物價が少しも變動しなければ之に越した事はないが、今物價が上ると下ると孰れが好いかと云ふに、少しづゝ次第に上る場合には社會全體のために利益である。併し今日のやうに物價が騰貴したのは全く人爲的に助長したのであつて、當局者はそれに對して責任を免れる事は出來ぬ。物價の騰貴するのは猶ほ人の酒を嗜むが如きもので、段々飮んで居る中に陶醉の狀態に陷入り心身爽快を覺えるのであるが、然し度を過して飮み過ぎると忽ち二日醉の苦痛が來ると同じやうに、物價が騰貴して世間が好景氣に浮つ調子になつて居ると、必ず其後には反動的に不景氣が襲來して、經濟界は勿論社會全體が苦痛を嘗めるやうになる。事實之が今日の狀態であつて、私共が物價騰貴も程度問題であると云つて、昨年以來の物價暴騰に際しては屢々意見を述べて其不可なる所以を指摘した。此度の不景氣の襲來は經濟界の不可抗力でなく、或程度迄は人力で如何樣にもする事が出來たにも拘はらず、當局は知らずしてしたのならば兎に角二日醉の苦痛を知りつゝも尙ほ恬然

民に酒を飲ませるやうに仕向けた。其結果今日では國民が既に亂醉の狀態に陷り、身動きも自由に出來なくなつた事實は之を等閑視する事が出來ぬ。私は今斯かる狀態に陷し入れられたゝめに國民が如何なる損失を招けるかと云ふ點に就き少しく述べて見たいと思ふ。

人はよく物價の騰貴に際して實業家が利益を得たのみならず、國民の殆ど半數を占むる農民が利益を受けた事を云ふ。成程戰時中多數の成金が出來たが、物價の騰貴に依つて或一部の人は巨利を博した事は事實であらう。けれども今日のやうな經濟界の變動が來ると、實業家、農業家などが總局の差引勘定に於て果して利益を得たか何うかは頗る疑問としなければならない。大概の成金の大部分は今日では先に得たものは失つて元の杢阿彌になつた者が多い。今日の經濟界の變動に際して堪え得る者は昔からの基礎固き富豪で、比較的基礎脆弱な新成金は變動來と共に直ちに一掃されて了つた觀がある。斯く觀じ來れば結局實業家も差引勘定に於て餘り利益を受けて居ないし、農民も亦米が高くなつて利益を得た者は地主や自作農で、大きい側は儲けたが、多數の小作農は米を賣る餘裕もないから、米が高値を唱へて居た時に於ても利益はして居ない譯である。若し利益を受けたとすればそれは副業たる養蠶業に依つてで、生糸高き時には彼等も大に繁昌したのであつたが、併し今日の經濟界の變動のために養蠶家は忽ち窮境のどん底に陷り、政府に獅噛ついて救濟を仰ぐの醜態を暴露した。然らば農民も好景氣の酒に醉つて居た時代はあつたが、今や醉醒めの苦痛を勘定に入れゝば殆ど利益はして居ないと云つても差支へない。要するに經濟界の受けた利益は後に來た不景氣に依つて帳消しにされたのであつて、事實今日の變動來に依つて隨分悲慘なる狀態に陷れる犧牲者をも出したのであつた。で、私がこゝに云ひたい點は、此經濟界の變動に際して利益を受けずに常に損ばかりした方面に就いてゞある。それは社會の重要なる一部を形造る所の俸給生活者であつて、彼等の中には賃金生活者なる勞働者の大なる階級も含めて、或種の精神的勞働者と共に私は俸給生活者と呼ぶのであるが、彼等は經濟界の好景氣時代にも何等の恩惠も受けず、寧ろ物價騰貴の爲めに大なる生活に苦痛を嘗めて來たのである。如何に考へても、物價騰貴の爲めに俸給生活者は俸給の半分を減ぜられたと同樣の結果になつて居る。物價は品に依つて違ふけれども、食糧品は戰前の物價安き時代に比すれば何かに三倍、其他の日用品は二倍、三倍の程度に上つたのであるが、兎に角平均して物價は二倍以上に迄高くなつた事は明かだから、今假りに其騰貴率を二倍とすれば、百圓の俸給生活者

は何等の理由なくして其俸給を五十圓に減ぜられた譯である。官吏に削俸の制度があるが、俸給生活者は物價の騰貴に依つて明かに半分の削俸を受けた事になる。最初の二三ケ月、四五ケ月はまだ〱辛棒が出來るのであるが、彼等の生活は段々に行詰り、其如何ともする能はざる窮狀に陷つてから、世間の同情も翕然として集まるやうになり、彼等の俸給も増額されるやうになつたが、併しそれもたか〲五割で、それでは百圓の俸給生活者が俸給の五十圓を減ぜられて後増俸せられた所で僅かに七十五圓にしか當らぬ。物價の安い時代にしても二割五分の減收となつたのであるから彼等も隨分生活の苦痛を經驗したに相違ない。勞働者に於ても亦同じて、彼等は好景氣時代には他よりも早く賃錢を増額されたが、之も其賃銀は生活費の騰貴と同一の率で増加するものでなく、各國の例に依るも生活費は餘計に上つても賃銀にそれと同一の程度に上らぬのが常である。すると勞働者も景氣が好ければとて賃銀は上つたやうであるが實質上一寸も上つては居ない事になる。それも好景氣時代にはさうであつたが、今日のやうな不景氣時代には俸給生活者や勞働者は何うであるかと云ふに彼等は不相變昔のやうに大なる生活の脅迫から免れる事が出來ないで居る。現に勞働者は不景氣の影響を受けて續々失業し、俸給生活者なども會社などの事業整理のために解雇されて新たに職業を求めなければならない困難に遭遇して居る。

私は今、此度の不景氣と云ふ事實が國民全體の上に如何なる影響を及ぼしたかを公平に考へて見たいと思ふものであるが、先づ第一に云ひたい事は、一般社會の人が今度の經濟界の變動に依りて斯う云ふ事を考へはしなかつたか。それは今日の社會は何か其組織に於て缺陷がありはしないかと云ふ事であつて、經濟組織に缺陷があるから生活の不安があると考へ、若し經濟組織が完備して居て物價に馬鹿々々しい變動がなければ人間の生活は安定を得ないと云ふ事はないと思ふであらう。然るにいくら戰爭があるとて、斯くも物價の變動が烈しいため人間の生活が全然安定を失ふと云ふ事は何か經濟組織に缺陷のあるためであつて、經濟界の變動の度毎に實業家などの其浮沈の烈しいのに見てもそれは明かである。一體私は實業其物が投機であると考へて居る者であるが、今度の經濟界の變動に於てそれを痛切に感ぜしめられる。成金も一度變動來に際しては忽ち裸になつて了ふのであつて、彼等は其事業の性質に於て全く投機的であるが、然るに事實を見ると社會の一般の人が皆投機的生活をやつて居るのである。私共には全く投機的考がないが、其私共も外界の事情に餘儀なくされて其生活が極めて投機的なものに

なつて居る。事實物價が安ければ俸給生活者は生活が樂であるが、物價が騰貴すれば忽ち生活の安定を失つて貧乏人になつて了ふのを見てもそれは分る。之等の事實は皆社會的不可抗力かと云ふに、それは人間の力でどうにでも出來るものなのであつて、斯くの如く生活の不安定なのは皆社會組織の缺陷に因由するものであると見なければならぬ。

以上私は現社會の組織に不完全な點のあることを指摘したが、同時に此度の經濟界の變動に際して社會一般の人が現在の社會組織、經濟組織に對して疑問を抱き初めたことは爭はれぬ事實であると思ふ。

第二には斯う云ふ考へが起つて來たであらう。それは何故に物價騰貴に際して當局者が、それを或程度迄抑止することを敢てしなかつたかと云ふ事があつて、それは抑止しやうと思ふならば抑止することが出來たので、能はざるに非ずして爲さゞりし事の非難は免れない。通貨が膨脹すれば物價が騰貴するのは經濟上の原則で、或程度迄の物價の騰貴は仕方がないが、殊に日本に於てのみ獨り物價の騰貴率が烈しいと云ふ事はないから、政府が適當な貨幣政策を行へば斯かゝる不合理にない筈である。景氣の好い時、種々なる事業の勃興した際、政府は日本銀行の利子を引上げて資金融通のコントロールをやる必要があつたのに、それを知つて居てやらない計りか寧ろ奨勵した傾向さへあつた。何故奨勵したかと云ふに、それは當局者が實業家の歡心を得るためであつて、一面放漫なる貨幣政策の下に物價騰貴の趨勢を助長せしめ一般國民生活を不安定ならしめつゝ、他面彼等を利益せしめるやうな政策をのみ行つて來たのである。更に農民は何うであるかと云ふに、選擧權を持たぬ小作農などは當局者の眼中にないが、地主や自作農などの歡心を得るためには物價騰貴の傾向を助長せしめるやうな政策を行ふことは彼等の歡迎する所であつて、事實彼等は當局者に頌徳表を奉らうと考へて居るかも知れない。私が注意したいと思ふのは此點であつて、當局者は有産階級のために歡心を得る事の利益なる事を知つて、無産階級の利益などは無視して居るのは不都合であると思ふ。今迄も少數の自覺せる人は將來政治家が有産階級と結托することを疑つて居たが、果然、此度の遣り方を見て今日の當局者は只眼中有産階級あるのみなる事が證明せられたのである。極言すれば無産階級は當局者のために犧牲になつたので、有産階級の利益のためには無産階級の苦痛などは何うでも構はぬと云ふ風に見える。此事實は國民の心に非常に惡い影響を及ぼしたのであつて、當局者の遣り口には世間並に云ふ惡化と云ふ意味[illegible]國民思想を惡化にし[illegible]のである。今[illegible]

る國民の大方は、最早今日の政治に飽き足らずして之に猜疑の眼を向け初めると同時に、政治家は全く有産階級の傀儡なることを思ふに至つた。そこで次に彼等の心に起る事は今日の如き社會を存續させることは不可であるとして、之に加ふるに國民全體のための社會、有産階級のために無産階級の犠牲にされることのないやうな社會が來らねばならぬことを考へるであらう。多數のために少數が犠牲になるとか、大の虫を生かすために小の虫を殺すとか言ふ言葉があるが、斯かる思想が今日の政治家には確かにあると思ふ。少くとも折々そんな口吻を洩らす。彼等は物價が騰貴して國民が困れば、國民の半數を占むる農民や、實業家は物價騰貴のために反つて利益を得て居るではないかと云つて、暗に無産階級なる俸給生活者の困難などは何うでもいいと云ふやうな事を仄めかすのである。乍然そんな考へを持つ者は舊式の政治家であつて、新らしい政治家は飽く迄も一般國民のための利益といふ事を念頭に置い居なければならない。第一に人を犠牲に供すると云ふ考からしていけない。政治家が一部の利益の爲に他を犠牲に供すると云ふ事は罪惡である。物價騰貴のために農民や實業家が幸福になつたと云ふ事はい丶が、それなら俸給生活者も彼等の犠牲に供するやうなことをしないで何とかしなければならないと思ふ。政治家は國民の一部のためを思ふことをせずして、全部のことを考へに置かなければならない。物價が騰貴したなら、國家が使つて居る官吏、殊に巡査などはそれに從つて俸給が増額されなければならないが、其費用は富裕なる實業家や、地方地主、自作農などから租税を徴收すればい丶のだが、此度の措置は確かに一部を幸福にして他を犠牲にした偏頗なる措置であると云ふ非難は免れない。今日の政府を有産階級の傀儡であると見るのは強ち無産階級の人計りではなく政府の雇人たる官吏の中にも斯かる思想を抱いて居る者が少くないと思ふ。玆に於て當然起るべき問題は政治組織更改の問題であつて、最近に於ては頻りに經濟組織、政治組織の改造が叫ばれるやうになつた。政府は之を思想の惡化と云ふが之は當然の成行である。殊に滑稽なのは當局者が此思想的傾向を危險視する事であつて、事實惡化したる思想を作り出した者は當局者自身であることを知らない。彼等の政策が思想の變動を誘起したのであつてそれは全然政府當局者の責任でなければならない筈である。

第三には、若し國民が今日の經濟組織の缺陷を自覺したならば、國民は今後國民自身の行くべき道を學んだに相違ないと思ふ。私共は如何にして今日の經濟界の不自然なる變化を豫防することが出來るかと考へるのに、それは矢張經濟組織の根本的改

造に俟つより外はない。それには有産階級のために無産階級が犠牲にされるやうな政治が無くなり、政治は第一に國民生活を改造することを主とするものでなければならないが、さうなるには國民全體の意志が代表せられる政治をするより外はないから、今日の選擧制度を廢して普通選擧制度を實現せしめることが必要である。今日の經濟界の變動に依つて無産階級が受くべき苦痛を避けるためには、普通選擧を實行せしめて、政治家が有産階級の歡心を得るために彼等の利益をのみ計ることが出來ないやうにしなければならない。要するに國民生活安定の最後の解決は普通選擧に在る事を私は信ずる者である。

最後に第四の點として、私がつけ加へて置きたい事は、斯かる經濟界の變動が國民の精神の上に及ぼす影響に就いてゞある。經濟界の變動の時期に於ては誰しも不安定な生活から逃れて、生活の安全な道を講じたいと云ふ考へが起るのであつて、何等かの手段に依つて財を得る事に努力し、結局今日の狀態から云ふと、何か出來る丈け掴めるものを掴んで置いて、將來の生活不安のために備へると云ふ考のために、ひたすら利益を追ふに汲々たる有樣となる。擧世滔々利を追ふに忙しければ大臣投機問題なども起るのであつて、事實は分らぬが今日の當局者の中に關係ある人、政府を形造る政友關係の人の間に金を得る事のために汲々として居る者が多くあるらしい。投機をやつては大臣になれないと云ふたら實業家は大臣になれないと云ふかも知れないが、苟も一國の大臣になつたならば其出處進退は愼まなければならない。通貨の膨脹と收縮とは或程度迄大藏大臣の手に依るのであつて、彼は高い處に在つて、經濟界の變動を豫知することの便宜ある地位に在るのであるから、其地位を利用して大臣が投機をやると云ふことは一國の風教の上から云つても面白くない事であつて、國民の思想に對しても決して好い影響を與へるものではない。然るに今日の政黨に關係ある人に專ら金を得る事に努力して居ることは明かであつて、彼等が經濟界の變動に際しては便宜ある地位を利用して利益を得んとし、斯くて上下交々利を取つて國危しの狀態を現出して居る。此事實は今更說く迄もなく決して珍らしい事ではないが、乍然經濟界の變動に際して斯かゝる思想が強くなると云ふ事は何となく厭な氣がする。それと同時に餘りに功利的な今の社會其物が實に不愉快であつて、こんな空氣の中に住んで居ると云ふ事が息詰るやうにさへ感ぜられて來る。かゝる考を抱いて居る者は一人私のみではなく、他の人も亦今日の餘りに功利的な思想の傾向に對して不快を感じて居るに違ひないと思ふのである。

不景氣について我等の反省すべき諸點

法學博士　河津暹

我國の經濟社會に今日のやうな不景氣が來るといふ事は、前から明白なる事であつた。未だ不景氣の來ない時に於ても、不景氣の來るべき事を警告した者も少くなかつた。又事業家の中でも、頓ては不景氣の來る事は十分に承知して居つた者もある。故に事業家の中で豫め其の來るべきを察して相應に之に備へた所の者は、今日に於ても苦痛を感じないが、又苦痛を感ずるにしても甚だ少いのである。之に反して其の之に備ふる事の少なかつた者が、今日最も大いなる苦痛を感じて居る。只事業家の方から云へば、其の不景氣來の時機といふものを豫測するといふことが極めて難しいのであるから、之に備ふる事が遲れた者が今日の悲境に陷つたと云はなければならない。而して景氣の好い時には學者等が如何なる警告を與へた所で、是等に耳を藉さないのであるが、不景氣の時は、此經濟社會をして熟く反省せしむる時機であるから、事業家等が此際に於て熟く反省して、其の反省したる所を實行したならば、不景氣の後には必ず景氣の好い時が來るのであるから、今日の苦境を脫して幸福なる時機が來る事は明かである。唯、私共の觀る所を以てすれば、好景氣が可也永く續いた、從て其反動として起つた不景氣であるから、其の時期は可也永いであらうと考へられる。だから頓て景氣が好くなるものであるといふやうに考へたなら、之れ亦大いなる失敗を招く因となるであらう。

然らば此の經濟社會は不景氣に由つて如何なる事を反省すべきものであるかと云へば、我國の事業家に於ては、第一に其經營が甚だ堅實でない事を反省しなければならない。事業の經營がもつと堅實になれば、縱令不景氣になつた所で、斯やうな窮境に陷る事はないであらうと思ふ。何が故に我國の事業の可也の部分が甚だ堅實でないかと云ふに、勿論經營者其人を得るを得ざるに關係して居る。が、一般的に觀察すると、尙ほ其他に我々は幾多の弱點を認めるのである。其の第一は、我國に於ては株主が濫りに多くの配當を要求するといふ事である。之れ實に事業の經營をして堅實ならしむる事の出來ない大いなる原因である。重役等事業の經營に當つて居るものが、自然株主に媚びて多くの配當をしなければならぬから、其の事業の基礎を堅實にせしむるに力を用ゆる事が出來ない。成る可く眼の前に於て多くの配當を爲す事を心掛けねばならぬ事になる。株主と云

つた所で、矢釜しく云へば、其の企業の經營に參加して居る者ではなく、大體上企業に資本を提供した者に過ぎない、唯資本のみを出して其れ以外の事を仕ない者が、其の多くの配當を要求する丈けの權利が無いと思はれる。然るに我國に於ては、頻りに多くの配當を要求して、近來に於ては一割前後の配當の如きものは殆ど顧みないといふ狀態に在る。此の事は社會問題として國民が大いに反省しなければならぬと思ふ。之れは元來事業も多くなつて居るし、又從て利益も少いからでもあるが、英吉利などに於ては、株主の配當額は極めて少いものである。而かも彼等は之に對して何等の不滿を懷いて居ないし、又苟くも株主にならうと云ふ程の者は、其事業の性質を理解して、素りに配當の多きのみを望まないやうである。現に殖民會社の如きものは、性質として其の利益を十數年若しくは數十年の後に待たねばならぬから、其株主になれる者は、永年無配當を以て甘んじて居る。英吉利の殖民事業は殖民會社の手で爲されたものが多く、それが又相當の成功を收め得たのは、株主が其事業の性質を解して、無配當に甘んじて居つた事による事は、多くの殖民學者の唱へた所である。何れにしても此の株主が濫りに多くの配當を要求するといふ事は、大いに改めなければならぬ根本問題であると思ふ。

尙ほ其の他に經營が堅實にならない一般的原因は、株主其の他の者が、此の經營に當る者の實力を見ずして、其の名聲とか地位とかいふものに因はれて居る事が多い事、之れが一の原因である。今日に於ては名前の時代は既に過ぎ去つて、實力の時代でなければならない、然るに尙ほ經濟社會に於ては、其の經營者の實力を重く思はず、其の名前に因はれて居るといふ事は實に殘念な事である。名に依つて選ばれたやうな重役が、事實上其事業の經營上に力を用ゆる事の出來ないのは明瞭な話である。從て事業が堅實なる發達を見る事が出來ない。彼の重役が多くの事業に關係して居ることも、何人も云ふ通り正しい事ではないが、世の中が經營者の實力よりも名前に因はれて居る事から來るのである。而かも是等の重役が單に其の名聲勢力ある力の代表として關係して、少からぬ報酬を受けて居る。從ていろ／＼の社會問題が起る事は、結局は斯くの如き所に多少の原因を爲して居る。要するに我々は今回の不景氣に當つて、從來の事業經營が甚だ理想に遠ざかつて居る、もつと堅實にせねばならぬ。堅實にする事は取も直さず事業をして永久の生命あらしむる爲めに、其礎を堅くするに外ならぬ、單に一時の景氣を喚つたり　多くの配當をなして其株式の價格を騰貴せしむるやうな事ではない。如何にして其の經營を堅實ならしむるか

は、やゝ問題が細かくなるから、他日に讓る。

第二には今日の不景氣來に於て我々が反省せねばならぬ事は、從來經濟社會に於ては群雄が割據して、互に競爭する事が甚だしい事である。而かも其の競爭が生產技術の發達、經營方法を改良し生產費を少くし、生產品の價格を低廉ならしめて勝を占めようといふ方面には力めずして、唯種々の方法に依つて其の競爭者を陷れたり、世間の注意を自分の方に集中したり、又其の競爭の手段といふものが、正當な手段に出ず所謂不正の手段に出づる者が少くない。此事が軈て事業其物の基礎を薄弱ならしむる事にもなるのであらう。經濟社會に反動が來ては、ます〱此の競爭が激烈になるであらう。競爭の激烈になればなる程、之れが爲めに困難を見る事がます〱甚しくなる結果を生ずる。何故に群雄割據して濫りに競爭をするかと云へば、蓋し我實業界に德望があつて、衆を統御して行く力ある者が割合に少くない事と、我國民性として人の下に立つを好まぬ島國根性とが其の因を成して居るのではなからうか。けれども之れでは、經濟社會の健全なる發展の上から觀て面白くない。故に同じ樣な種類の事業は、事情の許す限り合同すべきであると思ふ。さうすれば其の基礎を鞏固にし、經濟界に動搖を來しても、よく之に堪へて行く事が出來よう。現に今日種々な方面に於て事業の共同を取りつゝあるやうであるが、之れは其の統御者が必要に迫まられて爲したものであるが、其の勢は是認せねばならぬ。

第三には經濟界の不景氣來に於て我々の感ずる事は、各種の商業機關に連絡が取れて居らぬ事である。此の事實は屢々說いて居るから今更ら改めて說く必要はないと思ふが、例へば各種の事業と金融機關との關係を考へて見ても解かる。今日の經濟社會と金融機關が其の心臟になり、それの補助者になつて居る。兩者の關係は、かのゾンバートの「十九世紀に於ける獨逸の發達」に於て詳しく說明して居る。獨逸が十九世紀の後半に於て經濟上著るしく發達する事を得たのは、主として金融機關の力多きに居る、即ち他の言葉を以て云へば、各種の事業と金融機關との連絡が能く出來て居つて、之れが爲めに其の發達を促す事が出來た。無論我國でも兩者の間に密接な關係がある事は勿論であるけれども、我々の希望するやうに能く連絡が取れて、相提携して動いて居るかと云へば、大いなる遺憾があるのである。即ち經濟界が景氣が好い時には、殆ど事業の如何を問はずして金融の途を開くが、一旦經濟界に反動が起ると、金融機關は忽ち其の門戶を閉鎖して連絡を斷つ。斯く連絡が不當に取れて居ないのは、經濟界と金融機關との間に十分に事情が通

して居ない事が多いからである。又事業界の方でも只利率の少多い事のみを顧つて、而して一定の金融機關と連絡を保つ事を少しも力めない。從つて金融機關の方でも、或る事業の成績經營等に對して深く研究しない。故に景氣が好いと手を緩め、景氣が惡いと忽ち手を縮めるのである。然るに先進諸國に於ては、或る事業と金融との連絡が能く取れて、恰かも兩者は兄弟の如く夫婦の如く、金融機關の方では、關係ある事業の經營成績に常に注意し、金融機關の方で警告を與へる。事業の方で飽滿なる經營をすれば、金融機關は連絡を斷つから、勢ひ飽滿なる事は出來ない。之は經濟界と金融機關との連絡についてであるが、勿論そればかりではなく、凡ての商業機關が組織立つて連絡を取つて、互に扶け合つて動けば、或る場合には事業家を檢束するが、或る場合には極めて經濟界を鞏固ならしめて、發達させる事が出來る。此點に付いては反省すべきは當事者であるが、局外者も亦幾多研究すべき問題があると思ふ。

第四に事業を經營する者等がもつと事業本位に成り、國民も亦もつと事業本位に成つて貰ひたい事である。云ひ方を換へれば、我國には投機(スペキユレーシヨン)が割合に盛んのやうであるが、之を改めたいといふ事である。事業の經營、商業等とスペキユレーシヨンとは密接な關係があつて、如何なる事業如何なる商業にも、皆投機の動機を含むのは事實であるが、然し乍ら事業本位である事と、投機本位である事とは、其間に相違がある。投機が盛んになると經營の堅實を失はしめ、又經濟社會の一般を輕跳浮薄ならしめる。而るに我國の各方面に於ては此の投機が盛んに行はれて居る。之れ今日のやうな不景氣を招いだ原因である事、多くの人が說く如くであ　。故に是等の投機を出來る丈け少い限度に縮減して、頓て經濟社會全般、否社會全般をして、投機の風から離れしめ、勤儉といふ常道に復へらしむるやうにせねばならないと思ふ。此處にも亦社會問題として反省せねばならぬいろ〳〵の問題があるが、今は云はない。

第五には、兎角我國の經濟界事業界に於ては、政府に依賴するといふ風が甚だ多い事であ　。從て事業界が頓挫すれば直ぐ救濟を叫ぶ。勿論政府に於ても、國民全體の利益を見て、適當なる救濟策を講ずるは、政府の義務ではあるけれども、事業者等が景氣の好い時には、恰も自分の力でなした如く思ひ世の中に威張り、一朝頓挫しさうになると直ちに政府に救濟を求むるは甚だ腑甲斐が無い。政府を依賴する風が強くあればある丈け、事業が堅實の基礎の上に立つ事が出來ない。それであるから從來盛んであつた政府に依賴する風は、成るべく之を少くする方に考へて貰はなければならない。

最後に　我國に於ては經濟界が不況になると商業道德を重んじなくなる風がある。　現に取引を約束しながら、價格が動搖すると直ちに之を實行しないで、相手方を困らして居る事が盛んに行はれて居る。　之は我々に於て不景氣より生ずる困難を益々大ならしめた一の原因のやうに聞いて居る。　商業道德を重んずべきは、今度の如き經濟界の景氣の好からぬ時に於て、殊に必要である。　之を重んずれば初めて眞に信用を得、互に扶助する事も起り、叉之れが經濟界を盛り返して早く恢復せしむる動因とも成るであらう。

要するに前にも云ふ如く、我國の經濟界に不景氣が襲來したといふ事は、我國の經濟界に所謂改造を爲さしむる時機と信ずる。　當業者は勿論、苟くも此等の問題に注意して居るところの者は、此際大いに研究すべきであらうと思ふ。　私は唯以上二三の項目を擧げるに止める。

夏目漱石先生遺墨展覽會

夏目漱石先生の遺墨展覽會は、未亡人鏡子女史の主催により、十月九・十の兩日は東京日本橋區濱町河岸日本橋倶樂部に於て、（八日は招待日）同十六・十七の兩日は京都市市役所前京都美術倶樂部に於て開かるゝこととなつた。　先生の遺墨を全國から蒐めて一般公衆に觀覽せしむると云ふ機會は、今後再び得難いことであらうと思ふから、我等は一人でも多く此展覽會に行つて見らるゝことをお勸めする。　先生晩年の心境を如實に語るものは、其小說にあらずして、其詩であり、其書であり、其畫であることは、我等の深く信じて疑はざる所である。　閑遠の氣紙面に漲ひ、淸高の韻墨痕より迸るの概ある先生の書畫に接するものは、恐らく意はず識らず讚嘆の聲を放つを禁ずる能はざるものがあらう。　詩・書・畫三絕の域に達せんとせる先生の偉大さには、我等今更ながら驚かずにはゐられない。

（一記者しるす）



オムマ、ハヤムと「四行詩(ルバイヤト)」全譯

荒木茂

序

玆に簡單なる傳記と共に、一つの作品を紹介しやうと思ふのであるが、その作者であるペルシャの一詩人オムマ、ハヤムの名は讀者にとつて左程耳新しい響でないと思ふ。彼の作品は、殆ど詩を愛する程の人には、必ず讀まれるものである。或點から云へば、ペルシャの詩人中、彼程世界の廣い範圍で讀者を有して居るものがないと云つても過言でない。その第一の理由は、多くの國民にとつて、一種の迷語であるペルシャ語で書かれてあるオムマの「四行詩」が英譯せられ、引續いて佛語、獨語等に譯された事である。更に重大な理由はその英譯者中最も著名であつたエドウワド、フィッツゼラールド自身が一人の詩人であつ

たことである。當時ヨーロッパ人にとつては、東洋の文化が好奇と憧憬の焦點であつたのであるから、詩人であつたフィッツゼラールドが或機會で、ペルシャの詩藻に接した時、沛然として起つた感興の儘に譯し、興奮して仕遂げたオムマの「四行詩」の英譯は、たしかに人を魅する力があつたのであらう。けれども一部の人には、原作者の名さへ知られず「フィッツゼラールドの四行詩」として愛誦せらるゝやうになつたのは、ペルシャ文學の爲めに實に遺憾である。然かもそのフィッツゼラールドの美しい飜譯の中に盛られて居る詩藻は、主に此オムマと彼自身との混同されたものであつて、甚しきは、原作に現はるゝ氣分(ムード)に共鳴した譯者が、彼自身の言葉で書かれたのである。——勿論予は此英詩の美を否定しないけれども、オムマ、ハヤムの情緒を紹介する飜譯としては、決して容れられないものである。他の英、佛、獨の飜譯中にも、東洋に特殊な感興を寫して居らない多くのものが認められる。

予、ペルシャ語研究に趣味を持つてより數年、偶此「四行詩」の最も信ずべき寫本の原文を讀み、ペルシャ文學研究の興味を喚起するに適當なる資料と信じ、以下に紹介しようと思ふのである。

（一）「四行詩」の寫本と飜譯

古來寫本と云ふものは、いづれの國語に書かれてあつても、後世の手を煩はすのであるが、オムマの「四行詩」もその結果として、多くの混同せる跡を遺して居るのである。乃ち此「四行詩」の内には、彼より少しく早く世に現はれ、而かも彼と殆ど同じ思想的傾向を持つて居つた哲學者イビン、シナの二行詩又は四行詩、或はオムマの出生前に生れ、彼に似た經路を辿つたアフザル、カーシ、及び成吉思汗の手に倒れた詩僧アッターの四行詩などが多く混同された爲めに、又は寫字手の無智、或は行數を增して、より多くの賃金を貪らんとした故意な誤謬の爲めか、數多く輯錄された寫本もあるのである。オムマの故國ペルシャに於ては、彼は科學者として知られて居つたにも拘らず、その方面の著書すら、今日では漸く二三存在するのみであるから、まして當時一般的興味を引かなかつた彼の詩を集められたるものは、彼の死後三世紀、西暦紀元千四百六十年、シラーズにて寫された百五拾八節を集めたものを以て最も古き彼の「四行詩」集として知られ、目下オックスフォード大學の圖書館に保存されて居るのである。此寫本はコウエル博士が未だオックスフォード大學に居つた頃（千八百五十六年）、同大學圖書館

の未だ整理されて居なかつた書類の中に發見したものである。露國のシュコウスキーの說の如く、寫本は最も古きものを標準とすべきだと云ふ見地から、此寫本は最も信を措くべきものであらうと思ふ。特に注意すべき點は、此寫本は、四行の詩句が縱に配列されて居ることである。此配列法は、詩句と詩句との連續を最も自然に表はして居るのであつて、他の多くの寫本には、二行づゝの詩句が横に並べられて居る爲め、後世の人が解釋せんとするに際し、多くの誤謬を免かれなかつたやうである。印度のカルカッタの圖書館にある寫本は、全部で五百拾餘節を集めて居るが、前記のコウェル博士が印度からフィッツゼラールドに送つた寫本を作る爲めに用ひた原本で當時カルカックにあつたものが盜まれた爲めに、再び寫し戾したものが目下カルカッタの圖書館にあるのである。けれども此等の寫本は印度人の寫字手に依つて作られたものであつて、不正確であることが判然して居るやうである。而して時代の新しく集輯された寫本程四行詩の數が多くなつて、英國のカデルの如きは、總體千二百餘節の四行詩がオムマの作であるやうに云つて居るけれども、前にも述べた樣に、多くの異分子が包括されて居るのである。

上記の寫本二部の外に、巴里のビブリオテイック、ナシ・ナルに、三部の寫本が藏されてある。一部は二百十三節の四行詩を載せ千五百拾四年の寫本、他の二部は、他の詩集の一部として附加されて居つて、千五百二十八年と三十年に寫されたものなどである。外にテヘラン、ラックナウ、ボンベイ、タブリッズに石版刷のものがあるが、皆後世の作である。佛國のニコラスは、テヘランの寫本を譯したのであるが、スーフィー派に屬して居つたニコラスの翻譯には、多くの誤解が免かれなかつたやうである。露國のシュコウスキーはタブリッズの寫本を出版し又英國のウィンフィールドは前述の著名なる寫本の四五を對照して、五百餘節の四行詩を譯した。然しウィンフィールドは、その全部がオムマの作だとは證明することが出來ぬと告白して居るのである。

斯樣にして、種々な點に疑問の多い寫本がある時、原作の正鵠を期する事は、なか／＼困難なる仕事である。然し西紀千八百九十七年に英國のヘロンアレンの出版したペルシャ語の原文は、最初に述べたオックスフォード大學が藏する最古の寫本を基礎として、著名なる七八の寫本を對照して出版したものであつて、假令、附錄となつて居る彼の翻譯には多少の誤謬があるにしても、原文としては最も信頼するに足るものであると思ふ。

抄寫本の眞僞に就ては以上に止め、以下暫く、オムマが歐米に知られるやうになつた道程を調べて見ると、オックスフォード大學のセメティック語の教授ハイド博士とが、西紀千七百年にオムマの幽靈物語と稱するものを、ペルシャの古代宗教に關聯して書いたのが、その事實はさて措き、そもそもオムマを紹介した最初であつたやうである。西紀千八百拾八年、同七十四年に二人の獨逸の學者が少數の四行詩を譯して、ペルシャ語文法或は文學史の例證として擧げて居るけれども、其等は何れの寫本に基いて居るか、判明して居らない。次に英國のアウズリー（西紀千八百四十六年）と佛國のタッシー（西紀千八百五十七年）がオムマの四行詩に就て說いては居るが、最もオムマの紹介に預つて力のあつたのは、既に述べたやうに英國のエドウォード、フィッツゼラールドであらう。少くとも英語を解する人々の間に、オムマの「四行詩」が讚美せらるゝやうになつたのは、此フィッツゼラールドの力であつた。そこで彼が此「四行詩」を譯するまでの經路を大略述べて見るのも興味が深いと思ふ。

抑々フィッツゼラールドがオックスフォードのコウェル博士に就て近世ペルシャ語を學び初めたのは、西紀千八百五十三年であつた。彼が用ひたジョーンスのペルシャ語文法に引用されたハーフィッズ、サーディー等の作品の斷片が彼の詩興を刺戟したものと見え、嘗て十年程以前に嘲り笑つた東洋語の研究に沒頭して居つたのであるが、初めにサーディーの訓話集の研究に熱中し次いではジャミーの詩集を譯して西紀千八百五拾六年に出版するやうにさへなつた。丁度其頃オムマの「四行詩」の最古の寫本がオックスフォード大學に發見されたのである。されど彼が近代ペルシャ語を學び初めてより三年目乃ち彼がジャーミーの詩集を出版した年の秋、彼の師コウェル博士が印度に渡つたので彼の今迄の緊張も弛んだことが彼自身の書簡の內にも見えて居る。斯くて彼は獨逸語の譯に助けられてハーフィッズ等を繙き彼ペルシャ語の趣味を依然として保つて居つたと同時に、オムマの寫本をも時々讀んだ形跡がある。翌年佛國のタッシーがオムマに大なる注意を傾けたことを知つて、一種の競爭心より激勵の鞭韃を受け、オムマの「四行詩」の飜譯を急ぎ、同じ考を以て居つた師コウェルの意をも枉げたらしい樣子も彼等の手紙の中に現はれて居るのである。斯くて西紀千八百五十八年の一月彼の飜譯は出版者の手に入つたのである。然し最初の出版者は餘りに興味を持たなかつたものと見え不本意ながら原稿を取り戻して、翌年四月、自費で出版したとも彼の手紙にあり、又彼は "I hardly know why I print any of these things which nobody buys' 等と歎

て居る。既に述べた樣にフィッツゼラールドは自ら詩人であつた。さればオムマの「四行詩」を讀んで、彼自身の心に與へられた感興を描いた彼は或時には、一節の四行詩を讀んで、二節を生んだやうな場合さへある。英詩として充分に文學的價値のある彼の仕事は、ペルシャの詩人オムマの思想的作品であるペルシャ詩を明に異なつた位置に置いて居る。されば彼自身、コウェル教授に書いて居る通り、翻譯と云ふよりも寧ろ意譯であつて原文からは遠いものである。而して尙他の書簡にも "Many Quatrains are mashed together, and something lost, I doubt of Omar's simplicity" と云ひ、コウェル博士も亦 "I am quite sure that Mr. Fitzgerald did not make a literal prose version first,......verbal accuracy be disregarded" 等と批評して居る。斯くて彼の翻譯も始めは多大な注目もされなかつたのである。此等七十六節の四行詩を包含する第一版が現はれて後、十年にして第二版が出版されたが、その時にはニコラスの書をも參照して尙參拾五節を追加して居る。然し第三版第四版よりは九節を削除して百一節の四行詩を載せたのであるが、やがて "The work of a poet inspired by the work of a poet" は徐々に、愛讀せられる樣になつたのである。予の師ジャクソン博士が數回彼地を踏査した時に、土齋の學者より耳にしたと云ふ言葉の如く、確にフィッツゼラールドの翻譯は原作より遙かに美的に且つ裝飾されてあるので "Omar owes more to Fitzgerald than to himself" の感があるのである。兎に角彼の英譯がオムマの最上の紹介者として科學者としてよりも、詩人として作者の名聲を高めたのである。然しフィッツゼラールドの譯した百一節を更に詳しく調べて見ると、その内四拾九節だけは寫本に見出し得るけれども、他の四拾四節は、四行詩の一二行より得たる彼の印象の表現であり、八節は全くオムマの作品以外より編れたフィッツゼラールド自身の感想を歌つたものである事が明白となつたのである。

總ての國語は各異つた魅惑の美を以て居る。或民族の思想は、その民族特有な國語でなければ表はし得ない場合が多い。まして音韻の關係から言葉の撰擇を必要とする詩歌の翻譯等に至つて、その困難は決して獨りフィッツゼラールドの經驗せるのみでないのである。他の英譯並に獨、佛、伊等の譯も亦、音韻上の無理から少からず、オムマの詩想を破つたものが多いのは遺憾である。以上に於て予は「四行詩」の史的經路を觀察したと思ふ。是から進んでオムマを育てた國境並に彼の社會的生活に就きて述べ、彼の詩作を紹介せんとするものである。

(二) オムマ、ハヤムの生地

ホラサン州は、その名の如くペルシャの極東に位し、亞細亞大陸に抱擁せらるゝ一地方である。氣候の平穩なことと、土地の豐饒なりし爲め、農業に適し、綿類の耕作は最も盛んで、木綿織物製造、又は絹、毛織物等を以てその名を擧げ、今日に到り尚當時の餘波の衰へないのを見ても、其頃の盛況を推測するに充分であらう。又ペルシャ、西亞細亞の諸國及び埃及等の宮殿、玉座を裝飾した有名なるかの土耳古玉、その他種々の高貴な寶玉石の鑛源も亦、此地方にあつたので、ペルシャに於ては當時、最も繁華なる中心地であつたのである。

ニシャプールは、その州の首府であつた計でなく、其頃ペルシャ全土にても最も著名なる都市の一であつた。殊に西紀第九、十、十一世紀頃には、ペルシャ人文學、科學及び經濟上の發展に多大の關係を有して居る處であつた。此都は、州の北方に位し、ペルシャ史上に最も古くより其名を記錄された一都市であるが、現今持つて居る都の名稱は、西紀第三世紀頃、往古の廢頽したる市街を再建した王者の名に倣つたものらしく思はれる。該市の歷史の詳細は、希臘、亞剌比亞の古書を初めとして、歐米の學者が各說を異にし、唯だ現存の市街は、古より知られて居る場所とその地點を異にして居ると云ふ點だけには、皆一致した意見を持て居るやうである。ジャクソン博士の踏査に依ると、今のニシャプールより東南約四五哩の距離に、漸くその舊市廓の跡を認め得ると云ふ事である。長い年月の間に幾多の天災地變に遇ひ、又內憂外患の交々侵せる處となつたにも係らず、今日尚存在する所から推察しても、歷代如何に此都市が重要なる地點と見られて居つたかを察するに餘あるのである。今日一部分の硏究から察すると、古來ペルシャ人文學の中心地は、西部にあつたやうな觀がないでもないが、之は歐米の諸學者が、バビロン朝時代の硏究に熱中し、パサポリス、ピストゥム等に遺るアカメニアン朝時代の偉大なりし覇業の跡の硏究のみに焦點を集中した結果、自然地理上反對の方位にあるホラサン地方等踏査する學者も少くなかつた爲めである。然しホラサン地方の過去の文化と、其進步は、假令西部のそれに比して劣つて居つても、決して忽せにすべきものではないのである。

智識的中心地として知られて居つた當地方、殊にニシャプール市は當時著名な學府の所在地であつたので、各地方から集つて來た人、殊に希臘の學者等によつて古より知られて居つたが、又西紀第十一世紀頃には、印度、アフガニスタン、中央亞細亞に往復した多くの隊商の手に賣買された。華麗なる織物そ

の他の産物を通して、商業地としても廣く知られたやうである。

それのみならず、ニシャプールは四季を飾る各種の花樹の間に靜穏を求め悦樂に時を移すべき一種の靜遊地としても名聲を博して居つたので、亞剌比亞、ペルシャ及び西亞細亞諸國の史上には、此の地の美を稱せざるはなく、詩人は花香薫ばしき木蔭に瞳黒き處女の愛を歌はざるはなかつた。斯くてニシャプールは榮華の首府、天才の揺籃と稱せらるゝに到つたのも決して無理ではないのである、バグダット朝と通ずるに及んで、亞剌比亞の學者も多く此地に來り學び、異彩を放てる文化に生きて居つた爲め、自ら此地の産物をも廣く紹介せらるゝやうになり、ニシャプールも一時他を壓する程の繁榮の都市となつたのである。

然し月歩り年移る間に、此ニシャプールは幾度となく修羅の巷と化した。或時は無慘なる地震の襲ふ所となり、或は異教徒の狂暴なる行爲に破壊せられ、今は往古の面影もなく、繰返して建造せられたる都市は、幾度かその居をさへ異にし、唯だ粘土の民家の屋根に咲く野花の變らざる花蕪は、

「黎明鬱金香(ちゅりっぷ)に宿る露
その頭をうな垂る花園の菫
薔薇の蕾を見て我心よし
その花瓣を蒐めて己を擁く。」

と歌ひしオムマ時代の昔を想はしむるに足るのみである。

予は更に斯く古より重要視されたホラサン州、又著名であつたニシャプールは歴史的に如何なる變遷を經て來たか、その要點を觀察して見たいと思ふ。元來ニシャプールは、ペルシャ建國より第三代のタームラス王が有史以前に創立したやうに古史に記されてあるので、既にその時代に溯つて知られて居つた都である。次にかのゾロアスター教の教祖ゾロアスターがペルシャ内地の樞要な地點に「焔の堂」を建設した時、その最も著名なる三の内、ブルヅン、ミハルと稱せられたものは、ニシャプール附近の山頂に設けられたので、當地方の住民に彼の教理の傳播を努力した跡が明かである。降つてアレキサンダー大帝東征の際も、此地を經て中央亞細亞に入り、印度に下つたのである。彼が死に先ちて全領土を九十の種族に分け與えた時、ホラサン州は他の二州と共に暫くアバタハンの統御する處となつたやうである。

西紀第三世紀の初め、フワー州にセサニアン朝の始祖アルダシー、ババカンが起つて多くの種族を征服せるに際し、ホラサン州も彼の手に移り、彼の子シャプールが知事となつた。その時彼はニシャプールの都市を彼に與えられん事を父に乞ふたけれども聞き容れられなかつたと記されてある。然しシャプール

が王位を繼いだ時、彼は當時廢殘の都市を再建し、己が名を象つてニシャプールと呼んだと傳えられて居るのである。斯くて西紀第七世紀迄、ホラサン州はセサニアン朝の領土で比較的平穩な時代であつた。是より先き亞剌比亞には豫言者ムハマッドが現はれた。彼の出現に伴ふて、亞剌比亞は非常な勢で近隣に領土の擴張と教理の傳播とに努め、埃及、西亞細亞諸國を平げて、東方に押し寄せて來た。當時末路にあつたセサニヤン朝も其の勢に對抗する力もなく西紀第七世紀の中頃全く、ムハマッド朝の配下に歸して終つた。然し彼等の間には常に爭鬪が絕えず或は起ち或は倒れて、相鬩ぎ、ペルシャの到る處に血の乾く暇もなかつたのである。其にも拘らず尙ニシャプールのみは「氣候好良にして、雅量ある市民の多き」都市として知られ、アブドルラー王の如きは彼の居を此地に移した。その後繼者も彼に倣つたやうに史上には記されて居るのである。此アブドルラー王は文學の愛護者であつたが、ムハマッド信者であつた彼は一日「ムハマツド敎の經典と、その教理に關する書籍の外、ペルシャ人、メーヂャイの書はせるものは總て之を燒き捨てよ」と云ふ命令を下した。その結果サーマン朝に到るまで、ペルシャ語を以て歌はれた詩作等は、假令あるとしても憚つて蒐集しなかつたとダウラットシャーが誌して居る。されば其迄は幸にして兵火の難を幾度か免れ得た貴重なる書籍類も、その頃烏有に歸したものも多くあるやうに見えるのである。

西紀第拾世紀頃には、ペルシャの群雄割據時代とも云ふべく、諸雄が各地に優劣を爭つたのであるが、その內最も勢力のあつたのはセルズック族であつた。抑々此セルズック朝の祖は、タルキスタン地方に居つた遊牧の種族で、牧場狹隘の爲めに漸次南下し、西紀第九世紀の頃にはペルシャ國內に侵入して來たのである、時のガズナ朝も彼等との親交に努力したが、遂に征服せられ、ホラサン州はセルズック朝の領となつた。西紀第拾世紀の始め、ツグリル、ベッグがニシャプールに於て王位に登つて以來、彼等の一族は大に跋扈して、ペルシヤより印度に及ぶ大領土を占むるやうになつた。バグダットのカリフ朝も大に恐れてツグリルの要求を總て容れ、彼に媚ぶる有樣となつた。第二代のアルプ、アルスランが王位を繼いで間もなく、時の有名なる施政者ニザムが彼の股肱の臣として大に國運の發展に努力した。此ニザムがオムマ、ハヤムと特別なる關係のあつた人である事は漸次に述べよう。

更にオムマ時代に到るまでの宗教的經過を觀察すると、有史以前はいさ知らず、紀元前第五世紀アカメニアン朝のダリアス、ザキセス等が西亞細亞諸國を風靡した頃には、彼等自ら熱

心なるゾロアスター教徒であつた事がビスツムの石碑、ピサボラスの宮殿その他の古蹟に刻まれたる記錄に徵しても明かである。アレキサンダーが侵入してから、彼等の平和は全く攪亂せられしのみならずパサポリスの宮殿等にあつたゾロアスター教の經典その他貴重なる書類も皆彼の暴行の爲め宮殿と共に燒き盡くされ、同教理の研究が今日尙暗黑の中に葬られて居る一大源因が蒔かれたのである。さりとてアレキサンダーは別に該宗敎に敵愾心を持つて居つたやうな形跡もない。唯一夜、勝利の閑の饗と悅樂の酒興に激せる彼が、希臘の媚婦ザイスに唆かされ、壯大なる王宮に火を放つたに過ぎないのであらう。

斯くてアレキサンダーの横暴も程なく止み、セサニアン朝が起つた後は、再びゾロアスター教が盛んになつて、經典の蒐集にも努力したので、漸く現今の研究に幾分かの資料を與へて居るのである。然るに西紀第八世紀頃には、ムハマッド朝はムハマッドの經典と刄をもてペルシャの全土を征服し、ゾロアスター教徒も漸次追放せられて、現今の如く印度の西南部に蟄伏せしめられて終つたが、ムハメダンの内にも多くの異派を生じ、互に相喰むの有樣であつた。その內最も過激で、當時日の出の如き勢を以て傳播されたのは、彼のハッサンが始祖である「樂園に往かんと欲せば人を殺せ」と云ふ暴虐な一派であつた。此ハッサンも亦オムマ、ハヤムと同時代の人であつた。彼等の關係に就いても次の章に述べる。

(三) オムマ、ハヤムの一生

斯る背景の裡にオムマ、ハヤムは生れた。彼の生日に就て確たことは判らない。又死去せる日も大約西紀千百二十二年頃と云はれては居るが是亦明かでない。或るペルシャの古史に依るとオムマ、ハヤムは、ニシャプールに生れたが、ツス市より來り同市に學んで居つたニザム、ムルク等と學府に於て友誼を結んだと明かに誌してある。又ハサン、サッバーも殆ど同年配で學窓の友であつたとも記錄されて居る。今日學者の大多數は、此三人が學友であつたと云ふ事實を否定して居るけれども、之はオムマ、ハヤム生死の時日が餘り明瞭でない爲めに起つた一種の學說として、玆にはその是非を斷言しない。兎に角此三人の內でニザムが最も早く殺害せられ、それから、オムマとハサンの二人は殆ど同時代に死んだ樣である。

オムマの家系に就いても詳しく知る由がない。彼は純粹なペルシャ人の後裔だと說いて居る學者もある樣であるが、彼の姓より判斷すると、多く遺れるペルシャ語の寫本の中に、此詩人

オムマを引照せる場合の外、ハヤムと云ふ姓は見當らない。それに反してアラブ種族の間に、ハヤムと云つて天幕製造を生業として居つた一族の知られて居るものがある故、その族の末と解く方が正しいのであるまいかと思ふ。先きにムハマッド朝の宗教的政治的壓迫に次ぎ、バグダットのカリフ朝が未だその基礎を定めなかつた時代には、その頃の思潮と多くの掟に堪えず、宗教の自由に憧がれ、壓政の羈絆より脱せんとし、夙に聞くホラサン州に向つて落ち延びたものが澤山あつた。オムマの祖先も亦自由の天地を求めて此地方に來り、ニシャプールに居を定めたものゝ如くに見える。斯くて新しき圈境に移住して來た一族が偉才の一人として現はれた彼は、生ひ立ちては最高の學府に入り、富貴の子弟と共に時の大學者ムワフックの門弟となつて學び得る樣になつたのである。

オムマの祖先が常職として營んで居つた天幕製造は、ペルシャ文化の中心であつたニシャプール市に於ては左程に重要な業でもなく寧ろ輕んぜられた職であつたこと、並に階級觀念の强かつた當時、とかく富貴の子弟と共に學び得た點から判斷しても、後世の學者が多く彼の姓を直譯して「天幕製造人」など稱するは曲解であらう。少くとも著名なムワフックの許に學び得る人人の階級と交際も出來、又物質的にもオムマの知識慾を滿たし得る程度の家庭であつたと見るべきであると思ふ。然し客を歡待することを好むペルシャの風習に係らず、彼の親友であつたニザム等さへ、オムマの家庭に入り、或は彼の家庭の一人にも知己がなかつた模樣を見ると、オムマは何か特殊の家庭の狀態の中に生れたものとも思はれる。斯くてニザム、ムルクはホラサン州の一古都ツスより、ハサン、サツバーはペルシャの西南のライ市より來り、土着のオムマと共にムワフックの許に學んだのである。恐らく彼等三人は、青年時代の、あらゆる感激を此學園に於て經驗したのであらう。

或日此三人は、一つの約束を結んだ。それは後に慘虐なるムハマッド教の傀儡となつたハサンの提出したものであるが、之は彼が青年時代から　後世親友の一人を殺す事さへ敢てした未發の種子を彼の心底に潛ませて居つたことを示すやうである。即ち「此著名なムワフックの弟子であるお互の中で誰か必ず一人位は有福なものともなり高位高官の位置に登るであらう。若しさうなつた時には、その榮譽を獨占しないで自分等三人で等しく分たうではないか」とハサンが云つたのである。相當に自信を有する彼等三人は喜んで約束した。やがて學業を終へて別れた三人の中、先づニザムは或る知事の秘書となり、後推薦されて時の皇子アルプ、アルスランの顧問となり、進んで國政の參畫

を司る程の地位に就た。而して彼がペルシャ各地方に學府を設け、美術と教育の進歩に努力する間に、一方オムマは數學、天文學の研讃に時を移して居つたのである。ニザムは學窓時代の約言を守つて、ハサンの來訪した時、彼に職を與へたけれども、ハサンは徐々な昇進に滿足せず、夙に過つた一生の航路は、ますます彼を惡運に導いて、終に彼はムハマツド教の「總ての敵を殺戮する」一派の始祖となり、ニザムもその毒手に倒されたのである。かの第一十字軍の時、カスピアン海の南に位するアラーアムートの城趾に立籠つた「山中の老人」と呼ばれたのは實に此ハサンであつたのである。

之れに反してオムマは、時の王朝に仕へん事をニザムに勸告されたけれども、固く辭して靜に學術の深奥を探らんと答へ、ニザムの命壽を祈つたと云はれて居る。ニサムはニシャプールの市庫より年金千二百枚をオムマに贈つて彼の研究を助けたのである。又オムマは學窓にありし時代より、コラーンの研究を重大視した當時の傾向に從つて不本意ながら經典を研究して、尙當時の學者にも劣らぬ知識を有して居つたことも明かに誌されて居る。彼は科學の研讃に宿望があつた。殊に天文學には最も多くの趣味を持つて居つたので、彼は詩人としてよりも却つて天文學者、科學者として、生地ペルシャに知られて居つた。其故西紀第十二世紀に書かれた詩人列傳には彼の名が現はれて居ないのである。

玆にオムマの天文學的知識の正確さを證明する一つの逸話がある。其は或冬時の王マリクシャーが、最も獵に適する時日をオムマに尋ねられた。彼は二日間研究した後に日を指定して自ら王の出發を見送つた。然し王宮を出でゝ暫くする天は掻き曇り風も吹き加つた危險な天候と成つたので從者はオムマを嘲けり笑ひ、王も歸還を命じた。けれどもオムマは王を止めて「今は雲の晴れ去る時で、今後五日間は決して降雨降雪の恐がない」と斷定した。彼の言は果して當つて王は遊獵を樂んで歸つたと云ふのである。其後、王が暦を變更せんとするに際し、オムマも與つて大いに力があつたのであるが、後世の學者がその暦を批評して、ジュリアン暦に勝り、グレゴリアン暦の正確に殆ど匹敵すると云つて居るのを見ても彼の學識の一端を察するに充分なのである。

斯様な功績のあつた彼も、その生活の半面には、常に憂欝な隱遁的な處があつた。是實に彼の深遠なる學識と、正確なるコラーンの解釋とを、時當の一般社會の盲目的なムハマッド信者達が了解するだけの力を有して居らなかつた爲めに、自ら多くの敵を作つたのみならず、かの悪辣なるハサンが彼の學友であ

つた事も多くの誤解の原因となつたからである。彼がニザムから一定の補助を得て彼の研究を継續するやうになるまでは、放浪的生活を送つた様でもある。然しメリクシャーの時、オムマにとつて眞に「よき友」であつたニザムも王后ターカン、ハツンと嫡子の事で爭つた結果、二拾有餘年の奉仕を擲つて宮廷を去り、間もなくハサン一派に殺されたので、オムマも補助を得られなくなつて苦んだ様である。

オムマは餘りに多くの著作は爲なかつた。その理由は同族のもの、同じ宗教を信ずるものゝ間に、誤解をなるべく、避けん爲めであつたと云はれて居る。現今書名の知られて居るものは、次の十部、

1.『四行詩』"Ruba'iyat".
2. Demonstration of the Problem of Algebra.
3. Some Difficulties of Euclid's Diffinition.
4. Astronomical Tables.
5. Handbook on Natural Science.
6. On Metaphysics.
7. On Metaphysics.
8. Balance of Judgment.
9. Needs of Places.
10. Exactitude of the Indian Method of Extracting Square and Cube Roots.

であるけれども今日存在して居るものは、最初の三部のみである。彼の受けた教育、彼の得た友人、彼の通曉した學、彼の旅行、彼の著書などから見ると、彼を一個の天文學者とするよりも、寧ろ一種の思想家であつたと云ふ方が至當であると思ふ。詩人としてオムマはかの有名なるペルシャの詩人フヲダウシの死後百年に現はれ、スーフィー派の思潮に生命の全部を捧げた詩僧アツターに先んじ、此二期の分水嶺に立つて自由な思想を歌つた純ペルシャ語の詩界に最後の人であつたのである。然し彼は古來の偏見ある哲理に滿足せず、同時に時流にも投じ得ない事を知つて、慰藉を他に求めた結果、彼が持つた科學的知識が天文の研鑽に導き當時の人の最も容易に注目する點となつたのである。又或書に彼は精神科學者であつたが非交際的で、總て議論することを好まなかつたと記してある。又オムマは因襲的のムハマッド教徒を嫌つた處から考へると、彼が生地に教職を採つたと云ふ說は信じられない。勿論彼は彼の學理の說明と、彼の主義に耳を傾ける個人、又一團體に對してなどは眞理を紹介せんと勉めたのであらう。その事實は次の逸話にも表はれて居る。曾てオムマの許に屢訪れる或一人の學者があつた。彼は毎朝

未明人の起き出でざる内にオムマの許に來り、彼の哲理を學んで、去つては公衆の前に、オムマは邪教徒であると叫び彼を非難した。そこでオムマは或日密かに太鼓敲き、喇叭吹を多く集めて彼の來るを待つて居つた。其とは知らずその學者が來るや否や、太鼓、喇叭でニシャプールの市民を集め、彼の悪行を懲らしめてやつたと云ふのである。オムマにも斯る激情に驅られた時があつたと見える。彼の臨終に就ては悉しく知れて居らないが、或書には彼が或日イビン、シナの遺書を繙いて居つた時「我はあらん限りの力で爾を知つた。我を許し給へ。爾に就いての我が知識は爾への推薦狀である」と祈つて目を閉ぢたとある。然し之は普通ムハマッド信者の死に臨んで繰返す文句で、果してオムマが此祈を口にしたかは疑問である。之は死床に臨んだ知人が、多くの敵を持つた彼を葬るに際し、ムハマッド教の習慣に從つて埋葬することすら當局から拒まれんかを恐れて、悔心した如くに見せかけたのではあるまいかと思はれる。斯くして今日彼の墓として知られて居るものも果して事實に於て彼のであるかどうか疑問となつて居る。彼が生前弟子に「我墓上には年に二度花が散る」と云つた相であるが、後その弟子がオムマの墓に詣でた時花園より差し延びた果樹の枝から微風に吹かれて彼の墓に散る花を見て泣いたとある。眞理の追究に一生を費し、天文學者として葬られた彼は、永遠の床たるべき己が墓上に最後の詩を空想したのであらう。斯様にしてオムマは、カーライルの評して居るやうに、時のマハマッド教の悪口者として一生を終つたのであるが、彼の内的生活を最も明かに示すものは、現今まで傳えられたる遺著中、以下に譯せんとする彼の「四行詩」である。或一部の學者は、ペルシャの他の多くの詩人のやうに、彼もスーフィズムに屬する一人のやうに解くけれども、之は彼の思想をその當時の思潮に分類するに苦んだ結果、起して粗忽な說である。又スーフィズムが用ゆる秘意を包含する多くの言葉（例へば、酒＝神の愛、陶醉＝愛の外面的表象、畫夜＝信不信を意味する等）を彼の四行詩中の語に當嵌めて、彼の四行詩を意味ありげに解釋せんとした學者の誤案である。我々は四行詩中に、彼が一箇の人間として經驗せるあらゆる悦びと悲しみとを見出すのである。彼は現實の生活が誤謬と邪惡とに滿ちて居るのを見て、彼は冷然と「苦」を冷笑し去る程、非人間では無かつた。而して絕えざる眞理への憧憬、理想的生活への渴望は彼をして極度にまで厭世的にし、然かも彼は嘗て親友であつたニザムの無慘なる最後を見て、生命が瞬間每に脅かされる事を今更のやうに感じたであらう。而して矛盾せる此世に起る波動が彼の靈に及んだ時、彼の描いた「四行詩」

には意味深く、各種のものが包括されるやうになつたのであらう。

附記、「四行詩」の譯註に關して

オムマ、ハヤムの「四行詩」は、他の四行詩の如く、第一、第二及び第四行に韻をふんで居るのであるが、オムマの一行には特に十熟音を有して居る。予は最も正確にオムマの原作を紹介すると云ふ點に注意した爲め、寫本は、古來數多の寫本中、最も信頼すべきものとされて居る、オックスフォード大學に保存される最古のものに依り、原作の一行に表はされて居る意味を、予も亦譯文の一行中に、總て含めて書いたのである。譯詩中、片假名の振假名は、原語のペルシャ音に最も近き發音を示し、更に必要に應じて、追字譯を補ふ註を書き添へた場合もある。原作者の姓名が各種の國語に書き表はさるゝ時、又異なる人々がいろ〳〵に發音するやうであるが、予はオムマ、ハヤムが最も原音に近きものと信じて斯く彼を呼ぶのである。

予は幸にして、ペルシャ人で歐米に學び、拾數ケ國の國語に通じて居るヨハナン博士に接し、親しく彼等の風習を學びし事數年、此等の四行詩の飜譯に際しても、彼より多くの暗示を得たのであるが、微力ながら予はオムマに忠實なる譯者であることを信じて憚らないのである。されどペルシャ語の美は、畢竟ペルシャ語のみを以て感じ得るものであつて、作者オムマの氣分を表はすに最も適當なる總ての物を日本語にて表し得ないのは、予の深く遺憾とする處である。

以下「四行詩」の一部を譯して讀者に紹介する。

オムマ、ハヤムの「四行詩」全譯

第壹

◎我汝を拜するに玉の緒繰らず
頬蓋ふ塵をも亦拂はじ、
されど恩の望は絶えず
未だ一を二と僞らねば。

註釋、玉の緒繰るとは、佛教の僧侶が讀經の際珠數を繰ると同じく祈を捧げる意。

第貳、

◎我が宿にて私語く心の秘め事は
神を宿さずして祭壇に祈る語に勝る、
爾は萬物の初、又終、

我が苦しみも喜びも御心のまゝ。

註釋、ミハラーブは禮拜堂の内にある特別なる場所にしてムハンマッドの生地メッカに面する様に造られてある。

第　參

◎心あらば醉人を咎むる勿れ、
又僞善と策略を避け、
己が命の安きを願はゞ、
一節の時も卑しきを侮る勿れ。

註釋、他の寫本には此節なし。

第　四

◎心あらば人の苦の胚種となる勿れ、
何人をも憤怒の上に坐せしむる勿れ、
永遠の平安を爾もし望まば、
常に顧みて人を怒らしむる勿れ。

註釋、此の節も他の寫本になし。

第　五

◎爾の「明日」を誰か保證せん、
されば「母」幸あれ、爾の憧がるゝ想に、
女よ、杯を月蔭に傾けん、
輝く多くの月は我等を見出すまじ。

註釋、原文にマーと云ふ文字を三度用ひて女と、空に照る月と、時を表は去月とを意味せり。

第　六

◎神來の言と呼ばるゝコラーンも、
只だ折節に繙くのみ、
されど玉杯に刻める聖句を、
人常に何處にも讀む。

註釋、波斯の酒盃、酒瓶などにコラーンの句などを刻む風習あり。

第　七

◎生ける吾、酒、酒席、かの陶醉せる人は、
憐愍の望と叱責の恐に拘束られず、
吾等の心靈と玉盞と酒染の衣は、
遠く天地と水火の圏外に休安ふ。

註釋、寫本により行の位置を異にするあれど疑はし。

第八

◎生きては數なき友と交はるも、
好運の人を知るも良けれど、
心をかけて信頼みし人も、
監れば酬の敵ならんとは。

註釋、好運の人と譯せる語は英語の "the man of hour" と同意。

第九

◎粘土の盃よ爾も曾ては憧かれし戀人ぞ
うるはしき女の容貌に、
今見る此玉盃の把手も、
元戀人の頸を捲きし纖美なる手。

第拾

◎憧がるゝ心なきものゝ悲しさよ、
まどかなる戀にいたまぬ心、
愛なくして過ぎし一日の
その一日に勝る空虛を知れりや。

註釋、或る寫本には此節なし。

第拾壹

◎若人、今我は若し、
酒を求む、慰樂は彼方より來らん、
苦辛けれども愉樂あれば
誹謗を收めよ我が命なる酒。

註釋、フイツツゼラルドの第八節の印象は此節よりか、

第拾貳

◎「明日」を把握する力「今日」にありや、
思ふ勿れ、「明日」を思ふ勿れ、益なし、
心あらば「今」を豐饒ならしめよ、
刹後、生命の價値は未知なり、

註釋、原文に「明日に手が屆かない」とあり。

第拾參

◎人は此世の幸福に飽き
總て思慮ある心は沙漠に憧がる、
其總ての枝にモーゼの奇蹟あり
其吹く微風にクリストの靈氣あり。

註釋、モーゼの奇蹟に就ては舊約全書出埃及記第四章に、クリスト

の靈氣に就ては新約全書約翰傳第拾壹章にあり」。

第拾四

◎眞の實は若き枝に結ばず、
されば人若くして安き途にあらず、
若くして勝利を逸する人は、今日も
昨日の如く明日も創造の日の如し。

第拾五

◎創造の日已に我が蹤 天に
秀靈の判決と樂園と冥府とを探ねたり、
叡智ある師 我に告ぐ
秀靈の判決と樂園と冥府爾の裡にあり。

註釋、原文に秀靈の判決をタブレットとペンを以て表はす。

第拾六

◎起ちて酒を與へ、云ふことを止めよ、
爾の淺き口は今我が日々の支保なれば、
爾の頬の如き酒を我に與えよ
我が苦恨は爾の捲髮の如く糾多し。

註釋、淺き口は玉盃の意。

第拾七

◎薔薇の面にそよぐ春の風悅ばし
果園の蔭に樂しむ面影、亦快し、
過ぎ去りし昨日を語る勿れ幸なし、
今樂しければ喜べ、昨日を語る勿れ。

註釋、原文に春風を春の息と見ゆ、そのノールーズは波斯の元旦であつて三月二十一日に當り春の初めなり。

第拾八

◎何時まで大海の面に石を投げん、
我は寺院に跪く偶像崇拜者を嫌む。
誰か冥府の人たらんことを願はん、
何人か冥府に遁し又誰か樂園より來りし。

註釋、クニシトは「焔の堂」又は猶太人の禮拜堂を云ふ。

第拾九

◎酒の爲めに粘造りし玉盃の原質は、
醉人之れを毀つことを得ず、

總て之等の頭、纖弱なる足又指まで、
誰の愛にか造られ、又誰の憎惡にか毀たれん。

註釋、指と譯せし原語に多くの意あれど之れが最も適譯ならんか。

第貳拾

◎大河の流、沙漠の風の如く、
我が生命の一節、又一日過ぎ去りぬ、
我が心迷はされじ、二日の物思、
未だ來ぬ日と過ぎ去りし日。

註釋、此の節は他の寫本になし。

第貳拾壹

◎我が出現は我が爲めに創造の日にあらず、
期せずして去るも已に定れる律、
緘き酒僕よ、起ちて腰帶をつけよ、
我此世の悲痛を飲み干さんと思へば。

註釋、フイツゼラルドの第二拾九、三十節の印象は此の節より來る。

第貳拾貳

◎哲理の天幕を縫ひしハヤムも
悲みの墓に落ちて俄かに燒かれ、
運命の剪は彼の生命の緒を切り、
待ち兼ねし競賣人は一篇の歌に賣りぬ。

註釋、オムマは先祖の天幕製造を想ひ起し生前の苦と死後の[illegible]を比べたるか。

第貳拾參

◎爾何ぞ斯く罪に泣く、ハヤム、
苦恨は爾に何等の利をも與えじ、
贖罪何の爲めぞ、人もし罪を侵さずば、
罪は贖はるべし、爾何ぞ罪に泣く。

註釋、オムマの幽靈が彼の母に現はれて慰めたと云ふ有名な物語に關係あるべし。

第貳拾四

◎僧庵、學園、修道院、又寺院に
冥府を恐れ、樂園を探求るもの滿つ、
神秘の帷中にあるもの
誰か斯る種胚を心の眞理に蒔かん。

注釋、神秘の帷中にあるものとは所謂斯く信ずるもので教條を意味す。

第貳拾五

◎春の頃、天女(フーリ)の如き友、
盛れる盃を綠の野邊に與ふ、
こと粗朴に見ゆれど、
樂園の名を呼ぶ我、犬にも劣れり。

注釋、フーリはムハマッド教の樂園にありと云ふ女神なり、綠の野は沙漠に對する耕野の意なり。

第貳拾六

◎爾、爾の心靈より別れて、
神秘の帷中に過ぎ行くを知れ
幸なれ、爾何處より來りしかを知らず、
又何處に往くをも知らじ、盃を傾けよ。

注釋、此の節よりフイッツゼラルドは多くの節を產出せり。

第貳拾七

◎智者夢に告げぬ
喜悅の花は何人にも夢に咲かず、
爾、何故に睡るや、
飲めよ、爾の友たる春秋(とき)は來らん。

注釋、睡眠の友は死を意味す。

第貳拾八

◎我が心靈(こゝろ)求む「靈示の智を我は希ふ
もし得なば我に敎えよ」、我曰く
「アリフ」と、曰く「最早曰ふ勿れ、
もし家に彼いまさば此一字にて足れり。」

注釋、ムハマッド敎の神アッラーは近世波斯語の字母(あるふぁべっと)の第一文字アリフより始るより神を意味するなり。

第貳拾九

◎何人か神秘の帷中に達すべき
見えざる神制を誰の靈か知り得ん
爾の休安ん處(いこひ)は大地の懷のみ、
玉盞を傾けん、斯る忘想の限なさ。

注釋、フイッツゼラルドは此の節より多くの詩想を得たり。

第参拾

◎總て鈍き者より玄妙を避け
愚人より神秘を制せよ、
人に爾の行爲の如何なるやを考へ、
爾の眼は總ての人より蓋ふべきなり。

註釋、眼と譯せし原語には望と云ふ意もあり。

第参拾壹

◎秀靈の判決は來らんことをも定め
そのペンは善惡に躊躇せず、滯る處なし、
彼は永遠の日より總ての必然を與へぬ、
恐を喰ひ、憂苦と闘ふは痴戯なり。

註釋、フイツゼラルドの第七拾一節は此節よりの印象なり。

第参拾貮

◎花の頃、岸邊の耕野のほとり、
一、二、三人の天女(フーリ)の如き豐艶なる友と、
玉盞を齎らせ、目醒めに飲まん人に、
禮拜堂(モスク)の靜止と寺院(ヴエント)の制馭を離れ。

第参拾参

◎蒼穹は我が疲れたる體軀を纒ふ腰帶、
チーフン河は我が絞れる涙の流、
冥府は我が愚かなる悲哀の瞬時(とき)にして、
樂園は我が靜安體の一刻時なり。

註釋、チーフン河は今のオックスス河なり。

第参拾四

◎エデンの園は天女(フーリ)に良しと、
我は葡萄汁を甘しと云はん、
眞(まこと)を知りて空説を避けよ、
太鼓のしらべは遠くよりよし。

註釋、第三行は原文に現金を獲得して信用券を避けよとあり、太鼓は城趾の門に兵卒を集める爲めに下げあるものなり。

第参拾五

◎酒を飲め、爾荒土の下に永く眠らん、
知己(ムーニス)なく同僚(ヘリーフ)なく伴侶(ヘムダム)なく配偶(ジヤフト)なく、
默々たる秘密を語るなかれ、心せよ、

總て萎みたる野の花又再び咲かじ。

註釋、伴侶には盃と云ふ意もあり、共に呼吸する意を含む。

第參拾六

◎命は永遠に生く、酒を飲まん、」
是汝等青壯よりの獲物ならずや
今は薔薇香ひ酒と心浮き立つの友の季、
此の一刻と幸あれ幸ありてこそ生きん。

註釋、原文に友の頭が醉ふ時とあり、春の心浮き立つ季を意味する。

第參拾七

◎傷める魂の療劑なる酒を與へよ
之れ情を賣買ふもの丶好配、
我が魂の爲めには一杯の渣滓は、
萬物の上に懸る酒盃、天蓋にも勝る。

註釋、天文學者オムマの天に對する感面门し。

第參拾八

◎我酒を飲み、返對者左右より曰はく、
「酒を止めよ、之れ宗教の仇なり」と、
宗教の仇と知らば尚我云はん、
「神の名によりその仇の血を吸らん、之我等の律なり」と。

註釋、ムハマッドの律に仇を殺すと云ふことあれば斯く諷したるなり。

第參拾九

◎酒は鎔くる紅玉石、頸長盃はその鑛源、
玉盞は軀體にしてその靈は果實酒、
盛りて微笑みこぼる丶その美明なる盃は、
我が心血を秘める點滴なり。

註釋、盃と瓶と酒に多くの異なりたる名稱あり、形と種類の異なるに依らん。

第四拾

◎我を創塑りしもの我を何處に置かんとせし
我知らず、樂園に又怖しき冥府に、
耕野の邊に食料と愛する人と酒の、
三つのものは我が此の世の樂、爾は之れを天に求む。

註釋、原文には我が爲めに現金、爾の爲めには天への證券とあり、

第四行の意味である。

第四拾壹

◎人の資質（ゴーハーデベシヤル）に存する善と惡、
運命と神制の定めたる幸福と悲痛とは、
天に轉戾（もど）すことを得ず、實理の律には、
天も爾より賴なきこと千倍なり。

第四拾貳

◎心に愛の一葉を植ゑし人は、
己が命の一日をも害はず、
神の是認を期待して鬪ひ、
又は肉の靜止を選び、或玉盞を擧ぐ。

註釋、愛の一葉は佛語の "une page d'amour" と同じ意。

第四拾參、

◎薔薇と鬱金香（ちゆーりつぷ）に滿てる處には、
嘗て王の流がせる深紅の血あり、
地上に生い出でたる紫の嫩芽は、
もと麗人の顏にありし黑子。

註釋、黑子の美は東洋特有であつた、が今は寧ろ西洋に流行する。

第四拾四

◎卿等聰明なれ、世は亂れぬ、
有爲轉變の閃光は銳利なれば醒めよ、
好運爾の口に糖果を置くも、
心せよ、毒もあらん、嚥下（のみくだ）すなかれ。

註釋、原文に安坐する勿れとあるを醒めよと譯せり。

第四拾五

◎耕野のほとりに果實酒（シヤラーブ）の一瓶と友の昏。
我が此の世の樂（たのしみ）と爾の未來の幸（さち）を希へり、
人皆樂園と冥府とを信ず、されど、
誰か冥府に達し又誰か樂園より來しや。

註釋、此の節は疑はしい一つである、他の節より作り變へた樣な傾向が見える、（第拾八、貳拾五、參拾貳、四拾節等參照）

第四拾六

◎野生薔薇（ナスリーン）に似たる爾の面影、
支那美に擬裝（よそほ）へる顏もつ爾、

汝の目示（ガムザー）に昨日バビロン王は、
騎、城、角、歩、又女王をも斷念せり。

註釋、波斯には一時支那美術を最上の模範とせる時あり。バビロン王の惑溺せる樣を棋子に諷したるか。

第四拾七

◎世を去る時、バグダット、バルク何物ぞ、
玉盞滿つる時、芳香、苦味何かあらん、
飲めよ、此月吾等去りて後多く、
月末（サルク）よく月初（グルアー）に、月初（グルアー）より月末（サルク）に。

註釋、バルクはホラサンの一都市なり、フイッツゼラルドはバビロンと譯す。

第四拾八

◎蒸椰子酒（ナビーブ）を常に傾くる人、
又終夜祭壇（ミハラーブ）にある彼等は、
乾きし地にあるなし皆水に漂ふ、
目醒めるは唯獨り、外は夢の中。

註釋、唯獨り神のみ永遠より永遠に、他は皆一樣に世を去るのみと。

第四拾九

◎幸福の途を辿る此理智、
日毎百たび爾に告げん、
「爾知れ、爾の一瞬間の實在も
刈られて又生ひ立つ彼の雜草に如かず。」

註釋、此の節の意第六拾八節にも見ゆ。

第五拾

◎理智と認識の虜となりし人は、
存在、非存在の心痛の裡に滅びぬ、
愚かなるものよ、先づ葡萄酒を選ばん、
爾その葉につき何を知るや。

註釋、ヘロンアレンは第四行の意を誤解す、彼も不明なりと註す。

第五拾壹

◎我が出現は宇宙の存在を意味せず、
我去りてその完美と偉力に何を加へん。
我が耳未だ何人より聞かず、
如何なれば來り又去るかを。

第五拾貳

◎愛の途には境界と邪氣あるべからず、
死(アジャル)の陰に入る日は滅びざるべからず、
麗しき酒僕(サーキー)よ、空しく座するなかれ、
我に水を與へよ、我塵となるべし。

註釋、アジャルは死すべき時なり。

第五拾參

◎今は悅びの魂(こゝろ)も名のみ殘り、
馴れにし一つの玉盞(ヘムダム)と新しき酒のみ、
喜びの手酒盃より躊躇(ためら)ふなかれ、
今日我が手の及ぶ處には盃(ジャーム)あるのみ。

註釋、「馴れ」と云ふ原語には「熟したる」とか「煮えたる」など云ふ意あり、玉盞(ヘムダム)は同時に呼吸を止めるとか呼吸をするとかの意あり、されば伴侶とも譯す。

第五拾四

◎秀靈の判決より外に律なし、
憂苦(かなしみ)を喰ひては悲哀を增すのみ、
兩総世血を吸るとも、
一滴はそれより大ならず。

註釋、秀靈云々は原文にペンの過ぎし處變色せずとあり。

第五拾五

◎我が魂よ、心の弱きものと多く交はる勿れ、
又戀愛の事に多く係はるなかれ、
麼苦行僧(ダーヴシ)の門戸に來れ、
兩も亦選ばれしもの丶如くならん。

註釋、此の節は他の何れの寫本にもなし。心の弱きは道德的に弱きものを特に意味す。

第五拾六

◎寸時も天國を飾るものは、
來りて往き、又時と共に歸り來らん、
天藍の袖に、大地の懷に、
神失せざる間は生を見ん。

註釋、神います內は生物が顯はれるとあり。

第五拾七

◎起動の基礎を僞善の上に築くもの

来りて心靈と肉體との間に分限を定む、
我今より頭上に酒瓶をかざゝん、
彼等我が頭上に鋸を置くとも。

註釋、第四行の原文に鐘の様に頭上に鋸を置くとあり。光景悲慘にて說き難し。

第五拾八

◎かの蒼穹に恒定する形體も、
智者には迷の源となりぬ、
心して理解の端緒を亂さゞれ。
主理の人も頭（サル）をまげなば。

註釋、オムマは當時の天文學者を諷したるものゝ如し。

第五拾九

◎我、我が非存在を恐るゝものに非らず、
來らん半は此より遥かに心地よからん、
此の命、もと神の我に貸與せるもの、
歸るの日來らん時我之を戻さん。

第六拾

◎奇異に過ぎ往く此の命の隊商（ハーフィラー）、
悅樂に生くる時、その刻（とき）を知れ、
酒保（サーキー）よ爾何ぞ明日の顧客（ハリフワン）の事を憂ふや、
酒盃を持ち來れ、夜は更けぬ。

第六拾壹

◎年老いて愛の締に導れぬ、
さなくば如何に我が手と棗椰子酒（ナビーツ）の盃、
理智の生める悔悟も愛人（ジャーナーン）之を援（みだ）せり、
忍耐の縫ひし衣も時と共に破るゝ如く。

第六拾貳

◎果實酒（シャラーブ）は吾等の被衣（バルダー）を破るとも、
我生きん限りは酒より離れじ、
我酒賣るものをあやしむ、
彼等購求（もと）むる酒、賣るものに勝る。

註釋、被衣（バルダー）は謙讓、名譽、節制の律を意味す。

第六拾參

◎初めに斯る寛大と親切と

喜悅と阿諛の中に我を扶養せしは何故ぞ、
今は我が魂總ての惱の中に鬪ふ、
如何なる罪を我侵せしや我敢て云ふ。

註釋、此の節は此の寫本にのみ存するものである、

第六拾四

◎腦裡には天女(フーリー)の如き貌(かたち)に憧(あこがれ)あれ、
我が掌には常に葡萄汁(アーブアングール)あれ、
人告げて曰く、「神汝に悔恨を與へん」と、
彼與へず、我も亦欲せず亦程遠し

註釋、一般に波斯にては情の根源は頭にありと思ふ、

第六十五

◎我が宿にては酒によるの外洗淨に由なし。
汚れし名は潸くする事を得ず、
幸あれ、吾等自制の被衣(ペルデー)は、
かく破れて繕ふに由なし。

註釋、新禱の前の洗淨は、先づ手、口中、額、全面、臂、足と云ふ順序に水を以て洗ふ。

第六拾六

◎屋上に我獨りの人を見る、
彼は粘土を卑むが如く踏み居たり、
粘土その言葉を以て告げて曰く、
「穩かなれ、爾もかく多く踏まれなば。」

註釋、粘土造の低き屋上に陶工の働けるを見て詠みしか。第八拾九、百四拾六節參照。

第六拾七

◎爽かなる此日、大氣暑からず又寒くなし、
雨を含む雲薔薇の面より塵を拂ひぬ、
鶯はパーラヴイにて色褪めたる薔薇に、
「爾酒を飮むべし」と歌ひ續けぬ。

註釋、パーラヴイは中世紀に用ひられたる波斯語なり。

第六拾八

◎期せずして頭上に來ん夜襲の爲め、
薔薇色の酒を爾に命ぜよ、
思考なき鈍物よ、爾は一度地中に秘して
再び堀り出さるゝ黃金の如きに非らず。

註釋、夜襲の時彼等は總ての寶物を地中に秘くす。

第六拾九

◎心せよ、酒盃は我が命の支保、又
此の琥珀色の面を紅玉石の如くす、
我世を去る時は酒を以て我を洗ひ
又葡萄蔓をもて柩の板を造らん。

註釋、原語に目を引く麥の色とあり乃ち琥珀色を意味すとスタインガスの說。

第七拾

◎君主(シャー)よ運命鬮を王者に命じ、
王領なる馬は鬮の爲めに鎧へり、
黄金の蹄をもてる白馬の驅けて、
その蹄の及ばん大地は鍍金されん。

註釋、此の節は此の寫本にのみ在り、時の王マリキシャーを詠じたものか。

第七拾壹

◎眞ならざる愛に榮光なし、
半は消えんとする焰の如く光輝あらず、
愛人よ斯くあれ、年に月に夜に晝に、
沈靜安定なく、又食せず寢ねず。

第七拾貳

◎誰か永遠の難關を潜り、
又誰か（了解の）圈外に一步か踏み出せし、
我觀るに、初學者より師に到るまで
母と云ふものより生れし人の手無能なるかな。

註釋、原文に物覺え始めて以來觀察するにの意あり、

第七拾參

◎爾迩世の貪慾を制して滿足に生きよ、
勢運の結束より生命の善惡を分ち、
酒と愛人の捲髮(ヅルフ)をとれ、總てのもの
去るを急げば殘る日幾何かある。

註釋、第三行より第四行にかけ寫本に多くの差あれど斯く解くべきか。

第七拾四

◎天、雲より花の盃を下し、
果園に花を降らせりと云はん、
水仙の如き盃に我薔薇色の酒を盛らん、
蒼雲より素馨の降る時。
註釋、此の節又外の寫本になし。

第七拾五

◎我酒を嗜む、又飲むものに皆與へらる、
我酒飲むこと彼に何かあらん、
神は無始の永遠より我飲むべきを知る、
もし我飲まざれば神の叡智は愚なり。

第七拾六

◎爾、悲の虜となるなかれ、
現世の僞の懸念に捕はるゝなかれ、
書籍と愛人の唇と野邊とを忘れざれ、
爾大地の裾に捕るべし。

第七拾七

◎酒を飲め、爾の多くの悲を除き、
七拾二宗派の懸念を除かん、
錬金家なる酒を制するなかれ、
その一盃は千々の悲苦を除かん。
註釋、此の節はフイッツゼラルドの第五拾九節の原文なり、相違甚だし。

第七拾八

◎酒は禁ぜらる、されど飲む人、
飲む量、又倶に飲む人に依る、
三つの律に叶ふ時、言はん、
畢竟智者飲まずして誰か飲まん。

第七拾九

◎飲めよ、爾の肉は大地に原子となり、
その爾の土、後に酒盃又は土瓶とならん、
冥府と樂園より自由なれ、
智者何ぞ斯る説に迷はさる。
註釋、第九、及第六拾六節を參照せよ。

第八拾

◎吹く微風(そよかぜ)は四界を飾るの時、
雲を望みて眼を被くの季なり、
又モーゼの奇蹟は梢に顯はれ、
クリストの氣息大地より昇る。
註釋、第拾參節參照。

第八拾壹

◎酒僕(サーキー)の大地に放散する盃毎に、
苦しき目に浮ぶ怨恨の火を消さん
榮光(みさかえ)あれ、爾を知る、
千々の憂苦を魂より除くものと。
註釋、苦しみつゝ此の世を去りしものゝ惱み失せんとなり。

第八拾貳

◎黎明鬱金香(ちゅりっぷ)の面に宿る露、
その頭をうな垂る花園の菫(すみれ)、
薔薇の蕾を見て我心よし、
その花瓣を集めて己を擁く。
註釋、鬱金香(ちゅりっぷ)の原語は何れの野生の花にも用ひらる。

第八拾參

◎友よ、面と面の接する時、
爾友の記憶を增すべし、
倶に馨醇の酒を飲む時、
順に際して玉盃を伏するなかれ。
註釋、伏すると云ふ原語に底を上にするとあり。

第八拾四

◎友よ、約して相會す時、
相互の愛着を樂しむべし、
酒僕(サーキー)古老の酒を手にする時、
祝福して不憫なる者を覺えよ。
註釋、古老と譯する原語はメージャイの事で古く最上なる意なり。

第八拾五

◎一盃の果實酒(シャラーブ)は百の生魂(ディール)とその信仰(ディーン)に價す、
一飲の酒は支那全土に匹敵す、
紅玉色の酒を除き大地の面に
優しき千の靈にも勝る辛きものなし。
註釋、此節に來りすオムマが婦人に對して悲しき經驗あるを明か

す。

第八拾六

◎妻子より別れん事を神に願はゞ、
潔よく近親と同属への門戸を閉ぢよ、
總て前途に蟠まるものは爾の搾木なり
など旅を續け得ん、之等を除け。

註釋、此がオムーマの家族に對する意見なるか。

第八拾七

◎かの紅玉色（ヤアル）を盃に持ち來れ、
又總ての純潔なる知己と昵近（ムーニスマハラム）とを、
現生の持續は急に吹き來る、
迅風の如きを知る、酒を持ち來たれし。

註釋、純潔と譯せる原語は自由、高尚崇高など云ふ意あり、時には百合、「さいぷらす」など云ふ意にも使ひらる。

第八拾八

◎起ちて此悲歎の靈の療劑（ディワー）を選べ、
かの麝香（ムシク）かほる薔薇色の酒を持ち來れ、
もし悲哀より歎び立つ要素を爾求めば
紅玉色（ヤークート）の酒と絃樂を持ち來たれ。

註釋、此節も外の寫本になし。彼の四行詩中に樂器を云ふこと稀なり。

第八拾九

◎昨日我公市（バザー）に陶工を見たり、
彼烈しく新しき粘土を踏む、
かの粘土その言葉を以て曰く、
「我もかつて爾の如くなりき、好遇せよ。」

註釋、第六拾六、百四拾六節共に同じ意を含蓄す。

第九拾

◎永遠の命なるかの酒、
青壯なる樂の資（サルマーヤ）なる酒、
火の如く悲憂を燒き盡（つく）し、
生ける水の如くせん酒、酒を飲め。

註釋、資と譯せる原語はサル、マーヤ共に源と云ふ意あり、又マーヤは麹と云ふ意もあり。

第九拾壹

◎傳習を避け又神の律をはなれよ、
爾の含む一口を人に與ふる事を惜む勿れ、
毒舌を弄し又人の魂を惱ますなかれ、
我已に彼の世への契約あり、酒を齎せよ。

第九拾貳

◎酒は紅の薔薇、酒盃には薔薇水か、
透明なる玉盞には澄める紅酒、
精煉せる紅玉石の水中にあるが如く、
月の光彩は太陽の面貌(ヒジャーブ)の如し、

註釋、此節も他の寫本になし。

第九拾參

◎神掛けし誓句も我等再び破り、
介開と聲價に到るの戶を再び自ら閉ぢん、
再び我を咎むなかれ、もし狂える如く
見え焦思の酒に我再び醉ふとも。

註釋、此節も他の寫本になし、

第九拾四

◎眞理の面前に、——文飾の爲めならず、
我等は棋子にして天勝負を弄ぶ。
存在の盤上に兒戲をなし、
一人々々非存在の櫃の内に過ぎ往く。

第九拾五

◎心靈よ、浮世の眞理も譬喩なれば、
悲哀と窮困に何故にかく苦しむ、
爾の身を運命に任せて時勢を御せよ、
秀筆の判決は書き更へられず。

註釋、秀筆云々の原文はペンの過ぎし所謝の爲めに再び書かれぬとあり。

第九拾六

◎薔薇の面影には倚雲の被衣あり、
我が素質と心魂には倚果實酒(シャラーブ)の嗜好あり、
夢に遊ぶなかれ、夢るに何の遁辭やある、
愛人よ、酒を與へよ、未だ眞晝なり。

第九拾七

◎起ちて天界に灰塵をなげよ、
酒を飲み、麗人の歡興に急げ、
禮拜者何の洒辭かある、祈禱何事ぞ、
總て世を辭せるもの歸り來らず。

註釋、起ちて云々の行は彼の國にて輕蔑の表情なり。

第九拾八

◎玉盞を滿たせ、雪の如く日はさし來ぬ、
色彩を與へ、紅玉色なる酒より、
二本の蘆荷をとりて紡(つどひ)に寶れ、
一本を笛に、他の枝を捨てよ。

註釋、此の節も他の寫本になし。

第九拾九

◎我等又醉人の作辭を始む、
五度の祈(サマーヂ)に向つて我等呪文(タクビール)を投與(あた)へん、
玉盞ある處には爾必ず我等を見出さん、
頸(サーヒ)が盃のそれの如く我等傾首せん。

註釋、一日に五度の祈なり。

第百

◎渇望の極より我が脣を頸長壜(クーザ)の端に運び、
彼より長生の源泉を我探求(もと)めん、
その口我が脣を覆ふて私かに告ぐ、
「此の世に爾再び歸らねば酒を飲めよ。」

註釋、フイツツゼラルドの第三拾五節は此の節に基く。

第百壹

◎我に耳を貸さば忠言せん、
神の爲めに僞善の衣を着るなかれ、
末世は時滿ちて此の世は一瞬時、
その一瞬時の爲めに永遠の王領を賣るなかれ。

註釋、短き生命と永遠の將來につきフイツツゼラルドは多く詠んで居る。

第百貳

◎爾もし醉ひしならば、幸なれ、
鬱金香(ちゆりつぷ)の面影のものと俱にあらば、幸なれ、
宇宙轉行の終熄には爾皆無となれば、

爾存在する時非存在を想ひて幸なれ。

註釋、第二行は彼の所謂愛人を意味せしか。

第百参

◎昨夜我陶師の工場に往けり、
二千の壺壜或は呟やき或は默するを見る、
俄かに一つの瓶悽しく叫び
陶工何處に壺を買ふもの、賣るもの何處にある」と。

註釋、第六十六、八拾九、百四拾六節など同じ表情なり。

第百四

◎聖氣のふれし純粹なる酒は、
滅ぶる魂の看護者と聞く、
速かに二三のあふるゝ盃を据えよ、
彼等何故良き水を果實酒（シャラーブ）と呼ぶ。

註釋、シャラーブは二字に分解されて、シャル、アーブ（惡しき水）となる、之オムマの戯言か。

第百五

◎我が一優一秀を認め、十惡十罪を許せ、
過去の總ての過失を神の評價により恕せ、
風と大氣に怨恨の焔を激せしむる勿れ、
神の豫言者ムハマッドの墓上に容（ゆる）せ。

註釋、神の評價によりと云ふ原語又は第四行の原語は斯る場合に常に挿入する句なり。

第百六

◎玉盃の酒は正しく優順なる心靈、
又瓶の體中には適意なる生魂あり、
鈍重ならざれば酒の伴侶たるに値なし、
かの鈍重なる酒盃の外雅致あるなし。

註釋、伴侶と譯せる語について第五拾参節の註釋参照、

第百七

◎無終（アーベド）の永遠と無始（アーザル）の永遠の何時まで新しき、
悦の時果實酒（シャラーブ）に代ふるもの何かあらん、
推理と實行とは我が境界を去り、
果實酒（シャラーブ）のみ總ての葛藤を除かん。

註釋、無始無終の永遠はムハマッド數理の語なり。

第百八

◎かの圓かなる蒼空、その下に茫然と立つ、
彼見て我等の走馬燈の如きを知る、
太陽は燈にして宇宙はその走馬燈なり、
我等はその形貌の如く茫然と立つ。

第百九

◎我常に我が惡習に勝たず、如何せん、
我自ら爲せし行爲に苦しむ、如何せん、
爾の寛大我を看過することを信ず、
されど爾の我が行爲を見しその羞恥を我如何せん。

註釋、フィツツゼラルドは此の節に基き多くの節を作れるが如し。

第百拾

◎起ちて新酒を尋ねめぐらん、
己が顏色を棗實の頬の如くす、
自認の充溢せる習あふるゝ一杯を、
顏になげて夢地に往かん。

註釋、此の節は他の寫本になし、

第百拾壹

◎何時まで其日の智力に奴隷となるべきか、
此世に一年住むと一日生くると何かあらん、
酒盃を傾けん、陶工の仕事場に
頸長瓶とならざる前に。

註釋、第九、六拾六、八拾九節等に同じ意を含む。

第百拾貳

◎此宿に我等の住居も常ならされば
酒僕なく愛人なくて飲食味なし、
識者よ、古き教も新しきも何時までか、
我去りし後、新しき古き何かあらん。

第百拾參

◎爾を愛する爲め我非難の百罪を負ふ、
もし我此誓約にそむかばその罰を受けん、
我が命を爾の兇暴に任かせんも、神よ我、
末の日まで堪ふべきものよりも少し。

註釋、神を愛して苦しむ事浮世のそれに比して僅かなりと。

第百拾四

◎世早く過ぎ去れば我主義(フワン)の外になし得ず、
快意の途と輝く酒に身を處するより外なし、
「神前に悔心を與へん」と人我に曰ふ、
彼與へじ、もし與ふるとも我恨いず。
註釋、此節の意第六拾四節にも見ゆ。

第百拾五

◎我哀願をもて禮拜堂(マスジヤド)に來るとも、
神掛けて！　我因襲的祈禱(ナマーヅ)の爲めに來らず、
或日此處に來りて祈の坐氈(サッジヤーダト)を掠めぬ、
彼古びて我屢々來る。
註釋、サッジヤーダトはムハマッド信者の祈る時上に伏る毛氈なり。

第百拾六

◎悲運の足下に我迷ふとき、
我生命の希望より根絶えん時、
定に再我が粘土より頸長盃(サワーヒー)の外造らじ、
酒滿てる時我或は生き返らん。

註釋、此節他の寫本になし。

第百拾

◎我が心魂は叡智を錯覺より區別せず、
一つは禮拜堂(マスジヤド)へと、他は玉盞を勸む、
されど我等には常に酒と愛人、
僧庵に未熟ならんより酒保に强からん。
註釋、此節他の寫本になし。

第百拾八

◎朝來る、薔薇色の酒を飲む時、
此の令聞と聲價との器を石に投げつけ、
永き希望より我等の手を退けん、
ながき小輪(ズルフ)と絃琴(チャング)のはしを打たん。
註釋、樂器の事を述べし第二なり（第八拾八節參照）

第百拾九

◎此世界よりも一壺と二つの麵麭を採る、
權威とその壯大なる貪慾を捨て、
我が魂(ジヤーン)と心(ダル)を以て貧窮を購求(もと)めたり、

貧窮の中に我富財を認む。

註釋、此節も他の寫本になし。

第百貳拾

◎我、存在と非存在の顯明を知る、
又高きもの低きものゝ奧密を知る、
されど己が知識より謙讓たらしめよ、
我酩酊を越えて階段を知らば。

註釋、此節は彼の天文學上の知識を諷したるものか。

第百貳拾壹

◎幼少の時、我等曾て師と共にあり、
又我等の學業を以て滿足せり、
見よ彼等の推論を、「我等何處に達せん」
我等水の如くに來り、又風の如くに去らん。

註釋、フイッツゼラルドの第二拾七、八兩節之に基く。

第百貳拾貳

◎此世の神秘を解するものには、
世の喜悅と悲哀とは同一なり、し

世の善と惡、その終極に來たらば、
總ての疼痛、療藥思ふがまゝ。

第百貳拾參

◎爾奉仕し得る限りは遊漢となり、
祈禱（ナマーヅ）と節食（ルーザー）の基礎を毀たん、
オムマ、ハヤムの正しき推理に耳傾けよ、
酒も飲み、道路にも潛め、されど惠ある行爲せよ。

註釋、遊漢と譯せる原語はスーフヰー派の人をも意味する事あり。

第百貳拾四

◎此沼池に住む人の獲物は、
悲憂と臨終の苦悶を喰むより外なければ、
此世を早く去るものには喜悅、
此世に來らざりしものには平和。

註釋、沼池とは此の世を意味せること第百拾貳節の宿に於けるが如し。

第百貳拾五

◎行僧（メーサワン）、爾の身より模樣ある衣を除け、

身に纏ふその衣に留意せざらん爲め、
行きて古き襤褸を爾の肩にかけよ、
寧ろその裡に王者の輝を見ん。

註釋、襤褸は人の形なるが如し。王者の輝を見んと譯せる原語には王者の鐃鼓を打たんとあり。此節は他の寫本になし。

第百貳拾六

◎廻轉しつゝある圓穹よりの邪行を見よ、
友過ぎ去りし後の空無なる世を見よ、
爾自ら生きん一時も
明日を想はず昨日を探らず新現に目を止めよ。

註釋、フイッツゼラルドの第二拾、二拾五節は此の節に基けるか。

第百貳拾七

◎酒を飲み艶美の還繞に徒歩すること、
歸依者の僞善を爲すに勝る、
もし醉人と愛人苦悶を望まば
その時誰か樂園への途を見出さん。

註釋、僞善と譯せし原語は盲目信仰と云ふ意なり。

第百貳拾八

◎悲哀をもて悅びの魂を惱さず、
試煉の岩に已が樂しき季を傷すべきに非ず、
未顯を知るものは隱れて見えゝ、
酒と愛人と求むる安靜は缺くべからず。

註釋、スーフキー派の人は第四行の意味を特別に解す、但し此なり。

第百貳拾九

◎此回轉する蒼穹は爾と我が破滅の時、
我等の無垢なる靈魂の爲めに悲策めり、
芝生に來れ、愛(ブーター)よ、時遠からざるべし、
爾と我が土より綠草萠え出づるの時、

註釋、愛と譯せる原語は偶像と云ふ字で愛の變形と云ふ意に用ひたるか。

第百參拾

◎吾等の出現と去歸に何の利潤、
生命の本質なる經(たて)に對する緯(よこ)は何處に、
世に多くの纖弱なる頸足は燒かれ、
その焰の排卵——煙——は今何處に。

第百參拾壹

◎總て科學の精思より高翔し、
捲髮(ツルフ)もて飾れる愛人の頸にもたるゝもよし、
兩の血の流れん季の來らざる前に、
頸長瓶(サラーヒー)の紅酒を盛るもよし。

註釋、ハサン派の叛逆を見し時の表情か。

第百參拾貳

◎嗚呼髭もて我酒保の門戸を掃ひ
現、來二世の善と惡とを否認せり、
その二世、道程に玉の如く轉(まろ)ぎ來らんも、
尋ねよ、醉人の如くに眠れる我を。

註釋、道程と譯せる原語には地方、村落、市街など云ふ意あり。

第百參拾參

◎總てのもの節制することよし、
帷中に醉える美人の注ぐ酒を除き、
飲酒、巡禮(カランメ)、迷行もよし、
月又月に操り返す一杯の殘滓もよし。

註釋、月又月と譯せる原語は普通の時の月と十二支の一つを意味するなり、引き續けてと云ふ意。

第百參拾四

◎かの圓穹は逆にかゝれる玉盃の如く、
その下にさかしき人捕へらる、
瓶(シーシャー)と玉杯(シャーガル)との友情に摸れ、
紅酒、唇より唇に流れん。

註釋、摸ると譯せる原語に區別する又は選ぶと云ふ意あり、

第百參拾五

◎視ずや東風に裂かれし薔薇の花瓣、
その佳美に樂しく囀ずる鶯、
薔薇の蔭に座せん、多くの薔薇も
吹く風に大地に散されて土と化せば。

第百參拾六

◎何時まで占有、非占有を思ひ惱むべき、
又此命を歡喜の心もて過し得べき、
酒盃を滿たせ、我は知らず、

吸込む此一息を吹き戻すか。

註釋、占有と譯せる原語は何を所有するかせざるかの意なり。

第百参拾七

◎此不義の世の悲哀に屈するなかれ、
過ぎ去りし人の悲哀を想はしむるなかれ、
仙境に生える素馨(ヤサマン)の貌の外に焦思する勿れ、
風に爾の命を委ねず酒に友となれ。

註釋、屈すると釋せる原語には爾の身を與へずとあり

第百参拾八

◎爾六十の坂を超ゆるも退く勿れ、
爾何處に歩を向けんも醉はずし了せざれ、
爾の頭蓋 頸長瓶(クーザー)とせざる內は、
頸長瓶(クーザー)を肩より玉杯を手より退く勿れ。

註釋、第一行の退く勿れは原語に除く勿れとあり。

第百参拾九

◎新しき王領より一杯の古き殘滓よし、
酒ならざる總てに何れの途か開かれん、
フェリードゥーンの王璽は彼の王領に勝る百倍
煉瓦の瓶蓋もサイラスの王冠(タージ)よりよし。

第百四拾

◎酒僕(サーキー)よ、早く去りし彼等は、
自負の芥積の中に夢む、酒僕(サーキー)よ、
行きて飲め、又我より教を聞け、
● 彼等の叫びは總て唸呻のみ、酒僕よ。

註釋、唸呻と譯せる原語は風と云ふ字なり、

第百四拾壹

◎師よ、爾は我が酒壺を毀り、
師よ、爾は我が有福の門戸を鎖し
我が淸純なる酒を大地に放散せり、
我口すさみて滅びん、「奇しき醉惱(マステー)なる師かな」と。

註釋、師と譯せる原語は神學博士と云ふ字なり。

第百四拾貳

◎天爾は總ての卑賤奴にも何物かを與へぬ、
浴所を與へ、磨石を與へ、溝濠を與ふ、

されど正しきものはの夕食の一塊の爲め
に己を賭す、斯る天には放屁せんも可なり。
註釋、第四行を斯る天には何物か與へんと譯せる人にあり。

第百四拾參

◎我が靈よ、爾かの玄妙なる謎に達せず
又聰明なる智者の異想に入らず、
酒と玉盞もて此處に樂園を備えよ、
爾達するも達せざるも其處には樂園あり。
註釋、フイツツゼラルドの第六十貳節の基くものなるべし、然し相違甚し。

第百四拾四

◎爾常に人の庖厨より來る薫烟に腹を滿たし、
何時まで存在、非存在の悲憂を食むべきか
爾蓄財（ウルマーヤ）を求めされ、その貪も盡きなば、
爾常に利を食る如く資を食みて。
註釋、第一行は世の法則に若む意なり。

第百四拾五

◎我が魂よ、もし肉の芥塵より消え失せなば、
爾、靈の裸心、天界に來りて、
火天は爾の第宅とならん。はずべし、
來りて大地の限界に住人たらんとは、
註釋、火天とは天の最も高き處を意味し神の座の所在地と想像せる處なり。

第百四拾六

◎昨夜硝子（カーシー）の盃を石に投げつけ、
その粗行に我が頭樂めり、
盃その言葉をもて曰く、
「我も曾て爾の如くなりき爾も亦斯くなるべし。」
註釋、第六拾六、八拾九節など同じ表情なり。

第百四拾七

◎玉盞と頸長壜（サブー）を擧げよ、オー[illegible]慰（アルチユーイ）、
樂しげにさも樂しげに川邊の花園に逍遙ん、
邪辯ある天、優秀なる幾多の人を
百度か或は王（ピーラー）遙に或は頸長壜（ナプー）に
註釋、此の寫本にのみなり。

第百四拾八

◎爾我途上に百千の民を横たえ、
「もし爾歩（ガーム）を濯かば捕えん」と曰ふ、
一點の判決も爾の世より自由ならず、
爾判決を下して我を不從順なりと云ふ。

註釋、第三行は此の世の總てのこと爾の知識以外になしとなり。

第百四拾九

◎僅かなる紅玉色の酒と一篇の詩集（ディーワーン）を我望む
我只生きん爲めに半塊のパンを要するのみ、
斯くて爾と我、寂寞（ナイーラーン）に座せば、
王領を與へられんよりも幸なり。

註釋、此の詩集と云ふ原語は韻字によりアルフアベツト順に集めたものなり。

第百五拾

◎利なき多くの悲憂を食むなかれ、悦に生け、
非道、不義の代に公道に生き、
此の世の最終の行動は虛無（ニースティー）なれば
空無を想はず解脱に生きよ。

註釋、行動と譯せる原語は事務と云ふ意を持つて居る。

第百五拾壹

◎我が眼の及ぶ總ての限界
世界はカウサル河より灌漑せられ、
冥府も失せて砂漠も樂園の如く
かくて秀美の人と樂園に座せん。

註釋、カウサル河はコーランの內にある神話的の名なり。

第百五拾貳

◎幸なれ、昨日彼等爾の焦思の慾を慰め、
又爾總ての慾望に堪ゆ、
爾幸福に生きよ、爾昨日求めずして
明日、爾の行動は定められぬ。

註釋、慾を慰めたりと云ふ原語は好く料理が出來たとあり。

第百五拾參

◎鬱金香（チユーリツプ）の色めく澄める紅酒を傾け
又は酒瓶の頸より清き血を搾らん、

今は我が爲めに王璽の外に、
眞(まこと)の心持つ一人の友もなければ

註釋、色と譯せる原語は紅玉石(ファール)と云ふ字なり。

第百五拾四

◎天、我が心靈の耳朶に密かに告げて
「定められたる運命は我より爾知らん、
我もし己が轉換に預からば
酒我を眩榮より救はん」と。

註釋、此の節も他の寫本になし。

第百五拾五

◎一地の麵麭、一瓢の酒、
羊の股肉を得て
爾と我、寂莫に座すとき
その喜びを何れの王か遮らん。

註釋、第百四拾九節參照、

第百五拾六

◎されば二升(ふたます)の酒手に入らば
總ての會合(マフフィル)と家會(アンジュマン)に之れを飲まん
此世を創造せし彼は心を勞せざりき
爾の如き髭(サアアト)と我が髯(リーシ)とに。

註釋、第一第二行は第五拾五節の一部と直接關係あるが如し。

第百五拾七

◎我己が出現に預らば生れ來らじ、
又己が去歸に預らば何處にか往かん、
此世に來らず、去らず
又生きざるは遙かによし。

註釋、此の世と譯せる原語に人肉もてと云ふ思なり。

第百五拾八

◎ラマザーンの月は去り、シャヴァール來る、
活力(ナシャート)の季、悦(アイシ)の季、卽興詩人(カヴァール)の季、
土瓶を肩に運ぶの季、
又陶工相助くるの季來ると云ふ、

註釋、此の季は春なり。

◎終◎

予が此の譯述の基となせる寫本（乃ちオクスフォード大學に保存せらるゝ最古のもの）には最後に亞剌比亞語を以て寫字手が次の跋を書いて居る。

『永遠の神の恵を求むる卑しき僕マームード、エルブーダーキーに依つて書かれた、八百六十五年（西紀千四百六十年）、サフローの終り、ヒジラーの年、シーラーズ地方に勝ち終えぬ。神彼を邪悪より救ひ給へ。』

酒中の天地

高須梅溪

一 酒の季節と酒中の趣味

酒の味が、一番、身に沁みるやうに快く感ぜられるのは、秋から冬へかけてである。殊に夜が宜い。春の酒も、わるくはないけれども、環境が餘りに浮々して居るので、酒の味が、身に沁みない。矢張、夏の暴威が次第に衰へて、朝晩、萩の葉をわたる風が、涼しくなつてくる頃から、酒に親みたい氣分、酒をなつかしむ情緒が起つてくる。

秋は蟹や松茸を、冬はいろいろの鍋類を好下物として、明るい燈火の下で、會心の友と無駄話をしながら、靜かに對酌する快さは、ひとり酒徒の領する樂しい、無邪氣な別天地であらう。酒の讃美者若山牧水氏が「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒は靜かに飲むべかりけり」と歌つたのは、私等と同じ心境を表現したものである。

酒には、いろいろの種類があるか、私は日本酒が好きである。それは、ひとり私に限つて居ない、一體に上戸黨の多くは何を措いても、先づ日本酒を熱愛するやうである。西洋の酒、支那の酒も、一種の異國情調と特殊の香味とがあつて、決していやではない。新しい藝術的氣分から云ふと、時には西洋の酒が、日本の酒よりも、好ましい場合もある。有名な「秋の歌」

を作つたフランスの詩人ヹルレイヌが、アブサントに惑溺した心持、或は「鴉の歌」を作つたアメリカのポーが其の赤い魂を浸した強烈な酒 醉ひ心地、または「清貧の歌」を書いたイギリスの民衆詩人バーンスが愛飲した村酒の風味、世紀末のデカダンが象牙の塔に籠つて、時々嘗めたと云ふ火酒の勁烈な味などを思ふと、西洋の酒に對して、一種のなつかしみ味を感ぜずには居られない。何人も、多少、藝術的氣分を有するものは、西洋の酒を飲む時に、ベルレイヌや、ポーの詩的心境を胸に描くと、何となく、洋酒に對する興味が、自然に湧いてくるのであらう。

私は曾て西洋の酒について、短い感想を披瀝したことがあるが、其のうちで「一體、私は日本酒が一番好きであるが、西洋酒は、コップに注いだ時、ぢつと其の色を眺めてゐるのが好きである。其處から いろいろの詩的聯想が浮かんでくる。ブランデーを飲んだ時は、情熱の炎が身を包むやうに感ずる。綠色のペパーミントを飲んだ時は、若々しいロマンチツクな世界が私の眼の前にひろげられたやうに感ずる。黄金色のマラスキノーを飲んだ時は、神秘な霧にとざされた夢の國に遊ぶやうな心持がする。」と酒日記に記したことがあつた。

色彩の上から云ふと、私は、ペパーミントが好きである。其の濃い綠色を眺めて居ると、其の色が快く眼に沁み付くやうに思はれる。それは、象徴主義の使徒ヘルマン・バールによつて描かれた年少畫家が、綠色のソースを見て歡喜したのと同じやうな誘惑を感ずるのである。色彩の鮮麗と變化とは、洋酒の特色で、私等の視覺を快くして、いろいろの詩的聯想を誘發してくれる。赤い酒、青い酒、黄な酒、琥珀色の酒、萬色の酒、それ等の色彩が 舌の美感をも促進してくれる。而して其の香味も亦勁烈なものや、甘美なものがあつて、異國情調を伴ふ魅力の美を具へて居る。

だが、其の醉心地になると、餘りに强烈な傾きがあつて、私等のやうな淡泊な日本料理をより多く愛するもの、殊に微醉的な柔かい、縹渺たる世界に其の心を遊離させようとするものには、適當しないところがある。色彩の上から見ると、日本酒は單調 琥珀色のみであるけれども、それを飲んだ時の心持は、ウヰスキーや、ブランデーや、ペパーミントなどを飲んだ時の心持にくらべて、遙かに刺戟が柔和で、溫室の甘い空氣に抱擁されたやうに適度の醉ひ心地を誘發してくれる特色を持つて居る。京都に居た民衆詩人賴山陽が、其の詩に於て、度々、日本酒殊に灘の生一本を讃美したのは、成程と首肯かれるのである。特に狹斜の巷からの朝歸りに淡泊な湯豆腐ではかない事から

醒めたやうな心持で、一酌する時、氣の置けない友人と閑雅な小室で、夜の巷を流しゆく新内を聞き乍ら、ゆつくり對酌する時、物好きに縄のれんへ這入つて、他の酒客らと共に快く盃をあげる時、日本酒に對する愛着と興味とが、一段强く胸をそゝるのを感ずる。私は、夏を別として、秋から冬へかけては、全然、日本酒の讃美者である。

二、銀座附近に於ける酒場と日本酒黨

國木田獨歩氏が書いた短篇小説のうちに「號外」と題した一篇があつたと、私は記憶して居るが此の「號外」は、獨歩氏が銀座の狹い小路に今もある鹿六と云ふ正宗ホールで、其の暗示を得たのだと云ふことを聞いた。獨歩氏は獨歩社の前身である近事畫報社へ這入る前に、ある小さな新聞に關係して居たが、其の時分、折々、鹿六へ出かけて、酒中の警句を吐いて、友人らと痛快に飲んだ相である。

銀座は、東京に於けるカフエーや、酒場の中心地である。カフエー・ライオンを始め、パウリスタ、臺灣喫茶店など、一體に西洋の酒を飲むのに便利の多い家が、到るところにある。それに對して、主として、日本酒を飲ませるレストランが、甚だ少ないやうだが、一歩、大通りから横に外れて、裏道や、小路へ這入ると、迷宮のやうな、わかり惡いところに、不圖、鹿六と同様な日本酒專門の酒場や、小料理屋などを見出すのである。末廣、三勝などは、鹿六と略ば同趣味の家で、其の他手輕で、氣の利いた家には、青柳、江戸銀、よた助、たんぽゝ、赤瓢簟などがある。鳥料理を專門とした家にも、輕便な快いところが五六軒はある。これ等は、平民的な酒客が好んで、よく出かける家である。

だが、其のうちでも、徹底的な酒客の姿を能く見受けるのは江戸銀、末廣、鹿六、三勝などである。江戸銀を除いた後の三軒は、何れも、狹苦しい小路のうちにあつて、六疊乃至八疊位の廣さのある一室に椅子、テーブルを程よく配置してある丈で、極端にさつぱりして居る。此處へ來る人々は、最低三、四合位から、一升以上を飲むものが多い。酒の燗も、多年の修練で、程よく出來て居て、熱くもなく、ぬるくもない。酒の肴は、刺身ぬた、酢の物と云つたやうなものばかりで、酒客が喜びさうな淡泊な、簡單な物が四五種出來る。私が、度々、出かけたのは末廣であるが、一體に文學者よりも、寧ろ新聞雜誌記者の群が飲みに來て、旺んに政治上の氣焔を吐くのを聞くことが多い。彼等が顏を眞赤に染めて、愉快さうに談論風發しつゝあるのをぢつと客觀的に眺めて、靜かにひとり酒を飲んで居るのも、わ

るい心持ではなかつた。

以上の家と稍趣を異にするけれども、天下茶屋や、金六亭などは、上品な酒客に喜ばれる家である。金六亭は、うまい物屋として、最も聞えて居るので、高濱虛子氏などは、能く出掛けた。曾て「赤い鳥」の鈴木三重吉氏、「國民」の島田青峯氏、それに虛子氏と私とを加へて、金六亭で小酌した時、始終、落着いて、ゆつたりとして居た虛子氏が、一番性急に酒をぐんぐん飲んだので、私は少し驚いて、意外な感じがした。私が想像して居た虛子氏の酒の飲み振は、寧ろ悠揚として、迫らない、あせらない方だと思つて居た。ところが、其の豫想は見事に外れたので、私は虛子氏に向つて「あなたの飲み方は、非常に性急ですね。」と云ふと、虛子氏は、一寸首肯いて「實は、表面、私の態度は、ゆつくりして居るやうですけれど、性質は極氣短かな方です。それが自然、酒の飲み方にも現はれて居ます。」と答へた。唯酒の飲み方のみを見て、一概に人の性格を判斷するのは、早まつたことであるが、時には、それが適中することもある。

島田青峯氏は、一番、酒に弱かつたが、鈴木三重吉氏は、一番强かつた。三重吉氏が酒量の上に傑出して居て、京都料理の平野屋が未だ日本橋の上槇町邊にあつた頃、旺んに飲みに出かけたと云ふことは、三重吉氏と同郷の友人から聞いて居た。氏は、徹底した態度で痛飲するが、少しも座を亂すやうなことはなかつた。私は、此の勢なら、二次會も、三次會も行けるだらうと思つたが、其の夜は、金六亭だけで、散會したので、眞に三重吉氏の優れた酒量も見屆ることが出來なかつた。

天下茶屋は「ニコニコ」の松永敏太郎氏が經營して居るところから、氏の友人や、文士、畫家、政客などが能く出かける。殊に林田雲梯氏、横山勝太郎氏、松崎天民氏などは、度々、行くやうである。松永氏が一方の酒豪である丈に、酒の味は能く調べてあるので、快く醉ふことが出來るところから、一時、私も度々、友人を誘うて出かけた。

數年前、私等の發起で、天下茶屋で、辰年の酒客ばかりを集めて、辰に因緣んだ料理を出して、痛飲したことがあつた。其の時は、俳優の片岡市藏氏、速記家の今村次郎氏、劇通の田村西男氏らを始め、新聞記者、法律家、會社員、女優など二十餘名來會して、午前一時近くまで、騷いだ。片岡市藏氏は、其の時、大分醉うて、歌舞伎座へ出かけて、自分の持ち役を演じたが、少し足許が怪しかつたので、相手の市川中車氏を驚かしたと後で傳聞した。市川左團次氏も、私と同年であるところから是非、出席したいと云つて居たが、横濱と東京とのかけ[illegible]

ため、到頭、來會しなかつた代りに、ビール一打を寄越して、辰年會を祝福したことがあつた。

三　日本橋、下谷、淺草の酒場ロマンス

京橋から、日本橋へ移ると、此にも、酒客の間に認められて居る家が相應にある。それは、なだや、赤行燈、中鐵、重亭、菊之家、かね萬、中善、花村、浮船などである。菊之家は、久松町にあるが、此は、時々、政界の慧星として知られて居る三浦觀樹將軍が浪人組のもの等と共に出かけて、名物の鯛ちりで酒鯨飲しつゝ、天下の形勢を手に取るやうに談論することがあると聞いた。私も五六度、菊之家に出かけたけれども、觀樹將軍には、一度も、逢はなかつた。だが、此の家は、二階のほかに飲むところがないから、私が踞座して居るところで、矢張天下の政客を睥睨する觀樹將軍か酒盃を擧げたこともあつたらうと思ふと、何となく、坐上に風雲が生ずるやうに感じられて悲壯氣分に浸つたことがあつた。

なだやは、下横町にあるが、此の家を最初に見出したのは「萬朝」の中内蝶二氏であつた。中内氏は、酒量に於て、同じ土佐出身の大町桂月氏と匹敵して居た。ある時、私が新富座の食堂で、中内氏と對酌した折「近來酒をうまく飲ませる家はないだらうか。」と問ふと、中内氏は言下に「下横町になだやと云ふ家がある、此處の酒は中々うまい、是非一度、出かけ給へ。」と勧めてくれた。

其の後、ある晩、友人S氏と共に、なだやへ出かけて見た。繩のれんを排して、土間へ這入ると、七八人の酒客が、長方形の食卓を圍んで、眞赤な顏をし乍ら、頻りに酒を飲んで居た。私等は、窮屈ではあつたが、客の中へ割り込んで、床几に腰を下して、少し肩をすぼめるやうにして居た。やがて女中が銚子を搬んで來たのを見ると、それは、徳利ではなかつた。俗に「ちろり」と稱する錫製の銚子のやうなものに酒が入れてあつた。此の「ちろり」で飲むと、酒の味が柔かになつて、口當りが極めて宜かつた。成程、中内氏が、推讃した丈のことはあると思つて、靜かに落着いて飲んだ。

不圖、手にして居る酒杯を見ると、日本酒會の字が、藍色で出て居る。私は、それも宜いと思つたが、も少し雅味を帶びた「芳醇會」と云ふやうな字を用ゐたら、一層、興味があらうと思はれた。盃のことについて思ひ出すのは、私が三保の松原の料理屋で、二階から、富士山の姿を見上げながら、酒を飲んだ時、其の盃の中にも亦富士山が、はつきり小さく描かれて居たことである。盃中の富士、實際の富士、この二つが、ぴたりと

一致して居たので、酒興頓に加はるのを覺えたことがあつた。

中善は、茅町にあるが、此の家を最初、知つて居たのは、浮世繪研究で知られて居る石井研堂氏であつた。氏の發起で、一風變つた人々と、一夕、此で芳醇な酒と江戸前の料理とを味つた。此の時、一番、痛飮したのは、手紙研究で有名た桑川春風氏と私とであつた。偉大な體格を持つて居て、酒が飮めさうで、飮めなかつたのは、料理通の齋藤鹿山氏であつた。鹿山氏は、秋田の人で、俳人安藤和風氏の親友で、東京の料理屋は、何處でも、能く知つて居た。一時、私は氏と毎晩のやうに市中の料理屋で、晩發を食べて廻つたが、それは、主として、食味を研究すると云ふよりは、芳醇な酒に調和した好下物を渉獵するためで、私には、何處までも、酒が附いて廻つて離れなかつた。

日本橋から、下谷、淺草、神田に移ると、此處にも、酒客の間に知られた平民的な料理屋や、繩のれんなどがある。私が出かけた家だけ數えると、神田の幾榮、下谷の江戸ッ兒、麥とろ、笹の雪、杓子、揚げ出、釜飯、淺草の三角、甲子（金壽司の隣）などは、最も平民的色彩の多い家である。杓子は、伊藤松坂屋の裏手にあるが、表に大きな杓子を掲げて、家には古い格子がはめてある古風な繩のれんの一つである。此處で酒を飮んで居ると何となく、昔の江戸時代が思はれてならなかつた。麥とろは、日本酒と能く調和する湯豆腐が優れて居るので、豆腐好きで、ちびりちびり落ついて飮む春風氏と幾度も出かけた。釜飯は、守田寶丹の横町にある小料理屋で、彫金家の中で、酒豪として知られて居る四谷正美氏が、最初發見して、私を同伴した。此處は、鯛飯や、しやこ飯、貝飯などがうまいので有名であるが、寄せ鍋の味も優れて居て、酒も特に吟味して居るところから、酒客に喜ばれて居た　四谷正美氏の家は、釜飯に近かつたので秋から冬にかけて、私は氏と一緒に此の家で宴飮することが多かつた。林田雲梯、山本鼓渠、西川長左衛門、河野桐谷、河瀬蘇北の諸氏も、能く此處へ來て、酒を飮んだ。

吉田絃二郎氏は、最近まで下谷根岸に居たが、氏は、近所にある笹の雪へ折々出かけて居た。ある時、氏に逢ふと「一度、遊びにいらつやい、笹の雪へ案内しませう。」と云ふてくれた。多感な詩人的な南歐風の吉田氏と笹の雪で、痛飮したら、必ず寂人芭蕉の話などが出るであらうと思つたが、つい行かないうちに、氏は千住の方へ移つて了つた。冬の寒い寒い朝、吉原などの歸りに、笹の雪へ立ちよつて、あの純白な、京美人の膚より尙ほ美しい湯豆腐で、熱い酒を飮むと、何となく、江戸情調と云ふやうなことが考へられるのである。」

四　山の手に於ける酒場ロマンス

山の手には、酒客に喜ばれさうな家が割合に少いやうに思はれる。牛込神樂坂の紀の善の横にある甲子、通寺町のヤマニ・バー、江戸川のたぬきと蛤鍋屋などは、何れも平民的で、氣の置けない家である。たぬきは、俳人倉澤狸庵氏の經營する家で和田垣博士や、大町桂月氏などが能く出かけた。主人狸庵氏と俳句を談じ乍ら、酒を飲むのも、風變りで、興味があつた。

江戸川公園を眼の前に構へて居る蛤鍋屋は早大史學科の人々が能く出かけるので知られて居る。教授の煙山專太郎氏、關與三郎氏を始め、船舶研究の西村眞次氏などの酒豪が、蛤鍋をつゝき乍ら、二升位の酒を平氣で飲むと聞いて居る。煙山氏は、一見、優しい、溫厚の君子だが、酒にかけては、一方の豪傑である。酒には目のない西村氏も、舌を捲いて「煙山君はゑらい、一體、幾何飲むか、底が知れない、二升位は平氣だ。」と驚歎したほどである。關與三郎氏は、酒のたゞに生きて居るのか、社會學のために生きて居るのかと云ふほどで、毎晩、江戸川附近の小料理屋へ飛び込んで、夜遲く迄、ぐんぐん痛飲するが、それで居て、頭腦がはつきりして、社會學の造詣が深い。最近、歐洲留學に赴いたが、友人らは「學問よりも、ウヰスキーや、ブランデーに氣を取られて居るだらう。」と噂して居る。

小川未明氏は、ヤマニ・バーの推讃者である。「君、一杯飲まう」と氏が云ふ時は、大抵、ヤマニ・バーへ友人を同伴する。勞働者や、無資産階級者に深い同情を持つて居る氏は、矢張、平民的に心安く、酒を飲み得る家を好むのであらう。曾て水守龜之助氏を同伴して、ヤマニ・バーへ出かけた時、恰度、流行感冒が、旺んに蔓延して居たが、未明氏は「酒さへ飲めば、大丈夫だ、マスクなどは、しない方が宜い、君もマスクはやめ給へ。」と云つて、水守氏が口に當てゝ居たマスクを嫌厭の眼に見乍ら氣短かに飲んで居た。ところが、水守氏と十本ばかりの德利を倒して歸つた其の翌日から、流行感冒に取り付かれて、一時、危篤に陷つたので、全快後氏は「マスクが必要だ、是非、使用し給へ。」と水守氏に云つた相である。ヤマニ・バーには、牛込に居る文士中の酒豪が、時々、出かけて、氣焰をあげるやうである。

私は、山の手と下町のレストランについて餘りに無駄話を續け過ぎた。私が好んで出かける淺草の金田や、柳橋のくりか屋や、駒形町の前川や、牛込の川鐵、四谷の三河屋、神田の今文本郷の豐國などについての酒中感は、他日に讓つて、此に酒場酒徒の中に於ける知名の人々や、酒戰についての印象などを記

したい。

五　酒客としての林田雲梯氏と其の美人觀

私が知つて居る酒豪のうちで、殊に名物男として、喧傳されたのは、林田雲梯氏と和田垣博士とであつた。雲梯氏は、最近代議士となつて、政界に復活したが、私が始めて、氏を知つたのは、粋翰長として、盛名を馳せて居た時代で、今から、十年前のことであつた。

其の頃、私は、各方面の上戸黨を以て、二々會と云ふ一つの酒を中心とした社交機關を組織した。二々會と云のは、會員の數を二十二人、會日を毎月二十二日、會費を毎回二圓二十錢と定めたところから、命名したので、何でも、十月二十二日の夜、第一回を京橋三十間堀の富貴亭に開いたと記憶して居る。

其の夜、集つた會員は、七八人に過ぎなかつたけれども、それ等の人々は、大抵、一升以上は飲めると云ふ酒豪揃ひであつた。其の頃、歐洲から歸朝して未だ間がない彫塑家の武石弘三郎氏や、長い間、フランスに居た畫家野口駿尾氏や、川端玉章氏の繼嗣玉雪氏、香取秀眞氏の親友四谷正美氏、藤田篤氏（文學士、丸見屋商店廣告部長）磯野正登氏（法學士、理學士）河瀨蘇北氏等のほかに、林田雲梯氏と私とが集つたのである。

其の夜、中心人物として期待されて居たのは、云ふ迄もなく、雲梯氏であつた。私は未だ一度も、氏に逢つたことがないので、一體、如何な人だらうかと、胸の中に氏の俤を描き乍ら氏の來るのを待つて居た。艶聞を以て彩られた雲梯氏、伊藤公に愛せられて長い間、官僚畑に居る雲梯氏、社交家として融通の利く、才氣潑溂たる雲梯氏、左樣した點を輳合して、其處に瀟洒たる氏の風采を想望して居た。

やがて、蘇北氏が「翰長が來た相だ。」と私に云つて居るところへ、女に案内されて、身長の高い、格好よく肥大した雲梯氏が、五つ紋の羽織に茶縞の袴を穿いて、のつそり現はれた。氏が坐に着いて、二言、三言、蘇北氏と話して居るところを見ると、割合に官僚風のない、さつぱりした、氣の置けない苦勞人と云つたやうなところがあつた。

雲梯氏が來ると、直ぐに酒宴が開かれて、坐は俄かに活氣付いて來た。氏と最初、話し合つたのは、新歸朝者の武石、野口二氏で、歐洲の美術や、建築の話が出たが、間もなく、酒の事、美人の事に話頭が向けられた。野口氏が、頻りにパリーの美人を讃賞すると、雲梯氏は「フランスの女、殊にパリーの女は皆美しい。だが、それは、容姿が美しいよりも、化粧で美しく見せるのだ。眞に健かな、いきいきした顏の美人は、寧ろ日

ンドンに多い。私は、パリーの女よりも、ロンドンの女が好きである。」と云つた。私は、それを聞いて、成程と首肯いたけれども、尙ほパリーの女に對する一種の迷信が附き纏つて居る、ロンドンの女よりも、優美と嬋娟とに於て、優つて居るやうに思はれてならなかつた。

美人の話で、一同、思はず、酒興が加はると、雲梯氏は、遊蕩子の保健上の注意について、いろいろ箇條を分けて、私等に話した上、それを「雲梯戰術」と稱した。それ以來、私等は、何か云ふと「雲梯戰術だ。」と云つて、快活に笑ひ合つた。斯うして、二々會の第一會は、賑かに終つて、雲梯氏は、一歩先きに歸つたが、後に殘つたものは「二次會をやらう。」と云つて、卅間堀から、ぶらぶら日本橋迄歩いた。而して魚河岸の屋臺店で、午前一時近くまで、元氣よく、わいわい云ひ乍ら、熱い芳烈な酒を飮んだ。

私は、斯うして酒を通じて、雲梯氏を知ることが出來た。其の後二々會が、毎月開かれる毎に氏は大抵、顏を見せたので、次第に親しくなつたが、政治上の事は、一度も、話し合つたことがなかつた。大抵、趣味を中心とした話ばかりで、酒のロマンス、美妓のロマンスと云つたやうなものだつた。時としては氏の舊友で、年中、朝から晩まで飮んで居る快男子石坂晉彌太氏らと共に、縄のれんへ出かけて、半日を酒興のうちに費して能辯な雲梯氏の坐談に、ぢつと耳を傾けて、快い陶醉を覺えたこともあつた。

六　一晝夜にわたる酒戰ロマンス

私が、次第に酒中の雲梯氏を知つてゆくと、氏の酒の飮み振が、能くわかつて來た。氏は慥かに强健な體格を持つた酒豪の一人にちがひないが、絕えず、宴會に出席せねばならぬところから、平生は、力めて、酒量を節して、其の老巧な話術によつて、座を賑はして、他の人々に、より多く酒を勸めると云つたやうな風がある。それで、外見は、氏も旺んに酒を飮んで居るやうに思はせるところが、氏の秘訣であるやうに思はれた。

だが、氏の酒量は、決して小さくはなかつた。平生、綽々たる餘裕を存して居る代りに、大きく叩けば、大きく響き、小さく叩けば、小さく響く力を持つて居るので、相手や、必要によつては、一升や、二升は、平氣で飮む丈の下地が充分にあつた。それで、ある時、私が一升足らずの酒で亂醉すると、氏は「一升や二升で醉ふよな人は酒を飮むなよ後生（五升）だから」と云ふ都々逸を戲れにハガキに書いて、私の許へ寄せたことがあつた。

ある日、私が雲梯子と淺草駒形の前川で、隅田川の背黒い水の上を行く川蒸氣の姿を眺めながら、柳川鍋、茶碗蒸などで、對酌した時、氏は私に向つて「君は文士中の酒豪として、知られて居る割合に酒量が弱いね。」と云つて、氏が曾て某子爵と一晝夜にわたつて、酒を飲んで、勝敗を爭つたと云ふ話を始めた。

某子爵は、家族社會でも、有名な酒豪の一人であつた。ところが、不圖、雲梯氏と共に痛飲して、酒興が高潮に達した時「如何だ、一つ日を期して、酒戰をやらうではないか。」と云ひ出した。其の頃、少壯な雲梯氏は、言下にそれに贊成したので、來る何月何日正午頃から、某料理屋で、決戰しようと云ふことになつた。負け嫌ひの雲梯氏は、歸つてから、頻りに敵を破る方法について、懸命に考へた。其のうち、不圖、一種の名案を思ひ付いたので「これだ！」と覺えず、膝を叩いて、得意の色を浮べた。

約束した當日になると、雲梯氏と某子爵とは、柳橋邊の旗亭で逢つた。子爵は、既に必勝を期するやうな色があつた。雲梯氏も亦胸のうちに成算があるので、悠々と落着いて居た。行司役には、老妓や年增藝者を呼んで、双方、大杯を傾け始めた。一升位迄は、某子爵も、雲梯氏も、金時のやうに顏を赤く染めた丈で、泰然、自若として居た。

其の後、双方一息入れて、また鯨飲し始めたが、雲梯氏は、其の時分から、時々、座を起つて、便所に赴いた。而して暫く經つと、歸つて來て、勢よく、酒を煽り付けるやうに飲んだ。某子爵は泰山のやうに、腰を落ち付けて、座を起つことが、割合に少かつた。「これからが面白いのだ。」と云つて、旺んに盞を交へ乍ら、巨杯を手にして、一氣に飲み干した。

斯うなると、何れが勝つか、老妓らにも、わからなかつた。其の中、夕暮の色が、窓の外に迫つたが、二人は、それを知らないやうな風で、未だ足りないと云つて、ぐんぐん飲み續けた。斯うして、夜の燈火が、ぱつと花やかに輝くのを仰ぎ乍ら、午後十二時頃まで鯨飲すると、流石に必勝の色を見せて居た某子爵の顏も、稍青ざめて來た。雲梯氏も亦少し疲れ出した。けれども双方、元氣を揮つて「徹夜して飲もう。」「贊成だ。」と云ふ風で、互ゐに二升以上飲んだ。夜が更けるにつれて、某子爵は大分、弱り氣味になつて、雲梯氏の旗色がよくなつた。到頭、曉近くなつて、三升ばかり飲んだ某子爵が、自然に醉倒して了ふと、雲梯氏のみ、態度を亂さずに、勝利の人となつた。これで、一晝夜にわたる酒戰の幕が下りた。

雲梯氏が、此の勝利を得たについては、一つの秘密があつた。某子爵は、後で雲梯氏から、正直な告白を聞いて「それ[illegible]

負なしだ。」と云つて、覺えず、大笑した。其の秘密と云ふのは、酒戰を開始する二三日前から、能く攝生を守つて、毎日、柔かい粥と卵子とを喰べて、胃腸を休息させて置いたのである。これが勝利の一因となつた。それから當日は、度々、便所へ赴いて、咽喉へ指の先を突込んで、胃腑に充滿して居た酒を悉皆吐き出して了つて、始終、胃腑を空虚にして置いてから、引續いて、大酒を飲んだので、三升でも、四升でも、それに抵抗してゆく力が充分にあつたのだ。これが、勝利の第二因だつた。一見、磊落な氏には、斯うした周密の用意があつて、時々、意想の外に出ることがあつた。

七　酒豪としての和田垣博士と芳賀博士

林田雲梯氏と比しく、酒席に於ける有力な中心人物として、何人にも、敬愛されたのは、和田垣博士であつた。私が始めて博士を知つたのは、今から十餘年前で、牛込藁店の高等演藝場で、文藝講演會が開かれた時であつた。當時、私は講演者のうちに加はつて居たので、自然、博士と親しくなつたが、昨年の春、赤坂の旗亭で、氏と二言、三言、云ひ交はしたのが、最後の會見であつた。

私は、豫ねて博士の諷刺と諧謔とに富んだ文章を讀んで、深い興味を感じて居たのみならず、酒豪としての噂などをも聞いて居たので、講演會が濟んで、地下室の新しい食堂で偶然、博士と相對した時、心中頗る愉快であつた。それとなく、博士の樣子を見ると、赭顏で、左右の頬が豐かにふくれて、眼鏡越しに温情で輝く眼が光つて居た。而して其の眉の間には、不羈卓落と云つたやうな氣象が閃めいて居た。

其の時、博士は、私が、講演のうちに、カーライルの言葉を引用したことについて、博士のカーライル觀とでも云ふやうなことを少しばかり話したが、それは、酒中に忘れて了つた。けれども、これが緣となつて、博士と二々會でも、親しく、話すやうになつた。

博士の酒の飲み振は、一口に云ふと、豪快であつた。林田雲梯氏は、平生、より多く語つて、より少く飲もうとしたが、博士は、より多く飲んで、またより多く語つた。酒席に於ける博士は、斗酒を辭しないと云ふ風があつた。それほど、博士は、深く酒を愛して居た。殊に博士は、極めて學者ぶらない、平民的な人であつたから、時によると、單身、繩のれんへ這入つて平凡な酒客らに伍し乍ら、酒を飲むやうなことも珍しくなかつた。私が江戸川邊を散歩して居ると、偶然、たぬきで飲んで居た博士が、巨軀を現はして、酒氣を吹き乍ら、私に近付いて「や

あ」と聲かけたことも、折々あつた。

「まあ一度、僕の宅へ遊びに來給へ、何も御馳走はないよ、其の代りに酒だけは、宜いのが用意してある。」と再度、勸められたが、引込思案の私は、到頭、博士の宅を訪はずに過ぎた。けれども二々會では、博士と折々、逢つて、博士が、四方から攻めよせる酒客に應酬して、綽々たる餘裕を示された態度を、如何にも、痛快に思つた。友人二三人と共に池の端の旗亭で、雪見酒を飲んで、二合入の徳利を四十本ばかりあけたと云ふ酒豪の四谷正美氏も「和田垣先生の酒量には敬服して居る、僕でも充分、太刀討ちするわけには行かない。」と云つた程であつた。

それ程、酒に强かつた博士も、昨年の春、赤坂の旗亭で逢ふと「病氣のため、もう日本酒は飲めない。」と云つて、葡萄酒を淋しさうに飲んで「君等は、未だ元氣だから、これから旺んに飲めるね。」と私に云つた。其の言葉が、未だ耳の底に殘つて居るうちに、博士は間もなく、病んで、長逝した。

和田垣博士のほかに、尙ほ酒豪の一人として、敬愛されて居るのは、芳賀博士である。博士は、國文學者中の豪傑で、外へ出る時は、いつも、詰め襟の質素な洋服を着て、强度の近眼鏡を光らせて居る。時には、舊式なフロックを着て居ることもあるが、それが埃で汚れて居ても平氣だ。博士も亦和田垣氏に讓らない愛酒家で、長い間、糖尿病に惱んで居ても、容易に酒をやめないで、日本酒の代りにウヰスキーの滿を引くことを忘れない。

神田の寶亭に居るウエイターなどは、博士の顏を見ると「芳賀先生ですか、先生なら、いつも、ウヰスキーに定つて居ります。」と云つて、博士には、必度、ウヰスキーの瓶を持つてくるだが、博士も、一時、糖尿病で、失明しようとした折は、一時ウヰスキーもやめて了つたが、其の後、失明を免れると「矢張酒はやめられないよ。」と云つて、今も、ウヰスキーを愛飮しつゝあると聞いた。私は酒豪としての博士の健在を祈つて居る。

八　京都祇園に於ける風變りの酒戰

斯う書き續けてくると、際限がないので、私は、最後に京都祇園の旗亭で經驗した酒戰のことを記して、酒の幕を撤したい。

それは、初秋の一夜であつた。

私は、京都の宿屋で、友人Y氏と一緒に泊つて居たが、ある日「各方面の異色ある人物をあつめて、一風變つて饗宴を開かう」と云ふので、卽刻、四五人の知人に案内狀を出した。

其の夜、祇園の一力へ集つたのは、天龍寺に居る俠僧X氏、禪宗方面の奇才關惠端氏、小說家の近松秋江氏、川村曼舟氏、

の令兄村上文芽氏及びY氏と私の六人だつた。侠骨X氏は、長身で、肉付きの宜い、磊落な肌合の人で、曾て布教のため、支那大陸を一巡したことがある。私が、天龍寺の僧房で、X氏に逢つた時「今度、東京へ來られたら、眞先に品川の土藏相模へ遊びに出かけませう。」と云ふとX氏は大笑して「それは結構、私には一つの修養です。」と云つた程の快活な、からりとしたところがある。

醍醐氏は、顔の色が白くて、鼻が高くて、市村羽左衞門のやうな風采であつた。私等が、氏と一緒に自働車に乘つて、嵯峨に赴いた時、Y氏が、醍醐氏に向つて「未た奥樣を迎へないのですか。」と云ふと、醍醐氏は、少し吃りしながら「未だです。私は、それについて、一つの奇拔な方法を考へ付きました。近日、四條大橋の袂に起つて、大きな白い旗へ、妻君入用と大書して、募集廣告をやらうと思つて居ます。」と云つたので、一同は、覺えず、哄笑した。

Y氏は、私よりは、二三歳若いが奇策縱橫の才人で、其の眼は、始終、鋭く功名を追ふ色で光つて居た。平生、酒を飲まないけれども、一度、飲み出すと、可なりに徹底しなければ、止まなかつた。

斯うして、一風變つた人々が集つて居るところへ、一風變つた年増の女が來た。それは憲政藝者として、嬌名を馳せた歌蝶であつた。彼の女は、稍色香が褪めたけれども、何處か色が白くて、背がすらりと高くて、押出しは立派であつた。坐持ちは、極めて宜かつた。少しも、人の氣をそらすやうなことがなかつた。歌蝶のほかに、二十歳前後の撰りぬきの美妓が七八人ほど來た。近松秋江氏は、小說家だけに、それ等の美妓の特色を仔細に觀察するやうに、忙はしく、眼を働かした。

「如何だ、尾崎さんは、雄辯家だから、座が賑かだらう。」

と私が歌蝶に問ふと「いつも、默つて御居でやす。」と云つて議政壇上で獅子吼する人も、宴席では、別人のやうに溫和しくて極靜かだと答へた。此の時分から、私等は、酒盃に親んで、すがすがしい初秋の夜氣が、水のやうに肌に迫るのを覺え乍ら打解けて話し合つた。不圖、歌蝶の隣を見ると、黑い法衣を付けて、袈裟をかけたX氏が居たので、何となく「色卽是空、空卽是色」の感じを、さながらに暗示して居るやうに思はれてならなかつた。

「今夜は、大に酒戰をやつて、誰が最後の勝利を得るか試みませう。」

とY氏が、鋭い眼を稍細くして云つた。二三杯の酒で、もう眞赤になつて居た秋江氏はそれを聞いて、稍迷惑さうであつた。

Y氏は一向、それに頓着しないで「日本酒では、利き目がなくて駄目だ。ウヰスキーを持つて來い。」と女中に命じて、やがてウヰスキーが來ると、豪快な態度で、ぐつと一口に飲んだ。

「痛快だ！」と私は、Y氏の飲み振を喝采した。Y氏は、また續けて、ウヰスキーを煽り付けた。私も耳や、頬が熱して來て續けさまに、七八杯の酒を元氣よく飲んだ。

歌蝶は、私等が差す盃を一々、受けて、丁寧に返盃するうちに、白い顏が、櫻色になつて、若々しい美しさを帶びて居るやうに見えた。奇才醍醐氏は、默々として、稍遠慮の體で、ぐびりぐびりと飲んで居たが、眼は快さに輝いて居た。

「もう大分遲くなつたでせう。」と俠僧X氏が云つた。私等は、頻りに氏を留めたが、時間の都合で、先づ辭去した。その次ぎに村上文芽氏も歸つた。Y氏は「これからだ。」と云ふ風で、尚ほウヰスキーを飲み續けた。

夜は次第に更けて、蟲の聲が耳につくやうになつたので、醍醐氏と私とは、一力を出て、島原へ車を急がせた。私は、非常に醉つて、車にゆられて行く心持が、夢の國でも歩いて居るやうで、柔かい快感が私を喜ばせた。島原へ着いてから、私はまた醍醐氏と午前二時頃迄、飲んで、到頭、座上に醉ひ倒れて了つた。今も、當時の酒興を思ふと、も一度、痛快に祇園の旗亭で飲んで見たいやうな氣がしてならない。

附記

讀者諸君、私の手許には、未だ續けて書く材料が、相當にありますけれども、瀧田さんと約束した枚數を既に超過しましたから、改めて他日、續稿を發表したいと思ひます。

難い哉在米の活動俳優

妹珊瑚への公開狀

在米國　上山草人

珊瑚君お留守番永々御苦勞様。七月の初めになつて、ワシントン湖畔で託任居中の私共の手許へ久し振りで精細な模樣を報じた二封の手紙が、幾束かの新聞雜誌と一所に到着した。お蔭で柚子の臨終の模樣、葬式の模樣から知人諸氏の御好意の模樣迄手に取るやうに明瞭にわかつた。「天の土産(おみや)に何もろた、紅いシヤツポに青い靴」と彼女がはる〲旅の父母を慰むる爲めに詠んでよこした「駒鳥の歌」の一連の文句のやうに、棺の中へも雪のキヤナダから送つてやつたあの紅いシヤツポに青い靴を履いてあの世へ旅立つた聖らかな姿が、君のお手紙から鮮に過ぎる程に印象されて悲しい極みである。雛鳥のやうにして抱へてゐたおばあちやんの心持はどれ程であらう。流石の兄さんも袖の事では大打撃を受けて日々ボンヤリと暮してゐる。姉さんは勿論泣き通してゐる。今度も亦谷崎先生が兄さんに代つて一切を處理して下さつたとの事、又小田原では北原白秋さん御夫妻の懇な御見舞をうけお寺のお世話迄して頂いた模樣、兄さんからお禮狀は出したものゝはるかに涙を寄して感謝してゐると君からも傳へてくれ。兩親のゐない間の夭死(わかじに)はまことに可哀想な次第ではあるが、お前やおばあちやんやその他の人々の行屆いた看護を受けた上、年が若くて歌を詠む事が上手だつたあの子が、谷崎、北原それから佐藤春夫さんと云つたやうな詩人連のお世話になつて天國へ旅立つたのは幸福であつたと思つて兄さんは斷念めてゐる。拾歲で死んだ少女詩人の詩集が北原さんの手で編んで頂けるとの事、父様としては此の上もない光榮だと思つてゐる。幸に回向の爲めに是れ迄放浪中のこつちの手許へ送つてよこした澤山な詩も歌も繪も手紙も一束にしてあつたから別封で送つてやる。寫しとつたら直ぐ又送り返してくれ。

珊瑚君。豫てからボツ／＼お知らせのあつた大正活動寫眞株式會社が愈々スタートして君も花形女優として交ぜて頂く事になつた由、會社の主幹たる志茂さんは兄さんの同郷同窓の友人でもあり、それに谷崎先生が顧問で、その他聞く名が皆僕の親近者許りなので、直接に關係はしないものゝ何だか自分の事業が成功したやうな氣持がして非常に嬉しい。どうか會社の皆さんによろしく。アメリカで會見する筈であつた栗原さんとは僕等が布哇でぶら／＼してゐる間に入れちがへて會はれなかつた、よろしく云つて下さい。元來フイルム事業と云ふものは世界的に見ても極くの初歩で、恐る可き未來を持つてゐる。日本では今日でも一部の人達から下等な事業のやうに思はれ、ひどく卑しめられてゐるやうだがそれは目前の現ればかりを見て、其の本質を理解しない人達の云ふ事だ。新時代、俳優を以て任ずるならば舞臺藝術からフイルム藝術に行く事は進化であつて毛頭墮落ではない。將來のフイルムの能力は次第に演劇類、即ち一切の舞臺藝術や、創作類、即ち一切の出版藝術の能力を壓倒するの氣息がある許りでなく恐らく新聞雜誌の使命をも取つて代らうとする傾向を持つてゐる。現にこちらの都市毎の大劇場では普通のフイルムの間に現在新聞が報道するやうな最近の市井の出來事を映畫記事共々掲出し、新聞雜誌の家庭欄に載せらる可きお手輕料理の教授や流行唄や一と口噺や流行詩人の新作などを必ず小一時間フイルムの上で報告するやうになつてゐます。まあ考へて見るがいゝ、大きな資本を土臺にして全世界の自然を舞臺とし最新の科學や撰ばれた身體美を材料として、それが一切偉大な藝術的頭腦によつて纒められて表はれた時、舊來の約束に縋つてゐる諸藝術がどんなに慘　に見ゆるかを。今度の君の行動は御相談をうける暇もなく、報告的に聞いたのだが兄さんは大贊成だから臆せずやるがいゝ。然し一方では天下の公人としての自重も益々必要になつた譯だ。勿論谷崎さんがついてゐる事だから氣を揉む必要もあるまい。遠方から威勢丈けをつけてゐる。

珊瑚君　今度の手紙と一所に「活動雜誌」の七月號が屆いた。君の手紙の末に「青山雪雄の通信にあなた方の事が出てゐます、これから乘り出さうとする私の爲めに、こうした事がうそにもあれ雜誌にのるといふ事は悲しい事だと思つて心配してゐます」と書添へてあつた。披いて見れば十行程の惡意に滿ちた通信であつた。自分達にとつては是迄永いこと世間の毀譽褒貶の中を通過して來てゐるから、今更是位の事に氣をいら立てる可く神經が餘りに擂り耗つてゐるが、然し自分の沈默丈が是か

ら乘り出さうとする若い人の爲めに災すると聞いては、默つてもゐられず、こゝに嘲りを解く傍社會に近況を報ずる事にした。ほう、さう云へば君への公開狀が兄さんが日本を出てから一年有半の、いの一番の通信なのだ。

珊瑚君、兄さんの不精は私信にあつてさへ一筆を執らず、姉さんが筆まめなので僅かに補つて呉れてゐる。その筆まめな姉さんも入組んだ動靜は成る丈け家へも知らせない方針をとつてゐる。だから家族の君達でさへ兄さん達のやつてゐる事は皆目知らないから心配するのも無理はない。近頃兄さん達二人を主腦（スター）とする、ダイヤナフイルムコーポレーションが羅府の白人間に設立され、發表された時、日本へも國際通信で知れたさうな。あの時も兄さんは特に君に手紙をやつて何事もまるで知つてゐないと答ふるやうに嚴重に申渡した筈だ。會社は成立してもまだあやふやの點があり、あやふやな事を世間に發表される事は兄さんのひどく好まぬ所だからだ。

珊瑚君。兄さんが未だ布哇にぶら〳〵してゐる頃、はる〳〵手紙を飛して羅府演劇研究會と云ふ名目を以て歡迎の意を表して來た。渡來の上は早速羅府へ來てくれ、今回貴下夫妻の渡來を機として如上の會を組織した。興行でもやるならば全力的に應援して上り高の如きも全部貴下の見學費の內に寄附しやうとの申條であつた。印刷物の中には顧問格に領事其の他有力者の名を並べてあつたので、始めの中は東京の國民文藝會のやうな性質の會と受取つてゐた。偖て羅府へ着いて熱狂的な大歡迎をうけ早速興行の事を承諾した後になつてやうやく知れた事は此の會の內容で、會員の多數は以前「革新團」等と稱へて不如歸、金色夜叉の種類を以て沿岸を打廻つてゐた新派俳優の人々が羅府の活動寫眞界の勃興に連れて次第に集合したもので、目下は日本人活動俳優組合を形成してこの地澤山な活動會社の東洋の人物群集の必要に應じてデーウオーク即ち日働きをしてゐる人々であつた事だ。それにこの地邦字新聞の青年記者三四人に工場の人も混り一二名は普段浪花節などを持廻る興業師も加はつてゐた。青山雪雄君は元革新團の座員で日本人活動俳優組合の幹事でもあり傍々この新設の研究會にあつて音頭取の一人であつた。珊瑚君。兄さんがこう此の會の會員の身元を語るのは、第三者に對して漫然この會を誹らうとするのではなく、こうした人々が一團となつて同じ歩調で演劇の研究が出來るものであるか、特に如何なる演劇を如何なる傾向に研究しやうとしてゐるものであるかに一寸氣が附いて貰へばいゝのだ。偖ていよいよ芝居の稽古となつて兄さんはこの素人玄人混合の出演者を統-

す可くひどく困じた。で止むを得ず、役割に不服を申さぬ事、稽古時間を厳重に守る事、藝事の上で罵倒されても苦情を云はぬ事と云ふ三ヶ條の誓約書を貰つてから、いつも兄さんが志願者にしてやるやうに、ア、イ、ウ、エ、オ、の發音からやり出した。青山君始め出演者一同兒童のやうに起立してこのアイウエオをやつたんだ。

青山君の役はたしかマグダの中尉とヴエニスの商人のグラシヤノであつたと思ふ。活動寫眞壇の御嚢も芝居では……、いや兄さんの眼からは……從つて舞臺監督としての小言も頻繁で兄さんは青山君其の他の青年紳士諸君がこの爲め顔をまつ蒼にするのを幾度か見かけないでもなかつた。文藝を愛好する心持許りで加はつてゐたズブの素人の新聞社の人々の發展を達成させる爲め兄さんは自分も苦しみ先方にもひどく氣の毒な思をさせた。何弗と云ふ入場料を取つて興行する以上、演技の最善を期するのは舞臺監督の義務だから眞に止むを得なかつた。手暴な事はしなかつたが語氣に於て君のクラス、君や蘭子君や明石、溝口、三村君等に與へた程の嚴しさが無論そこにあつた。アメリカ沿岸の青年氣質を熟知する人に兄さんの稽古場の模様を語つた丈けで當然起る可きトラブルを占ひあてゝきつと哄笑するに相違ない。稽古場の事許りでなく興行に關する事でも會は名乘りを上げた許りで、經驗なく統一なく兄さん達に對しては大體に於て善意なのだが其の代表者が轉々して一人々々に申條が變り、次第に會の基本金を此の興行から要求するやうになり、其上頻りに好意呼はりをして、面倒な話が永引くので、とうとう兄さんの方から腹を立てゝしまひ、終ひには意地になつて……惡い僻だ……、ぴしぴしと詰めた。尤も會員の中には此の機會に於て私利を度外視しない向も見受けた。現に幹部の青山君は劇場の板椅子の上に敷く座布團を賣る株を（所謂小物の株）を握つて幾干の上げ錢をこの興行で懐中したのだ。

そこで珊瑚君。此の興行はひどく成功して兄さんは大分嵩んだ芝居の雜用を引いた中から猶千弗近くの取前を獲たが、芝居が終ると直ぐ青山君一味の策謀によつて立所に報復を喫した。理由としては「彼等は有名な藝術家だから呼込んで歡迎をしたが、性質極端で我々の貴い感情を弄び剩へ興行に敏だ、自ら[illegible]の役者と號するから彼等は藝術家でない。故に絶交せよ、同時に妨害せよ、亭主の罪は女房も同斷」と云ふのだ。手近な新聞は掌を飜して劇評も何もそつちのけで筆を揃へ、糞坊主覺えてゐろとばかり、息も詰る程な荒つぽい攻撃を浴びせられた態は近來稀に見る傑作だつた。兄さんは　の時シヤトルの方から引拔られてゐたので沈默して羅府を去つた。するとシヤトルの自由

劇團の方へも青山君の手で「奴は人間を犬猫のやうに取扱ふから歡迎をするな」と云つた手紙を送つてあつた。このやうに米國各都市へ通信を出したとの事。犬猫とは嘗く聞かない言葉だつた。

米國の羅府（ロスアンゼルス）と云ふ所は氣候の温暖な自然の美くしいいゝ都市だが雨が一年中一滴もないのでこゝに住む同胞の頭もいくらかのぼせると見えて出來事が常に亂暴だ。日本人會長の榮職が二三日風邪で寢てゐる間に馘首され同時に會を除名される。仲間から睨まれた百姓は馬を毒殺される。うつかり野良に働いてゐると鐵陰から鐵砲が飛んで來る。白晝大道のまん中でピストルを撃合ふ。現に兄さんは二三人對合つてピストルを撃合つた光景に遭遇した。前述の兄さん達の災難は其芝居前後の興奮狀態としては先づ助かつたゞだ。尤も土地の識者の中には「陰謀に嵌りましたね」などゝ耳語して、その社會のさま〴〵とこみ入つた情僞を知らせてくれた上、當時內密に出來かけてゐた兄さん達のダイヤナ活動會社に對してとつた卑む可き惡德の發露が根原であるやうに取沙汰して居たが、兄さんの氣性としては人のことをさうかんぐつて考へたくはないし、且面倒臭くもあつた。

珊瑚君。青山君の通信の末に「因に兩人は映畫に入つてスターに成り度いと奔走したが何所の會社も相手にならないとかで失敗した」とあるのは以ての外の通信で人を誣ゆるも甚だしいものだ。兄さんは羅府に入るや、日本のコクラン氏の紹介でユニバーサルの社長に會つて撮影場を見物したのと、早川雪洲氏に招待されて其の撮影場を見物したのみで數多い撮影場は自働車で外側から見物したのみだ。況んや百にも餘る他の會社の何人にもこつちから會つた事は無いのだ。これは兄さんが活動俳優たる事を毛嫌ひしてゐるのではなく、いろ〳〵考へる事が多いから自重した爲めだ。一度早川雪洲氏から直接に大役を提供されて出演を勸められた事があつたが、その時は前述のダイヤナ會社と契約が成立した後だつたので即座にお斷りをした。

珊瑚君。今度はダイヤナフィルム會社と兄さんとの關係を說明しやう。兄さん達が羅府で芝居の稽古をやつてゐるうち英字新聞へも二人の寫眞が出て其の爲め多少白人の間にも知られ、エル、アール、スターリングと云ふ白人に訪はれ、是非貴下等兩人をスターとして新會社と設立したいから應じてくれと懇望された。熟考の末兄さんは

The said Sojin Kamiyama and the said Wraji Yamakawa shall have the right to refuse to act in the following films;

(A) Pictures which may do harm to the dignity of said Actor and Actress.

(B) Pictures which might break the friendship between Japan and America.

(C) Pictures which may be a menace to the sacredness of Art.

先づ右の横文字通り「第一に俳優及び女優としての品格を害ふと認めた映畫には何時にても出演を拒絶する權利」「日米國交を害ふと認めた映畫には何時にても出演を拒絶する權利」及び「藝術の神聖を害ふと認めた映畫には何時にても出演を拒絶する權利」と云ふ三ケ條を基本として其の他充分なる主張を試みそれが皆貫徹したので調印をし即座に約束金として六百弗を受けた。會社の幹部は全部羅市在住の白人で中には羅府の名士高等法院判事ウォルクス氏等の顔もあつた。然し私としては申條通りに約束金は貰つたもの丶二十萬弗の株劵を日米兩國の間から募集しやうとする會社の方針に尠からぬ疑念があつたのでオイソレと此の事を世間へ吹聽する事がいやだつた。羅府に於ける日米の名士を一堂に會して宣言やら祝祠やらで發會式は花々しかつたが案の定株劵募集の事が思ふ通りに行かなかつたらしく一度は日本人の株主を全然宛にしないやうな方針を取つて見たり、次には白人の株を宛にしないで日本々國で株を募集に人を日本にやると云ふやうな方針を取つて見たりしたがもと〳〵幹部に一人の日本人もゐない上に二兎を追ふた傾でそのま丶行難んでゐるらしい。サクラメントの州廳からライセンスも下り、事務所も出來、何のかのと創立費はかゝつたらしいが一寸行詰つた姿と見なければなるまい。兄さんは契約の條項がある許りでなく同じ船に乘り合つた義務で或る時期迄此の會社の成行を見なければ無關係の地位には立ちたくないのだ。從つて目下の所他の會社に關係をつけやうとは思つても見ないのだ。

珊瑚君。羅府(ロサンゼルス)といふ所には日本人の活動役者を本業とする者が三四十人副業とする者が男女を合せて百人以上(めしやの酌婦などが隨時五弗十弗と云ふめぼしい日給を貰つて狩出される。)も集つて奇觀を呈してゐる。是程の俳優が集つて永住してゐる所は日本でも三都を措いた他にはあるまい。其の中で早川雪州君夫妻が嶄然頭角を拔いて王侯の榮を擅にしてゐる。後の人は誰も一會社のスターになる程の出世が出來ず、台帳の仕組の都合から必要な日本人や支那人や乃至印度人サイバシ等の有色人種黒奴人種に扮する爲めに雇はれて働いてゐる。青山君は此の組合の幹事で諸會社の注文を帶びて有色人種のモップ共

の他を周旋する重寳な役目を勤めてゐる事は丁度東京にあつて子役や仕出女優に於ける菅原や田中勘大郎氏の重寳なのと髣髴してゐる。青山君は又日本着物の古を寄せて隔部のやうに貸衣裳業も兼てゐる。青山君の人柄や伎倆やに關しても、又は青山君級の人々に關しても面白い話は澤山あるが、先方がこちらを誹つたからと云つてやがては活動寫眞壇の新智嚢として花々しく歸朝する期のある可き寶出しの妨げになるやうな事は兄さんも餘りしやべりたくない。否寧ろ目下沿岸各地に於て青山君の身邊に起りつゝある非難に對して兄さんは進んで同氏の爲めに代辨しやうと思ふ。

最早日本に響いてゐるかゐないかは知らぬが、目下沿岸の同胞間には青山氏の出演したフーイスユアーサーヴアント（足下の家僕は何人ぞ）と云ふ映畫が物議を醸してゐる、これは日本人の家内勞働者が白人の家庭を汎す話を種にしたもので内容の何處にも些の藝術味なく仕組から表題から徹頭徹尾排日の爲めの排日映畫として非難を受け日本人側の抗議に依つて到る所撮影を禁止されてゐる。何故こんな愚劣な物に出演をしたかと云つて同氏を責める前に「米國のフイルム」に關して我々は一寸落着いて考察を遂げなくてはならない。由來或る葛藤を捉へなければ映畫の蓑帳にはならないし素晴しい葛藤を捉へ得たものが素晴しい映畫として人氣を生ずるに定つてゐる。それから又異人種の俳優が寄合つて映畫を作る場合に其の出來上つた映畫がどの國に供給されるかに依つて役割は自然に定らなければならない。日本の市場に販かれる映畫であるならば日本人が立役で白人が敵役に廻り觀客の單純な愛國心に投じなければならない。從つてアメリカの市場に販かれる映畫であるとするならば伎倆の所は別問題とし一勢ひ日本人が敵役に廻つて白人俳優のお引立役をしなければ其の映畫の需用力が增さない道理だ。敢て明瞭に敵役に廻らずとも異人種が思ひ切つて安つぽく取扱はれなければ其の國の市場には向かない氣勢を持つてゐる。興行の事に多少の智識ある人ならば必ず此の原則を諾くだらうと思ふ。すると此の沿岸に活動俳優として働いてゐる日本人の俳優は、原則として立役や喝采役として使はれる場合が極めて鮮く顯まれ役、卑まれ役、輕んぜられる役としてしか用ひられない事になつてゐる。此の虐たげられた狀態に立働いてゐるといふ事を青山君のフーイズユアーサーヴアントといふ映畫の場合にも汲んでやらなければなるまい。

早川雪州君が出世をした動機はチートといふ排日映畫の敵役であつたと聞いた。流石の早川君も出世前は此の原則の下に働かなければならなかつたのだ。現在は一會社の主腦として自分

でテキストを編み自分で出演をしてゐるのだから目下ひどく在留同胞の爲めにならないやうな映畫は寫してゐないけれど、アメリカにフイルムを販くといふ商法上の原則から相手の白人を無下な敵役に廻す事も出來ないで其の臺帳の構成には餘程苦心を重ねてゐるらしい。然しもう早川君のやうになればさうした難かしい事をも自分の一存で手際よく調子を取つて行く事も出來るのだが、青山君及び青山君級の人々の時代はすべて白人の仕組んだ物に出演をしなければ商賣にならないのだから一寸でも役の重いものに出演の機會があればかぶりついても出世の端緒を得なければならず、さうした機會を得る爲めには普段はベルボーイ專門で帽子や外套を捧げる丈けのチイプな役にも敢然として扮してゐなければならず、其の爲め日本國民の品位や同胞の迷惑等をいちいち省みてゐられない今が一番苦しい時代だらうと陰ながら同情を表してゐる。

珊瑚君。兄さんがシヤトル、ヴアンクーヴアー方面で興行をやつてから北の方に腰を据えてこつちの新聞に拙い連載小說や柄にもない時事評論を賣込んだり家庭雜誌の編輯を手傳つたりして本業以外兄さん達の出來る範圍内で小遣を取り乍らワシントン湖の眺めの好い所に世帶を持つて至極安穏に日を送つてゐる事は只ダイヤナフイルムコーポレーションの義理合で其の成り行を待つてゐるといふ理由のみではないのだ。米國内は何所から何所迄も鐵道で一と走りだ。一日も早く見當の所へ出掛て行つて能ふ限り活動して見たいといふ氣持は兄さん達の胸から寸時も離れはしないのだが、前項で青川君を辯護した理由などが兄さんとしては前以て大に熟慮を要する事の一つになつてゐる。

珊瑚君。兄さんも姉さんも役者である前に人間である。日本人である。役者として出世をする爲めに、或は物質の上で成功する爲めに當然日本人として非難され輕蔑される傾向を有する陷穽に落込まなければならないといふことに關しては一考も二考も三考も必要なのだ。早川雪州君のチートは藝術的見地から觀て頗る出色の出來榮えであつたとやら、然しそれを認めるのは我々仲間即ち特殊な藝術に生きてゐる俳優とか其の批評家とかのみ受取らる可き理由で一般の日本國民に取つては出來が好かつた丈け餘計に迷惑を感じた結果になつたのだ。此の時の早川君の態度は命をも捨てる覺悟で一本路を走つたのだ。同胞からは賣國奴といふ災の冠を冠らせられながら……そして彼は日本人と云ふものを眼中に置かずして進む間に現在のやうに世界の市場に賣込んだのだ。日本の劇界にあつて毛剃や石川五右衞門

や小泉修三の役を巧に演じたからと云つてその役者を非難する」ものはよもや一人もあるまいが、米國にあつて米國人の善良な男女に對して日本人が毛剃や五右衛門や修三のやうな態度を巧に演じたとなると日常排日に苦んでゐる在留同胞間に強い刺激を與へずには置かぬ。進んでは國際關係にも面白からぬ影響を與へずにはをかぬ。商賣だ何でも御座れと長いフイルムの間に眼にも留らぬ程の帽子取役や、投り飛ばされ役に廻つてゐる間は見逃されてもゐるが役柄を認られて役を振られ、活躍が眼に立てば立つ程國民としての非難の目標が擴大すると云ふ所の海のやうな米國の活動界に、其の渦卷の坊底を見定めずして輕卒に飛び込めるものではないのだ。てんからこんな事に無神經に出來てゐる俳優諸氏は仕合せなものだ。此の故にダイヤナフイルムコーポレーションが今以て有耶無耶になつてゐるのは兄さん達の爲めに結句有り難いとも思つてゐる。元來兄さん達の今度の旅行の目的はあながち米國へ活動を寫しに來たのではないし、芝居の見學と許りに限られてゐるのでもなく、流行語を使はして貰へば生活革命と云つた意味が多分に含まれてゐるのだから、米國へ來て活動も寫さず、何も表立つて仕出かさないからと云つて、やくざなやうに取られては困る。然し腹さへ定ればば何んでもやる、風の吹廻しでは青山君などのお引廻しを願ひ皆さんと一所に例の帽子取役からおつぱじめないものでもない。初心者が下手から稽古するのは極めて順當な事だから。

珊瑚君。米國といふ國は其所へ行くと有難い國で何をしても生活が安易だ。又國中到る所の都會へ數週を出でずして本場の新譜も新劇も廻つて來る。完備したライブラリー、ミウジアム、リトルセアタの幾つかは何所の市にもある。勉強は何所でも出來る。兄さん達は目下勉強する事が澤山あるんだ。但し御承知のやうな氣性で前述のやうな環境に入る事もあるんだからひよつとしたら今後も謬報が傳はらないとも限るまいと思ふが、取り上げて心配しないやうに知人諸氏にもよろしく賴む。

珊瑚君。兄さん達と一所に日本を出た先生方は最早とうに世界を一と廻りして日本に歸り其の後も後から／＼と見物人がこつちへ押し掛けて來ては大急ぎで歸つて行つて大變こつちの事を褒めてゐるやうだが、兄さんに云はせるとこつちだからと云つて何も大した事は見當らないよ。萬事大仕掛で機械が揃つてゐると云ふ迄の事。今迄の中で兄さんを感服させたのはあの人達の縱に通り脱けて行つた所には一つもなく太平洋の孤島ヒロ市の奥にあるキラウエヤといふ火山に唸るラバの響き－去年の冬北極に近い所に住んでゐる從兄を訪なふ爲めに踏込んだキヤ

ナダロツキーを越えてからの大曠原の雪景色と丈だつた。そこには northern light と稱へて凍る夜の靑空一面に光が進軍する光景や、sun dogs と稱へて餘り寒いので太陽が左右に二つの屈從者を作つて雪原のあなたに消ゆる奇態な天象やがのぞまれた。こういふ事はいづれ長いものに書いてお目にかけるつもり、兄さん達のやうに麋塊に塗れながら流浪する旅行には、それに酬ひらる丈けの意外な收獲は澤山ある。いろ／＼お知らせし度い事もあるが少し長くなるから今度はこれでやめる。この公開狀に對して雜誌社がいくらでも呉れたならみんなで蜜豆をお上り。

絶代畫說

長井金風

繪畫は時代に先だつ、繪畫も詩も豫言的である、故に繪畫は時代に先だちて、時代の變轉を豫言警告する、もしも繪畫にして時代に先だつの精神も無く、又その暗示をも與へ得ぬものは繪畫として看るに足らぬ、假令それがどれ程の技巧あつても、それは單なる職人の技巧に過ぎぬ、私は何も職人といふことを賤民と同一の意味に用ゐて、時俗の非難を招致するを好むものでは無い、職人は賤民では無い、今日の藝術家たる俳優を昔時は『非人』と稱する特殊の階級に置いて、自由市民の列に入れなかつた、私はさういふ意味で、畫人を職人と呼ぶのでは無いが、單なる自己の生存のために自己の手足を動かすだけで、猿が芝居を務め、犬が曲藝する樣に、單なる藝を、單なる口腹のために演ずるものは、何時の世でも賤しいものとする、假令それが內閣の最上顧問の法律家でも、或は內務、宮內の勅任技師でも、今現に吾輩の指摘し得べき「非人」階級の專門家は世に少くは無い、獨り繪畫にのみいふでは無論無いのである。

吾輩は政治を一の藝術と見ること獨逸の極端な政治學者と同じとする、しかし每年例の帝國議會を文展、帝展の繪畫、又は他の音樂と同様、乃至は國技館と同樣となさば、彼等は憤慨

する、而して世間の畫人は帝展を單なる兩國の大場所にかける大相撲と同一のものとして、彼等は當然といはぬばかりの顏色をして居るのを怪しむ、繪畫も、相撲も同等のものと、相撲が體育とやらに補ひある位の程度で、繪畫が風敎に補ひあるものとして、政府でも、又彼等自身にも甘んじて居るのは、實は吾輩から看れば甚だ奇怪にも、又慇然に堪へぬ。

今や世界は新思想に征服せられんとして、動搖しつゝある、この革新期に當りて、繪畫は果して天下に何を敎へ何を示して居るだらう、又何を敎へんとしつゝあるだらう、繪畫は時代に先たつべきものである、しからば我輩は繪畫を看て、世界の將來をト知し得べき筈である、その繪畫は果して職人以上に、天下に何を敎へ、天下を如何に導かんとしつゝあるのであらう。繪畫は美術品だ、否、國産品だ、西洋人にも賣れる、それを奬勵するのは、取りも直さず國産を奬勵するのだといふ樣な考へで、文部省でやつて居るのではなからうか。

大雅堂が初め扇子百本に畫いてそれを江州に賣りに行つた、それが拙劣なりしより誰も買手が無い、そこで大雅堂は發憤して、百本の悉くを瀨田の長橋に拋棄して京都に返へり、再び勉强して大家になつたとは、世俗の傳ふるところで、何時かの小學修身書にも書いてあつた、しかしそれは餘まりに繪畫といふものを知らぬ愚昧の沙汰で、又餘まりに大人傑士を[illegible]如何にも文部省式の觀察である、大雅堂は初め土佐派を學んで相當に出來たので、殊にあの人は極めて敦厚な性質で、決して輕るはづみに自作品を賣りに出す樣な人では無いことは、その手蹟を見ても知らるゝ、畫の簡疎なるを看て、俗人は何か無頓着の人にてもありしかの如くに誤想するが、その畫の簡疎なるは、その字の瀟散なるが如く、稽古し、努力して簡疎になつたので、投げやりで、あんなのを書いたものでは無い、非常に丁寧なものである、それは彼れ一人では無く、彼れの心友なりし大島芙蓉の篆刻でも、韓天壽の隸書や行書を見ても、彼等仲間の心を費やすに如何に苦んだかゞ知らる、粗笨なのは皆僞作である、彼れは初めより土佐派によりて餘程上手に繪を書いて居たのであるが、祇園南海の所持して居た瀟尺木の刻本を見て、殆めて南畫の高雅なるを知り、從前學ぶところを悉く棄てゝ南畫の一路に向上したのである、しかし當初の考へでは、南畫も畫である、畫の最上級なものである、それは必ず世人を驚かすであらうと考へた、そこで百扇に畫いて、大津繪賣りの樣に、何か扨先づ近縣の江州へ行つたのであらうが、當時京都の歷々の學者ですら、南畫といふものは見たことが無く、大雅堂の後輩なりし皆川淇園すら未だ南畫を知らずして、應擧の弟子の畫

雪に心酔し、村瀬拷亭は松村呉春を二無きものと思つて居た程だから、大雅堂の初めて扇子に畫いた頃は、天下何人も南畫といふものを見たことが無く、怪物でもあるかの如くに異様の眼を發てたは無理も無いことである、大雅堂はこの江州旅行の一經驗で、世人の存外語るに足らざるを知り、天下に已れを知るもの丶得易からぬを悟り、而して眞の繪畫といふものは、決して人の爲めにするものでは無く、已れの爲めにのみなすべきの道たるを覺つたので、畫の大道に撞着したのである、それ故恐く昨日の我れの卑しき心を以て畫いた百扇を抛棄して、自分を向上の一路に導き上げたのである。

畫といふものは、元來自己の爲めにするの道で、他人のために畫くのでは無い、このことは萬古を通じて繪畫の大道であり本則であつて、獨り畫といはず、天下の藝術は皆それに外ならぬ、卽ち政治も藝術であり、戰爭も藝術である以上、自己を滿足せしむる爲めにするものであつて、決して他人の爲め、他人の歡心を買ふ、他人の賞賛を博する、そんな鄙劣な、下劣な、淺墓な心根ですべき汚されたものではない。

古しへより聖哲の士は皆天下に先たつの器有り、尋常評言文字を以てこれを川せば、忽ち天下の爲めに誤まられ、怪しまれて、十字架上に釘つけらるゝを免れぬ、それ故解すべし、解すべからざるの詩に托して、これを詩といふ、畫も亦此くの如しで、もとより普通の議論、普通の說明、普通の說法では、行かれぬところを畫で現はしたので、それ故畫を無聲の詩ともいふ。しかし此くいはゞ又世間の淺薄なるものは、然らば畫は何か俗の諷刺畫、鳥羽繪、ポンチを無上極意とするかの如くに速了するものもあるべし、畫は此くの如く淺薄に、鄙俗なるものでは無い、既に我れは聖哲の士といへり、聖哲の見るところは此くの如く卑近なものでは無く、皮相なものでは無い。

今少しく轉じて、唐朝の繪畫の革命のことを謂はん。唐の一代は六朝以來のアラビア貿易全盛の後を承いて洛陽の富貴は前古未聞の發達をなし、アラビア商船の齎し來れる珠玉香料珍寶は、廣東より、泉州より、錢塘口より無限に輸入せられ、唐の文化はこれらの新貨に彩られ、その建築も、その輿服も美麗の極を盡くせり、唐朝は五胡十六國の外人が內地を蹂躙し、從前夷狄なり、野蠻人なりと蔑んで居た塞外の種族が公然支那の內地に帝王と稱した山河瓢梨の如くに破碎せられた後に起つて漢民族を一統し、日月再び天に冲して、その文物典章は燦然として備はり、その經術は賈公彦、孔穎達の官撰の注疏に一定せられ、その文字は魏晉人の蕭散閑放なる風度より、歐陽詢の方正なる矩度に移り、扁平なる形は、長方に變じたり、詩において

は陳子昻により齊梁叔季の習ひが一洗せられんとせり、唐朝の繪畫は大小李將軍により如何にこの洛陽の富貴に相應しゃ金碧燦然たるものになりしかを看よ、石綠も、石靑も、所謂岩繪具といふものは後世までも、ピルシア、アラビアの名を冠した程で、唐朝の繪畫が、從前の植物顏料から、礦物顏料に移つたのは、その由來淺しといふことが出來ぬ、しかるにこの間に起つて洛陽富貴の寂莫を豫言し、唐朝文化の破綻を警告したのは王維である、此くいはゞ俗人は直ちに王維の詩集でも繙いて何か見出さうとするだらうが、王維の詩や文章には、それらしいものは更に無い、それを詩や文章で言ひ現はさるゝならば、何を苦しんで繪まで描く必要は無い、王維の詩中に畫有り、畫中に詩有りといふは、そこを指すのである、詩では何も言はぬ。その畫はといへば、王維の畫といふものは、青綠山水は矢張り純然たる唐法で、雙鈎夾葉の樹は、これは古しへの絢法の遺りである、絢法のことは後に言ふ。

しからば何故に前に王維を豫言者であるとしてこれを古しへの聖哲に比したかといふに、王維の有名な雪裡の芭蕉といふのがそれである。

雪の中に芭蕉があるべき筈で無い、芭蕉は至つて脆いもので秋風が立てば直に葉が敗れて仕舞ふ、芭蕉は雪の中にあるべきもので無い、それを王維は雪中の芭蕉を畫いたといふ、又今世に傳へて居る、王維の雪中山水といふものがある、それを見るに、皴法も、點法も、何も無いもので、單に水墨で一抹殺しただけのものである、しかしこれを見て我輩は大に感じた、王維はこの一抹殺の力を以て唐畫を革命したものと感じた、而してこれは仲々容易のことでは無く、實に畢生の力を振ひ、一命を賭してした、全く渾身これ膽でしたことなるを悟つた。

王維のこの革命は非常莫大の結果を齎した、支那、否、世界人類の文明の上に容易ならざる暗示を與へたのである、繪畫といふ一點よりのみ論ずべきものでは無いが、我輩は又姑く迹を繪畫の底に晦まして少しく畫法といふものから、宇宙、人生の性質、將たこの既往將來を物語るとしやう。

王維は南畫を創めたと一般に學者は說く、しかし王維は破壞者であり、建設者では無い、完全に南畫といふものを建設したのは、北苑であり、巨然であり、荆浩であり、關同であり、范寬であり、李唐である。

人體を構成する許多の線に宇宙の美を寓するは希臘彫塑家の能で、彼等は近きに取れるものであるが、遠く天文地文の上より、人文のイサクサを化成するのは北苑なり、巨然なり、荆浩、關同で、イサクサの中に許多の美有り、無數の畫有るのである。

畫とは宇宙に遍在する無限の線の、偶然吾人の眼に觸れ、心に感じて吾人を昏倒し、醉殺せしむる、ある一線の魔力に生ずるのである。

元來宇宙は無數の小渦紋が、一つの大渦紋に率ゐられて、無窮に旋轉して居る現象で、凡ての音が音樂になるであらぬ如く、すべての線が畫になるでは無い。

渦紋運動のことは吾輩前年「性純朴義」といふ書を、上海に出版し、この書は佛蘭西にも傳はつて、多少の共鳴者があるがこのことは今は略して云はぬが、畫は線より生ずる、線とは點より點へ、引き延ばしたものであることは、誰も異議あるまい、線に美醜有る、故に美しい線の組合はせを旨とする。

通俗にいへば、美しい線とは、柔らかにして硬ばらず、彈力有りて枯燥せぬ、水々(ミズミズ)した線をいふ、王敬美も、又淸朝の王覺斯も共、倪雲林の畫を喜ばざりしは、所見あるので、雲林の畫は、關同から出て居る正しい畫であるが、彼れは關同の正鋒を變じて、側鋒を用ゐた、その結果としていやな線が出來た、いやな線とは枯竭した線をいふ、雲林の描く線は、流石に洗錬されて居る、しかしいやな線といはねばならぬ、何故といへば枯竭して居るからである、枯竭した線は何故いやなりやといふに線に水々しいのを美とする、枯竭して居るのは病的である、病的なのは決して快い筈は無い、それ故に王麟州や、王鐸の雲林を喜ばざりしは見るところ有りといふべきである。

畫といふものは、もと宇宙の情思を畫くものである、宇宙の渦動は、もと宇宙性情の巳むことを得ざる自然の運動で、萬物も亦こゝに性有れば、卽ち情思がある、性とは享くるところをいひ、その動くところを情といふ、情思は盲目的のものであるが、衝動に始まつて、運動に向へば、彼れ、彼れを率ゐ、彼れ又宇宙を率ゐて居る、聖哲の士が天下に先たつの憂有る所以のものは、性情の動くところを洞見して、彼等に情思の滿足を與へんが爲めに憂ふるのである、情思を抑へんが爲めでは無い。

線の旋動は情思の旋動である、情思はもとイキ〳〵したものである、それ故に線の美といふものは瑞々(ミツ〳〵)したものであらねばならぬ。

畫といふものは、もと吾人が宇宙に遍在する無數の線に醉はされて、その美しい一線の心に銘したものを取つて縑素の上に再現せしむるに外ならぬ、孤掌は鳴らさる故に、この線彼の線と對し、かの線この線に應じ、彼れを以てこれに反し、これを以て彼れに諧和せしむる必要上、山を描き、水を添へ、地上觀るべきは木に如くは無き故に木を寫し、石を加へ、彼れに樓閣を構へ、これに人物を點ずるので、もと皆線の調和を目的とし

たので、山水樓閣は目的で無く、即ち假借物に過ぎぬのである。前年ある當時に有名なりし一日本繪師の支那へ行き、歸りて瀟湘八景圖を作らんとして經營甚だ苦しめるを聞き、我號笑つて云く、啓書記のまゝに描きたりとて誰か非となさん、必ず御土産を點在せしめんとするが故に苦しむなり、胸に一の瀟湘無くんば、假令その地を百巡回すとも、豈一片新意を發ゝるに足るの好畫景に逢はんやと、又曾つて支那の宗社黨の一領袖とて有り、墺國公使をも務め、外務次官ともなり、且その父は世界的に英雄とも稱せられたる人なり、その言として、共和政治は理想政體なり、惜むらくは支那に於いては一百年早しといへるを、世俗傳へて名論となせり、我號彼れに謂つて云く、古しへより帝王の統を垂るゝ所期するに千萬年を以てす君は則ち九十有九年の業を創めんと欲するかと、因りて梨花を畫き、これに題して云く、

倚天長劍玉鏘鳴。柳絮欲飛花滿城。翻爲文人憐器小。一家寒食萬清明。

飛人は自ら一家の春秋有るべし、萬寒食有り、萬清明有るなり、この故に平生胸中の抑鬱に堪へずして、遍ねく天下に行きて名山川を觀るも、自然の我れに教ふるところは實に少し。畫人は自ら渾淪の墨有り、何を苦しんで甘んじて下風の後塵を拜

して山に模し、水に倣せんとはする、故に當さに知るべし、畫山の一片石は黄子久の全面目にはあらず、天台に入りて後に松針石脈迴然として異ること有りといふものは、未だ奇とするには足らず、畫の迹は進むも、畫の情にして變ずるにあらざれば囚を停めて智を長ずるの類のみ、功は空しく施さず、藏文進の筆を行るに頓挫有る如き、蘭葉の描法を用ゐて小變し、務めて媚を世に取る、俗の遠州流の生花式の如し、病眼に空華を見るものにして、一歩を失して魔道に入るものなり。

我れは則に絢法といへり、絢法の語は我號の創始に係るが故に、この語は釋明を要す、孔夫子の繪の事は素を後にすといへるを、朱子は誤りて素より後にすとなせり、朱子は宋代時俗の畫法を知りて、古しへも亦此くの如しと謂へり、今傳ふる閻立本の帝王眞迹圖の如き、或は新羅朝、又は我が法隆寺の壁畫を觀れば、成る程、初めは先づその地を白粉に塗りて後に彩色を施くる如きも、所謂繪とは壁畫の謂にはあらず、素を後にすとは素以て絢となすの謂にして、絢とは後世の畫成りて後、焦筆を用ゐて勾するが如きなり、繪とは今の刺繍の稱にして、絢は以て輪廓をなす所以なり、この故に畫は輪廓より筆を起すにあらず、輪廓は亦繪にあらざるなり、繪とは五彩の色なり、畫とは亦絢の以て劃る所以をいふ、後世の金粉を用ゐて界すると似た

り、唐以後士大夫の畫起りて、繪とは線の會するをいひ、線の交會して諧調するよりいふなり、夫れ絢の素たるを辨へず、素とは絲の類たるの本を忘れて、素地となすが故に、遂に輪廓の有無を以て東洋繪畫の西洋に異るの著しき特徴となし、併せて又畫は筆を輪廓より起すものとなすに至りて古法泯然として廢しぬ、唐の圖像の素描なるものを見て、畫は古しへより皆此くの如しとなすの類、畫を知らず、又古しへを知らざるの甚し。

畫は輪廓を主とせず、畫に線といふは皴をいふ、畫は皴を以て主とするなり、曹弗興、畫を善くし、人物の衣紋皴皺を作るといひ、北苑の披麻皴を始めたる、皴とは萬葉に志和掻き乘りしといへる志和にして、シワの語は皴の字音に出でたること、略察し得べし、皴の音はシンにして、シユンにあらず、駿といひ、竣といふはシユンの音なれども、竣なり、浚なりはシンにしてシユンにあらず、この兩語の關係は又我が邦語のハシル、ハシコキ、ハカハカシなどゝ、ポチポチ、ポキ、ボキ、バカバカシなどの關係に似たり、これら兩者はもとは同語の音轉にして、Haciru, Hacicoci, or pachipachi. Hacuhakaci, なとがPochipochi, bocibaci, bacabacaci, に轉じ、卽ち馬鹿の語と、賢しの語は同一語の音轉なり、それと同じくシユンといへば、ツル〳〵したる意味なれども、シンといへばシワとなり、シユンといへばハヤアシのことなれども、シンといへばタチロク意味となるなり、ほきの懸路など古歌にほきといへるは、ばき〳〵したる路の謂にして、はかとらぬをいひ、はかどるといふも、ポチ〳〵行くなど遅きをいふものと皆一音の轉にして、もとは同語なり、轉音反語の妙を知らば、以て言語の秘密を悉くすべし、言語の秘密は宇宙の秘密なり。

衛夫人稱す、弟子王逸少筆勢洞精にして字體遒媚なりと、字といひ、畫といふ、皆線の遒媚なるを尚ぶ、遒媚とは、前にいへる柔らかにして、而も彈力有るをいふなり、線の遒媚を尚ぶこと獨り字畫のみをいふにあらず、建築しかり、音樂亦しかり、音樂に音波をいひ、繪畫建築に光波をいふ、その觸るゝところは耳と目の相違有りと雖も、その觸るゝ所以は則ち一なり、その妙は使轉に在り、使轉の限り無き動きを示さんが爲めに山水を假り、樓閣を借るなり、使轉のどこ〳〵までも盡くる無きを現はさんとして、遊戲自在にするなり、大遊戲大自在にするなり、これを名畫といふ、言を用しては鄙俗に遠かる、鄙俗なる線とは洗錬せられざる線なり、陳言務めて去るといふ、亦これに同じ、俗子は徒らに東西の畫に異るあるを知りて、その同じきところを知らず、書畫に皆その勢ひ鯉魚の躍るが如くなるべし、何ぞ曾つて反轉せさらん、又彼の濠梁上に行き、鯉

魚の游ぶを見る、當さに其勢を悟るべし、古人の觀勢といひ、戲鴻といふ、觀るところは則ち一なり。

三味線の自ら調律しつゝ自ら彈奏する如く、畫はピアノと異り、而も千錬に千錬の功有り、百磨に百磨の功有るは則ち未だ曾つて一ならずんばあらず、絲竹の妙は必ずしも曲の上に在らずして、基礎たる音色に在り、畫も亦しかり、畫面は末なり、基礎たる線の洗錬せらるゝにあらずんば、何を以て見るべしとなすことを得ん。

畫は又描きつゝある間に時令生ず、未だ筆を着けざるの前に時令有りて行はるゝにはあらず、故に筆の行くまに〳〵霞棚引きて春立つを知り、夏雲奇峯を出して炎帝の事を用ゐるを知る。

時月は筆に隨つて生ず、故に筆に化工有りといふ、山河は性情の迹なり、情思の節度に時月有り、天道は關たり、人道はその準規なり、地道はその矩度なり、時日は天地の調節なり、畫は天に屬して地に屬せず、況んや人をや、筆の行くまゝに地に制せられ人に率ゐらる、畫は人を率ゐんとするなり、萬人を率ゐんとするなり、率ゐるに道有り、故に時月生じて、道德行はる。

六法に氣韻生動といふは、畫成りて後の驗なり、未だ成らざるの前、豈所謂氣有り韻有るを知らんや、余は少年の時長船の劍工を招きて鍛冶を學び、又眞葛香山などの陶瓷窯を看るも

その煮えといひ、匂ひといひ、又味ひといふは皆物成りて後の品定めにして、湯候火候の加減は熟錬にても自知すべけれど、必ず物毎にして意の如くならしめんことは鬼神と雖も前知の由無きなり、

晉人は風度を尙ぶ、夫れ性に格有り、時に調有り、畫格は畫調と相得て以て加ふべき無し、天下の能事畢れり、故に云く能事は人の促迫を受けずと、再言すれば筆に格有りて、墨に調有るなり、然れども墨は自ら變ずるも他を變ぜしむること能はず、變ずるものは筆なり、墨にあらざるなり、元人の輕く變ずるものは末なり、唐畫の未だ變ぜざるの畫格自ら高きには若かず、元信は變を學びて格無く、雪舟は格を得て變に通ぜず、時月は天の行なり、筆行きて時月生ずるものは已むを得ずして變ずるなり、或は時に感じて畫く、變ずるものより興ひを構ふるにはあらず、時は線にあらず、線は情思の自ら動ける迹なり、故に渲淡す、王維は革命者なり、革命は「時」の大變なり、故に渲淡の一法を創めたり、皆誠に已むを得ざるの活運動なり、龍の野に戰ふ、その血玄黃なるが如し、戰ふとは交接なり、二氣の交接なり、故に和なり、時の和は用ゐて以て畫を和するなり。

畫人は自ら蹊徑獨闢すべし、眼前の景物多くは進化率爾の惡畫のみ、故に宜しく既形萬象を一掃して原始の一線に復へるに

若かざるなり。

我れ今已にいへり、畫は己れの爲めにして人の爲めにせずと、俗子雷同して動もすれば自己自己といふ、人のためにするものは奴畫、而して己れの爲めにするもの亦以て畫となすべからず、畫を學ぶは自己を泯絶せんことを學ぶなり、美は宇宙の美にして自己の美にあらず、美は亘古にして至今なり、彌天にして匯地なり、何のところにか一點自己の醜を着け得んや、美は諸律す、諸律は法度なり、法度は自己をも他人をも平均す、法度は與奪なり、二十年畫を學びて始めて梅花を畫いて圓かなるを得なば、これ亦自己を圓成せるなり、自己は圓きが上に活躍すべし、圓きの後に横行濶歩すべきなり。

余齡七八歲、始與畫於江幡晩香。晩香時已七十歲許、與那珂梧樓有爪莖本支之別。梧樓官於文部。稱俠儒。名于時。因屢聆說。江幡也者家世隷于小場氏。梧樓與寒微。與兄春菴脫家奔南部。見其國君擢用。戊辰之變。奥羽廿餘侯伯。會盟白石、以禦西軍。梧樓與有力焉。南部降。梧樓禁錮。後遭赦。晩香善和歌。工詩。好作南宗小畫。有佳致。余又見渡邊小華問六法。小華方作花卉草蟲。顧盼左右。意頗驕。余覩其闘娟麗。童子何知。竊謂士夫不爲。不告而歸。距今不百年。愛其素朴亦知其非古法。弱冠過海出遊。往高麗謁大院君。善畫蘭。余



上書言時事。叨蒙寵遇。衣冠杖履許我追隨。余與暗則小阮先生之徒。精於書法。又有樋東壽。字畫雙美。屢米見。授餘數幀。距上顧若波有女弟子。善識余。每過則勸余習畫。然以年尙少。專爲經濟實用之學。措而不問。廿有餘年矣。

時論

法學博士 吉野作造

日曜學校萬國大會の開催に際して

十月五日から十日間、我東京に開かるゝ第八回日曜學校萬國大會は、我國に於ける初めての世界的會合たる點に於て、又世界各國から第一流の有力者の數千と云ふ數が集り來ると云ふ點に於て、我國空前の出來事である。時節柄宗教的會合などは動もすると等閑に附せらるゝの嫌ひなきにあらざれども、西洋の否な世界の心ある人々は、決して之を輕視しては居ない。どうせ此種の會合はお祭り騷ぎのやうなもので、直接に基督教の發達の爲めに、どれ丈け眼に見ゆる貢獻をなすやは明かでないが、之を機會として各國民族の間に相互信賴の情を喚起し、依つて以て平和的國際精神の振興を促すことは疑を容れない。此意味に於て丈けでも、此會合が我日本に開かれたと云ふ事は、我々の最も幸福とする所でなければならない。從つて又我々も誠意を盡して此會合の成功に畢らん事を希望せざるを得ないのである。

日曜學校萬國大會の初めて開かれたのは一八八九年である。最初は倫敦に開かれ、次いで三四年の間隔を置いて聖路易(セントルイス)、倫敦、エルサレム、羅馬、華盛頓を廻つて第七回は一九一三年瑞西のチユーリツヒに開かれたのであつた。此會合で一九一六年に開かるべき第八回大會の會場を東京とするに滿場一致で極められたのだが、戰爭の爲め延び〳〵になつて、やつと今年開催を見ることになつたのである。日本の基督教徒は此種の會合に何時でも指導者の地位を取る亞米利加側と協力して、準備おさ〳〵怠りなかつたやうであるが、併し宗教的會合として如何なる成功を收むるやは、今茲に予輩の問題とする所ではない。只切に其成功を祈ると共に、又內外教徒の熱誠に信賴して成功を疑はざる旨を一言するに止めて置く。予輩は茲では主として此會合が日本人の國際的精神の開發に對し、並びに日本現在の國際的地位の改善に對し、どれ丈けの副作用をするかを考へて見

たい。と云ふよりも干渉は宗教的會合としての本來の目的を傷けざる範圍に於て、右の二點の開拓の上に十二分に之を利用したいと思ふ。斯う云ふ意味に此會合を利用することは、事日本一國の利益を圖るが如くにして、其實又世界の平和の爲めにもなる。何故なれば日本一國の平和的進歩は、やがて東洋の平和の爲めに、世界の平和の爲めに大關係があるからである。

日本一國の立場から云へば、今日世界の各方面から有力な一流の人物が集つて來ると云ふ事は、願つてもない幸福である。何故なれば之を機とし、彼等を通して日本に對する十分の諒解を世界に求むることが出來るからである。凡そ日本が世界各方面の誤解を受くること今日より盛なるはない。排日熱が米國其他加奈陀、濠洲等に旺盛を極め、殊に加州に於ては所謂白熱的昇騰の域に達して居ることは言ふ迄もなく、支那朝鮮に於ては對日反感の極、日曜學校大會にすら代表員を出さないと云ふ始末である。之が爲め我國はどれ丈け損害を蒙つて居るか分らない。形にあらはれた所丈けでも可なりの苦痛であるが、眼に見えぬ損害に至つては實に測る可からざるものがある。之ではならぬといふので、外務省などでは新たに情報局などゝ言ふものを設けて、對外宣傳を司らしむると云ふ事であるが、一片の宣傳丈けで目的を達するや否やは元より大いに疑あるけれども、併し之も一つの方法たるを失はない。果して然らば、此方から行くまでもなく、向ふから、而も誂ひ向きの有力者が續々來到すると云ふ事は、思ひも掛けない好機會と言はざるを得ないではないか。然らば我々は之を如何に利用すべきであるか。

之について我々はいろ／＼の點に國民の考慮を求めて置きたい。

第一は、今度來る連中は日曜學校の相談に來るのだからとて政治や外交の事に全く關係の無い素人ばかりだと高を括つてはいけないと云ふ事である。外國の有力者が來ると云へば何時でも日本の官吏や實業家などの主だつた所が歡迎の衝に當る。金に厭かして迎接之れ日も足らず、殆んど一般民間に接見するの機會を與へない。而して此等の主だつた連中は自分達の狹い識見から割出して、政治家とか實業家とか看板を掛けたものには眞面目に熱心に物事を相談するけれども、其他の謂はゞ觀光團といふやうなものに就いては深切に待遇はするが、素人扱ひにして胸襟を披いて物事を相談すると云ふ態度に出でない。今度の來朝する連中に對しても又同じやうな態度を取るならば之は大いなる誤りである。今度の參會者中には、政治家もあれば實業家もあるが爲めに斯く云ふのではない。よしんば純然た

る宗教家丈としても西洋の宗教家は日本のそれの如く社會の實生活と掛け離れた所謂世捨人ではない。政治の事も分れば外交の事も一通り知つて居る。のみならず此等に對して大いに興味を持つて居る。其上彼等は社會の精神的指導者として一種の實際的勢力を握つて居るものだから、之をいゝ加減に扱ふと云ふ事は以ての外の過りである。日本の政治家などは兎角宗教家を世事に迂濶な妄想家と云ふ風に考へ勝なので宗教家の一團が來たと云つても、野球選手の一團を迎ふる位の態度以上に出でない憫れがある。斯う云ふ風に何等精神的準備と覺悟となくして彼等に接するならば、どんなに外形の歡迎が到れり盡せるものがあつても、何の役にも立つまい。

第二には、少くとも今度來る連中は外的歡迎丈けでは滿足するものでないと云ふ點である。前項と牽聯する事ではあるが、特に從來の外客接待振りが兎角此弊に陷り勝ちであつたから特に一項目として之を掲げて置く。我輩は之まで度々西洋から來た知人から日本の官紳の餘りに手厚い歡迎が却つて其自由行動を束縛し、折角のプログラムも遂行が出來ないで甚だ有難迷惑だと云ふ打明け話を聽いた。彼等の求むる所は今朝は博物館の見物とか晝は何某男爵邸の午餐會、夜は外務大臣の夜會と一刻の隙間も無く、引廻さるゝ事ではない。親切にする事だから無下に斷る事も出來ずして、實は彼等は非常に迷惑がつて居るのである。世間には斯うした外形的の接待振りの厚薄によつて親密の度を計らんとするものもあるが、此考へ方は彼等には餘り通用しないやうだ。我輩は屢々友人の海軍士官から聽く事であるが、彼等は遠洋航海の途上いろ／＼な港に上陸して土地の官紳から歡迎を受くるが、其時に向ふが使つた金高によつて日本に對する感情の冷熱を判斷する、從つて又特別御馳走されると自分の方でも彼等を呼んで無益な金を使つて其國と日本との親密な關係を其一夕の會食で開拓したやうに考へて居るらしい。こんな報告に基いて英吉利の態度が冷淡になつたの、和蘭が非常な好意を日本に示して居るのと判斷せられては殊に迷惑であるが、他からもてなされて喜ぶの情は又轉じて他を鄭重にもてなしさへすればすべて人が喜ぶものとする輕信に陷る。今や外來の客は斯う云ふ通り一片の歡迎には厭きて居る。況んや今度來る連中は初めから斯う云ふ形以外、何等かの精神的のものを求めんとして居るに於ておや。彼等は如何なる人々に、如何なるものを求めんかについては已に十二分の用意があるものと觀なければならない。我々は十分此點に注意して所謂パンを求むるものに石を與ふることなからんやうに勸めねばならない。

第三に我々は、彼等を迎ふるに厭くまで門戸を開放し、其

間に何等の作爲を用ゐてはいけない。之については我々は何よりも先きに彼等の希望を尊重し、彼等の自由行動を拘束せないやうに心掛けねばならない。更に我々は彼等が宗教的教養に陶冶せられた立派な品格を有する紳士であることを信じてかゝらなければならない。或新聞に露西亞の過激派とか、或は朝鮮獨立黨に款を通ずるものなどが、代表員に隠れて來朝するものもあり得る、と云ふやうな事を書いてあつたが、代表者が如何にして擧げらるゝかを考ふる時、かゝる悪意ある特殊目的を有するものゝあるべからざるは明かであるが、よしんばさう云ふものがあり得るとしても、之を軍事探偵視して巡査や憲兵が附き纒ふのは如何にも見苦しい。其位なら初めからかゝる會合を開かない方が好い。巡査や憲兵を附けなければならないと云ふ事は、取りも直さず此種の會合の開催地として日本は未だ適當でないと云ふ事を意味するからである。

之と關聯して我々が甚だ遺憾に感ずるのは我國一部の政治家が支那や朝鮮の代表者が來つて直接に其排日論を外客に說かんことを怖れて居ることである。此等の外客が日本に初めから悪意を有つて居るものか、或は少くとも支那や朝鮮に適當の特別の好意を有つて居るものなら格別、掛値のない所彼等は健全な常識を有する公平な第三者である。無論日本に客となつたからとて特に日本の辯護もすまいが、濫りに弱き者に同情して、日本の立場を強ひて諒解せざらんと努むるやうな事はなからう。然らば我々は公平なる第三者の前に、我々が非難さるゝと云ふ事を何等怖るべき理由はないではないか。若しありとするならばそは我々が密かに我々の非を自覺して居ると云ふ事になる。自分が正しいと思ふなら、何處で何を云はれても決して之を意に介するの必要がない。故に我々は若し支那人朝鮮人の外客との接近を少しでも氣に掛けるやうな事があつたら、或は此懸念が實際問題として何等かの形に外來代表員の行動を拘束するやうな風にあらはれるなら、之は獨り局に當る者の失態ばかりではない。日本國民にとつての由々しき道德的恥辱である。

支那や朝鮮が何を云はうと、我々に自信があるなら、毫も意に介する必要はないが、假りに彼等の言ひ分に相當の理窟があり、日本從來の彼等に對する政策の中には、多少確信を以て辯明し得べからざるものがあるとしたならどうか。さうすると一方には宗教は濫りに政治に關係しない方がいゝと云ふ理窟で外客と支那朝鮮人との接近をはゞまんとするものがある。支那朝鮮の人の訴へんとする所は政治問題である。此機會を利用して彼等の日本に對する政治的不平を漏さんとするのは宗教的會合としての神聖を瀆すものであると云ふ。併し之は宗教と政治との

相混淆すべからずとする傳統的一主義の誤解から來るので深く顧慮するに足らぬ。政治問題だらうが、經濟問題だらうが、各民々の親交と世界の平和とに大關係ある問題なら、我々之を論ずるに毫も差支はない。宗教家だつて同じく世界文運の進歩を念として居るものであるから、心に蟠りのあるのが元來親しい交を妨ぐる主なる原因であるから、不平があつたら何でも云ふがいゝ。之を云ふに今度の會合は實に絶好の機會である。此點に於て萬國大會の代表員は少しも遠慮する必要はないと思ふ。

斯して支那朝鮮の人がどんどん日本に對する不平を訴へたとする。而て日本の立場は之に對抗すべく道徳的根據が甚だ薄弱であつたとする。此際我々は如何なる態度を此間に取るべきであるか。或人は黒を白と辯じても彼等の非難を擊退せねば日本人としての面目が立たないと考るだらう。又或人は斯んな風に日本の醜惰をさらされては大變だから、かゝる政治問題の論題に上らないやうにしようと云ふもあらう。更に又支那朝鮮人と西洋人との往來を監視しやう、否出來るなら之を妨げたいと考ふる人もあらう。併しながら、斯う云ふ所謂愛國者的行動は我々の取らんとする所ではない。斯くの如きは精々所謂臭いものに蓋をする底の一時的彌縫策に止まる。眞に國家の開發を計り其道徳的進歩改善を促す所以ではないからである。然らば我々の取るべき態度は第一に他人の非難を虚心に聽き、正を正とし義を義とするの判斷に迷ふてはならない。第二に自分の非を擧げられた時に徒らに辯護の言葉を弄して自ら責むるに怯なるの弱點を忽にしてはならない。第三に自己にあると他にあるとを問はず、すべての不義は世界の表面から之を絶滅せねばならず、此絶滅の爲に我々が今世界の人々と協力して居るのであることを忘れてはならない。惡を平げんがために今や世界的一大示威運動を試みんとする際に、自分の缺點丈けは之を隱さうとするのでは、何處に我々は勇氣凛々として此大會を指導するの大氣魄を引き出すことが出來やうか。

尚此事は獨り支那朝鮮人の非難計りではない。外國人自身の或は加ふることあるべき非難についても云へる。彼等が日本に客となつたからと云つて、お世辭を云ふにあらざる限り、日本に對する評判が世界の各方面に於て頗る惡い此際であるから、隨分無遠慮に此點に關する説明を我々に求むるだらう。蓋し彼等が世界の惡を征服せんとするに熱心であればある丈け、日本に對する疑惑を等閑に附し得ない筈だからである。我々は彼等の熱誠を信ずる、從つて又彼等が露骨に日本に對する實際について我等に詰責し來るを覺悟せねばならない。之を云はないやうなら、我々は寧ろ彼等の誠意を疑はざるを得ないのである。

然るに世の中には斯う云ふ事になるのを怖れて、今度の會合に於ても排日問題等には觸れないやうにしやうなど〻云つて、まるで腫物に觸らざらんとする態度を以て此問題を所置せんとする人がある。無論我々國民の中には人から何か非難されると自ら反省するに暇なく、直ちに昂奮の極、度を失ふ底の人が少くない。併し之を怖れて事件を何時迄も曖昧に附するやうではそこに到底改善進歩の希望は湧いて來ない。冷靜に彼等の言ひ分を聽くと云ふ事は必しも彼等に屈服すると云ふ事ではない。辯解すべきは辯解し、改むべきは改める。更に進んで此方から主張すべき事もあれば彼等の非を責むる點もあらう。彼等の非を責むるに當つても、自ら其非を改めた者ほど言ひ分に權威が附く。日本が朝鮮人をいぢめるさうだといはれて、英吉利も愛蘭をいぢめて居るではないかといふやうな論法ほど道德的に力の弱いものはない。惡を去り善に就くの熱情の前には、須らく國境を超越すべきである。其爲めにこそ態々萬國的會合が開かれて居るのではないか。思ふに西洋から來る代表者は皆此心掛けを以て來て居るに相違ない。獨り主人公たるべき日本側に此點の諒解が無かつたならば、之れ獨り千載一遇の好機會を無意義に取り逃がした許りでなく、又日本民族の一大恥辱と云はざるを得ない。而して此點の諒解は獨り之を萬國大會關係者に求むべきのみならず、直接之と關係なき國民一般にも之を求むるの必要があると思ふ。

支那朝鮮基督教徒の大會不參加

支那並びに朝鮮の基督教界が今度の日曜學校萬國大會に代表員を出す出さぬの問題は未だに決定しないらしい。打つ棄つて置けば來ない事が明かなので、是非來るやうにと之まで內外の先輩を態々彼地に派遣して勸誘に努めたのである。それでも結局來ない事になるらしいが、よし來たとしても快く自發的に來たのでなし、又人數も非常に少いだらうから、我々日本人としては、矢張り大いに考ふべき一問題たるを失はない。併し何れにしても大會不參加と云ふ事は、支那朝鮮の基督教の爲めにも遺憾千萬な出來事と言はなければならない。

彼等は何故東京に來る事を厭ふのか。言ふ迄もなく、日本官憲の從來の侵略的武斷的態度並びに之に對する日本國民全體の無反省を憎むからであらう。併し如何に之を憎めばとて、基督教徒が國境を超越して其眞理と愛とを舒べんとするのに、之れまで

を厭がるのは餘りに偏狭に失しないか。成程支那朝鮮の人にとつて當面の何よりの苦痛、若しくは憤慨、從つて又當面の第一の問題は日本よりの壓迫を如何しようと云ふ事にある。從つて日本に對する反感に異常の昂奮を見て居るのも、之を諒としない譯には行かないが、併し少くとも基督教徒丈けは、も少し眞理と愛との輝きに眼が明いてゐる筈である。日本に反感を有つは止むを得ないとして、若し之が眞に東洋の平和に害あるものたら、彼等は何故に胸襟を披いて日本の基督教徒と之を談ずるの態度を採り得ないか。

日本にも基督教徒の數は澤山ある。隣邦の同教徒と同じ眞理と愛とに動いてゐるものが澤山ある。日本人なるが故に基督教徒だからとて安心が出來ないと云ふ風に疑ふのは明白に基督教的精神ではない。而して今我が日本の基督教徒は主人公となつて彼等を鄭重に迎へんとするのに、彼等が面を背けて之に應ぜらんとするのは、一時の憤激に昂奮し一時の利害に眼が暗んで、眞に基督教的精神から遠ざかつたものと言はれても仕方がないではないか。

現に日本の基督教徒の中には、日本在來の彼等に對する政策を以て不當なりと認むるものが少くない。否な多數は其武斷的軍事的色彩に極度の反感を示して居る。從つて又或場合には支那朝鮮の人々の言ひ分を尤もとし、中には之に共鳴し、彼等と力を協して呪ふべき惡主義を東洋の全局面から排し去らんことを考へて居るものもある。尤も此種の人々に對して一部の人は、之も實は官憲と同腹で畢竟我々を籠絡せんとするの手段に過ぎまいと邪推するものもあるやうだが、基督教徒丈けは、其處まで拗ねくれて考へまい。只今日一般民間には非常に排日熱が盛んだから、之に壓倒されて心ならずも參會を見合せると云ふものもあらう。之も事情は諒とするが、併し基督教徒としては甚だ臆病な態度と云はざるを得ない。眞に基督教的情熱に燃ゆるものは、之れ位の壓迫に怖れて大事を取り逃がす筈はない。

尤も支那朝鮮の代表者の渡日を躊躇せしめたに就いては我々にも責がないではない。一つには從來日本の基督教徒が、彼等の所謂日本の對外的罪惡を責むるに甚だ冷淡であつた事である。尤も我々日本の方から云はすれば、基督教徒が概して時務に迂濶であつた事。並びに政府の秘密政策の結果として、驚くべき程外交事情に無智であつた事を擧げて一部分の責を辨じて置かなければならない。斯くして日本の基督教徒は、自分の考から割り出して外から非難の聲を聽いた時、まさかそんな事はあるまいと云うて辯護する。そして彼等の非難を事實に基かざる惡意の

讒誣と見做し、彼等は又我々の態度を以て、知つて居る癖に餘りに白々しい辨明だと怒る。故に多少阻隔の原因があり、從つて基督教徒でも、日本人は駄目だとする考を起さしむるに至つた。故に我々は基督教徒として隣邦の友人と胸襟を披いて虚心に物事を談じようとならば、もう一層突き込んで日本の對外的行動の眞事實を知らなければならない。今までのやうな隣れむべき無智の狀態より脫しない以上、我々は十分なる信頼を彼等に要求することは無理である。

次ぎに今度の會合に際しての政府の態度として傳へらるゝ所も又著しく彼等の不參加の決心を固むるに與つて力があつた。それは支那朝鮮より來る代表者に對する差別的待遇の事である。支那や朝鮮の代表者は必ず其不平を米國人たぞに訴へて日本の不利益を計るに相違ない。故に彼等を嚴重に取締つて出來る丈け米人と接近するの機會を少くしようと云ふのである。政府が果してこんな馬鹿な方針を取る積りであるかどうかは分らないが、兎に角かう云ふ噂が傳つた。斯ういふ噂の傳つたに就いては、曩頃の米國議員團一行の來到に際しての政府の取締方が大いに累をなして居ることは疑ゝ容れない。あの時如何に政府が朝鮮人と米人の接近を妨ぐるに苦心したか。此無用の苦心は米人鮮人双方に疑惑と不快の念を深からしむるの外何の得る所があつたらうか。要するにこんな失態が累をなして今度も不愉快な思をするに相違ない、そんなら初めから行かない方がいゝと云ふので、やつと行かうかと考へたものまでが、急に又不參加に定つたと云ふ說もある。よし之が一片の噂に基いた誤解であつたにしろ、政府が今度の會合に對して名實共に、もつと寛容な態度を取るでなければ彼等の疑を今更らどうする事も出來ないやうに思ふ。

第三に我國の日曜學校大會關係者が、政府並びに之と同類と認められて居る官紳の直接間接の援助に餘りに寄り縋つて居ることも亦一つ考へねばならぬ問題であると思ふ。

斯く考へて見れば支那朝鮮の代表者が快く參加しないのも無理がないやうに思ふが、併し我々は斯う云つた一時の感情には代へ難い大きな意味があると思ふから、それ丈け此大會の不參加を彼等の爲めにも非常に遺憾に思ふのである。

今や軍國主義、武斷的專制主義は、東洋の天地には到る所に横行して居る。隣邦の友人は之れあるが爲めに我々を憎むけれども、彼等の中にも又之れあるは疑もない事實である。然らば我々進步思想を取るものに取つては軍國主義、武斷的專制主義は共同の害惡ではないか。而して我々は現に日本を道德的な基

礎の上に平和の發展を遂げしめんが爲めに、此害惡と大いに惡戰苦鬪して居るのである。此際隣邦の友人は即ち我々の惡戰苦鬪に於て眞に頼み甲斐ある味方であるべきのに、彼等が故らに我々と協力を拒むのは、之れ眞に眞理と愛とに徹底して居るもの、之れが爲めに粉身するの勇氣に富むもの丶安んずる所であらうか。我々は固より彼等の基督教的精神の缺乏を責むるのではない。固より日本人と比較して其深淺を説くのではない。彼等の立場は萬々之を諒とするが、只單純に基督教的精神の見地から觀て、我輩は支那朝鮮の教友の爲めに其態度を遺憾とするものである。

國防計畫の根本義

友人工學博士大河内正敏子は最近「國防計畫の根本義」と題する小冊子を各方面に配られた。子の主として目的とする所は、最近の議會に提出された豫算案につき、政府の國防計畫の根本的缺陷を指摘し、併せて國民一般に向ひ、其調査研究の急要を説き、且つ之を陸海軍人のみに委せ置くべからざる旨を警告せんとするにある。專門家の言として傾聽に値するは云ふ迄もないが、獨り國防計畫のみならず、政府の仕事の中には、此種類の缺陷が調べて見れば外にもないではなからうと思ふ所である。一つには國防計畫に關する確實なる智識を傳へ、又一つには政務に對する國民の監督を鋭敏ならしむる爲めに、茲に子の所説の大要を紹介する。

子の言に依れば、第四十二議會に提出された大正九年度の總豫算を見るに、總支出十二億七千六百萬に對し、陸海軍費は六億二千萬の多きに上つて居る。併し此巨額の費用は「只兵數の増加、艦船の建造、兵器の改良充實等の表面的國防」にのみ注がれ、「今日一日も計畫實施を急がなければならない最も大切な事項、殊に我日本に取りては他の列强と比較にならない位緊要な事項は依然として後廻しにされて」居ると云ふ。果して子の言の如くんば、是れ誠に由々敷大事ではないか。此點に我々は冷靜に子の説明を傾聽するの必要がある。

子は云ふ、今後戰爭に勝つ主要件は三つある。擧國一致、兵力及び國家總動員が之れである。第一は精神的要素、第二と第三とが即ち國防計畫を編み出す基本とならなければならない。此等の點に多少の説明はあるが、其點はどうでもい丶。我々の主として子に聽かんとするは第二第三の問題についてである。兵力についての説明を聽かう。兵力とは軍隊の人馬數、艦船

航空機の數量品質、指揮訓練の程度、兵器の數量品質等の諸ろ〳〵の要素から成り立つ戰鬪力を意味する。之について如何なる國でも採らねばならぬ原則は、平時に於ける兵力を最小にし、戰時に於けるそれを最大にすることである。最も之は國情によつて其程度を異にしなければならない。戰前の獨逸のやうな四面强國に圍まれて居る國は、平時に於て己に十分の兵力を養ふ必要がある。之に反して英吉利のやうな海を以て他と隔離して居り、且つ强大な海軍を有する國は、少くとも陸軍については、戰爭が初まつてから、其充實を計ると云ふ餘裕がある。平時から大兵を養ふ必要がない。獨逸のやうな遣り方を平時兵力充實主義といひ、英國のやうなのは戰時兵力充實主義と云ふ。一般に海軍の方は前の主義に據らねばならぬが、陸軍の方は國情によつて或は甲、或は乙と、選擇の餘地がある。動員計畫や兵器軍需品の準備の容易と云ふ點から云へば、平時兵力充實主義がいゝが、只之では經濟が堪らない。軍人は兎角此主義に據りたがるけれども、他の一般國力を考慮に置く時、之にのみ據つて國防計畫をされては堪つたものではない。予は少くとも陸軍について我國の採るべき原則は、戰時兵力充實主義だとして居る。さうすると、イザと云ふ場合に於ける兵器軍需品等の供給が緊急の問題になる。是に於て予は所謂國家總動員を以て國防計畫の最も大切な要素と認めて居る。

軍需品と國民生活物資との供給は、從來でも大事な問題であつたが、之からの戰爭には殊に矢釜しい問題になる。之を顧みずしては、殆んど何等の計畫も立て得ない。戰時兵力充實主義を採れば尙更らである。委しく云へば「戰時に於ける國軍の動員、艦隊の編成が企畫せられたる以上、それに要する兵器、彈藥、燃料を初めとして、すべての軍需品或は國民の生活必需品を如何に供給按配すべきか等の問題に對し、工業動員、原料動員、農業動員等の計畫は必ずや戰時の兵力と相併行したものであらねばならぬ。」若し此等の必要品の中、日本に於て需給し得ざるものあらば、之を如何にすべきや、「從來の國防計畫は此問題に對し、驚くべき無頓着を示して居る。殆ど何等計畫する所がないと云つてよろしい。」と予は斷定して居る。更に進んで予は「金と兵隊さへあれば、何時でも戰爭に勝てると云ふ舊思想」は「危險千萬」であると斷言して居る。

かゝる當局の無鐵砲を證明する一材料として、予は「帝國海軍の活動の源泉となるべき重油の供給」について一言して居られる。平時海軍の必要とする油は一年大約十五乃至十七萬噸であるが、我國一ケ年の產額は三十萬噸に過ぎず、而かも年々減少の傾向がある。戰時に到ればどの位の油が要るかと云ふに、

日露戦争當時と同じ比例とするも九十萬噸を要し、今日の時勢を鑑みれば、少くとも百四十乃至二百萬噸は要るだらう。更に陸軍の自動車用や、飛行機用を加算すれば更に驚くべき數量になる。而して之をどうするかの計畫を全く立てずしては、軍艦がいくらあつても何の役にも立たない。當局は之について殆ど何等の計畫を立てないのだから驚くと云ふのである。

油の問題は一例に過ぎない。其他彈丸、砲彈についても同様の事がいへる。一般に必需品の供給問題について何等積極的の施設がない事丈は疑を容れない。此等の點は今度の戦爭で歐洲諸國の最も痛切に感じた所であり、我々も亦之から深刻なる教訓を受けた筈であるのに、今尚之を等閑に附して居るのは驚くべき怠慢と云はざるを得ない。「工業能力、工業原料の貧弱」を極むる日本としては寧ろ此方こそ一日も早く準備研究にとりかゝらなければならない問題ではないか。

斯くて予は尨大なる軍備擴張を計畫するなら、國家總動員を十分に準備研究するの必要を説き、而して現在當局の施設に此重大問題を閑却して居るの失態を指摘して居る。更に結論に於て予は論歩を轉じて「戦時の陸海軍兵力は日本の工業、農業能力及び天然資源、原料供給力等を基礎として案出され」ざるべからず、即ち「國防計畫は國家總動員の能率を基礎として樹つ」べきを主張し、從來の當局の遣り方は丸で逆だと罵倒して居る。日本のやうな國柄では國家總動員の能力が第一で、之によつて兵力の多少を定めべきに、今日までの遣り方は尨大なる兵力を作り上げ、而も之に追隨すべき國家總動員の方は等閑に附すると云ふのだから、我々は之を默つて見ては居れぬのである。兎に角「戦時に當り、他國から軍需品、國民生活用物資、原料等の供給を」依賴みとする國防計畫は「不確實、不安、脆弱」を極むるもの、從つて兵力充實計畫は數年乃至十數年延期してもいゝから、國家總動員計畫丈けは一時も之を後廻しにしてはいけない。萬止むを得ずんば兵力を減少するも差支ないと斷言せられて居る。

先月中旬の諸新聞の報によれば、海軍省では明年度の新計畫として、燃料、油等の準備の爲め、約二千萬圓を要求する積りだとか、或は此等の問題を十分に準備研究する爲めに、燃料局とでも云ふべきものを新設する計畫だとか云ふ事である。後れたりと雖も時宜に適した計畫に相違ないが、併し等閑に附せられて居る問題は燃料に限らない。燃料局が新設されたからとて我々はまだ安心するの時機には達しないのである。否、よしん

ば他の方面についてもそれ〴〵新らしい計畫が立てられたとしても、一體斯う云ふ種類の失態は今日の官僚に珍らしくない。表面は一通りの形式を備へても根本に隱れたる重大な缺陷があつたために、イザとなつて見苦しいボロを出して居ると云ふ例は各方面にあるではないか。斯う云ふ意味に於て我々は國防計畫に於ける當局の怠慢を大河内子によつてマザ〳〵と見せつけられたを機とし、更に各般の政務に亘つて國民的監督の鋒鋩を鋭敏ならしめたい。

加州排日立法の對策

米國加州に於ける排日騷ぎは久しいものだが、昨今更に峻嚴を極むる土地法の改訂を一般投票によつて決せんとするの新運動が初まつてから一層我々の神經を惱ますこととなつた。今日までの形勢によれば、一ケ月後に行はるべき一般投票の結果が豫定通り排日運動者の希望を滿足すべきは疑を容れない。斯くては在留同胞の利害の上から見ても、又日本帝國の面目から云つても由々しき大事である。默視するに忍びずとして我國の朝野擧つて之を問題にして居るは怪むに足らない。

排日運動の由來については今玆に詳述するの必要なからう。只昨今特に排日熱の旺んになつたについては少しく我々に於て靜かに反省するの必要を認めざるを得ない。米國側の誤解、並びに爲にする所あるものゝ讒謗其他いろ〳〵の理由もあらうが、然し最近に於ける支那並びに朝鮮に對する我が官僚軍閥の政策の失正や、西伯利出兵に伴ふ各種の不利益なる風評やが著るしく彼等の反感を煽つたとは特に我々の注意を要する所である。

排日運動を中心とする日米間の懸案は土地法にあらはれた差別的待遇の外、移民禁止の問題もある。即ち現に在留するものに他とは違つた不利益な待遇を與へてやらうと云ふ問題と、更に新なる移民の來住を拒まうと云ふ問題と即ち之れである。昨今問題となつて居る所謂紳士協約は後者に屬するもので、加州が一般投票によつて改訂を斷行せんとする土地法は前者に屬するものである。最近まで我々は此双方に亘つて日本民族の利益を主張して來たのであつた。紳士協約を罷めて、之から多數の勞働移民を送り得るやうにして欲しいと云ふことは、毎年議會の質問や建議の上にもあらはれて居つた。況んやどの點から觀ても、不道理の明白なる差別的待遇の問題に於ておや。然るに今度は、加州の態度の餘りに突擊的なるに遠慮してにや、移民禁止の方は全然之を讓歩する代り、せめて差別的待遇の方丈は

我々の要求を容れて貰ひたいと云ふ事にやつて居る。今の慮强て差別的待遇問題の此上の惡化を防がんとせば、此外に疏通の途はつかないのだらう。さればにや昨今の新聞が、政府が移民禁止に讓歩して土地法の改訂を阻止せんとするの廟議を決したと云ふ報道に接しても國民は別に其軟弱外交を責んともしない。尤も全然理屈で爭ふと云ふのなら、差別的待遇の撤廢を求むるのは聽えて居るけれども、移民禁止の方まで我々の意見に從はせようと云ふのは餘り蟲の好過ぎる話かも知れない。併し日本と米國とが今日の樣な水臭い仲でなかつたのなら。移民禁止の問題ですら好ましい問題でないとして取扱はれたに相違ない。

移民禁止に讓歩して、差別的待遇に關する我々の主張を容れしむると云ふのは如何にも出來さうなやうな話 聽えるが、併し少しく米國の事情を知るものから見れば、之が又なかなか容易な問題ではない。政府は之について果して成算があるだらうか。九月下旬新聞の傳ふる所によれば、政府は幣原大使に對し訓電して、コルビー國務卿と交渉するの基礎たらしむべき目的を以て次のやうな對策を決したと云ふ事である。(一)米國中央政府の諒解と其斡旋を得て米國議會に高等委員會とでも云ふやうなものを設立せしめ之をして一般投票を阻止せしめんとする事、(二)若し此第一策にして成功せざる時は憲法違反の理由を以て訴訟を提起せしめ、排日立法を無效ならしむべき事、(三)之でも尙成功せざる時は國際條約に牴觸するの理由の下に、改めて上訴せしめ、法律の拘束力を失はしむること、此三策の何れかを利用することによつて、兎に角在留同胞の不幸を救ふことが出來やうと云ふのである。併し此方法は政府當局者の豫期するが如く果して實效を收むるだらうか。

高等委員會の設置を勸告して一般投票阻止に盡力せしめようと云ふも、米國政府は果してかゝる勸告を容れるかどうか。之を容れて委員會を折角造つても、果して彼は日本の有利になるやうな意味に於て盡力するかどうか分らない。更に一歩を讓つて大いに盡力したとしても、加州が果して彼等の勸告を聽くかどうか分らない、故に單に之れ丈では加州の自由行動を拘束すべく餘りに無力ではないだらうか。

次に憲法の精神に反するの理由で、訴訟を提起すると云ふ方法は形の上では第一策よりも遙かに有效だ。判決の結果は必ず法律の有效無效を明かにすべく、又從來此種の法律にして無效の判決を受けた例もないではない。併しながら今度の一般投票が無效のものなら大正二年八月の土地法其物が同じく無效であらねばならない。純法理論の見解が如何樣にあれ、前の土地法が今日まで有效に行はれ來つたと云ふ事は一般投票其物にも一

廣に有效の推定を受けしむることになる。併し之は單に推定に過ぎない。憲法第十四款には「州は其管轄内にあるすべての人に對して均等なる法律の保護を拒むことを得ず」とあるから、此條章によつて差別的待遇の無效を爭ふ法律的餘地は十分にある。そこで此方面から突進すると云ふも一つの確實なる方法に相違ないが、併しいよ〱出訴したとして米國の裁判所が急速に之を判決して呉れるかどうか分らない。現に繋爭中の小澤某氏の歸化權に關する訴訟についても明かなるが如く、米國の裁判官はなか〱常識に富んで居るから、此種のデリケートな渉外的問題についてはなか〱急速な判決を下さない。彼等の腹は恐らく斯う云ふ事を考へて居るのだらう。之を米國の有利に判決すれば日本が承知せず、又日本の有利に判決すれば國民が承知せず、何れの勝利に判決を下しても日米國交の波瀾は免れない。然らば斯くの如き訴訟は何れ米國が讓歩するか、日本が讓歩するか、自ら外交上定まる所あるべきが故に夫れ迄決定を延期して居つた方がいゝと。斯くして彼等はいろ〱の口實を設けて、何時までも延期に延期を重ねると云ふ態度を取るに相違ない。斯くては此第二策によつて急速な解決を見るの望も亦甚だ少ない。因に云ふ、土地法が加州の憲法に戻らざるや否やの問題もあるが、之は法律上の議論としても餘程六つかしいのみならず訴訟の上で爭ふと云ふ事になれば、日本の有利に解決せらるゝの望みは殆んど全く無からう。

第三、條約と牴觸するの理由を以て訴訟を起すと云ふ方法も亦前と同樣、甚だ實際的見込は立ちにくい。法律問題としては爭ふの餘地は大いにある。そして憲法第六章は條約と牴觸する一切の法律は裁判官を拘束するを得ずとあるから、之によつて確實に法律の無效を主張する事は出來る譯だ。併しながら裁判官は恐らく容易に判決を下さないであらう。

斯く觀ると第二第三策は、確實なるが如くにして而かも殆んど成功を見るの見込は無いとすれば、我々は是非共第一策によるの外はない。而して加州の決心は又頗る鞏固なるものがあるから、第一策に成功せんとせば勢ひ中央政府をして盛んに威力を加州に加へしめなければならない。併し州權尊重の念の強い各州が果して容易く中央の勸告を容るゝだらうか。先年學童問題につき日米兩國の關係緊張を極た時、時の大統領ルーズヴエルトが高壓手段を以て加州に特殊の壓迫を加へた事があつた。其結果單に州權保護と云ふ立場のみから加州に應援を申し出したものが頗る多かつた。故に強ひて中央が威力を州權に振ふと云ふ事になれば、事によると内亂を挑發しないとも限らない有樣であつた。今度はあの時から見ると事情が一層進んで居るの

みならず、米國に於ける一般排日熱も頗る高潮に達して居るから、中央の壓迫の結果が如何様に進むか分らない。從つて彼國の中央政府に專ら迫つた所で、州の事は如何ともすることが出來ないのである。換言すれば、中央は最早や州を動かすことは出來ない。若し玆に州を動かすものがありとせば夫は只一つ民間の輿論あるのみである。然らば我日本は、米國民衆の輿論を開拓する上にどれ丈け努力して居るか、甚だ心細い。

何れにしても已に在住するものに露骨な差別的待遇を與へるのは明白に不當である。此不當に對して我々は飽くまでも米國に抗議する。我々の要求に面を背けて何處までも改むる所なくんば、我も亦遂に假借する所なく報復の手段を取るの外はあるまい。併し我々の對策は此處に盡きるのではない。更に他面深く此等の點に就いての原因を研究して根本的に覺醒改革する所なければならない。此覺悟があつてこそ我々の報復にも意義が附く、之れ無くして只管威力を弄ぶのは、所謂暴に報ゆるに暴を以てするに過ぎない。我々は不正に對しては何處までも爭ふ。けれども同時に其因つて來る所を詳かに察め、改むべき所あれば直ちに之を改むるに躊躇しないのである。

高等委員會開設の提議

前項日米問題の評論中に、我國より米國に對する提議中高等委員會の設置といふ一項目ある旨を述べたが、此事について更に其後の新聞に表はれた報道に據れば、之は日米兩國聯合委員會の事のやうである。即ち兩國政府より若干名の委員を舉げ、愼重なる共同研究を遂げしめて、其決定に萬事の解決を委任しようと云ふのである。かういふ意味の委員會の設立を日本から米國に提議しようと云ふのである。

かういふ聯合委員會の開設によつて國際紛議を解決したといふ事は、殊に米國に於て先例がある。アラバマ事件其他十九世紀の初めから久しきに亘り結んで解けざりし英米の葛藤は、大抵此方法に據つて極めて滿足なる解決を見たのである。此際兩國政府が各一流の錚々たる人物を舉げて委員とした事、並に彼等が英米兩國に交る〲會合を開いて、暗に双方民心の融和を圖るに努めた事も、圓滿なる解決を見るに與つて力があつた。されば此種の會合はよしんば決定的解決を見るに至らざる事ありとしても、少くとも姑く會合を重ねるに連れて、双方が反感

を緩和する力のある事丈けは疑を容れない。

けれども若し英米の葛藤を圓滿に解決したと同じ樣な成功を今度の加州問題についても、聯合委員會の上に豫期するならば、之れは大いなる謬りである。予輩は聯合委員會を無益だとは云はない。けれども英米當年の葛藤と、日米今日の紛議とは、問題の性質が餘程違ふから、縱令各第一流の人才を蒐めて調査講究せしめても、決定的斷案を見る事は非常に困難ではあるまいかと思ふ。我輩一個に取つては今の所殆ど不可能のやうに感ぜられてならない。

先づ彼と此とは問題の性質が違ふといふ點を明かにして置かう。英米の葛藤は主として事實の認定並に法規條約の解釋に關する問題であつたが、日米の紛議は主として感情に關する問題である。彼にあつては事實の正直な認識と、道理の淡泊な了解とによつて一刀兩斷の解決を爲す事が出來るけれども、此にあつてはもと〱何となく氣に喰はないといふ所から起つたのだから、甲の問題を解決しても、他日乙の問題が起らないとも限らぬ。從つて此にあつては一問題を解決しても、更に第二第三の難問が起らないと限らないのに、彼にあつては當面の問題を解決する事によつて、光風霽月の親しみを恢復する事が出來る。次ぎにも一つ注意すべきは、英米の葛藤は米國中央政府の權限內の事件であるのに、日米の紛議は主として加州の權限に屬する問題たる事である。中央政府の權限で如何樣にも定め得る事だから、委員會に最後の決定權を委す事も出來る。が、若し州の權限內の事となると、中央政府では之を如何ともする事が出來ない。故に折角委員會を設けても、之は只州の決定の參考に供するに過ぎないものとなる。かういふ薄弱な權限を有するに過ぎないものなら、何も兩國政府で第一流の人物を仰々しく任命する迄も無いではないかといふやうな考も起る。さればとて最後の決定權を有するやうな強い權限を持たさうとすれば、豫め加州の承諾を得る事が必要だ。然し加州としては豫め此種の承諾を與ふる事は、取りも直さず傳統的州權獨立を中央の威力の爲めに捨てるといふ事を意味するから、到底承諾を與へないだらう。新聞の報ずる所に據れば、「加州問題善後策に關しては、該委員會に權限を委任する事」といふ條件を附して提案したといふけれども、米國政府は恐らく日本の提議を其儘承認するものではあるまいと考へて見ると、我々は委員會の設置に對して餘りに多くの希望を繫ぐ事は出來ない。

決定的權限の無いものとすれば政府の任命に繫る公式の委員

會とするは、少しく其の當を得ないやうにも考へらるる。予輩は寧ろ民設の機關として此の種の計畫の實現せん事を希望する。少くとも官設委員會を設くる前、永い間民設委員會の調査研究に據つて準備する事が必要だと考へる。いきなり官設委員會を開けと云ふのでは、權限の決定的なるものなら出來ない相談であるし、然らざるものなら出來ても大した直接の效果を期待する事は出來ない。少くとも目前に迫つて居る一般投票を阻止するには何の役にも立つまい。予輩は日米兩國の識者を集めて、共同研究する事が最も公平に又最も冷靜に双方の立場を比較し、紛議の由つて來る處の眞相を明かにし、且つ又彼我往來に依つて相互の反感を大いに融和するの效あるべきが故に、此設置に反對はしない。若し夫れ幸にして此處に何等かの解決案を發見し得んか、夫は法律上何等の强制的權威を有するものではないが、加州の當局並に排日政治家を道德的に强く威壓するの效は慥かにあらう。此意味に於て高等委員會設置の議に賛成する。但し官設の委員會を作るのはまだ早い。同時に又り餘に大きな望みをその上に懸けてもいけない。

小題小言六則

◎勞働不安

英吉利、伊太利を中心として最近歐洲の勞働界は又しても大いに動いて居る。英國では炭坑夫同盟の賃銀引上げ、炭價引下げの要求を發端として、三角同盟の大罷業の決行を見んとして居る。形は單純なやうでも、裡面に國有論が潜んで居る事、並に運動の方法がやゝもすれば直接行動の形を取り、例のスマイリーが糸を操つて居ると云ふ點に於て、之れ亦最近流行の急進的勞動運動の一表現に外ならない。伊太利のは金屬工組合の工場占領に初まり勞動者自身が自ら工場を賃借し、全産業を社會主義的經營の下に置かんとする運動として、初めから急進的勞働運動たるの特色が鮮明であつた。聰明なる宰相ジョリッチは先手を打つて資本家を抑へ、頻りに勞働者の肩を持つて居るやうだが、頻りに彼等の運動が純經濟的のもので斷じて政治的目的を有するものに非ずと强ひて、資本家勞働者の協同管理の下に全産業を置かんとするの目的を以て一新法案を作製すべきを公約して居る。說としては大に勞働者の鋒先を緩和するものゝやうではあるけれども、要するに彼の說の通りに行はれたとしてもやはり勞働者の非常なる勢力增進の事實は爭はれない。是等英米の勞働爭議が如何に解決さるかは暫く別問題と

して、一雨毎に勞働者の位地が著るしく向上しつゝある事丈けは明かである。只是に依つて所謂ボルセヸズムの勝利と斷定し得べきや否やは疑はしい。今日勞働者の地位の向上を最も強く叫んで居るものはボルセヸズムに相違ない。又ボルセヸズムが熱心に主張するが爲に勞働者の地位が著しく高められた事も疑は無い。けれども勞働者の地位が高まつたといふ事は、必しも直ちにボルゼヸズムの主張の全體が勝利を占めた事にはならない。是等の點は尙は他日詳論する事として、我々は今日の此形勢から大なる敎訓を學ぶ必要があると思ふ。就中資本家に向つては何時までも勞働者の食慾的無意識的要求に眼を蔽ふて讓歩を貪るの極めて危險なることを警告したい。更に勞働者に向つては近き將來に於て彼等の前に開かるべき光明ある運命に對し、彼等に對して十分に之を利用するの準備ありや否やを質したい。

◎日米交涉　昨今一番我々の頭を惱まして居る問題は、米國に於ける排日の問題だ。十一月二日を期する一般投票も落着く先はもう分つて居る。どの途日米の關係はだん〱惡化する許りで殆ど手の着けようが無い。民間にも之れはと思ふ對策は無いやうだが、政府の新聞を通して發表せる對策の如きも、何等光明を前途に與ふるものでない事は、別項に述ぶる通りである。只我々の呉れ〲も遺憾に堪えないのは、我々日本の側が此問題の此處まで極端に來るについて粗漏と不謹愼とが有つたにしろ、今度のやうな露骨無法の形で差別的待遇を我に與へるといふ點である。予輩は元來日米問題については、餘りに米國に同情し過ぎるとの非難を受けた程、日本側の責任を重く見て居つた一人である。かうした險惡な關係を作るに至つたに付いては、主として反省すべきものならば、それは我々日本の側だとは今尙ほ考へて居る。それにも拘らず米國の今度の態度は餘りに常軌を逸した不當な說と斷言せざるを得ない。此方が惡るければ向ふが怒るのも已むを得ないが、怒るといふ事も程度がある。加州今日の態度は、少くとも紳士として甚だ常軌を逸して居る事は、我々の敢て斷言するを憚らざる所である。我々は此點に於て切に米國識者の良心に訴へたい。之と同時に亦予輩は我が同胞の論客に向つても、十分徹底した道德的根據に立つて此問題を取扱はれん事を希望する。之れまでの議論には隨分得手勝手の主張があつたやうだ。一方には日本人に歸化權を與へないのが不都合だと云ふかと思へば、他方には外國に歸化するなどといふは不都合だと云ふものがある。日本人は米國に同化しないといふ彼等の云ひ分に青筋を立てる共舌の根の乾かぬ内、日本人は何處へ行つても日本國民として立たなければなら

ないなどと云ふ。かういふ得手勝手の議論を同じ人がして居るやうでは、我々が米國の政府の不義を責むる聲に、至つて道徳的根柢が無い。日米問題も今の所、如何とも手の着けようが無いとして、我々の執るべき道は自ら改むべきは改め、又他を責むべきは責め、一定の主義を以て去就を一貫する事が大切であると思ふ。

◎**人種平等案の提唱**　今度瑞西國ジュネーブに開かるゝ國際聯盟總會に、我國は復たもや人種平等案の提案を爲さんとするとの事である。或は之を提案したいといふ一部の民間の希望に過ぎないのかも知れない。何れにしても人種平等の名は甚だ美である。此大義の提唱に日本が主たるチャンピオンとして活動する事は、我々國民としても甚だ愉快な事である。併し乍ら此提案を爲すについて、我々の私かに懸念する所は、我々日本人に果して此提案を爲すの準備ありや否やといふ事である。換言すれば我々自身此大義に悖るやうな事を現にして居ないかといふ事である。も一つ注意せねばならぬ事は、人種平等は國際交通の基本原則ではあるが、之を實際に適用するにはいろ〳〵條件が付せられるといふ事である。平等の原則が定まつたからと云ふて、傳染病毒を保有する人間を我々の家庭に置かれる事が出來ないと同じやうに、生活の理想を異にし、人類共存の趣意の爲めに獻身するを辭せざる底の者でない限り、完全な平等の原則に共儘行はれ難い理由がある。従つて此一則の確定は、例へば夫の移民問題の如きを直ちに解決し得るものではない。米國や濠洲の移民問題の解決を爲さうとなら、只我々が白人と同様な生活の理想を有し、又世界共通の文運の進歩の爲めに同じやうに努力する考であるといふ事を表明する事によつて問題は解決し得べきである。何れにしても人種平等といふやうな基本原則の決定は誠に結構だけれども、それは何處までも一個の原則として確立すべきであつて、或國が或特別の目的を遂するが爲めに主張すべきではない。此目的でやれば此前の講和會議の場合のように葬り去らるゝか、然らずんば日本の爲めに却つて蝮蛇とならぬとも限らない。

◎**極東統一緩衝國**　久しい間の問題であつた緩衝國は今日のところまだ出來さうにして出來ない。出來れば極東治安の爲めにも、亦我々の爲めにも結構だ。西伯利の土民も結局喜ぶであらうし、抜いた刀を鞘に收め兼ねて居る日本に取つても、撤兵の口實が出來て誠に都合が好い。只當初日本が希望したやうな國が出來ない事だけは明白である。而して今日の所日本はいよ〳〵西伯利出兵の此上維持すべからざるに氣が着いて、何か適當の口實を見付け次第撤兵せんとして居るやうであるが、

どの途撤兵は已むを得ないとして、その動機が一時の便宜に出づるやうでは、甚だ心許ない。我々はもつと冷靜に日露兩國の將來を考へて、もつと根柢ある計畫を立てゝかゝりたい。我々は何の爲めに撤兵するか、彼等と我々との本當の親善關係を將來に確立したいからである。一時の便宜に逃げるように撤兵するのでは、後を何うするかの計畫は立つまい。緩衝國が近き將來に愈々出來るなら、我々はこゝに撤兵の口實を得る事を喜ぶばかりでなく、もつと突き進んだ考慮を廻らしては何うか。

◎**支那最近の政情**　北方に於て段祺瑞派が根こそげ覆されたのに、其友黨が昨今南方で頻に頭を擡げて居るのは一見甚だ不思議な現象である。而してもし之を段の主義主張が北方に倒れて南方に復活した、換言すれば北京に於ける安直二派の爭が先度の政變を轉機として南北の爭に形を變へたといふ者あらば大いなる誤りである。思ふに支那の政爭は今日の所まだ主義主張の爭になつて居ない。北京の安直兩派の爭にした所で單に二主義の爭ではなくして、政界に羽翼を張らんとして互に爭つて居つた兩勢力の政權爭奪に過ぎない。同じやうな野心家は至る處にある。北京に於ける甲乙二黨の爭も、一方の敗北によつて一段落を告げると、今度は南方の方から政敵が現はれて來る。斯くして段々複雜な政權爭奪が多少單純な形になる傾向はあるが、假令甲が倒れて乙が出ようが、丙が仆れて丁が出ようが、其處に何の進歩發展あるのではない。段の專制主義が仆れたからとて、北京の政界は民主的方向に少しも歩を進めて居ないと同時に、段の友黨孫逸仙一派が南方に段々頭を上げて居るからと云ふて、彼の主義主張の確實な地歩を南方に占めたと云ふ事も出來ない。支那が政治上本當に確實の進歩を見ようとするには、もつと異つた形の大政變ある事を必要とする。只此際少しく注目すべきは國民大會運動である。現在の政府現在の議會に慊らずとして、先度の政變は吳佩孚の主張する所であつて、專門的政治家に諦めをつけて國民一般の意見を聽かうと云ふのであつた。又或意味から言へば新人物によつて新局面を開かんとするの一部の輿論を代表するものと言つてもよい。只此の種の議論は云ふまでもなく所謂專門政治家には喜ばれない。之に共鳴する者が主として學生であるので、世人は多く之を輕視して居るけれども、併し之が今日支那の民心の專門政治家に愛相を盡かして自分達の希望要求をありのまゝ實際政治の上に影響を與へしめんとするの切望の一表現として見る時、我々は大いに之を注目するの必要があると思ふ。

◎**大臣の政治的責任**　尼港問題に就いて、田中陸相は必ず責任を重んじて臣節を完ふすべしと云ふやうな事を公言し

た。其後彼が此言責を果す爲めに何等特別の處置に出でないので、世人之を疑ふ者がないでない。と云て予輩は玆に敢て陸相の責任を問はんとするのではないが、先頃ふと之に關する某新聞の記事を見、現代政治家の政治的責任感の甚だ淺薄なるに驚いたので、此事を一寸指摘して置かうと思ふのである。新聞の報道に曰く、陸相は初め辭表を出す積りであつたが、斯くては此際政界に波瀾を起すの恐れがある。其處で山縣公の了解を得て、內實陸相は絕對に責任を負はない事にした。此報道も眞實かどうかそれは知らない。假りに誤報だとしてもこんな事が普通の事として新聞に出る以上は、我々國民の中には、政治的責任に就いてこんな間違つた考を抱いて居る者がある事丈けは分かる。即ち彼等は第一に責任の有無を實質的に問はさらんとする事である。第二に彼等は隱退するの當否をその時の政治の便宜から割り出し、隱退を不便とすれば白を黑と云つても噛り付かうとする事である。第三に責任有つても無いと云ひ通し、辭職も何もせず平然として居れると云ふ事は、一面に於て議會の無能力を語るものに他ならない。第四に山縣公の了解と云ふ事が此種の決定を權威あらしむるに非常に必要な事である。山縣公さへ含んで居つて呉れゝば、議會が如何なつても構はないと云ふ態度である。議會多數の反對はどうでも誤魔化せる。誤魔化せなければ陰に陽に壓迫を加へる。只彼等の最も氣兼ねするところは一元老あるのみと云ふ處に、日本政治の特色があるのであらう。事實は如何でもいゝ、此風說の中に含まるゝ思想に就いては、大いに讀者諸君と共に考ふべきものがあると思ふ。

蘇峰德富猪一郎新著

■新刊發賣■

大戰後の世界と日本

内容一斑 二十八章二百十項に亘る一大論策

■世界大戰後に於ける日本帝國■世界大戰の眞相■獨逸は何故に敗北者となりし乎■英國は何故に勝利者となりし乎■世界大戰の影響■露國革命の因由■露國革命の爆發■ボルセウイズム■米國と世界大戰■巴里會議の大立者■巴里會議の經過■對露政策乎對露無政策乎■巴里會議の所得奈何■世界大戰の效果■英國と勞働者■歐米に於ける勞働界の趨勢■世界に於ける經濟的影響■世界大戰の齎せる惡果■惡化の甚なる者■大戰後の英國■英國と米國■愛蘭問題■英米の角逐■戰後の英國■日米の關係■排日の始末■日米葛藤の結果如何■死中活あり

四六版　八百餘頁

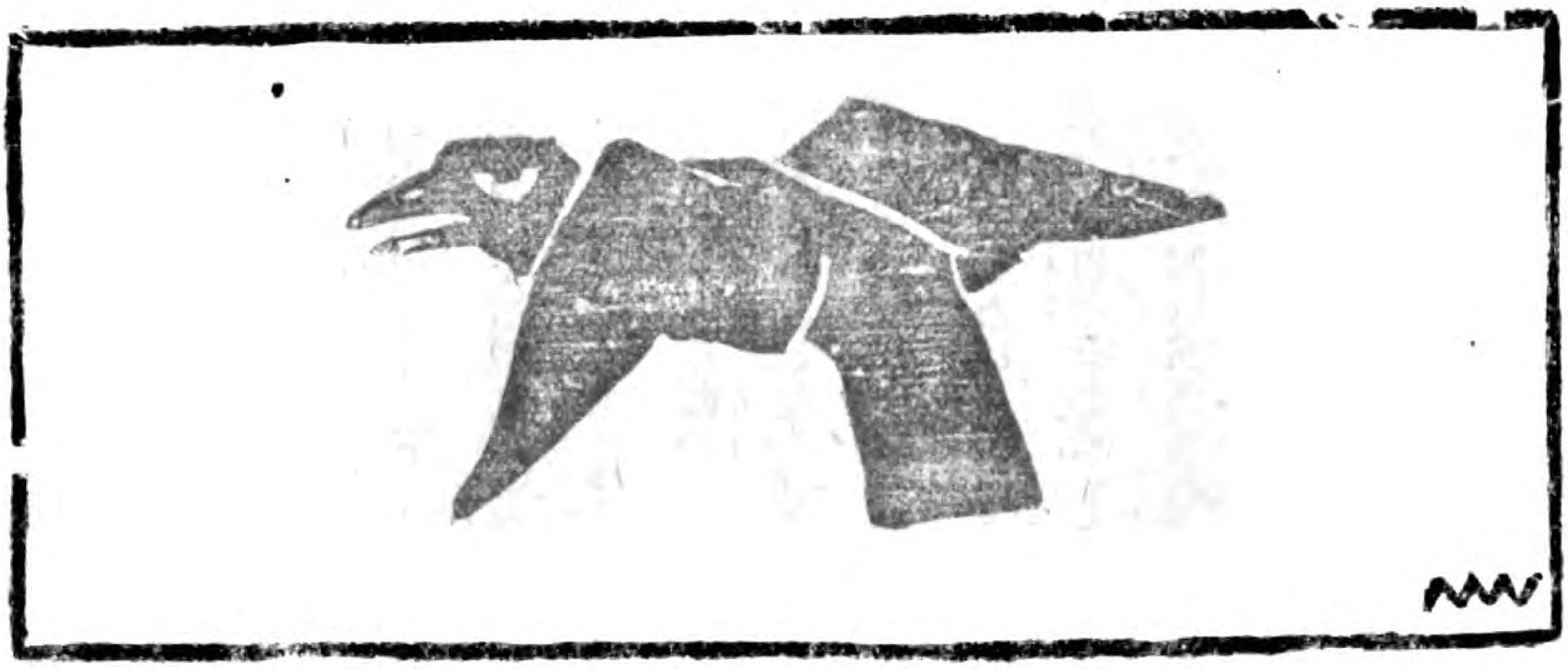
定價　金參圓五拾錢

内地送料　金拾八錢

本書は實に現時世界に於ける、生ける百科全書也。最近の活歴史也、活寫眞也。總ての問題を事實に由りて說明解釋し、其の說明し解釋するや、一として肯定を與へざるなし。卽ち其の問題より云へば、巴里會議の如き、國際聯盟の如き、露國のボルセウイズムの如き、米國のモンロー主義の如き、英國勞働問題の如き、回教徒問題の如き、黃人對白人問題の如き、特に其の日米問題の如き、最近の事實に照して、情理兼臻り、其の識見の透徹せる、敵も味方も感嘆せざるなし。若し夫れ最後に至り、日本國民に對し、死中活を求むるの經綸を披瀝するや、著者の愛國的熱涙は、讀者の心胸に鼓動し、大起一番を禁ぜらしむ。蓋し世界大戰後に於ける、特別出色の產物と謂ふ可し。

東京市京橋區日吉町
振替口座一三一〇〇

發行所　民友社



或る親子

田中純

一

關西の或る修道僧院にゐる間に、ぽつり／＼ロシアの小說などを讀み始めて、四年の間にすつかり文學者志望に豹變してしまつた私が、早稻田あたりで一二年もぶらつくつもりで、初めて昔の新橋驛に着くと、思ひがけない新田の顏が、改札口で待つてゐた。

「よし來た――」

彼の逞しい太い腕が、低い柵の上からにゆつと出て、私の大きい信玄袋を受取つて呉れる間に、私は切符を渡して改札口を出た。

「何うしてこの汽車が解つたのだ」

「昨日君の兄さんから、うちのおふくろに來た手紙にね、君がこの汽車で來る筈だつてことが書いてあつたのでね、兎に角迎へに來て見たのさ」

「へえうちの兄貴も氣が早いな」

一昨日會つた時には、まだ別にこの汽車に確定したと云ふのでもなかつたのだが、それをもうかうして知らせて來てゐる兄の輕卒なほどな氣早さが、私を苦笑させた。

「それで、これから何處へ行くつもりだ」

「小石川の方の下宿屋へ紹介狀を貰つてるんでね、一先づ其處へ行つて見やうかと思つてるんだが」

「君、下宿屋なんか騷がしくつて駄目だぜ。それよりも素人下宿にし給へ。東京には幾らも二階の貸間があるからね。なに、僕のうちに當分ゐて、そのうちにゆつくり探せば、幾らでも好いうちがあるよ」

私がどちらにしようかと思ひ迷つてゐるうちに、新田はさつさと信玄袋をかついで、あの古びた建物を出て行つた。がらんとした停車場そとの廣場の、花曇りに薄曇つた空の下で見る新田の後姿は、もうすつかりおとなびてゐた。それは、私がこれまで漠然と豫想してゐた新田とは、似てもつかない變り方だつた。

彼と私とは文字通りに、搖籃の友であつた。新田の母と私の母とが、同じやうな大きい臨月のお腹をかゝへてゐる時分、新田の母が私のうちに來て、母と何か話してゐる時に、突然、はげしい雷雨が起つた。それは、僅か二三丁の一廓に、落雷が五つもあつたと云ふ烈しさだつた。が、それから三日ばかりして私が先づ生れ、五日ばかり經つて新田が生れたのだと云ふことは、其處に何か特別な因緣ごとでもあるやうに、私たちが子供の頃によく聞かされた話しだつた。

「おや、また雷の子が騷ぎ出したよ」

私たちが家の中で騷ぎ廻ると、母たちはよく微笑を含んだ聲でかう言つた。私たちはまたそれを好いことにして、雷の子らしく、止めどなくはしやぎ切るのが常だつた。すでに生れ落ちるとからかうした仲であつた私たちは、其後、幼

稚園に行き、小學校に通ふやうになつても、殆んど片時も離れないほどの友だちだつた。

その頃、私の郷里の町の控訴院長をしてゐた新田の父と　同じ町の小さい女學校の教師であつた私の父とが、何うしてあれほどの交りをするやうになつたかは、今でも私にはよく解らない。が、町一番の宏壯な官舎に住んでゐた新田のうちと、その門番小屋とも見える小さい隣家に住んでゐた私のうちとが、殆んど親戚同様の交りをしてゐたことは事實だつた。その證據には、私は新田のうちの女中たちを自分のうちの女中のやうに思つて、平氣で駄々を捏ねてゐたし、女中たちもまた私を「坊ちやま」同様に扱つてゐたからである。

或る夏の夜であつた。早くから寢かしつけられた私が、何時になく夢におびえて目を醒した。それはたしか、晝間に買つて貰つたゴムの風船に引きずられて、限りなく高い空に昇つて行くやうな夢だつた。むくりと起き上つて、半眼に目を開くと、冴えたやうに明るい空氣ランプの下に、私の父と新田の父との顔が、こちらを見つめて浮んでゐた。

「勇吉、まだ寢ないのか」

父の聲は何時になく険しかつた。私はすぐそのまゝ横になつたが、それからは何うしても寢つかれない。ぼつり〳〵と囁くやうに話してゐる父たちの聲は、私の睡りを妨げるほど大きくはなかつたのだが、一度寢そびれた目は、たゞ冴えて來るばかりだつた。時々目を開いて、横目で盗むやうに見ると、父たちはまだ、顔をくつつけるやうにして、何か話し續けてゐる。私は殆んど泣き出したいやうな氣持で、ランプの消えるのを待つてゐた。

思へばそれが、今日までも續いてゐる私の不眠症の最初の經驗であつたのだ。私は今でも、烈しい不眠に惱む夜などに、あの夜のことを思ひ出す。父たちが私を見つめたあの不安な目を思ひ出す。

が、思ひ出せば、まだいろ〳〵なことがある。

或る日新田が、山國のこのあたりでは見かけない大きいブリキ製の軍艦を持つてゐた。

「君、それ何うしたの？」

「札幌の兄さんの御土産に貰つたんだよ」

「君には兄さんがあるの？」

「うん、札幌にはお母さんもゐるんだぜ」

「嘘だい。お母さんが二人もゐるものかい」

「だつて兄さんがさう言つたぜ。札幌にもお母さんがゐるんだつて」

二人はこんなことを言ひ合つたが、その「兄さん」には、たうとう一度も會はなかつた。

或る日、うちに歸つて來ると、恰度新田の母が來てゐて、うちの母と二人きりで、座敷で何か話してゐた。何氣なく座敷に入らうとすると、五六枚の新聞紙を前に置いて、新田の母が、眞赤に泣きはらした目を釣り上げてゐた。私は見ては惡いと思つて、すぐ隣りの室に逃げこんだが、新田の母の歔欷する聲が、それからしばらく絶えなかつた。新田の母が怒つてゐるのを、うちの母がなだめてゐる樣子だつた。

それからしばらく經つてから、或る日新田がこんなことを言つた。

「僕、うちを引越すんだぜ。お父さんは控訴院をよすんだつて、そして新聞社を告訴するんだつて」

私にはよくその意味が解らなかつたが、流石に新田は、かうした專門的な言葉をよく知つてゐた。

事實、その後まもなく、新田の家は下町に引越して行つて、其處で辯護士を開業することになつたのだつた。

この頃の新田のうちに、何時も何かの事件があつて、うちの父がそれに何かの關係を持つてゐるらしいことは、私も

子供ながらに感づいてゐたことだつたが、それが何う云ふ事件であつたかは、私には見當さへつかなかつた。私は一度そのことに就て、新田に訊いて見やうとさへ思つたのだつたが、そのうちに新田が、入學試驗の成績の關係で同じ縣下のK市の中學に入ることになり、私が郷里の中學に入ることになつたので、は遂にその機會を失つてしまつた。そして、新田との交渉が薄らぐにつれて、私もそれを忘れて行つた。

其後、私たちは暑中休暇にしか會はなかつた。會へば何時でも、すぐにもとの親しさに返るのだつたが、手紙などは一度も取り遣りしたことがない。作文の稽古でもするやうに、なが／＼と互ひの動靜を知らせ合つたり、變らない友情を保證し合つたりするやうなことは、私たち田舎の子等の性に合はないことだつた。が、そのうちに、私の父が死んでから間もなく、彼の父も七十才の高齢で世を去つたので、新田の一家は、母親の生れ故郷である東京に移ることになつて、私たちはそのまゝ別れてしまつたのだつた。

東京での新田の噂は、しかし、其後も度々、修道院にゐる私の耳に傳へられた。それは大抵、私の母からの手紙で知つたのだつたが、たまに歸郷した時に、昔の友だちなどから、彼の近狀を聞くこともあつた。が、何れの噂も、あまり芳ばしいものではなかつた。その頃、塾の理財科に通つてゐた新田は、放蕩にすつかり身を持ち頽してゐると云ふ噂だつた。彼の底の知れない放埒を取り鎮めるために、彼の母親が自分で口入屋に頼んで、月ぎめ妾を當てがつたと云ふことを、「呆れたものだ」と云ふ顔つきで、私の母から話されたこともあつた。彼が毎月、二三百圓の金を、遊蕩のために持ち出すと云ふやうな話しは、一錢半錢の喜捨によつて生きてゐたその頃の私に取つては、全く一つの驚異であつた。私は、身を切るやうな自分の峻嚴な禁欲生活の中から、幾らかの非難と幾らかの羨望とを含めて、幾度も彼の放縦な姿を描いて見た。それは全く別世界にある、淫蕩な、だらしのない、不健康な、見苦しい姿であつた。

が、今かうして私の前に立つて、無雜作に信玄袋をかついでゐる新田の姿は、私のその豫想を裏切つてゐた。彼の姿には、何處にも放蕩兒らしい影はなかつた。色の多少白つぽいのを除いては、すんなりとよく伸びた筋骨逞しい彼の體軀にも、黑く潤んだ彼の瞳にも、壓へ切れないほど生き生きした、男らしい分別(ふんべつ)に溢れてゐた。彼の着てゐるものは、私のにも劣らないほどな、よれよれの着物だつた。縞ものの銘仙か何かに黑い角帶をしめて、その上に禿げちよろの前垂れまでつけてゐる彼の姿は、何うみても勤勉な小商人である。これが何うしてあの宏壯な屋敷に住んでゐた新田であり得やう。道樂な塾の書生さんであり得やう。

私は何となく嬉しかつた。

「君、この電車の方が近いのだけども、乘換へがうるさいからこつちにしよう」

彼はぼんやりしてゐる私にかう言ひすてて、素早く電車に乘りこんだ。私もすぐにその後に從つた。

二

新田の家は麻布の本村町にあつた。或る長い坂の中腹の小さい二軒長屋で、粗末な格子戸のそばに、小さく「華道指南」の札がかけてあつた。

「入らないか」

彼が先づ格子戸をあけて入つた。

一間に三尺ほどの狹いごめごめした土間に、白いコール天の太い鼻緒をすげた朴の下駄だの、齒の三角になつた小さい女下駄だのが、亂雜に脫ぎちらしてあつた。

「二階に上つて呉れ給へ」

玄關にとつつきの梯子段を見上げてから言つて、人氣のなささうな奥の間に入つたが、すぐに彼も二階に上つて來た。

「この頃、お母さんは何うだね」座につくとすぐ私は訊いた。

飴色に赤ちやけた疊だつた。煙草の喫ひ殼の堆い粗末な眞鍮の火鉢が、板目のむき出た一閑張の机のそばに、くつつけて置いてあるほかには、家具らしいものは何もなかつた。たゞ一つ私の目を引いたのは、すばらしく立派な青銅の水盤に、十三枚の一つ葉が、鮮かな未生流で生けてあることと、壁に並んでゐる二枚の大きい油繪の半身像とであつた。それは私にも憶えのある新田の父と母との姿だつた。きちんとしたフロツクに、勳三等の略章をつけた父親は、もう可なりな年配だつたが、母親はまだ娘のやうに若くて美しかつた。日露戰爭時代の黒づくめの特志看護婦の洋裝に、何かの赤い綬章をぶらさげてゐた。

「うむ、相變らず飛び歩いてるよ」私の視線を追ふやうに、新田も母親の肖像を見上げながら答へた。

「お花を教へてゐらつしやるのだね」

「あゝ、弟子なんかゐやしないのだがね。……この頃は謠ひの稽古で夢中だよ」

「何しろ御丈夫で結構だな」汽車で疲れたからだを横にしながら、私は氣のない聲で言つた。

「うむ、まあ、丈夫すぎて困るくらゐだ。何しろ勝氣だからな」

新田はふいと口を噤んだ。

そこへ新田の妹が茶を運んで來た。新田に似て背のすらりとした、髮をおさげにした、美しい少女だつた。

「隨分大きくなりましたね」

彼女がまだ七つか八つかの頃の或る日、自分のからだの二倍もありさうな長い箒を、両手で胸のところに抱いて、顔ちゆうに汗ばんで、庭を掃かうとしてゐた姿を思ひ浮べながら私は聲をかけた。

「こいつもお轉婆でしやうがないよ」新田が苦いものを吐き出すやうに言つたが、妹はそれに堪へるやうに、口元にまだ子供らしい微笑を浮べて、なみ〲と注いだ番茶を、兄の前に置いた。

「もう女學校だらうね」

「え――」

妹は美しい前歯を出して輕く頷いたが、

「まだ今年入つたばかりさ」と、新田が受取るのを見て、彼女はそつと階下に降りて行つた。

「君の弟さんは何うしてゐるんだ」妹を見送つた目を擧げて新田に訊いた。

「あいつは今、商船學校に入つてるよ」

「ほう、もうそんなになつたかね」

私たちはしばらく、昔の友だちの噂にふけつてゐた。

その夜おそく、新田の母が出さきから歸つて來た。もう四十を幾つか越へてゐる筈だつたが、まだ三十餘りにしか見えなかつた。顔が多少脹すぎる嫌ひはあるが、巧みに刻まれた端正な鼻から薄い唇の小さい口にかけてたゞよつてゐる或る冷い美しさは、曾つて私の郷里の新聞が美人番附の大關に讃へた頃と、殆んど變つてゐなかつた。

「勇吉さんに東京で會はうとは思はなかつたね」

ふだん着の銘仙に着換へた新田の母は、しげ〲と私を見ながら言つた。

「それは僕だつて、東京に出て來るくらゐのことはありますよ」

「だつて修道院に入つたつて言ふんでせう。もうすつかり坊さんになつてるかと思つてた」

「しかしまだ坊主になるかも知れませんよ」

「今度は文學をやるんですつて？　さうすると矢つ張り小說だとか芝居だとかを書くつもりなの？」

「まあ出來ればそんなものも書いて見たいのですがね。まだ何うなるか解りやしないのです」

すると母親は、カラ〳〵と娘のやうな聲で笑ひ出した。

「坊さんの小說？　早く見たいわねえ」

その軋るやうな乾いた笑ひ聲に氣を奪はれた私は、急には怒ることも出來なかつた。

「まあ、そんなに見縊つたものでもないですよ。うちの父のことを書くだけでも、立派な小說になりますからね」

「そりやさうだわねえ」と言つて、私の父の臨終の時に、新田の母の手厚い看病をどれほど有難がつたかと云ふことなどを可なり感傷的な言葉で話し出した。

「おい、もう寢ないか」

先刻から頭に押し默つて、自分の鼻の尖でも見つめてゐるやうに、目を伏せて苦り切つてゐた新田が、母親の饒舌が一段落つくと、それを遮るやうに聲をかけた。

「ああ、寢やう。それではお休みなさい」

私たちは母親に挨拶して、二階に上つて行つた。

「うちのおふくろを、君は何う思ふ？」

くつつけて敷いた床に二人が枕を並べると、新田が聲をかけた。

「何うつて、別に變つたこともないやうだが、多少ヒステリーぢやないかい?」

「うむ、そいつに困るのさ」

「劇しい發作でも起ることがあるのかい」

「いや、そんなこともないのだがね。あれでいろ〳〵な强迫觀念を持つてるんでね。それも、無理のない點があるのだよ。なにしろまだ四十にもならない女盛りに後家になつたのだからね」

「では、なにかい、君が遊ぶつて言ふ嘩が、うちの母なんかには隨分大袈裟に傳へられてるやうだつたが、あれもおふくろの强迫觀念から出てるのかい」

「いや、あれは全然さうでもないのさ。僕も隨分やつたからね」

新田はごとりと半身を起して、腹這ひになつて、烟草に火をつけた。

「そんなにやつたのかい」

「まあやつた方だらうね。五百人の女をと云ふ願をかけた奴が、もうやがて突破しさうだからね」

「五百人の女?」私の胸に、何か冷りとしたものが來た。「それは藝者とか娼妓とか云ふ種類の女かい?」

「玄人も素人も一緒でさ」

「素人つて女學生なんかもかい?」

私は全く別な世界の話しでも聞くやうに、胸をわく〳〵させてゐた。

「ああ、神田邊の下宿にでも行つて見たまへ。國籍不明の女學生がごろ〳〵してるから」

「しかし、よくそんなに女が出來るものだな。僕等には想像もつかないね」

「出來るさ。それは君なんか、女と云ふものを買ひかぶつてるからさ。女も男と同じやうな慾望を持つてるんだから、何も遠慮する必要はないぢやないか。こちらが言ひ出しさへすれば、大概の女は出來てしまうよ」

新田の喫つた煙草の火が、暗の中で、ぱつと赤く、彼の健康さうな首のあたりを照らした。

「それで、君は未だなのかい？」

「無論、未ださ」

「その方がよつぽど僕等には想像がつかないね」

二人はしばらく默つてゐた。新田の言ふことに、多少の僞惡者らしい誇張はあるにしても、それは私を身ぶるひさせるほどの事實だつた。私は暗い頭の中で、處女の一人もゐない大都市の淋しさを思つてゐた。

「しかし、これで世の中はよく出來てると思ふよ」やがて新田のしみ〴〵した聲が、私の耳のそばで響いた。彼は枕を寄せて、私の布團に寄り沿つてゐた。私も枕を彼の方へ寄せた。「これは漸くこの頃になつて僕に解つて來たのだが、うちの親爺なぞも隨分あの方ではひどかつたらしいね。僕は、子供の時分から、隨分いろ〳〵不思議だと思つたことがあるのだが、君も知つてるだらう、あの北海道に僕の兄貴がゐると云ふことさ。それから、僕のおふくろと親爺の歳が殆んど四十近くも違つてると云ふことさ。子供の時分は、唯何だか可笑しいと思つてただけだが、一昨年の夏北海道に行つて、すつかり兄貴から聞いて驚いちやつたのさ」

新田の言ふところによると、新田の母と云ふ人は、新田の父の後妻だとのことだつた。新田の父が、もう五十を越えやうとする頃に、彼の家にお花と云ふ十六七の美しい小間使ひがゐたが、それがやがて新田を生んだのであつた。

「それで、前の奥さんは何うしたんだ？」

「それがあの北海道のおふくろさ。今のおふくろに手をつけるとすぐ、前の奴を離縁しちやつて、兄貴と一緒に札幌の實家へ歸してやつたのさ」

「それもまだ生きてゐらしやるのだね」

「うむ、もう好いお婆さんだがね。息子が商船に乘つて、だいぶ出世してるのでね、今ぢやもうすつかり收まつて、これをお花にやつて呉れつて、自分の若い時の着物を、僕にお土産に持つて歸らしたりしてたよ」

これは私には初耳であつたが、それで多少、あの子供の時分のことを想像することが出來る氣がした。

「つまりその問題なのだね。僕等が子供の時分に、君のうちが妙にごた／＼してると思つたのは」

「さうさ。兄貴の養育費だとか、遺産の分配だとかの問題が、親爺が死ぬまでごた／＼してたらしいからね。君のお父さんが、すべて仲に立たれたらしいよ」

「うちの親爺でもそんな粋な役廻りをしてたのかね」

「そのほかにもねえ、うちの親爺の子供と云ふ奴が、甲府にも福岡にもゐるらしいのだよ。つまり裁判官時代の行く先き先きで女を持つて子供を生ましたらしいのだね。その養育費なんかも、みんな君のお父さんの手を通して、こつそり渡してゐたらしいよ」

こんなことを話してゐるうちに、夜はだん／＼と更けて行つた。私は少しでも眠らうと思つて、目を瞑つて見たが、旅に疲れてゐるにも拘らず、頭がすつかり冴えてゐた。

しばらくして、ごとりと新田の寢返りの音が聞えた。

「まだ寝ないのか」

「うむ、寝られない」

「出て見ると、世の中にはいろ〱な事があるね」しばらくして、また私が言つた。

「君なんかには、まだ坊主になる資格はないよ」

新田のしんみりした聲が聞えた。

三

それから四日ばかりして、私は新田の家を出た。彼にすゝめられた通りに、彼が自分で捜して來て與れた素人下宿に移つたのだつた。小石川の高臺だが、隣家の高塀に遮られて、風もよく通らないやうな、北向きの部屋だつた。

引越した當時、彼はよく遊びに來た。例のよれ〱の銘仙に、帽子も被らないで來るやうなこともあつたが、時には揃ひの高貴織りか何かを着込んで、りゆうとした帶をしめてることがあつた。

「いやにぴか〱したものを着てるぢやないか」

私が冷かすやうに言ふと、

「ああ、今日はちよつと寄るところがあつてね」

彼はにやりと笑つて答へた。

「また女のところか？」

「うむ」

彼は近頃、或る軍人の若い未亡人と親しくしてると言つてゐた。

「やつぱり年上の女が好いね。ぴい〳〵の娘つ子にはもう飽きちやつたよ」

「しかし、そんなことをしてて、子供でも出來たら何うするんだ」

「ところが、そいつが何うも出來たらしいんだ。まだよく解らないがね」新田が案外呑氣さうに答へた。

「そいつは困るだらう」

「うむ、そいつが表向きに知れると、恩給だとか扶助料だとかが取れなくなるんでね。女の方ではそれを口實に、僕と結婚して呉れつて言つてるんだがね、なに、そのうちに、何處かでそつと生まして來れば好いのさ」

「君はその女と結婚する氣はないのか」

「いやなこつた。……まあ、そのうち、好い折りがあつたら別れるのさ」

彼は贅澤な金口を吹かしながら答へた

或る朝私が彼を訪ねると、彼は珍らしく、黒つぽい鳥打帽子に粗末な袴をはいて、學校にでも出かけるやうな格好で玄關に立つてゐた。

「珍らしいぢやないか。君でも學校に出ることがあるのかい」

早稻田に籍は置いてゐても、殆んど教室になど出たことのない私が、格子戸越しに聲をかけると、

「うむ、まあ、ちよつと、一緒に外に出やう」

彼は何かに憚るやうに、早口にかう言つて、格子戸を明けて出て來た。二人は、初夏の朝日に明るい長い坂を降りて行つた。

「學校も學校なんだが、實は、僕、この頃一つ工場を持つたことになつたんでね」

坂の中腹まで來ると、彼は漸く口を開いた。

「工場？」

「うむ、小さい鉛筆の工場なんだ。其邊に安い賣り物が出たのでね、例の女からも多少出さしたり、隨分いろ〳〵工面して、たうとう買つちやつたのさ。これからちよつと工場に行つて、それから圖書館に廻つて、黒鉛のことを少し調べて見たいと思つてるのだが、何うだい、君も一緒に工場に行つて見ないか」

「うむ、行つて見ても好いが、君も隨分妙なことを始めたものだね」

「それがね、實は例の女のことが少し六つかしくなつて來たんだ。何れそのうち君にはゆつくり話して、ちよつと顏を貸して貰ひたいと思つてるんだが、何うもあの事がすつかり露はれちやつたらしいのでね。扶助料でも取り上げられると忽ち路頭に迷ふことになるから、ちよつと可哀さうだよ」

新田は何時になく困惑した顏つきで言つたが、その時には、私たちはもう電車通りに出てゐた。

大きい商館と商館とに壓されて、暗く狹められた大都市の露地――其處には必ず土蜂の巣のやうな貧民窟がある――この一帶の路地に沿つて、それから四五丁も行くと、私たちは或る草深い空地の隅の、小さい掘立小屋の前に出た。それが新田の工場だつた。

「ふむ、やつてやがるな」

新田はそれでも、嬉しさうに微笑して、まだ露の深い草原を渡つて行つた。なるほど、小屋の中からは、低い器械の音が聞えてゐた。

「まだ始めたばかりだからね。きたないよ」

新田に導かれて入つたのに、思つたよりも穢い暗い狹い[illegible]た。もう三十四五の血色の惡い男工と、三四人の女工とが、黒鉛を入れた桶や、筆軸の束が亂雜に散ばつた中こ[illegible]してゐた。

「何うだい。今日は器械の調子は好いかい？」

新田は物馴れた調子で、器械の方に寄つて行つて、聲[illegible]た。

「へえ、今朝は何うかかうか巧く行つてるやうですが」

男工が鈍い目を擧げて答へた。

そこで新田は、一かどの事業家になつたやうな顏をして、鉛筆が出來上るまでの手順や、この工場の純益が一ケ月二百圓と下らないことや、もつと新しい器械を入れたいことなどを話したが、やがて私たちは工場を出て行つた。

「まあ、これさへ巧く行けば、あの女も大丈夫だよ。ちつぽけな扶助料なんか貰つて小さくなつてゐるよりはよつぽど好いからな。なあに、女一人だもの。月に二百圓もあれば、芝居を見てても日が經つからね」

新田はもうすつかり元氣になつて、裏長屋の軒に響き渡るやうな聲で話し續けた。

其後も私たちはちよい〳〵會つてゐた。大概は新田が訪ねて來れたのだが、時には私から訪ねて行くことがあつた。が、何時行つても、母親は殆んど家にゐなかつた。妹に取次がれて二階に上ると、新田がしよんぼりと部屋のまん中に胡座をかいて、黒鉛のかたまりを爪で掻いてることが多かつた。

「何うだ。鉛筆は巧く行くかね？」私が多少冷かすやうに訊くと、

「うむ。まあ駄目だね。儲かることとは解つてるんだが、あの器械ちやしようがないよ」

新田は、言葉と一緒に黒鈴を投げ出すのだつた。

或る日、珍らしく、新田の母がひとりで家にゐたことがあつた。

玄關で幾ら呼んでも返事がないので、無斷で二階に上つて行くと、母親がしきりに花を立ててゐた。

「おや、まあ、珍らしい。誰かと思つてた」母親は、白粉の濃い顔を振り向けて、愛想よく笑つたが、すぐにまた花の方へ向いて「ちよつと、御免なさいよ。ついでに生けてしまうから」と言つて、華奢な手を動かし始めた。

私は、床の前に中腰になつて、裾から赤いものなどを見せてゐる彼女の後姿を見つめながら、彼女のお花時代のことなどを、いろ〳〵に空想してゐた。すると、その空想に答へるやうに、

「今ではもう、これが私のたつた一つの樂しみなのですよ」母親は、突然、手を止めて私に話しかけた。

「しかし、謠曲なんかもやつてゐらつしやるんでせう？」

「え、謠曲でも仕舞でも、私に出來ることなら何でもやつて見るつもりでやつてゐますがね。……まあ八十の手習ひですよ」

それからしばらくして、私たちは階下の茶の間に降りて行つた。母親は、臺所でしばらく何かこと〳〵してゐたが、上つて來ると、すぐに、美しく膝を立てた長火鉢の前で、長煙管に一服すひつけながら、

「何うです。小說が書けさうですか」と言つた。

私はすでに前に不愉快を嘗めてゐるので、

「いや、もう、あの方は止すつもりです」と答へて、すぐに「弟さんの方は御丈夫ですか」と問ひかけた。

「俊雄ですか？　まあ、あの子も、お蔭で何うにかかうにかものになるやうですよ。こなひだの日曜にも、學校から歸つて

來ましたが、まあ、あんな初心な子つたらありませんね。こんなに柔しくつて、何うして船乗りなんかになれるだらうと思ふほどですよ。終日私のそばについてて、學校のことなんか話して呉れましてね。兄の方とはまるで違ひますね」
「さう。新田君の方は、なか〳〵そんなことはしないでせうね」
「あれがそんなことをするものですか。あれくらゐまた親切氣のない子もありませんね。親なんか眼中にないのですからね」
「そんな事もないでせうが、氣象は非常に強い方ですね」
「ねえ、勇吉さん」そこで母親は、一膝乘り出して、私の顏を見つめた。「あなたはあの子を何う思ひます? 私には何うも、あの子の氣が知れないのですがね。それは、若い者だから、少しくらゐ道樂するのもよござんすさ。たゞ、他處の娘さんに手を出したり、若い後家さんを騙かしたりするやうなことだけは、止して呉れるとよござんすがね。この頃もまた、何處かの軍人の後家さんと親しくしてるらしいのですが、一體そんなことをして好いものですか、それに、こなひだなんか、鈴維とかの工場を買ふんだから、是非金を呉れつて、たうとう八百圓ばかりうちの貯金を持ち出したりしましたが、私には何だか譯が解らないのですよ。あなたなんか、これでちやんと精神修養が出來てるんだから、一度うんと說敎してやつて下さいな」
私はそれを默つて聞いてゐたが、何故だか、新田を非難する氣にはなれなかつた。彼の善良さが、私に解る氣がしたのだつた。

四

翌年、新田は理財科を卒業した。そして、彼の就職した或る會社から派遣されて、九州の炭鑛地に行くことになつた。無論、その時には、彼はもう鉛筆工場は投げ出してゐたが、例の女とはまだ手が切れないらしかつた。嫉妬のことで多少女の親戚の間では問題になつたが、結局、扶助料も取り上げられないで、濟んだらしかつた。生れた子供は里子にやつてあつた。

「あの女をこれから何うするつもりだ？」

見送りに來てゐる弟や妹の目を避けて、夜氣がかすかに秋ばんだ停車場そとの廣場に連れ出して、私は私かに訊ねた。

「何うするつて、子供まで出來てるんだからしようがないが、まあ、これでおしまひさ。會はなきやそれまでだからね」

「しかし子供は何うするんだ」

「あれは僕から養育費を送ることになつてるんだ」

「また僕が養育費の輸送係りかい？」

私は、私の父が彼の父に勤めた昔の役割を思ひ出して苦笑したが、彼はにやりともしないで、そのまゝ停車場に入つて行つた。

それから四年ばかり私たちは會はなかつた。九州に着いてから、一度住所を知らせて來たことはあつたが、例によつて私は手紙を出さなかつたし、彼も手紙をよこさないので、お互ひに何も知らなかつた。

が、その間に、私の生活はぐるりと變つてゐた。無論、形の上では、素姓不明の一書生が、一躍して、相當に名の知れた文壇人の末席に成り上つたと云ふ[illegible]なかつたが、心の上では、道[illegible]、[illegible]、却ち破廉恥な露見

になり済したほどの變化があつた。

子供の頃から、すつかり淸教徒的な家庭に育てられた私には、何時の間にか、心に堅い障壁が出來てゐた。それは、もと〳〵、外から來る「惡」に敵するためのものではあつたが、やがてそれが、私の心を頑にし、私の眼を鈍くしてゐることに氣付くと、私は先づかたちの上から、それを打ち毀すことにかゝらねばならなかつた。これまでのプラスをマイナスにしてかゝらうと思つたのだ。私がこれまで、あれほどまでに苦しみ守つて來た童貞を、醜い盛場女郎の手によつて、惜氣もなく破つたのもこの頃だつたし、場末の惡酒に狂醉して、夏の一夜を拘留部屋に過したのもその頃だつた。私は、次ぎ〳〵に變る飮み仲間を求めては安酒の醉ひを漁り歩いた。

チリリリリ……と鋭い電鈴が鳴つた。私の事務所の上の受話機を手に取ると、

「新田さんと云ふ方がいらつしやいましたが」といふ受付の小僧の聲だつた。私は飛上つて挨拶した。

「やあ………」

やがて新田の大きい背廣姿が、暗い樣子段から現れて來た。

「何時東京に歸つて來たんだ」私が椅子を出しながら訊くと、彼はゆつくりそれに坐つて、

「やあ、何うもしばらく〳〵」と言つて、割りに丁寧なお辭儀をしたが、「うん、もう去年から歸つて居るのさ―」と續けた。

「へえ、それなら早く知らせれば好いのに。君と一緒に飮みたくてしようがなかつたよ」

「君でもこの頃は飮るのかい」新田も笑ひながら、私の顏を見た。

「うむ、少しくらゐ飮るやうになつたよ。何うだい、久しぶりだ、今日は一杯やらうか」

それからしばらくして、私たちは或る小料理屋の二階で酒を飮んでゐた。倉の壁に遮られて、風の殆んど通らない奥

に、階下の料理場で魚を燒く臭ひが、むん〳〵押し寄せて來るやうな家だつた。

「君はなか〳〵飲めるんだね」

幾ら飲んでも顏に出ない私を見つめながら、新田がまた杯を啣んだ。新田はもう可なり赤くなつてゐた。

「いや、これで可なり醉つてるんだよ」

「女の方は何うだい。まさかあれきりぢやないだらう」

「女の方か。うむ、あれきりぢやないが、君の方は何うだい。九州は面白かつたか」

「いや、この頃またそろ〳〵始めたが、九州の方はまるで駄目だつた」

新田はそこで、鑛夫の待遇改善問題で上役と爭つて會社を退いたことや、今の仕事が藥品のブローカーであることなどを可なり詳しく話した。

「いや、もう、社長だとか上役だとかのゐるやうな處は眞つ平だ。裸一貫のブローカーが一番好いよ。歐洲の戰爭の續く限り、ブローカーは萬々歳だからね」

彼はひどく元氣づいてよく饒舌つた。實際、彼は可なり工面が好いらしかつた。

「それでは、この頃はお母さんも喜んでゐられるだらうね」私は、以前の彼の家にお花の師匠の看板が懸つてゐたことなどを思ひ出してゐた。

「いや、ところが、おふくろとは、今、別れてるんだ」

「別れてる？」

「うむ。何うもうちが面白くないのでね、僕はもう家を出ちやつたよ」

「また女とでも一緒にゐるのかい？」

「あゝ、女と一緒は一緒なんだが、何うもおふくろとは氣が合はなくつてね。別になる方が、おふくろのためにも好いと思つたから、別れちやつたのさ」

「では、また、例の軍人の妻君との縁がもどつた譯なんだね」私は微笑して訊いた。

「いや、あれはもうあれ切りさ。なに、今の奴はちよつとした女なのさ。少し氣の毒な事情を持つてるのでね、まあ僕が下宿してるやうな形で面倒を見てやつてるのさ」

「それではもう、君のうちとは關係がない譯かい？」

「いや、さうも行かないよ。妹だけは、兎に角、僕が面倒を見てやるつもりで、金でも出來れば着物くらゐ買つてやつてるのだが、あいつなか〳〵綺麗になつたぜ」

「さうだらう。あれなら何うして、なか〳〵美人だよ。もう好い年頃だらうね」

「今年たしか十八だつたかね。あいつだけだよ。僕と云ふ人間がよく解つてるのは。僕はだうも、あいつをおふくろのところに置くのが厭でたまらないから、そのうち引き取つてやらうと思つてるんだが、何うだい、いつそ、來年あたり君、あいつを貰つて呉れないか」

織田は眞赤になつた目で、むきに私の顏を見つめてゐた。私にも、妙な亢奮が込み上げて來た。

「よし、貰はう。來年だよ。來年だよ。なあに、それまでには、僕ももつと偉くなるよ。それまでは、君、俺の女房を大切に預つといてお呉れよ」

私たちはもうすつかり醉つてゐた。

それから一二軒、またカフェーなどで飲んでゐたことは覺えてゐるが、それから何うしたかは二人にまるで記憶がなかつた。兎に角、翌朝、目が醒めて見ると、私達は、神田の或る裏通りの、新田の女のうちの二階に、枕を並べて寢てゐるのだつた。

新田に起されて、やわな梯子段を降りると、二十八九にも見える、一寸小粋(こいき)ななりをした女が、臺所に立つてゐた。

「おや、お目醒めでございますか」女は周章(あは)てたやうに言つて、半顏を隱すやうに、横向きに私にお叩頭(じぎ)をした。

「何うも飛んだ醜態を見せまして」

何氣なく女の顏を見ると、右の顎(あご)の大きい傷跡を中心にして、顏が三角に釣るし上つてゐるのだつた。

私は何だか、見てならないものを見たやうな氣がして、すぐに緣がはに出て行つたが、殘つた酒氣にぬら〳〵する頭に石鹸を塗りながらも、或る苦笑が顏に上つて來るのを、何うすることも出來なかつた。

その日私たちは、重い二日醉の頭をかゝへて、終日、この二階にごろ〳〵してゐた。襖を貼りつめたざら紙も緣(へり)なしの疊も、まともに照りつける西日に、すつかり赤ちやけてゐたが、たゞ、北の高窓の下に据ゑた木地の立派な好らしい箪笥だけが、新田の工面のよさを語つてゐた。

二人は、だらしなく寢そべりながら ぽつり〳〵と話した。女は時々、飲みものなどを運んで上つて來たが、用事が濟むとすぐに降りて行つた。

女は長唄の師匠だとのことだつた。以前から、ちよい〳〵藝事などをやつてゐた新田が、母親と別れてこの近所に下宿した頃に、この家に稽古に來たのがもとで、間もなく一緒になつたのだつた。

「しかし、君も隨分、物好きだね。女を絶やさないところは感心だが」

私はつひこんな事を言つてしまつた。

「うむ、まあ、あれでも女中を置いた氣になれば好いさ」新田は案外平氣な顔をして言ひ續けた。「しかし近いうちにまた、大した奴が出來るかも知れないよ」

「何か當てがあるのか」

「今、實は進行中なのだがね」

「何だ、緣談かい？」

「そんな事ぢやないさ。相手は例によつて婆さ。これも五十近い婆だがね」

「莫迦だな。そいつは止せよ」私は多少呆れて彼を制した。が、彼はそれには無頓着に、穩かに笑ひながら言つた。

「問題は金さ。ちよつと小一萬の金は持つてるらしいのだが、聞いて見ると、可なり氣の毒な話もあるんだ。もとは或る華族の娘なんだが、娘の時分にうちの車夫と喰附いて勘當されたんだよ」

「へえ、よくある話だね」私は有り觸れた作り話しを聞く氣で聽いてゐた。

「で、今もその昔の車夫と云ふ奴が附いてるんだが、そいつが今はもうすつかり無頼漢でね。東洋新報社長なんて云ふ名刺を振廻して、盛んに女の實家だとか親戚だとかを脅迫してるんで、女ももう怖いつて言つてるのさ。實際、女が金でも出し澁ると、殺す目に會はせるんださうだからね」

「君はまたそんな女と、何うして知り合ひになつたのだ」

「ん、これの仲間さ」彼はかう言つて、笑ひながら、彼の高い鼻の上を指で横にかすめた。「それで女も、僕と一緒にしばらく何處かへ身を隱くして呉れつて言つてるのさ」

「では、もう、そんなに進んでるんだね」
「うむ、まあ、見てゐ給へ。これで一萬圓もあれば、ちよつとした船成金くらゐには忽ちなれるからね。それに、女がなか／＼敏腕家でね。小早川千吉郎なんて云ふ財界政界の巨頭でも、その女には、てんで頭が上らないのだからね」
新田は得意さうに、こんな事を話し續けた。

五

それから二ケ月ばかりして、私は突然、新田から葉書を受取つた。恐ろしく拙い彼の自筆で、蠣殼町に待合を開いたから來て呉れろと書いてある。新田が何故そんな商賣を始めたのか、私にはまるで見當がつかなかつたが、さうした家の出來たことは、私には好都合だと思つた。
春が漸く始まらうとする頃の或る午後に、私は、詩人の佐々木と一緒に淺草を歩いてゐた。朝から閑つぶしに、玉乘りだの、活動だの、講釋だのに入つて見たが、どれにも退屈してしまつた私たちは、そのまま、足の運ぶのに任せて、吾妻橋の方に出て行つた。風はまだ冷たかつたが、それはひゆうと一氣に吹き流す風ではなくて、ひゆつ、ひゆつ、ひゆつと、思ひ出したやうに起る風だつた。
「もうすつかり春だね」
橋の手すりにもたれた佐々木が、水の上を見つめながら言つた。
「これからよくなるね」私も、また閑寂な向島の土手に目をやつて應じた。
「何うだい、久しぶりに一錢蒸氣に乘つて見ようか。春らしくて好いぜ」佐々木の丸い大きい眼にも、春らしい微笑が

漂つてゐた。

「うむ、そいつは好い。これで日本橋の方へ出やうぢやないか」

二人は急に元氣づいて、艀船場に降りて行つた。

水上には、もう長閑な春が流れてゐた。もうすつかり丸味の出來た水が、ゆるやかに岸を打ちながら、靜に流れてゐた。時々、舟ばたを掠めて行く學生たちのボートも、やがて近いシイズンを思はせてゐた。佐々木と私とは、默々として、あの狹い窗に顏を押しつけて、水の上を眺めてゐた。

新大橋まで來ると、私たちは船を降りて、電車道を歩き出した。

「この邊には、昔は隨分來たものだがね」やがて佐々木が、感慨深さうに聲をかけた。「何しろ、安田の兄弟が、二人とも勘當されて、この邊の桶屋の二階に巣食つてると云ふ時代だからね。隨分亂暴でもあつたが、あの時代はちよつと面白かつたね」

「さう、ねえ。あの頃は、この邊は隨分下等な處だつたんだらう？」

「ん、今でもさうさ。例の秋吟と白水とが女の取りつこした家なんか、まだその儘に殘つてるよ。今でもあんな商賣をしてるんぢやないか知ら」

この時私は、ふつと新田の待合のことを思ひ出した。

「うむ、この邊が蠣殼町なんだね。それでは好いことがある。僕の友だちが開いた待合がある筈だから、一寸寄つて見やうぢやないか」

「變な友だちがあるんだね」と言つたが、佐々木もすぐに同意した。

二三度、同じ道をぐる〳〵廻つた末に、私たちは漸く、或る湯屋の側の露路に、そのうちを見つけ出した。

がらんとした玄関に立つと、誰でもまづ暗い奥の間から、若い女が出て來たが、玄関の明るみに私たちを見ると、女は

「あらつ」と言つて、そのまゝすた〳〵と奥に入つて行つた。

「何だい？」佐々木が何か意味ありさうに私の顔を見て笑つたが、私にも何だか解らなかつた。

「やあ、上り給へ」新田がすぐに奥から出て來た。

「何うしたんだい、今の女の人は」私が上りながら訊くと、

「うん、妹さ。知つた人だつたから逃げこんぢやつたのさ。……さあ、何うぞ」彼は佐々木にも聲をかけた。

「いやに暗い家ぢやないか」私は妹の顔の見へなかつた不平をもこめて言つた。

「あゝ、この家は駄目だよ」

新田は私たちを、庭に面した四疊半に案内した。

「一體何うしたんだ。妙な商賣を始めたものだね」佐々木を紹介せると、私は先づ新田に訊いた。

「うむ、君に一寸相談しようかと思つたのだがね。例の女の一件が、いやに早く進行しちやつたのでね、たうとう隠れ家兼商賣と云ふので、無理矢理にこんなところへ入つちやつたのさ」

私にはちよつとその意味が解らなかつたが、漸く彼の先日の話しを思ひ出すと、更に驚いたのだつた。

「では、例の華族の娘と云ふのと、たうとう一緒になつちやつたのか」

すると彼は急に手を振つて、私の言葉を制するやうにして、

「今一緒にゐるんだよ」と、聲を落して言つたが、すぐに奧の間に立つて行つた。

私と佐々木とは顏を見合せて、意味はありさうだ何の意味だか解らない笑ひを、にやりと笑ひ合つた。

やがて新田が、自分で酒の道具などを持つて入つて來た。私たちはまた、女ぬきで、ちびり〳〵とやり始めたが、昨日の持ち越しの酒で、すぐに醉ひが廻つて來た。私と佐々木とは、時々、新田には解らない文壇の話しなどに聲を高めた。

その間に、新田の妹が、時々、銚子を代へに來た。女にしては、少し嵩丈すぎる嫌ひはあつたが、私の豫想した通りに、美しい娘だつた。私は、彼女の眞白い手を醉眼で見つめながら、ちよつと幸福らしい氣持になつた。が、私が心ひそかに待つてゐた例の女は、私たちがもう十本近い銚子を乾しても、まだ出て來なかつた。

「おい、何うしたんだ。マダムを見せろよ。マダム、マダム」私が少し硬ばつた舌で催促する。

「あゝ、今に來るよ、來るよ」新田は一寸困惑した顏つきで、佐々木の顏を見てから、「何うも、佐々木さんがゐらつしやるので來にくがつてゐるらしいですよ」と言つた。

「何が來にくいんだ。呼べ、呼べ」私は更に狂暴な聲を立てた。

「何うもね、佐々木さんとは同族なんでね、來にくいんだよ」新田がまたなだめるやうに言つた。

佐々木は、親讓りの爵位を持つてゐるのだつた。

「ふんふん。何が同族だい」私は危く口に出かかつた言葉を飲みこんでしまつた。

が、そのうちに、たうたう例の女が銚子を持つて入つて來た。

「まあ、まあ、男爵で。さあ」

恰度、新田が佐々木の杯に酒を注ぐところに、彼女はぴたりと新田に寄り添つて坐つて、佐々木の杯を滿した。
「一つ、さし上げませう」私はすぐに、杯を彼女の前に差し出したが、彼女は好い手際に、ぐいと一口に飲み干してしまつた。
一體に小作りな彼女は、まだ四十ぐらゐにしか見えなかつた。無論、美人と云ふのではないが、非常に醜い女でもなかつた、たゞ、その狭い額や、鋭く光つた目や、顴の凹んだ卑しい口の形には、私は一寸我慢が出來なかつた。生れの好い女だとは何うしても思へなかつた。
「さう、浩さんも、今日は少し飲つたら好いでせう」女は新田にも酒をすゝめやうとした。が、三人とも、何故だか、しばらく默り切つてゐた。目に見えない氣拙さが、それぐ\に、三人を襲つてゐるやうだつた。
女は、このあたりの芸者たちの噂をしたり、小早川千吉郎氏が好いお客を紹介して吳れるだらうと云ふことを話したりしてゐたが、私たちは矢張り默つて、酒を飲んでゐた。
夜になつて、私たちはこの家を出た。月の好い晩だつた。しばらく歩いて、日本橋まで出ると、佐々木と私とはまた或る家で酒を飲み始めた。
二人きりになると、私たちは急におしやべりになつた。
「何だい、あの女は。新田君あれに惚れてるのかい?」佐々木が吐き出すやうに言つた。
「どうも、僕にも新田の了見が解らないのだが。厭な女ぢやないか」
「厭を通りこしてるね。顔を見ただけで、妙に脅かされるやうな氣がするぢやないか」

「誇大妄想狂と色狂人とを一緒にしたやうな女だね。それに金なんか持つてゐさうもないぢやないか」
「金持ちなのかい」
「新田はそれが目的だつて云ふやうなことも言ふんだがね」
「怪しいもんだね。しかし、新田君があの女に惚れてるとすれば、新田君と云ふ人も何うかしてるね」
「あいつも、誇大妄想狂で色狂人かも知れないね」
私たちは、醉ひにまかせて、さん〴〵に新田を罵倒した。が、さうして罵倒しながらも、彼を憐んで好いのか輕蔑して好いのか解らないやうな別の氣持が、私の心の底に萌してゐた。

六

その後、私はまたしばらく新田に會はなかつた。彼の待合に訪ねたい氣はあつたが、あの女に會ふことを思ふと、氣が進まなかつた。それに酒を飲みに友だちを案内するにしては、あまりに不愉快な、下等な待合であつた。
或る日、突然、新田の手紙を持つた車夫が、私の事務所に訪ねて來た。緊急な事件が突發したから、この車に乘つて本村町のうちまで來て呉れろとの事だつた。私は久しぶりに、あの長い坂を上つて行つた。
格子戸を開けると、新田が玄關に立つてゐた。私は默つて玄關に上つたが、新田はまだぼんやり突立つてゐる。帽子を脱いで、鴨居の釘に懸けながら、ふいと次の間を覗くと、派手なメリンスの蒲團を室一ぱいに敷いて、新田の母が寢てゐるのだつた。あの廣い富士額だけが、白く蒲團の上に出てゐた。
「御病氣かい？」私は低く呟くやうな聲で聞いた。

新田は、初めて私に氣附いたやうに、ちらりと私の顔を見たが、すぐに、目で梯子段を見上げて、私を促すやうな顔をした。私が登り始めると、新田もそれに隨いて來た。が、二階に上ると、新田の妹が、ぼんやり机の前に坐つてゐた。私は新田の母が、重病ではないかと思つた。

二人は、座蒲團も敷かないで、向き合つて坐つたが、妹が階下に降りてからも、しばらく口を利かなかつた。新田はすつかり度を失つてゐるやうだつた。その様子で、私は病氣以上に不吉な何かを豫感した。

やがて、新田の話したのはかうだつた。

三年前に、新田がまだ九州に行つてゐた間に、新田の家に一人の若い同居人が出來た。それは新田の母の謡ひ仲間でしばらく家元の代稽古として朝鮮に行つてゐたのだが、その間に、ちよつとした事業に手を出して、すつかり失敗して東京に歸つて來たのだつた。それを、男に頼まれるままに、新田の母が同居させたのだつた。

「なあに、初めのうちは、おふくろだつてそんなつもりではなかつたのさ。たゞ、おふくろはあれで人一倍しみつたれだから、謡ひ僕はゐないし、間代でも取れば家賃が助かるくらゐの氣で、まあ、男を同居させた譯なのさ」と新田は説明した。

が、もと／＼風來坊であるこの男と、殊に朝鮮あたりを喉一つで渡り歩いた多少藝人じみたこの男と、この女世帶との關係が、さうした利害關係だけに留つてゐることは不可能であつた。新田が九州の炭鑛から歸つて來た頃にはもう、この男と新田の母とが、夜おそく、赤い顔をして歸つて來るやうなことが多くなつてゐた。

「僕は、歸つて來るとすぐそれを感づいちやつたから、仕事が急がしいのを口實に家を出てしまつたのさ。おふくろにも氣の毒だからね。僕の母だもの、無理はないさ」新田は苦笑して言つた。

その後、新田と母親との間には、殆んど消息が絶えてゐた。母親の今の生活に息子が口を入れない代りには、息子が大きくに違つた女と家を持つ放埒にも、母親は非難を加へないと云ふ默契が、彼等の間に出來てゐたらしい。が、一週間前に、急に妹からの呼び出しで、新田がこの家に來て見ると、母親は殆んど狂亂の姿だつたと言ふのである。

「うむ、おふくろの財産をすつかり横領されてたことが解つたのさ」

「財産はよほどあつたのかい？」

「うむ。これまで僕にはまるで知らさないのだらう。親爺の遺産なんかもう幾らもないと云ふので、弟子も來ないのにお花の看板をかけたり、しまひには麻糸つなぎの内職までやつて見せるものだからね、僕ももう財産なんかないものだと思つてゐたのさ。ところが、今度調べて見ると、ちよつと二萬圓近く蓄めてゐたんだね。そいつを、何時の間にか、巧く根こそぎ持ち出されてゐたんだから、おふくろも驚いたのさ」

新田は、しかし、割合に落ち着いて、こんなことを話した。

しかし、その金の大部分は、その男が私かに澁谷の方に建てゐる撚絲工場に注ぎ込んだらしいから、工場の狀態さへ好いならば、多少取り返せるかも知れないとのことだつた。

「それで、その男とはもう手が切れたのか」

「手を切るも切らもないもないさ。すぐに告訴しちやつたさ」

私はこんな事に驅けては、ひどくてきぱきと遣つてのける、氣の強い新田の顏を見た。彼は何時ものやうに目を伏せて少し青づんだ自分の鼻の尖を見つめてゐた。

二人はしばらく默つてゐた。何も言ふことがないのではない。言ふことが多すぎて默つてゐるのだつた。室の中は、すべて昔の儘だつた。たゞ、隣りの四疊半の片隅に、男の持ちものらしい柳行李や信玄袋が、一まとめにして重ねてあつた。

新田はふうーと長く煙草の煙を吐き出して、わざ〳〵大きく胡坐の足を組み代へて、何か言ひたさうに私の顏を見たが、また默りこんでしまつた。彼は、それを二三度繰返した。私は彼が、まだ何か言ひ憎いものを持つてゐると思つた。そして、今日わざ〳〵周章てて私を呼んだのが、それよりもむしろこれにあると思つた。が、それに就ては、私もたうとう何も聞かないで、その日はやがて、そのまゝ歸つて來た。

しかし、其後二三度會つてゐるうちに、私がおぼろげに感じたことは、新田があの妹にも或る疑ひをかけてることだつた。

「幾ら僕でも、こいつだけは不愉快だから聞いて見る氣になれないのだが、何うも妹のそぶりにも腑に落ちないことがあるんだ。何しろ、男の方はそれで食つて來た奴らしいからね」

或る日新田がこんなことを言つたことがあつた。そして暗に、私が彼女に何かの希望を持つてゐるならば、それを斷念しろと勸めるやうな口吻をもらした。

「兎に角、僕には妹のことは保證出來ないね」と言つた。

これは、私には可なりな打撃だつた。無論、これまでとても、私はそれほど判然した希望を、彼の妹の上に置いてゐたのではなかつたが、彼女のあの無垢なからだが、この猜心鬼のために弄ばれたのだと思ふと、私はぎゆつと胸を擽られるやうな氣がした。

七

一ケ月ばかり經つて、私は久しぶりに新田を訪ねて見た。

あの事件以來、母親や妹の世話を見なければならなくなつた新田は、兎に角本村町の家をたたんで、彼がこの頃同居してゐた九段の方の、友人の家の二階に、母や妹と一緒に引越してゐたのだつた。（一緒に待合を開いた例の女とは、彼はもうとつくに別れてゐた。女が、昔の情夫と再び會つてゐるのを知つた彼は、それを機會に女の手から逃げ出したのだつた。）

その日恰度新田はゐなかつたが、もう直ぐ歸る頃だから上つて待つて居れとのことだつたので、私はそのまゝ、妹に案内されて二階に上つた。二階に上ると、一人の來客が恰度歸るところだつた。客は三十四五に見える男で、粗末な紋付羽織に袴をはいてゐた。

「それでは何うぞ、浩さんにもよろしくおつしやつて下さい」

客は丁寧に新田の母にお叩頭をして、まだ梯子段の上に突立つてゐる私のそばをすり拔けるやうにして、降りて行つた。母親も、ちよいと私に會釋して、そのまゝ客を送つて行つた。

二階は六疊の一間きりだつた。簞笥だの長持ちだのが、ごた〳〵と積み重ねてある中に、今、母親だちが食べたらしい夏蜜柑の皮が、新聞紙の上に亂暴に散らかつてゐた。

「何うも、失禮しました」

やがて、新田の母が上つて來た。私はもう五六年ぶりに會つたのだが、額の深い皺をのけては、まだ昔の儘の若さだ

つた。

「もう御病氣はおよろしいのですか」

私は或る顧慮から、先づこんなことを言つて見たが、母親は別に白ばくれもせず、恥かしがりもしないで、すぐに、

「勇吉さん、今度こそはひどい目に遭ひましたよ」と言つた。そこで私も、

「いや、新田君からすつかり聞きましたが、今度は隨分御災難でしたねえ」と言はなければならなかつた。

「ほんとに、もう懲り〲しましたよ。しかし、それもこれも、みんな私が至らなかつたからですよ。信用の出來ない人間を信用して、子供等の財産までなくしたのですから。私もよつぽど莫迦ですねえ。かうなると知れば、父の遺産などは、早く子供たちに分けてやればよかつたのですよ。しかし、考へて見れば、男の方だつて、いろ〲氣の毒な事情もあるのです。それは憎いには憎うごさんすが、さう憎い憎いでやつて行けば、結句、先きのある男を一人殺すことになるんですから、まあ、善いことをすれば善い報ひがあると思つて、私がこなひだから毎日裁判所に行つて、實は昨日も告訴の取り下げを許して、今、その男が御禮に來たところなんですよ」

「では、今のお客さんがその人なんですか？」

「え、あの男ですよ。あれで、謡ひの方では、兎に角天才のある男なんですから、今號物になるところを助けてやれば、また私たちにも好いことがあると思ひましてね。……あの男も今、この御恩は一生忘れませんと言ひましてね……」

母親はもうぽたり〱と、ヒステリカルな涙を落してゐた。彼女の愚痴は、それからも、娓々として盡きなかつた。が、その長い愚痴の間にも、彼女は、さま〲な他のことでは自分を責めても、彼女の不貞、言ひ得るならば彼女の不身持ちに就ては、決して自分を責めなかつた。無論、その點の事をまで、彼女は否定してはゐなかつた。

「ほんとに、私の一生のことをあたたたんかが小説に書けば　隨分面白いものが出來ますがね」と言つたのを見れば、拵事でなければ小説にならないと思つてゐる彼女らの常識から見て、彼女が自分の情事を認めてゐるのは事實だつたが、その點では、彼女には全然道德的感覺がないらしかつた。彼女はたゞ〳〵失はれた財産を惜んで、自分の愚さを責めたが、それにも增して、彼女は、あの男を許した自分の寛大さを認めることによつて、自分の有德を認めることによつて安つぽい涙にひたらうとするのだつた。

「まあ〳〵、これからに、新田君の子供になつた氣で、すつかり新田君にまかせて、靜にお暮しなさるんですよ」

私もすつかり彼女のセンテイメンタリズムに引き入れられてゐた。

「え、私ももうそのつもりで、尼さんのやうな氣で暮すつもりですよ」

彼女はまた深く泣きだした。

間もなく、新田が歸つて來た。私たちはすぐ簡單な夕食の卓に就いたが、新田は例によつて默り切つてゐた。妹もうつむき勝ちに、とぼ〳〵と箸を運んでゐた。たゞ、母親だけが、新田の顏を見上げながら、口を利いた。彼女は、今日男が禮に來た時の樣子や、彼の言つたことを、輕蔑し切つた調子で新田に話して聞かせた。が、それに對しても、新田は殆んど口を利かなかつた。

食事が濟むと、新田は私を外に誘ひ出した。

二人は默つて、靖國神社前の暗い廣場の方へ出て行つた。

「今度はおふくろも、だいぶこたへたらしいな」私が先づ聲をかけた。

「うむ。可なり弱つてるが、ほんとにこたへるところまで行つてるか何うかは解らないね」暗い聲で新田が應じた。

「僕も、今日話して多少さう思はないでもなかつたが」
「あれでなか〳〵氣まぐれだからね」
「しかし、男にはもう未練はないやうだね」
新田はしばらく默つた末に、
「ところが、何うもまだあるらしいのだよ」と言つた。「告訴を取りさげることには、それは僕も贊成して、隨分度々裁判所にも通つたのだが、さうして男が放免されて出て來ると、直ぐにこつそり會ひに行くなんさあひどいぢやないか」
新田は強い語氣で言つた。
「へえ。何時だい、それは」
「昨日さ。昨日の朝、男が出て來ると、すぐ午後には二人で大森の砂風呂に行つてるのさ。第一、砂風呂なんか下等ぢやないか。僕が何も知らないと思つてるんだが、そんなことが解らないで何うするんだ」
新田は何かを叱るやうな調子で言つた。
二人はまた默つて歩いた。たうとう九段下の明るみの中に出て行つたが、珍らしくその夜は、そのまゝ酒も飲まないで別れてしまつた。

八

新田と待合を開いたあの五十近い女の姿と、今日見た新田の母の顏とが、かはる〳〵、電車の中の私の頭に浮んで來た。私は妙にいら〳〵した氣持になつた。

今年の夏、私たちが講演旅行に出た時に、私は計らずも、大阪の講演會場で、新田に會つた。九段下で別れてから、もう三年經つてゐた。彼が其後、母親たちと一緒に大阪に來たことは私も知つてゐたが、何故だか、大阪と新田との聯絡觀念は、私の頭の何處の隅にもなかつた。だから、今度大阪に行くことが決つた時にも、私は全然新田のことを思ひ浮べなかつた。

「君も厭に名士になつたもんだね」あの宏壯な大新聞社の、風流しの好い講師控へ室に通すと、彼は先づ笑ひながら言つた。

「なあに、乞食旅行さ」私も輕い氣持で應じたが、それはすぐに不愉快に、私自身の頭に反響した。

「これで、講演と云ふものは儲かるものかい？」彼はすぐに、彼一流の金儲けごとに話しを落した。

「儲かりやしないさ。それよりも、君の方は何うだ。金でも少しは出來たかい」

「出來るものかい。支店長だとか何だとか、肩書きだけは立派だが、自分の身にはまるで着かないからね」

「お母さんは御丈夫かい？」私は矢張り輕い氣持で訊ねた。

「うむ。丈夫らしいが、また別れちやつたよ。大喧嘩をしてね、今、ふくろも妹も弟と一緒に神戸にゐるよ

「あゝ、弟さんはもう船に乘つてるんだね。では、君は今、一人か」

「たうとう女房を貰つたよ」

そこで新田は、或る温泉場で偶然知り合ひになつた娘を、妻にしてゐることを簡單に話したが、そのうちに、私の講演の番が迫つて來た。

「ぢや、歸りに寄るから」

私は彼を控へ室に殘して、そのまゝ頭で埋つた會場に入つて行つた。

私たちはそれから九州に行つた。そして、二週間後に再び大阪に歸つた時に、或る日私は、新田の家を訪ねて見た。

彼は、阪神線に沿つた郊外に住んでゐた。

「今日は、君が來るだらうと思つてたよ」洗ひさらしの浴衣を着た新田が玄關に出て來た。

私はすぐに、玄關にとつつきの表座敷に通されたが、明放した家の中は、空家のやうにがらんとしてゐた。

「いやにだだつ廣い家だね」私は鏡臺一つない家の中を見廻して言つた。

「うむ。これが最近の大喧嘩の結果さ」新田も苦笑して家の中を見廻した。

そこへ妻君が入つて來た。血色の惡い、腺病質の女だつたが、目の美しい聰明らしい女だつた。それに、新田には珍らしく、彼女は若かつた。

「貰つた見て、こいつが君の崇拜者だつたから驚いたね」

妻君の挨拶が濟むと、新田はすぐこんなことを言つた。彼は、見違へるほど快活に、幸福さうになつてゐた。

しかしその夜、二人が少しづつビールを飲み始めて、彼が顏を赤め始める頃には、彼の心持はそれほど明るいものではなかつた。それに、これまでは、幾ら醉つても彼一流の爽快さを失はなかつた彼が、今は醉ひにつれて愚痴つぽくなつてゐた。

「いや、おふくろには僕も死ぬほど弱らされたよ」

彼は幾度もかう繰返しながら、母親と別れた事情を、縷々話し始めた。しかしその事情も、たゞの嫁と姑との爭ひの多少烈しいものであるに過ぎなかつた。もしその中に、多少普通でないものがあるとするならば、それは、彼等の結婚

の成立ち世間的には多少不自然なものでも、女が兩親の家を脱け出して　ふだん着一枚で新田の懐に飛びこんで來たことと、新田の母親が近頃急に財産家になつたことであつた。

「うむ。あの例の男が、おふくろから盗んで建てた工場が、あれからぐん／＼良くなつてね。今ぢや、あれが可なり財産になつてるのさ」

しかし、一應告訴を取りさげて貰つたあの男は、其後また檢事から起訴されて、今では入牢してゐるとのことだつた。

「女と云ふものは不思議だよ。あの年になつて、色氣がなくなると忽ち慾氣にかゝるんだからね。工場の景氣がよくなると、忽ちあれを僕に渡すのが惜しくなつて、僕を廢嫡しちやつたあね。そして、すつかり弟の名に書き換へちやつたのさ。だから、今は弟が新田家の嗣子さ」

私は再び、がらんとした家の中を見廻した。

「引越しの時なんか、お鍋一つ置いて行つては下さらないのですからね」妻君も傍から恨めしさうに口を入れて、今更らしい臺所の方に目をやつた。

「それは君、滑稽だつたぜ。毀れたバケツまで持つて行つたからね」新田も忌々しさうに笑つた。

其夜私たち三人は、上蒲團を下に敷き、敷蒲團を上に懸けた珍らしい姿で横になつたが、夏のさなかに體をくつつけ合つてるのだから、何うしても寢つけなかつた。

私は、新田の温か味をせなかに感じながら、いろ／＼のことを考へてゐた。

「僕もうこれからは、色氣はぬきにして、少し金でも作るよ。今のまゝでは、こいつが可哀さうだからね」

しばらくして、新田がしんみりとかう言つた。それは、妻の前で言ふには餘りに月並な言葉だつたが、私は急に胸元がこみ上げて來るのを感じた。

新田の妻も泣いてるだらうと思つた。

朝がたからうと／＼して、翌日午近くなつて私は起き上つた。新田はもうとつくに店に出かけてゐた。私はすぐ縁かわの洗面所に出て行つたが、その時初めて見覺えのあるものを見た。新田の父と母とのあの肖像畫が、埃まみれになつて、縁の隅に立てかけてあるのだつた。

――大正九年九月作――



鮫人

第四編　深夜の人々

谷崎潤一郎

第三章

話は少し前に戻るが、ちやうど其の晩の十二時近い時分、恰も梧桐と服部とが奥の萬盛庵で酒を飲んでゐた頃に、仲店の裏通りに於けるチヤプリン・バアでは定連の樂屋の人々が寄り集まつて、盛んにメートルを上げて居る最中であつた。

チヤプリン・バアは其の名の如く極めて飄輕な元氣な醉ひどれの紙烟を上げに來る場所であつて、バアとは云ふもの丶勿論淺草式の見すぼらしい居酒屋に過ぎない。その上さんが先の亭主を追ひ出して「金公」を後釜へ引き擦り込んだ時分に、即ち以前の萬里軒がチヤプリン・バアとなつた時代に、表つきの面目を一新して洋食屋よりはおでん屋に近いやうに直したのであつたが、その生々しい落葉松の白木の造作は、以前よりも一層店つきを落ち着きの惡い、お粗末なものに見せてゐた。讀者は定めし淺草劇場の天井に吊る下つてゐた狹ツ苦しい梧桐の樂屋を記憶せられる事であらうが、

あの樂屋を仲店の裏通りへ持つて來て、ぎつしりと詰まつた家と家との廂間(ひあはひ)へ押し込んだものと思へば、それで大凡そ其店つきを想像することが出來るのである。實際それはウッカリすると眼に這入らないくらゐな間口の狹い家であつて、誰が書いたのか「チャプリン・バア」とブッキラボウなゴシック型の文字が記されてある入口の障子を明けると、一方にさゝやかな土間があつて、其處にはたつた一箇のテーブルと二三脚の椅子が並べられ、他の一方は上り框の上が四疊半ほどの座敷になつてゐて、チャプ臺が二つ据ゑられてある。チャプ臺の向うの壁には、櫻正宗の酒樽が積んであつたり、廣告のビラが下つて居たりする中に、梧桐寛治を始め多くの役者どもが醉筆をのたくらせた落書きだのポンチ繪だのが五六枚も貼り付けられて居る。で、定連以外の客は、大概此の落書きに恐れをなして、それでなくても樂屋ごろつきの空氣に充ちてゐる此の店の樣子を、ちよいと覗いて見ただけで敢て這入らうとする勇氣のある者は少なかつた。さうしていつも夜の十一時から十二時頃になれば、その四疊半の座敷に陣取つてチャプ臺の周りに眞赤な顔を並べるのは、北斗劇團の人々に極まつて居て、さながら其處が彼等の梁山泊になるのであつた。

その晩も、煙草の煙の濛々と立ち罩める中に五六人の醉ひどれが落ち合つて、喰ひ散らした洋食の皿を前にしながら、頻りに管を捲いて居たが、一番よく飮んでよくしやべるのはピアニストの井口昌吉だつた。舞臺の上で着用するフロック・コートを着込んだまゝ、紅い造花の薔薇の花を襟に挿して、だぶだぶした上衣の裾を荷厄介にしながらドッカと腰を据ゑてゐる彼の傍には、髮の毛を長く伸ばしてバカボンド・ネクタイを着けたファースト・ヴァイオリンの「山ちやん」と呼ばれる男、酒ツ喰ひで有名な女優の光代、テノル唄ひの垂水清六、バアの主人公兼居候の水木金之助、――その外二三人の役者や管絃樂部員が山塞の山賊のやうにごちやごちや固つて居た。

「……な、分つたか？　お前たちあ何かツて云ふと藝術々々ツて云ふが、全體何處に藝術があると思ふんだ。今やつて居

る『眞夏の夜の夢』があれが藝術か？『マアチャント・オブ・ヹニス』があれが藝術か？　あんたもなあ淺草のお客にやあ受けるかも知れないが、藝術のゲの字もありやしねえんだぞ。沙翁劇をやるならもつと眞面目な態度でやれ。あんなこけ嚇かしの茶番のやうな眞似は止しにしろ。もつと眞劍になつて、淺草の民衆を敎育してやるのが己たちの使命なんだ……」

「ヒヤ、ヒヤ」

と云つて、光代は手にした杯の縁からだらしなくポタポタ酒をこぼしながら、横つ倒しに足を崩して片手を美少年の垂水の膝に衝いて居た。が、誰もそんな事には氣が付かないほど醉つ拂つて居るらしかつた。

「だからもう分つたつて云つてるからいゝぢやねえか。お前は醉ふと理窟を云ふから厭だつてんだ。己たちあ何も云はずに梧桐寛治を信賴してりやあ間違ひはねえのよ。寛治だつて結局の所はお前と同じ考へなんだ。な、な、だからもう其れでいゝぢやあねえか。……」

さう云つて、ムキになつて昌吉の相手になつて居るのは由ちやんだつた。

「おい、おい、後生だから喧嘩なんかしないでくれよ。」

と、後ろから金公が眼の周りを櫻色にしたおめでたさうな顏を出して、ろれつが廻らないせゐか愈々甘つたれた聲で云つた。

「心配するなよ、何も喧嘩ぢやあないんだから、――」

「まあさ、喧嘩ぢやあなからうが、そんな議論なんか止しだ止しだ。なあ、ふんたうにさうぢやあないか、そんなこたあ今更云はないだつてお互ひによく分つてるんだ。何だい、藝術かどうしたツて云ふんだい。アルス・ロンガ、ポタ・ブ

レビスが何だつて云ふんだい。へん！ 今に見やあがれ！ 巳たちの芝居がいくら茶番だつて、茶番で妥協して置いて、それから段々見物を教育して行かうツてえ趣向なんだ。そこが梧桐寛治のえらい所なんだ。世間の奴等が何と云はうと、巳がちやんと引き請けたからにや安心するがいゝや。」

「止せやい、止せやい、パックなんぞの出る幕ぢやねえやい。居候の癖にあんまり威張るとお上さんに叱られるぞ。」

「それ、それ、コクツ場で眼を光らしてらあ。——ねえお上さん」

と云つて、垂水はにやにやしながら臺所の方を覗き込んだ。

物を油でいためる音が絶えずシユー、シユーと騒々しく響いて居る暖簾の蔭の、帳場格子のある所に、その上さんはいつもしどけなく襟をはだけた不恰好な太つた姿を見せて居た。年は金公より十も上らしい三十前後、色の淺黒い、そばかすの多い、貪慾さうな眼つきをした、でつぷりと脂ぎつた圓顔の下びた年増で、どうして此の女が先の亭主を追ひ出してまで金公に浮身を窶したのか、その事件が起つて以來屢々楽屋中の問題になるのだが、谷崎潤一郎の小説を愛讀する井口昌吉の意見に依れば、「金公がマゾヒストで上さんがサディストだから不思議はないのだ。」と云ふ事になつて居たのである。さうして此の觀察は幾分か中つて居るらしく、舞臺で女優たちに頭を擲られる金公は、内でも時々上さんにポカリと喰はされて、「おゝ痛え！ 勘忍しておくれッてばよう！」などゝ意氣地のない所を、わざと多勢の前でさらけ出したりするのだつた。彼の舌足らずのやうな、低能じみた口の利きやうは、上さんに對する時は殊にひどかつたのである。

「お上さん、おたいにお小遣ひをおくんな。」

さう云つて彼が甘つたれると、

「何だねお前さん、乞食見たいに手を出さなくつたつて、欲しけりや遣るからいゝぢやないか。」

と口叱言を云ひながら、その癖上さんは此の馬鹿げた男が可愛くつて溜らないやうに、いそいそと首にかけた財布の底から幾らかの金を渡してやる。

「どうだい、みんな羨ましいかい、女に錢を貢がせるなんて、己はなかなか色男だらう。」

すると金公は得意になつて、でれりと肩を蒟蒻のやうに揺すつて見せる。とたんに上さんが、

「生意氣なことをお云ひでないよ。薄のろの癖にいゝ氣になつて居やあがる。」――ぴしやり！と云ふ工合に、平手で頬ッペたを叩き付ける。「あ痛え！」と云つて、慌てゝ金公が首を縮める。――斯うして二人は、見て居る者があればあるほど猶更ふざけ散らすのだつた。

「何でえ、己は威張つてなんぞ居るもんけえ、餘計な云つけ口なんぞするなツてことよ。――嘘だよ、お上さん」

金公は臺所の方をチラリと見て、さも恐ろしさうに竦み上つて、べそを掻きながら靈水の顔を睨みつけた。

「……そりや己だつて梧桐寛治のえらい事は知つて居らあな。だが彼奴にやあ藝術のこたあ分りやしねえ。分つたやうな顔はしてるが、實は何も分りやしねえ。彼奴のえらいのは世間からえらさうに思はせることがえらいんぢやねえか。要するに彼奴は偉大なるチヤアラタンだと云ふんだよ。」

井口はまだしつツくどくど、辯じ立てゝ居た。

「……貴樣はチヤアラタンと云ふ意味を知るまい？　知らなけりやあ覺えておけ。チヤアラタンてえのは山師ツてことだ。佛蘭西語でシヤアラタンてえんだ。梧桐寛治はつまり一種の山師だつてえ事なんだ。」

さう云つては片手でグビグビとコップを乾して、片手でハム・サラダを衝ツ突いて居る彼の樣子は、その奇怪なるフロ

ツク姿と相俟つてどう見ても大道の安藝人であつた。が、此れでも此の男は上野の音樂學校の出身なので、嘗ては帝劇の洋樂部に居たこともあるし、亞米利加三界を放浪して香港あたりに二三年ぶらついて居た經驗もあるし、また今日のやうにならない時代には有望なピアニストとして矚目されて居た人間だつた。天才肌で、恐ろしい酒飲みの怠け者で、何かと云ふと洋行を鼻にかけながら時々間違つた英語を使つて、その英語以上にアヤフヤな外國の智識を振り廻す無學な男ではあつたけれども、同時に何處かしら名人氣質の率直な所があつて、それが爲めに彼は多くの人から可愛がられ、未だに昔日の聲望を全く失墜してはゐないのだつた。さうして淺草の舞臺へ立つやうになつてからも、彼が得意とするショパンの演奏は、公園には勿體ないものとして心ある人々の注意を惹いた。醉つ拂ふと無闇に悲憤慷慨して、譯の分らない理窟を捏ねたがる癖があつたのも、さう云ふ過去の經歷と現在の境遇から來る不平の結果だつたのである。

「やあ、失敬、相變らずお盛んだね。」

その時ガラリと表の障子を明けて、閾際に佇みながら中を覗き込んだ男があつた。意氣なフレンチ・スタイルの、濃いオリーヴのサック・コートを小太りに太つた體へキチンと纏つて、同じオリーヴの天鵞絨の中折に、銀座の田屋のショウ・キンドウにでもありさうな蜥蜴の背の如くぎらぎら光るネクタイへ大きなルビーのピンを挿した、三十二三の色白の紳士で、杯盤狼藉たる一座の樣子を呆れたやうに見廻しながら、象牙のノッブのあるステッキでとゝゝとんと輕快に地面を敲いて居る。

「やあ、來た、來た、」

と、井口は直ぐとさう云つて、そのハイカラないでたちを眼敏くヂロヂロと眺めながら、

「何だい、そんな所に突ッ立つて何を考へて居るんだい。此方へ來て一杯やつたらいゝぢやないか。――尤も此處は、

君のやうな紳士の來る所ぢやないんだがね。」

紳士はそれには答へずに、垂水の膝に凭れて居る光代の醉顏を偷むやうに見て、鷹揚ににこにこ笑ひながら這入つて來た。

「星野先生、入らつしやいまし、今日はどうも、――」

「止せやい、金公、そんなにピョコピョコお辭儀なんかするない。もう此處へ來たら先生も糞もありやしないんだ。」

井口は金公をたしなめて置いて、それからぺつたりと紳士の傍へ體を擦り着けて、

「なあ、星野君、さうぢやないか。君と僕とは昔ッからの友達だらう。ねえ、さうだらう。君は今ぢやあ賣れッ兒にやあ違ひないが、何も先生ッて云はなくつたつていゝだらう。」

「誰も惡いッて云やあしないさ。僕は此れでも淺草黨の一人なんだからな、」

「うん、さうか、君あ感心だ、君のやうな小說家が淺草へ眼を付けるなあ感心だ。種はいくらでも供給するから、どうか一つ己たちの事を書いてくれ。己たちなんざあ小說こそ書かないが、實は君よりもズッと進んだ深刻な惡魔主義者なんだぜ。」

「垂水さん、あたいに其れを一と口おくれ」

光代は大きな口をパクンと開いて、チキン・ライスを喰つて居る垂水のふつくらしたホッペたの方へ、自分の顏を持つて行つた。

「あはゝゝゝゝ」

と、星野はわざとらしい快活な笑ひ方をして、

「僕は君たちの事よりか歌劇を書きたいと思つてるんだよ。世間の奴等は淺草と云ふと馬鹿にするけれど、劇の運動なんてもなあ淺草の樣な所から起つて行かなけりや嘘なんだ。僕の考へぢやあ、今に淺草からほんたうの民衆藝術が生れるだらうと思ふんだ。ねえどうだらう、僕に一つ歌劇を書かしちやくれないだらうか。」

「君が歌劇を書く？ そりや面白からう。是非一つやつて見るんだな。一體君たちあ、今迄小ツぽけな文壇なんぞに引込んで居たのがよくないんだよ。憚んながら君の前だけれど、僕は今の文士なんて者はみんな馬鹿だと思つて居るね。みんな意氣地のない、ケチの野郎ばかりだと思ふね。民衆藝術だの何のと云ひながら、一體どれだけ民衆の爲めに盡してるんだ。己たちなんか疾ツくの昔から民衆の味方になつてるんだぜ。此れで己たちが一つ踏ん張りやあ、今に淺草から藝術の革命が起るんだ。小說家だらうが俳優だらうが、淺草を輕蔑する奴は殘らず撲滅されちまふんだ。だから君なんぞも、宜しく今のうちから己たちの運動に加はるんだね、己たちを友達に持つた事を大いに光榮に感ずるんだね。ほんたうに君、冗談ぢやないぜ、僕は眞面目で云つてるんだぜ。君が歌劇を書くつてんなら、どうかお書き下さいツて云ふ所だが、僕はさうは云はないね。小說家の癖に感心な奴だ、書きたけりやあ書かしてやるから、名譽だと思つて己たちを奢るんだね。……」

「うん奢るよ、奢るなあ今でも奢つてやるが、歌劇を書くには何か書き方でもあるのかね。僕は西洋音樂の事を一向知らないんだけれど、それでも君、大丈夫だらうか。」

「大丈夫、大丈夫」

由つちやんが不意にさう云つて横合から口を出した。

「星野先生、是非やつて下さい。書き方なんざどうだつて構やしませんよ。音樂の事なんか分らなくつたつて、此方で都

合のいゝやうに直さして貰やあいゝんですよ。『星野先生原作』と云ふ名前がありやあ、それでお客が來るんです。ねえ先生、きつとですぜ。書いて下さりやあきつとやりますぜ。」

「ふん、面白いぞ、淺草に星野先生の歌劇が現はれるなんて、さうなつて來なけりや、面白くねえんだ。それで一番公園中をどつと引つ繰り返してやるんだ。なあ、どうだい、ちやんと寸法が出來てるぢやねえか。もう斯うなりやあ氣が強えぞ。」

ぬつと金公は腕を捲くつて、えらさうに鼻の頭を擦つて見せた。

此の星野と云ふ男は、——斯う云ふ人物も淺草名物のオペラ・ゴロツキ、所謂ペラゴロのタイプの一つであるから、ちよつと說明して置くのだが、——二三年前までは名も知れない三文文士だつたのが、近頃の財界の好景氣につれて雨後の筍のやうに生れて來た雜誌の爲めに、急にメキメキと賣り出した新進作家、當時流行の原稿成金の一人になつて居たのである。井口昌吉とは古くからの顏馴染で、久しい間手紙の遣り取りもしなかつたのに、何と思つたか此の頃になつて屢々樂屋へやつて來るのだつた。いつも折目の正しい新調の洋服をリユウと著込んで、芝居の方はロクに見もしないで、舞臺から引き揚げて來る女優の姿をそれとなく物色しながら、廊下をぶらぶらとうろついて居る、妙に氣取つた嫌味な男だつたが、それでも文學者を尊敬するのを一つの政略と心得て居る梧桐夫婦から、「先生々々」と云はれて居た。自分では常に「淺草黨の一人」と稱して、此れからの芝居は歌劇でなければならないやうに云つて居るけれど、その癖今も白狀したやうに音樂の事なぞ皆目分らない人間で、實はそれよりも芝居がハネてから役者どもを引つ張つて何處かのカフエへ寄りに行くのが、——さうして云ふまでもなく、其の中には必ず一人か二人の女優を誘つて連れて行くのが、内々の目的であるらしかつた。しかし、こんな男に限つて、イヤに勿體振つて居るので、まだ誰と云ふあても附かずに、甲

の女優に半襟を買つてやつたり、乙の女優にマントを拵へてやつたりしながら、無闇に札びらを切つてばかり居るのである。つまり此の男が公園へ來るのは、成金が藝者を連れて遊山に行くのと大した變りはないのである。勿論札びらを切るとは云つても、たかが小說家の分際で大した事が出來よう筈はないのであるが、そこは又御方便にも相手が歌劇の女優であるから、甚だ手輕に成金振りを發揮することが出來るのであつた。たとへばちよつと晩飯を奢るにしても、彼女だちは藝者と違つて決して無駄な贅澤を云はない。日本近代の產物たる此の愛すべきオペラの人魚どもは、淺草に住みながら恐らく「大金」や「草津」の有難味を知らないであらうし、知つて居たにしろメリンスづくめの氣の毒な彼等の服裝は、そんな所へ連れて行つたら却て哀れを催すであらう。彼等に物を喰はせるのは文字通り腹一杯に喰はせてやればいゝのであつて、喰ひでのある幾皿かの洋食と、酒とビールとがありさへすれば、徒らに手數のかゝつた料理や座敷は必要でない。だから作者に云はせれば、藝者に取り卷かれて愚にもつかないあぶく錢を使ふ連中よりも、此の星野のやうなペラゴロの方が遙かに賢い遊び方を知つて居る譯で、多少なりとも新しい時代の空氣を感じて居るさう云ふ女優たちの方が、藝者に比べればどんなに正直で面白い「女友達」だか知れないのである。

「どうだい君達、もつと盛んに飲んだらいゝぢやないか。」

と、星野はポツケツトから銀のシガレツト・ケースを出して、細卷のディミトリノをぷかぷかやりながら、大分醉が廻つたらしくチヤブ臺の下へ足を伸ばして、しかし時々ヅボンの折目を氣にして居た。

「光代さん、君もつとビールをやつたらどうだい。」

「えゝ有り難う、奢つてくれるならいくらでも飲むわ。ビールぢやまどろツこしいからウィスキーにして頂戴。」

「おい、光ちやん、お安くないぜ、そんなに澁ちやんの傍にばかり喰着いて居ないでもいゝぢやねえか。」

さう云つたのは井口だつた。

「滑ちやん」と云はれた垂水は先から默つてにやにや笑つて居た。光代が後ろから肩へぶら下るやうにして、そのつやつやしい柔かい髮の毛を玩具にして居たが、別にうるささうな顏もしないで、彼は大人しくさうされたまゝ、ちびちびとコップの縁からビールを舐めて居るのである。黑羅紗の上衣に格子縞のパンツを穿いて、水兵服のやうに襟の開いた寬やかなシャツに派手なスポーティング・ネクタイを結んで居る其の風つきは、彼が好んでするところの服裝なので、さう云ふ子供々々した樣子が彼には一番よく似合ふのであつた。彼は又その洋服の寸法を故意に體よりは小さく造らせて、伸び伸びと發達した裕かな手足を出來るだけ外へはみ出させる事に苦心して居た。ゆきの短かい、つんつるてんの袖口から飛び出して居るすんなりした滑かな手頸、背を屈めると上衣の肩が破れるほどに隆起する腕の曲線、幅の狹いパンツの下にたつぷりと張り切つた股の筋肉、――凡べてそれらは、裸體よりは一層強く異性を惹き着ける力があることを、彼は知つて居た。人は此の男を公園中でのテノル唄ひとして持て囃しては居たけれども、彼の人氣は多く美しい容貌のお蔭であつて、お伽噺のプリンスのやうに優雅に見える華奢な顏つきと體つき、白く細かに際立つた見事な齒並び、女のやうにやさしい粽足、それらのものがそれほどでもない彼の技藝を引き立てゝ居るのだつた。その點に於いて彼は眞珠と同じだつたが、外の評判がいゝ割りに樂屋うちでの評判が餘り芳しくない事も、亦眞珠と同じだつた。いや實を云ふと眞珠以上であつた。眞珠は兎も角も年の行かない子供ではあり、一應は無邪氣な少女として扱はれて居たのに、今年二十一になる垂水は、年に似合はない色魔として恐れられて居たばかりでなく、自分でもそれを得意にして居た。何か女の事に就いて妙な噂がある場合には、「垂水が怪しい。……」と、直ぐさう云はれたのである。

「――焼くなら勝手に焼くがいゝや、あたいは滑ちやんが好きなんだもの。」―

光代はウィスキーをぐいゝ飲みにして、乾したコップをごろごろと壁へ轉がしたかと思ふと、ぐつたり卓子へ突つ伏してしまつた。

「あゝ醉つた、醉つた、あたいほんとに醉つちやつたわ。こんなに醉つちや歸れやしないわ。」

「時にもう一時だね、」

と、星野が云つた。

「みんな一緒にタキシーで歸らうぢやないか。どうせもう電車はありやしないから。」

「よからう、よからう、さう極まつたらもう一本だ。――お上さん、此れを一つ。」

と云つて、井口は空ツぽの正宗の瓶を翳して見せた。

一同がぞろぞろとバアを出て行つたのは、それから又三十分程立つてからだつた。

「お上さん、僕も其處まで送つて來るぜ、なに大丈夫だよ、直ぐ歸つて來らあ。」

金公はさう云つて吾妻橋の袂まで附いて來たが、星野は其處で皆をタキシーに乘り込ませた。

「垂水君、君も乘つてつたらいゝぢやないか。みんな方角が違ふんだから、どうせ廻り路をしなけりやならないんだ。」

「えゝ、有う難う、――僕は歩いたつて譯ないんです。直き此の橋向うなんですから。」

垂水は餘り進まない顏つきで何か外の事を考へて居るらしかつた。彼は此處からつい五六丁の向嶋の小梅に住んで居たのである。

「濟ちやん、左樣なら、――」と、光代は自動車の中から大きな聲で云つた。此れから大塚の終點まで歸るんだと云ふ醉つ拂ひの彼女を中に挾んで、星野と井口とはまだ根氣よくおしやべりを闘はして居た。

第四章

「光代は已に惚れてるんだぜ、あの面でなあ。──ほんとにしつッこいッたらありやしねえや。」

自働車の影が遠くへ行つてしまふと、垂水は吐き出すやうに云つて、敷島の吸殻を地面へ叩きつけた。

「あゝ弱つた、今夜見たいに弱つたこたありやしねえや、僕あ先からやきもきしちやつたぜ。」

さう云つて金公は、その頓興な眼の玉を緋鯉が麩でも追つ駈けるやうにパチクリやらせて、恐ろしく眞顔になりながら垂水の側へ寄つて行つた。

「おい、垂水君、君シッかりしないぢやいけないぜ、先生が感付いてるらしいんだぜ。」

「感付いて居る？　どうして？」

垂水は肩を聳やかした。

「どうしてッて君、垂水が怪しいから氣を付けろッて、僕に頼んだんだ。それにね、僕あ先手紙を持つて、服部の所へやらされたんだが、少し變だと思つたから、手紙の中を讀んでやつたんだよ。」

「手紙で何だつて云ふんだい？」

「──手紙にや別に何とも書いちやなかつたがね、今夜頼みたいことがあるから、大急ぎで來てくれろッて、それだけしか書いちやなかつたがね、僕の考へぢやあ、服部が眞珠さんに惚れてるから、彼奴を使つて捜らせようッて魂膽なんだよ。大方それに極まつてらあね、今夜あたりやあ氣を付けなくつちやいけないぜ。」

「ふん、さうか、──だけど服部なら始末がいゝや、彼奴なら一杯飲ませてやりやあいゝんだからな。」

小屋へ歸る筈の垂水も、[illegible]とはしないで、非常から金公とつるみ合つて公園の方へ戻つて來るのだつた。

もう彼れ此れ二時近くであつた。前にも云つたやうに、それは土曜日の晩だつたので、可なり遲くまで群集が出盛つては居たけれども、さすがに其の時分には廣小路の大通りも大概の家は戸を鎖して、「公園」全體がほつと溜息をつきながら眠りかゝつて居るやうであつた。――實際、夜が更けてからのあの公園には、さう云ふ溜息が聞えるのである。たしかにあの公園は一個の偉大なる生物であつて、それが一日の勞役の爲めにぐつたりと疲れて眠つて居るのが、感ぜられる。さうして又、そこには群集の靈魂とでも云ふやうなものが、人通りの絶えた仲店の舗道の上や、觀音堂の蔭の廊や、活動寫眞館の近所などにさまようて居て、消え殘つた電燈の光の中をふわふわと漂ひながら、公園の眠りを脅やかしてでも居るやうに思はれる。さう云ふ時刻の「淺草」の姿を見た者は、何かの悪夢を連想したり、怪しい犯罪の事を考へずには居ないであらう。晝の公園が不思議な魅力を持つて居る以上に、夜の彼女が更に物凄い妖婦である事を知るであらう。――垂水と金公とは雷門の前を通り過ぎて、ちん屋の先を右へ曲つて、だんだんとカフエエ・パウリスタの方へ歩いて行くのだつた。背の高い、すらりとした洋服姿の男と、ぶくぶくの木綿の羽織を着た子供じみた小さな男と、その二つの影はひつたりと寄り添つて、小聲で話をしながら動いて居た。

「――よし、よし、それで分つたからお前は歸れよ、さういつ迄も喰着いて來るなよ。」

さう云つたのは垂水である。

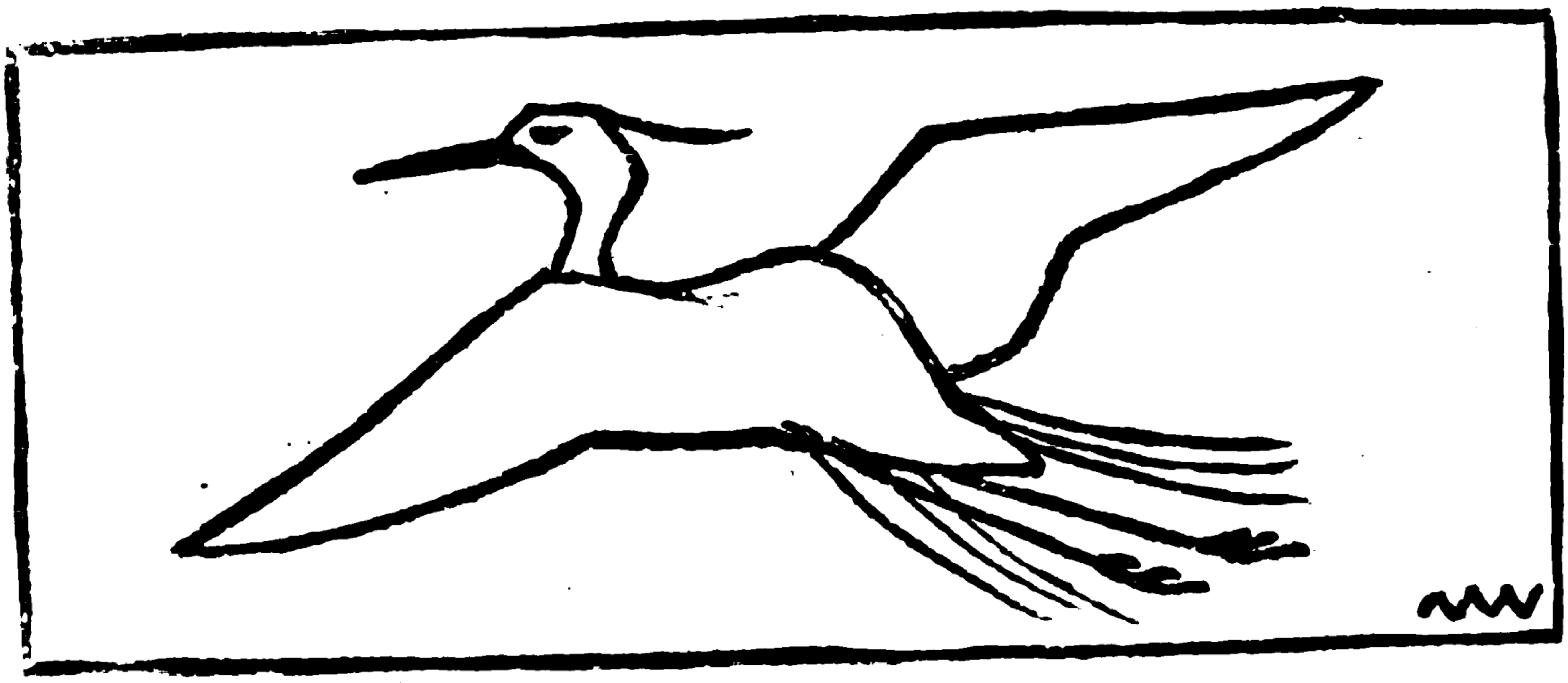
「あ、さうだ、さうだ、つい話に夢中になつちやつた。遲くなると又おとゝさんに叱られらあ。」

「だが、今夜は來るかどうか怪しいもんだな。――又その時はその時で宜しく頼むぜ。」

「大丈夫だよ。そこは僕の口の先でどうにでもなるから心配はないよ。梧桐寛治なんて、眼ばかりキヨロキヨロさせてたつて甘えもんさ。ちや失敬」

と云つて、金公は仲店の方へ歩き出した。垂水はオペラ館の前に立ち停まつて、やゝ暫く其處に彳んで居た。

（此章つゞく）



お律と子等

芥川龍之介

一

雨降りの午後、今年中學を卒業した洋一は、二階の机に背を圓くしながら、北原白秋風の歌を作つてゐた。すると「おい」と云ふ父の聲が、突然彼の耳を驚かした。彼は倉皇と振り返る暇にも、丁度其處にあつた辭書の下に、歌稿を隱す事を忘れなかつた。が、幸ひ父の賢造は、夏外套をひつかけた儘、うす暗い梯子の上り口へ胸まで覗かせてゐるだけだつた。

「どうもお律の容態が思はしくないから、愼太郎の所へ電報を打つてくれ。」

「そんなに惡いの？」

洋一は思はず大きな聲を出した。

「まあ、ふだんが達者だから、急にどうと云ふ事もあるまいがね、——愼太郎へだけ知らせた方が——」

洋一は父の言葉を奪つた。

「戸澤さんは何だつて云ふんです？」

「やつぱり十二指腸の潰瘍ださうだ。──心配はなからうつて云ふんだが。」

賢造は妙に洋一と、視線の合ふ事を避けたいらしかつた。

「しかしあしたは谷村博士に來て貰ふやうに賴んで置いた。戸澤さんもさう云ふから、──ぢや愼太郎の所を賴んだよ。宿所はお前が知つてゐるね。」

「ええ、知つてゐます。──お父さんは何處かへ行くの？」

「ちよいと銀行へ行つて來る。──ああ、下に淺川の叔母さんが來てゐるぜ。」

賢造の姿が隱れると、洋一には外の雨の音が、急に高くなつたやうな心もちがした。愚圖愚圖してゐる場合ぢやない──そんな事もはつきり感じられた。彼はすぐに立ち上ると、眞鍮の手すりに手を觸れながら、どしどし梯子を下りて行つた。

まつすぐに梯子を下りた所が、ぎつしり右左の棚の上に、メリヤス類のボオル箱を並べた、手廣い店になつてゐる。──その店先の雨明りの中に、パナマ帽をかぶつた賢造は、こちらへ後を向けた儘、もう入口に直した足駄へ、片足下してゐる所だつた。

「旦那。工場から電話です。今日あちらへ御見えになりますか、伺つてくれろと申すんですが………」

洋一が店へ來ると同時に、電話に向つてゐた店員が、かう賢造の方へ聲をかけた。店員は外にも四五人、金庫の前や神棚の下に、主人を送り出すと云ふよりは、寧ろ主人の出て行くのを待ちでもするやうな顏をしてゐた。

「けふは行けない。あした行きますつてさう云つてくれ。」

電話の切れるのが相圖だつたやうに、賢造は大きな洋傘を開くと、さつさと往來へ歩き出した。その姿がちよいとの間、淺く泥を刷いたアスファルトの上に、かすかな影を落して行くのが見えた。

「神山さんはゐないのかい？」

洋一は帳場机に坐りながら、店員の一人の顔を見上げた。

「さつき、何だか奥の使ひに行きました。——良さん。何處だか知らないかい？」

「神山さんか？ I don't know ですな。」

さう答へた店員は、上り框にしやがんだ儘、あとは口笛を鳴らし始めた。

その間に洋一は、其處にあつた頼信紙へ、せつせと萬年筆を動かしてゐた。或地方の高等學校へ、去年の秋入學した兄、——彼よりも色の黒い、彼よりも肥つた兄の顔が、彼には今も頭の何處かに、ありあり浮んで見えるやうな氣がした。「ハハワルシ、スグカヘレ」——彼は始から書いたが、すぐに又紙を裂いて、「ハハビヨウキ、スグカヘレ」と書き直した。それでも「ワルシ」と書いた事が、何か不吉な前兆のやうに、頭にこびりついて離れなかつた。

「おい、ちよいとこれを打つて來てくれないか？」

やつと書き上げた電報を店員の一人に渡した後、洋一は書き損じた紙を噛み噛み、店の後にある臺所を抜けて、何時もは父が坐つてゐる、晴れた日も薄暗い茶の間へ來た。茶の間には長火鉢の上の柱に、或毛糸屋の廣告を兼ねた、大きな日暦が懸つてゐる。——其處に髪を切つた淺川の叔母が、頻と耳搔きを使ひながら、忘れられたやうに坐つてゐた。それが洋一の足音を聞くと、やはり耳搔きを當てがつた儘、始終爛れてゐる眼を擧げた。

「今日は。お父さんはもうお出かけかえ?」

「ええ、今し方。――お母さんにも困りましたね。」

「困つたねえ、私は何も名のつくやうな病氣ぢやないと思つてゐたんだよ。」

洋一は長火鉢の向うに、いやいや落着かない膝を据ゑた。襖一つ隔てた向うには、大病の母が横になつてゐる。――さう云ふ意識が何時もよりも、一層この昔風な老人の相手を苛立たしいものにさせるのだつた。叔母は少時默つてゐたが、やがて額で彼を見ながら、

「お絹ちやんが今來るとさ」と云つた。

「姉さんはまだ病氣ぢやないの?」

「もう今日は好いんだとさ。何、又何時もの鼻つ風邪だつたんだよ」

淺川の叔母の言葉には、輕い侮蔑を帶びた中に、反つて親しさうな調子があつた。三人きやうだいがある内でも、お律の腹を痛めないお絹が、一番叔母には氣に入りらしい。それには賢造の先妻が、叔母の身内だと云ふ理由もある。――洋一は誰かに聞かされた、そんな話を思ひ出しながら、少時の間は不承不承に、一昨年或呉服屋へ縁づいた、病氣勝ちな姉の噂をしてゐた。

「愼ちやんの所はどうおしだえ? お父さんは知らせた方が好いとか云つてお出でだつたけれど。」

その噂が一段落着いた時、叔母は耳搔きの手をやめると、思ひ出したやうにかう云つた。

「今、電報を打たせました。今日中にやまさか屆くでせう。」

「さうだねえ。何も京大阪と云ふんぢやあるまいし、――」

地理に通じない叔母の返事は、心細い位曖昧だつた。それが何故か唐突と、洋一の內に潜んでゐた或不安を呼び醒ました。兄は歸つて來るだらうか？ ——さう思ふと彼は電報に、もつと大仰な文句を書いても、好かつたやうな氣がし出した。母は兄に會ひたがつてゐる。が、兄は歸つて來ない。その內に母は死んでしまふ。すると姉や淺川の叔母が、親不孝だと云つて兄を責める。——こんな光景も一瞬間、はつきり眼の前に見えるやうな氣がした。

「今日屆けば、あしたは歸りますよ。」

洋一は何時か叔母よりも、彼自身に氣休めを云ひ聞かせてゐた。

其處へ丁度店の神山が、汗ばんだ額を光らせながら、足音を偸むやうにはひつて來た。成程何處かへ行つた事は、袖に雨じみの殘つてゐる縞絽の羽織にも明らかだつた。

「行つて參りました。どうも案外待たされましてな。」

神山は淺川の叔母に一禮してから、懷に入れて來た封書を出した。

「御病人の方は、少しも御心配には及ばないとか申して居りました。追つていろいろ詳しい事は、その中に書いてありますさうで——」

叔母はその封書を開く前に、まづ度の强さうな眼鏡をかけた。封筒の中には手紙の外にも、半紙に一の字を引いたのが、四つ折の儘はひつてゐた。

「何處？ 神山さん、この太極堂と云ふのは。」

洋一はそれでも珍しさうに、叔母の讀んでゐる手紙を覗きこんだ。

「二丁目の角に洋食屋がありませう。あの露路をはひつた左側です。——

[illegible]の[illegible]の御師匠さんの[illegible]」

「ええ、まあそんな見當です。」

神山はにやにや笑ひながら、時計の紐にぶら下げた瑪瑙の印形をいぢつてゐた。

「あんな所に占ひ者なんぞがあつたかしら。――御病人は南枕にせらるべく候か。―」

「お母さんはどつち枕だえ？」

叔母は半ばたしなめるやうに、老眼鏡の眼を洋一へ擧げた。

「東枕でせう。この方角が南だから。」

多少心もちの明くなつた洋一は、顏は叔母の方へ近づけた儘、手は袂の底にある卷煙草の箱を探つてゐた。

「そら、其處に東枕にてもよろしくと書いてありますよ。――神山さん。一本上げようか？　抛るよ。失敬。」

「こりやどうも。E・C・Cですな。ちや一本頂きます。――もう外に御用はございませんか？　もし又ござへましたら、御遠慮なく――」

神山は金口を耳に挾みながら、急に夏羽織の腰を擡げて、匆匆店の方へ退かうとした。その途端に障子が明くと、頸に濕布を卷いた姉のお絹が、まだセルのコオトも脫がず、果物の籠を下げてはひつて來た。

「おや、お出でなさい。」

「降りますのによく又、――」

さう云ふ言葉が殆同時に、叔母と神山との口から出た。お絹は二人に會釋をしながら、手早くコオトを脫ぎ捨てると、がつかりしたやうに橫坐りになつた。その間に神山は、彼女の手から受け取つた果物の籠を其處へ殘して、氣忙しさう

に茶の間を出て行つた。

「どう？ お母さんは。——御免なさいよ。電車がそりやこむもんだから。」

お絹はやはり横坐りの儘、器用に泥だらけの白足袋を脫いた。洋一はその足袋を見ると、丸髷に結つた姉の身のまはりに、まだ往來の雨のしぶきが、感ぜられるやうな心もちがした。

「やつぱりお肚が痛むんでねえ。——熱もまだ九度からあるんだとさ。」

叔母は易者の手紙をひろげたなり、神山と入れ違ひに來た女中の美津と、茶を入れる仕度に忙しかつた。

「あら、だつて電話ぢや、昨日より大變好さゝうだつたぢやありませんか？ 尤も私は出なかつたんですけれど、——誰？ 今日電話をかけたのは。——洋ちやん？」

「いいえ、僕ぢやない。神山さんぢやないか？」

「さやうでございます。」

これは美津が茶を勸めながら、そつとつけ加へた言葉だつた。

「神山さん？」

お絹は、いゝはすはに顏をしかめて、長火鉢の側へすり寄つた。

「何だねえ。そんな顏をして。——お前さんの所はみんな御達者かえ？」

「ええ、おかげ樣で、——叔母さんの所でも皆さん御丈夫ですか？」

そんな對話を聞きながら、卷煙草を啣へた洋一は、ぼんやり柱暦を眺めてゐた。中學を卒業して以來、彼には何日と云ふ記憶はあつても、何曜日かは全然忘れてゐる。——それがふと彼の心に、寂しい氣もちを與へたのだつた。その上

もう一月すると、殆受ける氣のしない入學試驗がやつて來る。入學試驗に及第しなかつたら、——

「美津など此頃は、大へん女ぶりを上げたわね。」

姉の言葉が洋一には、急にはつきり聞えたやうな氣がした。彼は内心にどぎまぎして、長火鉢の灰に金口をさした。

美津は勿論その時は、臺所へ下つた後だつた。

「これにあの人は男好きのする顔だから、——」

叔母はやつと膝の手紙や老眼鏡を片づけながら、蔑むらしい笑ひを見せた。するとお絹も妙な眼をしたが、これはすぐに氣を變へて、

「何？　叔母さん、それは。」と云つた。

「今、神山さんに墨色を見て來て貰つたんだよ。——洋ちやん。ちよいとお母さんを見て來ておくれ、さつきはよく休んでお出でだつたけれど、——」

ひどくいやな氣がしてゐた彼は、叔母や姉の視線を逃れるやうに、早速長火鉢の前から身を起した。そうして襖一つ向うの座敷へ、わざと氣輕さうにはひつて行つた。

其處はつきあたりに庭があるから、茶の間程今日でも暗くはなかつた。麻の掻卷きをかけたお律は、比較的明い障子の側に、氷嚢を頭へ當てがつた儘、あちら向きにぢつと横になつてゐる、——その枕もとには看護婦が一人、膝の上にひろげた病床日誌へ、退屈さうに鉛筆を動かしてゐた。

看護婦は洋一の姿を見ると、ちよいと媚のある目禮をした。洋一はその看護婦にも、はつきり異性を感じながら、妙に無愛想な目禮を返した。それから蒲團の裾をまはつて、母の顔がよく見える方に坐つた。

母は眼をつぶつてゐた。が、すぐに眼を上げると、何時もの通り笑つて見せた。洋一は何だか叔母や姉と、茶の間に話しこんでゐた事が、すまないやうな心もちになつた。母は少時黙つてゐてから、

「あのね」と、さも太儀さうに云つた。

洋一は唯頷いて見せた。その間も母の眼のまはりに、薄黒い暈の出來てゐるのが、ひどく氣になつてならなかつた。

お律はそれでも、さう云つたきり、何とも後を續けなかつた。洋一はそろそろ不安になつた。遺言――と云ふ考へも頭へ來た。

「淺川の叔母さんはまだゐるでせう？」

やつと母は口を開いた。

「叔母さんもゐるし、――今し方姉さんも來た。」

「叔母さんにね、――」

「叔母さんに用があるの？」

「いいえ、叔母さんに、――梅川の鰻をとつて上げるの。」

今度は洋一が微笑した。

「美津にさう云つてね。好いかい？――それでおしまひ。――」

お律はかう云ひ終ると、頭の位置を變へようとした。その拍子に氷嚢が辷り落ちた。洋一は看護婦の手を借りずに、元通りそれを置き直した。さうしたら何故か瞼の裏が、急に熱くなるやうな氣がした。母が見てゐる、――咄嗟にそんな氣もあつた。

「莫迦だね。」

母はかすかに呟いた儘、疲れたやうに又眼をつぶつた。

顔を赤くした洋一は、看護婦の見る眼を恥ぢながら、すごすご茶の間へ歸つて來た。歸つて來ると淺川の叔母が、肩越しに彼の顔を見上げて、

「どうだえ？　お母さんは。」と聲をかけた。

「目がさめてゐます。」

「目はさめてゐるけれどさ。」

叔母はお絹と長火鉢越しに、顔を見合せたらしかつた。姉は上眼を使ひながら、笄で髷の根を掻いてゐたが、やがてその手を火鉢へやると、

「神山さんが歸つて來た事は云はなかつたの？」と云つた。

「云はない。姉さんが行つて云ふと好いや。」

洋一は襖側に立つたなり、緩んだ帶をしめ直してゐた。どんな事があつてもお母さんを死なせてはならない。どんな事があつても――さう一心に思ひつめながら、……………

二

翌日の朝洋一は、父と茶の間の食卓に向つた。食卓の上には、昨夜泊つた叔母の茶碗も伏せてあつた。が、叔母は看護婦が、長い身じまひをすます間、母の側へその代りに、行つてゐるとか云ふ事だつた。

親子は箸を動かしながら、時々短い口を利いた。この一週間ばかりと云ふものは、毎日かう云ふ二人きりの、寂しい食事が續いてゐる。しかし今日は何時もよりは、一層二人とも口が重かつた。給使の美律も無言の儘、盆をさし出すばかりだつた。

「今日は愼太郎が歸つて來るかな。」

賢造は返事を豫期するやうに、ちらりと洋一の顏を眺めた。が、洋一は默つてゐた。兄が今日歸るか歸らないか、――と云ふより一體歸るかどうか、彼には今も兄の意志が、どうも不確でならないのだつた。

「それとも明日の朝になるか？」

今度は洋一も父の言葉に、答へない譯には行かなかつた。

「しかし今は學校が丁度、試驗ぢやないかと思ふんですがね。」

「さうか。」

賢造は何か考へるやうに、ちよいと言葉を途切らせたが、やがて美律に茶をつがせながら、

「お前も勉强しなくつちやいけないぜ。愼太郎はもうこの秋は、二年生になるんだから。」と云つた。

洋一は嘴を尖らせて、何とも返事をしなかつた。やりたい文學もやらせずに、勉强ばかり强ひるこの頃の父が、急に面憎くなつたのだつた。その上兄が二年生になると云ふ事は、弟が勉强すると云ふ事と、何の關係などはありはしない。――さう又父の論理の矛盾を嘲笑ふ氣もちもないではなかつた。

「お絹は今日は來ないのかい？」

賢造はすぐに氣を變へて云つた。

「來るさうです。が、兎に角戸澤さんが來たら、電話をかけてくれつて云つてゐました。」
「お絹の所でも大變だらう。今度はあすでも買つた方だから。」
「やつぱりちつとはすりましたかね。」
洋一はもう楊枝を使つてゐた。この四月以來市場には、前代未聞だと云ふ恐慌が來てゐる。現に賢造の店なども、可成手痛くやつてゐた、或大阪の同業者が突然破産したおかげで、最近も代拂ひの厄に遇つた。その外まだ何だ彼だといろいろ打擊を通算したら、少くとも三萬圓内外は損失を蒙つてゐるのに相違ない。――そんな事も洋一は、小耳に挾んでゐたのだつた。
「ちつとやそつとでゐてくれりや好いが、――何しろかう云ふ景氣ぢや、いつ何時うちなんぞも、どんな事になるか知れないんだから、――」
賢造は半ば冗談のやうに、心細い事を云ひながら、太儀さうに食卓の前を離れた。それから隔ての襖を明けると、隣の病室へはひつて行つた。
洋一は疊に片手ついて、襖の明いてゐる所から、母の床の方を覗いて見た。すると庭の八つ手や槇が、今日は障子が明いてゐるから、靑々と薄日を浴びて見えた。父はその庭に向つた儘、母の枕もとに坐つた叔母と、立つて何か話をしてゐた。
「ソツプも牛乳もおさまつた？　そりや今日は大出來だね。まあ精々食べるやうにならなくつちやいけない。」
「これで藥さへ通ると好いんですが。藥はすぐに吐いてしまふんでね。」
こんな會話も耳へはひつた。今朝は食事前に彼が行つて見ると、母は昨日一昨日よりも、ずつと熱が低くなつてゐた。

口を利くのもはきはきしてゐれば、寝返りをするのも樂さうだつた。「お肚はまだ痛むけれど、氣分は大へん好くなつたよ。」――母自身もさう云つてゐた。その上あんなに食氣までついたやうでは、今まで心配してゐたよりも、存外恢復は容易かも知れない。――洋一は隣を覗きながら、さう云ふ嬉しさにそやされてゐた。が、餘り蟲の好い希望を抱き過ぎると反つてその爲に母の病氣が、惡くなつて來はしないかと云ふ、迷信じみた惧れも多少はあつた。……

「若旦那樣、御電話でございます。」

洋一はやはり手をついた儘、聲のする方を振り返つた。美津は袂を啣へながら、食卓に布巾をかけてゐた。電話を知らせたのはもう一人の、松と云ふ年上の女中だつた。松は濡れ手を下げたなり、銅壺の見える臺所の口に、襷がけの姿を現してゐた。

「何處だい？」

「どちらでございますか、――」

「しやうがないな、何時でもどちらでございますかだ。」

洋一は不服さうに呟きながら、すぐに茶の間を出て行つた。おとなしい美津に負け嫌ひの松の惡口を聞かせるのが、彼には何となく愉快なやうな心もちも働いてゐたのだつた。

店の電話に向つて見ると、さきは一しよに中學を出た、田村と云ふ藥屋の息子だつた。

「今日ね。一しよに明治座を覗かないか？　井上だよ。井上なら行くだらう？」

「僕は駄目だよ。お袋が病氣なんだから――」

「さうか。そりや失敬した。だが殘念だね。昨日堀や何かは行つて見たんだつて。――」

そんな事を話し合つた後、電話を切つた洋一は、其處からすぐに梯子を上つて、例の通り二階の勉強部屋へ行つた。が、机に向つて見ても、受驗の準備は云ふまでもなく、小說を讀む氣さへ起らなかつた。机の前には格子窓がある、――その窓から外を見ると、向うの玩具問屋の前に、半天着の男が自轉車のタイアへ、ポンプの空氣を押しこんでゐた。何だかそれが洋一には、氣忙しさうな氣がして不快だつた。と云つて又下へ下りて行くのも、やはり氣が進まなかつた。彼はとうとう机の下の漢和辭書を枕にしながら、ごろりと疊に寢ころんでしまつた。

すると彼の心には、この春以來顏を見ない、彼には父が違つてゐる、兄の事が浮んで來た。彼には父が違つてゐる、――しかしその爲に洋一は、一度でも兄に對する情が、世間普通の兄弟に變つてゐると思つた事はなかつた。いや、母が兄をつれて再緣したと云ふ事さへ、彼が知るやうになつたのは、割合に新しい事だつた。唯父が違つてゐると云へば、彼には可成はつきりと、こんな思ひ出が殘つてゐる。――

それはまだ兄や彼が、小學校にゐる時分だつた。洋一は或日愼太郎と、トランプの勝敗から口論をした。その時分から冷靜な兄は、彼がいくらいきり立つても、殆語氣さへも荒立てなかつた。が、時々蔑むやうにじろじろ彼の顏を見ながら、一々彼をきめつけて行つた。洋一はとうとうかつとなつて、其處にあつたトランプを掴むが早いか、いきなり兄の顏へ叩きつけた。トランプは兄の横顏に中つて、一面にあたりへ散亂した。――と思ふと兄の手が、ぴしやりと彼の頰を撲つた。

「生意氣な事をするな。」

さう云ふ兄の聲の下から、洋一は兄にかぶりついた。兄は彼に比べると、遙に體も大きかつた。しかし彼は兄よりもがむしやらな所に強味があつた。二人は少時獸のやうに、撲つたり撲られたりし合つてゐた。

その騒ぎを聞いた母は、慌ててその座敷へはひつて來た。

「何をするんです？　お前たちは。」

母の聲を聞くか聞かない内に、洋一はもう泣き出してゐた。が、兄は眼を伏せた儘、むつつり佇んでゐるだけだつた。

「愼太郎。お前は兄さんぢやないか？　弟を相手に喧嘩なんぞして、何がお前は面白いんだえ？」

母にかう叱られると、兄はさすがに震へ聲だつたが、それでも突かかるやうに返事をした。

「洋一が惡いんです。さきに僕の顔へトランプを叩きつけたんだもの。」

「噓つき。兄さんがさきに撲つたんだい。」

洋一は一生懸命に泣き聲で兄に反對した。

「ずるをしたのも兄さんだい。」

「何。」

兄は又擬勢を見せて、一足彼の方へ進まうとした。

「それだから喧嘩になるんぢやないか？　一體お前が年嵩な癖に勘辨してやらないのが惡いんです。」

母は洋一をかばひながら、小突くやうに兄を引き離した。すると兄の眼の色が、急に無氣味な程險しくなつた。

「好いやい。」

兄はかう云ふより早く、氣違ひのやうに母を撲たうとした。が、その手がまだ振り下されない内に、洋一よりも大聲に泣き出してしまつた。——

母がその時どんな顔をしてゐたか、それは洋一の記憶になかつた。しかし兄の口惜しさうな眼つきは、今でもまざ

あり〳〵と見えるやうな氣がする。兄は唯母に叱られたのか、病癖に障つただけかも知れない。もう一歩臆測を逞くするのは、善くない事だと云ふ心もちもある。が、兄が地方へ行つて以來、ふとあの眼つきを思ひ出すと、洋一は兄の見てゐる母が、どうも彼の見てゐる母とは、違つてゐさうに思はれるのだつた。しかもさう云ふ氣がし出したのには、もう一つ別な記憶もある。——

去年の九月、兄が地方の高等學校へ、明日立たうと云ふ前日だつた。洋一は兄と買物をしに、わざわざ銀座まで出かけて行つた。

「當分大時計とも絶縁だな。」

兄は尾張町の角へ出ると、半ば獨り言のやうにかう云つた。

「だから一高へはひりや好いのに。」

「一高へなんぞちつともはひりたくはない。」

「負惜しばかり云つてゐらあ。田舍へ行けば不便だぜ。アイスクリイムはなし、活動寫眞はなし、——」

洋一は顏を汗ばせながら、まだ冗談のやうな調子で話し續けた。

「それから誰か病氣になつても、急には歸つて來られないし、——」

「そんな事は當り前だ。」

「ぢやお母さんでも死んだらどうする？」

歩道の端を歩いてゐた兄は、彼の言葉に答へる前に、手を伸ばして柳の葉をむしつた。

「僕はお母さんが死んでも悲しくない。」

「嘘つき。」
洋一は少し昂奮して云つた。
「悲しくなかつたらどうかしてゐらあ。」
「嘘ぢやない。」
兄の聲には意外な位、感情の罩つた調子があつた。
「お前は何時も小說なんぞ讀んでゐるぢやないか？　それなら、僕のやうな人間のある事も、すぐに理解出來さうなもんだ。——可笑しな奴だな。」
洋一は内心ぎよつとした。と同時にあの眼つきが、——母を撲たうとした兄の眼つきが、はつきり記憶に浮ぶのを感じた。が、そつと兄の容子を見ると、兄は遠くへ眼をやりながら、何事もないやうに歩いてゐた。——
そんな事を考へると、兄がすぐに歸つて來るどうか、愈怪しい心もちがする。殊に試驗でも始まつてゐれば、二日や三日遲れる事は、何とも思つてゐないかも知れない。遲れても兎に角歸つて來れば好いが、——彼の考が其處まで來た時、誰かの梯子を上つて來る音が、みしりみしり耳へはひり出した。洋一はすぐに飛び起きた。
すると梯子の上り口には、もう眼の惡い淺川の叔母が、前屈みの上半身を現はしてゐた。
「おや、晝寢かえ。」
洋一はさう云ふ叔母の言葉に、かすかな皮肉を感じながら、自分の座蒲團を向うへ直した。が、叔母はそれは敷かずに、机の側へ腰を据ゑると、さも大事件でも起つたやうに、小さな聲で話し出した。
「私は少しお前に相談があるんだがね。」

洋一は胸がどきりとした。

「お母さんがどうかしたの？」

「いいえ、お母さんの事ぢやないんだよ。實はあの看護婦だがね、ありやお前、仕方がないよ。――」

叔母はそれからねちねちと、こんな話をし始めた。――昨日あの看護婦は、戸澤さんが診察に來た時、わざわざ醫者を茶の間へ呼んで、「先生、一體この患者は何時頃まで持つ御見込みなんでせう？もし長く持つやうでしたら、私はお暇を頂きたいんですが」と云つた。看護婦は勿論醫者の外には、誰もゐない心算に違ひなかつた。が、生憎臺所にゐた松がみんなそれを聞いてしまつた。さうしてぷりぷり怒りながら、淺川の叔母に話して聞かせた。のみならず叔母が氣をつけてゐると、その後も看護婦の所置ふりには、不親切な所がいろいろある。現に今朝なぞも病人にはかまはず、一時間もお化粧にかかつてゐた。……………

「いくら商賣柄だつて、それぢやお前、あんまりぢやないか。だから私の量見ぢや、取り換へた方が好いだらうと思ふのさ。」

「ええ、それりやその方が好いでせう。お父さんにさう云つて、――」

洋一はあんな看護婦なぞに、母の死期を數へられたと思ふと、腹が立つて來るよりも、反つて氣がふさいでならないのだつた。

「それがさ。お父さんは今し方、工場の方へ行つてしまつたんだよ。私が又どうしたんだか、話し忘れてゐる内にさ。」

叔母はややもどかしさうに、爛れてゐる眼を大きくした。

「私はどうせ取り換へるんなら、早い方が好いと思ふんだがね、――」

「それぢや神山さんにさう云つて、今すぐに看護婦會へ電話をかけて貰ひませうよ、——お父さんにや歸つて來てから話しさへすれば好いんだから、——」

「さうだね。ぢやさうして貰はうかね。」

洋一は叔母のさきに立つて、勢好く梯子を走り下りた。

「神山さん。ちよいと看護婦會へ電話をかけてくれ給へ。」

彼の聲を聞いた五六人の店員たちは、店先に散らばつた商品の中から、驚いたやうな視線を洋一に集めた。と同時に神山は、派手なセルの前掛けに、毛糸屑をくつけた儘、早速帳場机から飛び出して來た。

「看護婦會は何番でしたかな?」

「僕は君が知つてゐると思つた。」

梯子の下に立つた洋一は、神山と一しよに電話帳を見ながら、彼や叔母とは沒交渉な、平日と變らない店の空氣に、輕い反感のやうなものを感じない譯には行かなかつた。（前篇　終）

次號小說豫告

お律と子等(後篇)……芥川龍之介

長篇小說 微笑……上司小劍

鮫人……谷崎潤一郎

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區本富士町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金六拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾錢但支那を除く）

冊數＼國別	内國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は内國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
一金拾圓迄　金八錢
（集金委託料及送料共）

一中央公論及婦人公論　代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正九年九月三十日印刷納本
大正九年十月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木酉三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話（小石川一四〇四／小石川三四二〇）
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11,90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.